

# 松本市向畠遺跡II

— ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書 —

1989・3

松本市教育委員会

# 松本市向畠遺跡 II

— ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書 —

1989・3

松本市教育委員会

## 序

向畠遺跡は松本市の東部、中山地区にあり、この周辺の東山山麓は、古くは繩文時代から中・近世に至るまでの多くの遺跡が残され、隣接する内田地区、塙尻市片丘地区とともに、早くから職者の注目するところとなっていた場所であります。

今回の調査は、当遺跡一帯で県営は場整備が行われることになり、松本市教育委員会が長野県松本地方事務所の依頼を受け事業予定地内の遺跡の発掘調査を行ったものです。

発掘調査は市教育委員会を中心に地元考古学研究者の先生方等で組織した調査団により、昭和62年8月10日から12月23日にわたって実施され、多大な成果をおさめて無事終了いたしました。調査内容は本文で詳述してあるとおりですが、古墳時代の住居跡などと中世の墓址群やそれらに伴う遺物が多数発見され、この地が古くから人々の生活の根拠地となっていたことが証明されました。

今回の発掘は、記録保存と呼ばれ、開発のために遺跡を破壊するがその前に記録をとておくという性格のもので、本書を残して遺跡は消え去る運命にあります。せめて、本書に記された調査結果が充分に活用され、郷土や先祖の歴史を探る一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、この調査にあたり多大なご理解とご協力をいただきました中山土地改良区、発掘に従事された地元の皆様に心から謝意を表して序といたします。

平成元年3月

松本市教育委員会

教育長 中島 俊彦

## 例　　言

1. 本書は昭和62年8月10日から12月23日にわたって実施された松本市中山向畠に所在する中山向畠遺跡の緊急発掘調査に関する報告書である。
2. 本調査は昭和62年度県営は場整備事業に伴う事前の発掘調査であり、長野県松本地方事務所より委託を受け、松本市教育委員会が行ったものである。
3. 本書の執筆は下記の分担で行った。

第1章 事務局 第2章第1節 三村竜一 第2節—1 中村賢二・吉沢克彦・高野昌英・  
三村竜一 第2節—2～5 三村竜一 第2節—6 中村賢二 第3節(1)～(i) 竹原学 (1)  
(ii) 白居直之 (1)～(ii) 神沢昌二郎 (2) 関沢聰 (3) 神沢昌二郎 (4) 西沢寿晃 第4  
章 三村竜一 付編 竹原学

4. 本書の編集は事務局が行い、滝沢智恵子の助力を得た。
5. 本書の作成にあたっての作業分担は次のとおりである。

土器復元 滝沢智恵子 五十嵐周子 岩野公子  
遺物実測 神沢昌二郎 直井雅尚 関沢聰 竹原学 白居直之 中平智昭 望月映  
宮城孝之 岩野公子 土橋久子 赤羽包子  
土器拓影 五十嵐周子 白居直之  
トース 直井雅尚 関沢聰 竹原学 白居直之 中平智昭 土橋久子 岩野公子 開  
鳴八重子 赤羽包子 金井ひろみ 町田庄司 宮城晴美 三村竜一  
遺構写真 三村竜一  
遺物写真 宮崎洋一  
一覧表作成 白居直之 中村賢二 吉沢克彦 岩野公子 三村竜一

6. 本書の作成にあたって次の方々に多大な協力を得た。  
山田真一・高野昌英・高瀬典子
7. 遺構図中のスクリートーンは焼土・炭化物を表現したものである。第8・18図を参照されたい。
8. 土壌の土層名は記号化した。第31図を参照されたい。
9. 図面上の方位は磁北を用いた。
10. 委託契約書、作業日誌等の事業経緯を示す書類は調査結果の記載を重視したために、本書から割愛したが、図類、出土遺物と共に松本市教育委員会が保管している。

## 目 次

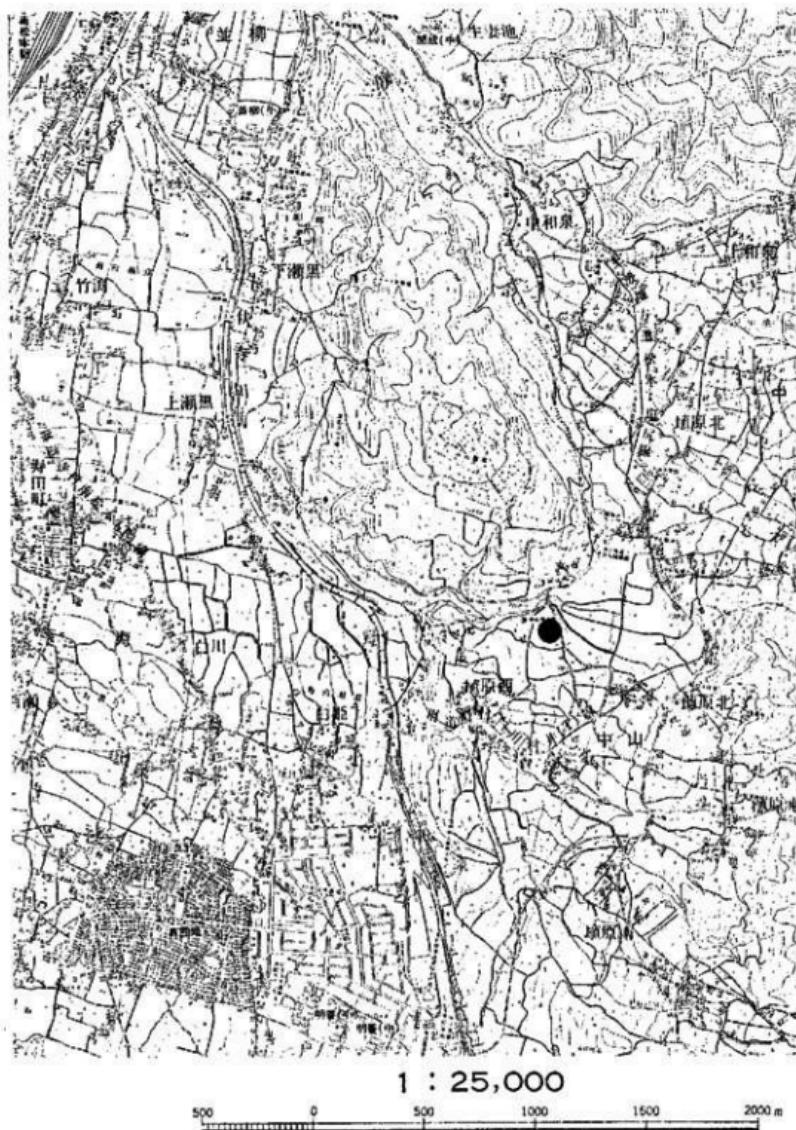
第1章 調査経過	
第1節 調査に至る経過	5
第2節 調査体制	6
第2章 調査	
第1節 調査の概要	9
第2節 遺構	
1 住居址	10
2 古墳	41
3 方形周溝墓	42
4 土塚	43
5 溝	85
6 穴状遺構	86
第3節 遺物	
1 土器・陶磁器	88
(1) 繩文時代の土器	88
(2) 古墳時代の土器	103
(3) 陶磁器	137
2 石器・石製品	137
3 鉄器・錢貨	152
4 土塚353出土の人骨について	155
第4章 結語	157
付 編 松本平の縄文中期初頭土器	158

## 表 目 次

表1 住居址一覧表	37
表2 土塚一覧表	72
表3 古墳時代土器一覧表	120
表4 石器一覧表	142
表5 鉄器・錢貨一覧表	153

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置	4	第27図 土壌配置図(2)	46
第2図 遺跡範囲図	7	第28図 土壌配置図(3)	47
第3図 調査範囲図	8	第29図 土壌配置図(4)	48
第4図 第1号住居址	11	第30図 土壌(1)	49
第5図 第2・3・5号住居址	12	↓	↓
第6図 第4号住居址	13	第52図 土壌(2)	71
第7図 第11号住居址	14	第53図 竪穴状遺構3	86
第8図 第12号住居址	15	第54図 竪穴状遺構2・4	87
第9図 第13号住居址	17	第55図 繩文時代出土土器(1)	92
第10図 第14・15号住居址	18	↓	↓
第11図 第16・18号住居址	20	第57図 繩文時代出土土器(3)	94
第12図 第17・19・20・21号住居址	21	第58図 繩文時代出土土器拓影(1)	95
第13図 第22・23・29号住居址	23	↓	↓
第14図 第24号住居址	24	第65図 繩文時代出土土器拓影(8)	102
第15図 第25・26号住居址	26	第66図 古墳時代出土土器(1)	106
第16図 第27・28号住居址	27	↓	↓
第17図 第30号住居址	28	第79図 古墳時代出土土器(4)	119
第18図 第40号住居址	30	第80図 陶磁器	138
第19図 第40号住居址遺物出土図	31	第81図 石器(1)	145
第20図 第42号住居址	32	↓	↓
第21図 第44号住居址	33	第87図 石器(7)	151
第22図 第45号住居址	35	第88図 銛器・錢貨	154
第23図 第47号住居址	36	第89図 繩文時代中期初頭土器集成(1)	163
第24図 向畠7号古墳	39	↓	↓
第25図 方形底溝墓	42	第92図 繩文時代中期初頭土器集成(4)	166
第26図 土壌配置図(1)	45	付図 全体図	



第1図 進跡の位置

# 第1章 調査経過

## 第1節 調査に至る経過

- 昭和61年8月29日 埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 12月23日 昭和62年度補助事業計画書提出。
- 昭和62年4月27日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。
- 5月16日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 6月1日 昭和62年度県営は場整備事業中山地区向畠遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- 6月30日 昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）内定。
- 7月11日 昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 7月20日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 8月5日 昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 8月6日 向畠遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 9月7日 昭和63年度埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 12月21日 昭和63年度補助事業計画書提出。
- 昭和63年1月28日 向畠遺跡埋蔵文化財取得届及び同保管証提出。
- 2月15日 向畠遺跡埋蔵物の文化財認定通知。
- 4月7日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定。
- 4月27日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 5月31日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
- 6月14日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 6月21日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 8月25日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 9月6日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）計画変更承認申請書提出。
- 9月19日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）計画変更承認申請書提出。
- 11月21日 昭和63年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）変更交付決定通知。
- 12月21日 昭和63年度文化財保護事業補助金（県費）変更交付決定通知。

## 第2節 調査体制

この調査に関する体制は、次のとおりである。

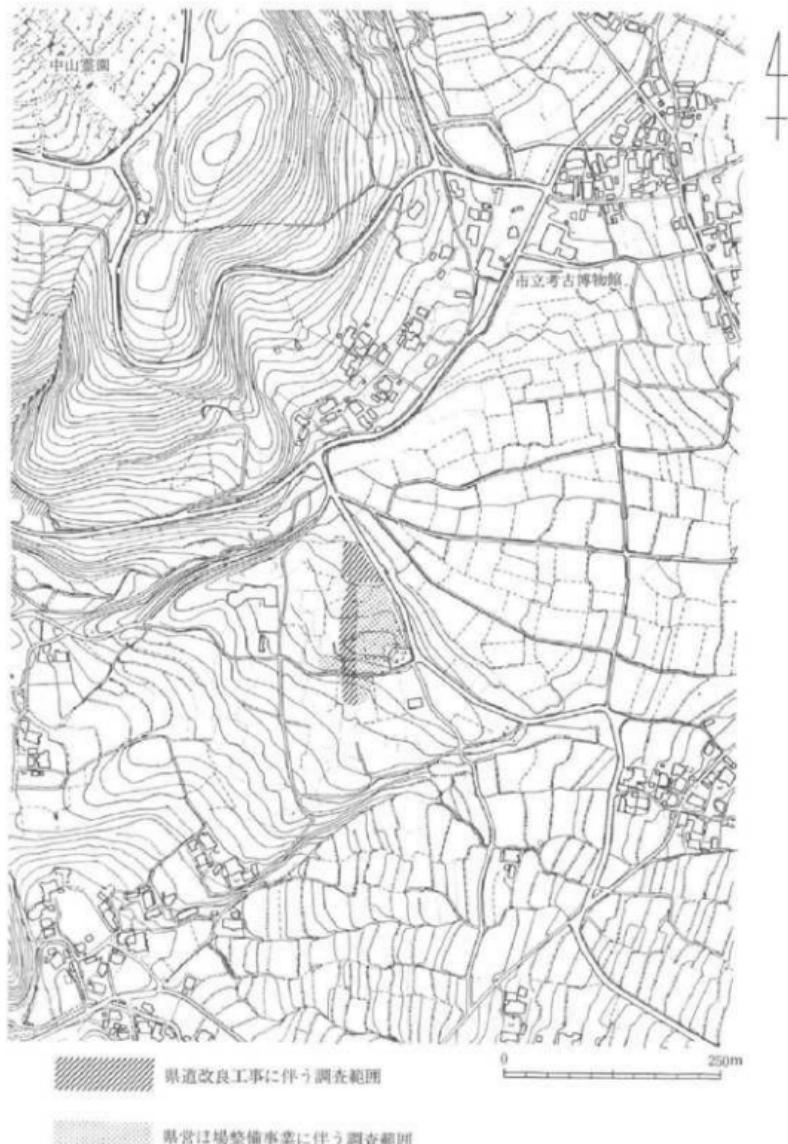
團長：中島俊彦（松本市教育長） 調査担当者：神沢昌二郎 現場担当者：三村竜一 調査員：  
太田守夫、西沢寿晃、森義直、三村肇、土橋久子、横田作重

発掘作業参加者：青柳洋子、赤羽章、赤羽包子、荒井唯邦、飯沼富夫、石井良子、五十嵐周子、  
伊丹早苗、岩野公子、白井美枝子、大出六郎、太田千尋、大谷成嘉、奥原富藏、小野光信、開鳴八  
重子、金井要二郎、金子富人、唐沢友子、小池直人、神戸巖、小岩井美津子、小林謙次、小林文子、  
小松啓吾、沢柳秀利、瀬川長広、仙石唯男、莊秀也、袖山勝美、田中泉造、田中正治郎、土橋幸子、  
土橋久美子、鶴川登、直井由加理、中島新嗣、中島督郎、中島直美、中島治子、中村文一、中村文  
子、中村恵子、中村喬頼、西原明子、西原いさ子、西原千代子、林昭雄、林伊和夫、林源吾、林佳  
孝、巾崎助治、藤本嘉平、丸山誠、丸山久司、丸山恵美、丸山よし子、丸山愛徳、丸山麻子、町田  
庄司、百瀬八江、牧田浩幸、村山正人、横山篤美、横山保子、横山倍七、若井七十郎、若井孝夫

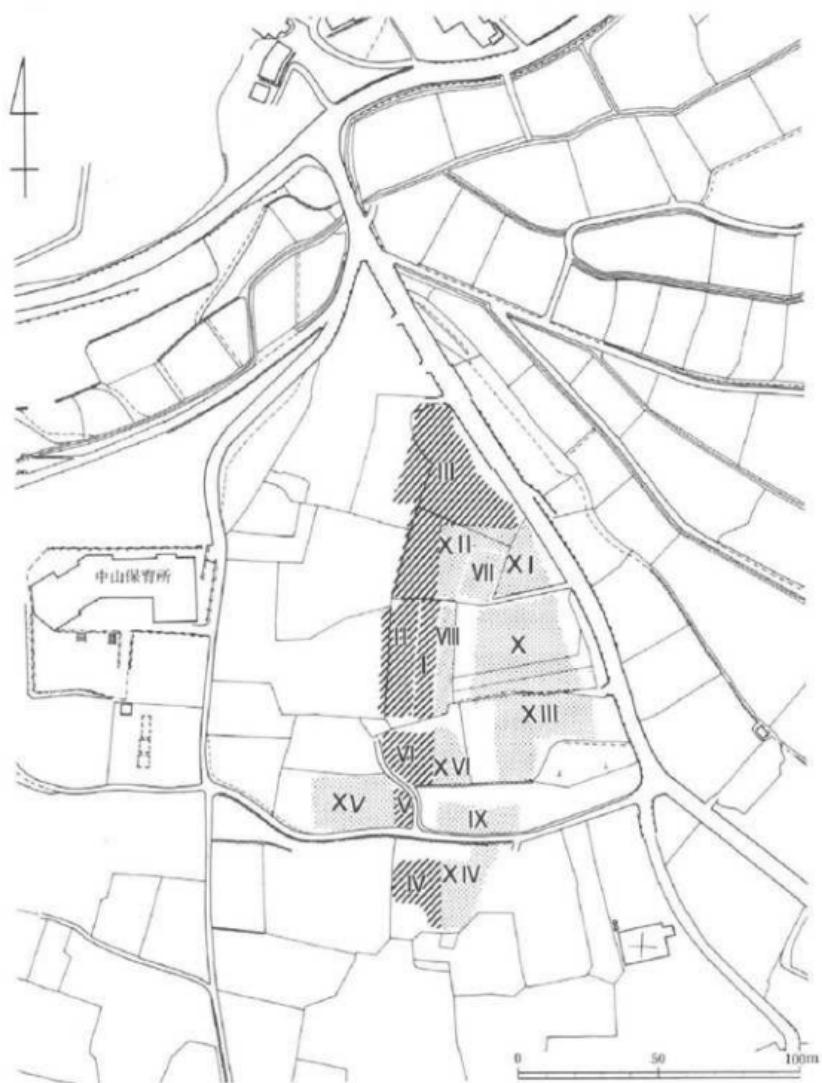
整理作業協力者：永沢周子、吉沢克彦、海野洋子、綱島正道、石合英子、宮島俊行、開鳴八重子、  
赤羽包子、伊丹早苗、金井ひろみ、町田庄司、小松千尋子、横山保子、小松正子、中村恵子、五十  
嵐周子

事務局：浅輪幸市（社会教育課長） 小松見（文化係長） 柳沢忠博、大村敏博（主査） 熊谷  
康治、直井雅尚（主事） 洞田睦子





第2図 遺跡範囲図



第3図 調査範囲図

## 第2章 調査

### 第1節 調査の概要

発掘調査は遺跡の範囲内で県営は場整備事業にかかる畠地を調査地として設定し、県道建設事業による発掘調査と並行していった。このうち、は場整備事業に伴う調査については昭和62～63年に亘って実施された。今回の報告では62年度調査分についてのみ扱う。そのため遺跡の調査方法は全体の流れに従っているので、非能率な点もあるかも知れない。調査結果についても向畠遺跡全体の評価に基づいて行っているため、本調査範囲のみでは把握できない点についても言及することがあるかと思うが、予めご了承いただきたい。尚、県道建設事業報告書は63年度に既刊した。

#### a 調査の方法

- ・該当の畠9枚について、畠作の休耕に合わせて行った。
- ・畠の形状を損なわない事が前提であったので、掘り出した順に畠の区割りごとの番号7～16までをつけた。
- ・実質調査面積は7区235m<sup>2</sup>、8区190m<sup>2</sup>、9区310m<sup>2</sup>、10区1040m<sup>2</sup>、11区280m<sup>2</sup>、12区330m<sup>2</sup>、13区690m<sup>2</sup>、14区380m<sup>2</sup>、15区530m<sup>2</sup>、16区170m<sup>2</sup>、計4155m<sup>2</sup>である。
- ・発掘調査は県道の東側とし、西側は63年度を行った。
- ・調査は重機による表土除去後、人力により遺構の検出作業を行い、確認された遺構から掘り下げを開始した。
- ・測量については10、11区間に設定した基準点から南北、東西に基準点を振り出し、そこから3m間隔に直行する線を振り、調査地全体を3×3mのメッシュで覆い、調査地内の求める位置を基準点からの方向と距離との組合せ、N、S、E、Wを数字によって表現できる様にした。ただし、7、8、9区については平板測量を行い、後の遺構図整理の段階で平面上にメッシュを移し、他の調査区同様に標記出来る様にした。標高は調査区が南北に長く、高低差も大きいため5本の杭を埋設して基準とした。
- ・遺構の命名については各地区の検出が終了し、掘り下げが開始された時点でその性格を推定してつけた。尚、本調査と県道建設事業に伴う調査は開発起因が異なるため別々の調査報告書となるが、本来は一つの遺跡であるので遺構番号については一連のもの对付した。
- ・竪穴住居址、竪穴状遺構は土層観察用の畔を十字に残して掘り下げた。土壌は2分割してまず半分を掘り下げ、土層観察を行ったあと全掘した。古墳については、既に墳丘部が削平されている

ため、周溝のみで主体部は検出されなかった。

#### b 調査結果

・遺構 竪穴住居址 30軒（縄文時代中期1、古墳時代前期29軒）

　古墳 1基（7号古墳は周溝のみが残り、周溝から供獻用の一括土器が出土した。  
　直径22mの円墳である。）

　方形周溝墓 1基（古墳時代前期）

　土塙 575基（縄文時代約150、古墳時代13、その他は中世～近世に属する。）

　溝 10基

　竪穴状遺構 3基（平安時代3）

・遺物 竪穴住居址を中心として各種遺構から土器、石器、石製品、鐵器、錢貨などが出土した。  
　土器には縄文土器、土師器、陶磁器があり、石器、石製品には石鍬、石錐、石匙、スクレイバー、  
打製石斧、磨製石斧、凹石等がある。鐵器には、鐵鉗、釘、鎌等がある。

　錢貨は、政和通宝、元祐通宝、至元通宝等がある。

#### c 成果

・古墳時代前期の大集落の一部が検出されたこと

・古墳一基が検出されたこと

・中世の大墓址群を検出したこと

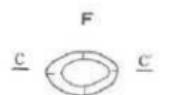
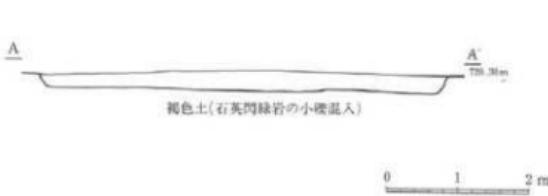
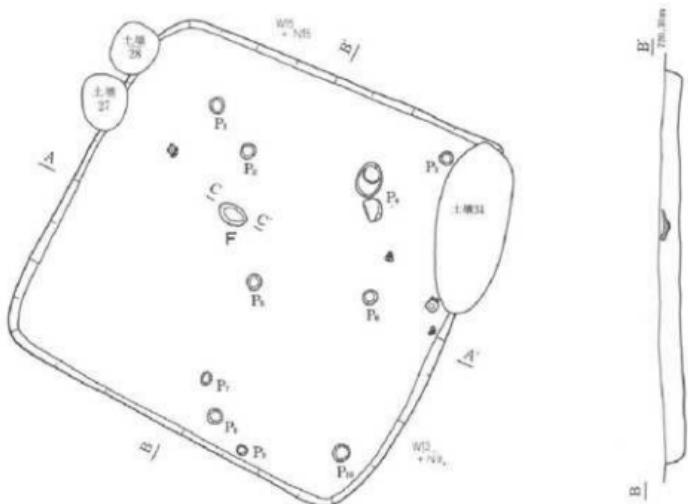
## 第2節 遺構

### 1. 住居址

#### 第1号住居址（第4図）

遺構 1区中央N 8～N15、W12～W19に位置する。周囲の一部を土壤27、28、31に切られる。  
主軸方向はN-65°W、5.76×5.66mと比較的規模の大きな住居址であるが、他の住居との切りあいもなく、隅丸方形の輪郭が明瞭である。二次堆積ロームの黄色土中に25cmの深さで掘り込まれていて石英閃緑岩を含むきわめて固い覆土をはげば、ゆるやかに外傾する壁面、平坦な床面とともに非常に堅固なものであった。中央西寄りには地床炉があり、100×60cmの範囲に10cm近い厚さの焼土が観察された。床面のピットのうちP<sub>1</sub>は深さ30cm、はっきりした柱痕が認められ、位置からみても主柱穴の一つと考えられる。

遺物 土師器が多量に出土した（第66図）。器種は高環、有段口縁壺、甕、古付甕があり、いずれも小片で器形の復元はできなかった。本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。

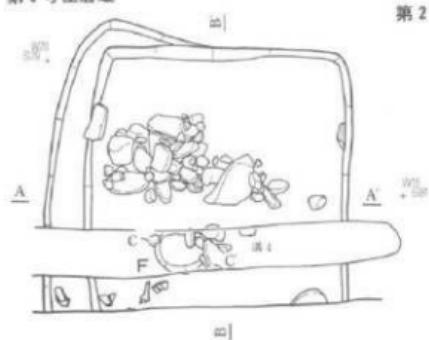


I : 暗褐色土(枯質)  
II : 褐色土(鈣土粒混入・砂質)

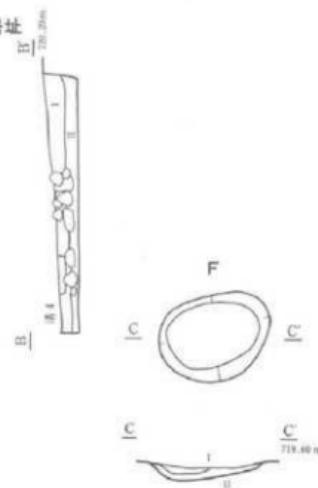


第4図 第1号住居址

第5号住居址



第2号住居址

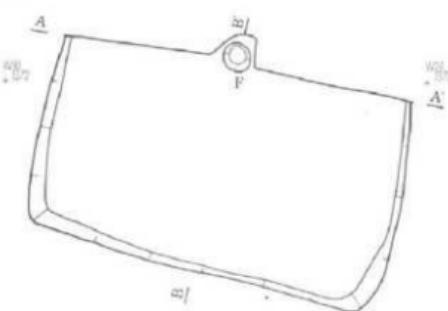


I': 黒褐色土(ローム粒微量・砂粒混入)  
II': 暗褐色土(砂質)

I : 暗褐色土(砂質)  
II : 暗褐色土(ローム粒微量・砂粒混入)

0 50cm

第3号住居址



I : 褐色土  
II : 褐色土(石英閃緑岩の小礫混入)  
III : 黄褐色土(燒土粒多量混入)

0 1 2 m

第5図 第2-3-5号住居址



第6図 第4号住居址

#### 第2号住居址（第5図）

**遺構** 9区南側S78～S83、W15～W20に位置する。溝4にきられ、5号住居址を切っている。主軸をN-O'にとり、南北3.8m、東西3.6mの隅丸方形のプランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり壁高25～50cmを測る。覆土中に80cm大の石が多量に投げ込まれていた。二次堆積ローム層に掘り込まれた床面は堅くたたきしめられ、少々起伏をもつものであった。中央部に炉(100×60×20cm)が検出された。

**遺物** 少量の土師器のみで図示できなかった。本址は遺物より古墳時代前期と考えられる。

#### 第3号住居址（第5図）

**遺構** 9区北側S71～S76、W24～W30に位置し、主軸をN-11°-Eにとる（南北5m）東西3.8mの隅丸方形プランを呈する。北側を調査区域外に残す。壁はやや垂直に立ち上がり、高さ10～25cmを測る。床面は堅固で少々起伏をもち、ゆるやかに傾斜している。中央部に炉(40×40×16cm)が検出された。

**遺物** 少量で図示できたものはない。本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。

#### 第4号住居址（第6図）

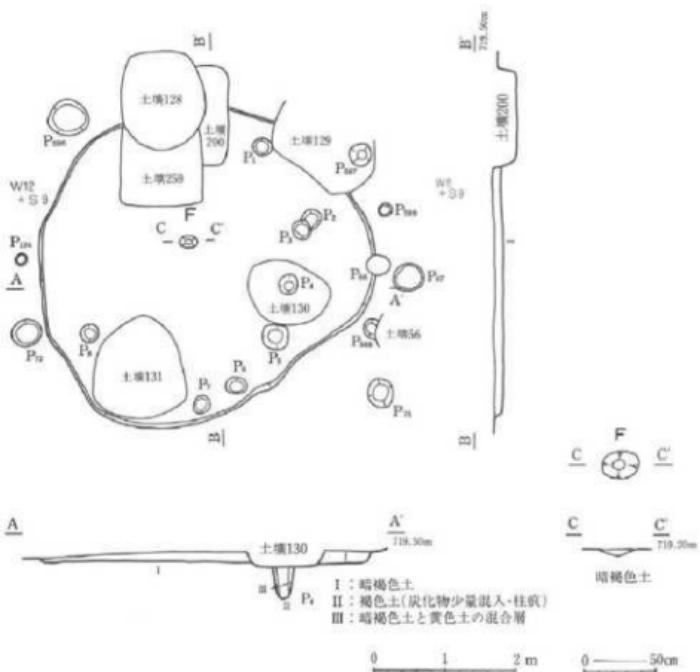
**遺構** 9区南側S75～S79、W32～W36に位置し、主軸をN-9°-Eにとる。南北3.8m、東西2.9mの隅丸方形のプランを呈する。壁はゆるやかに立ち上がり高さは8～12cmを測り、床は堅固で起伏をもつ。P(220×60×16cm)が検出されたが、その性格は不明である。

**遺物** 少量で図示できたものはない。本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。

#### 第5号住居址（第5図）

**遺構** 本址は、大半を2号住居址、溝21にきられ、南端を調査区域外に残す。西側に帯状に検出された部分から、壁の状態は、壁高16cm程度ではほぼ垂直に立ち上がっている事がわかった。尚、ピット、周溝などの施設は発見されず、床面の状態も不明であった。

**遺物** 多量に出土したが図示できたものはない。本址は遺物より古墳時代前期と考えられる。



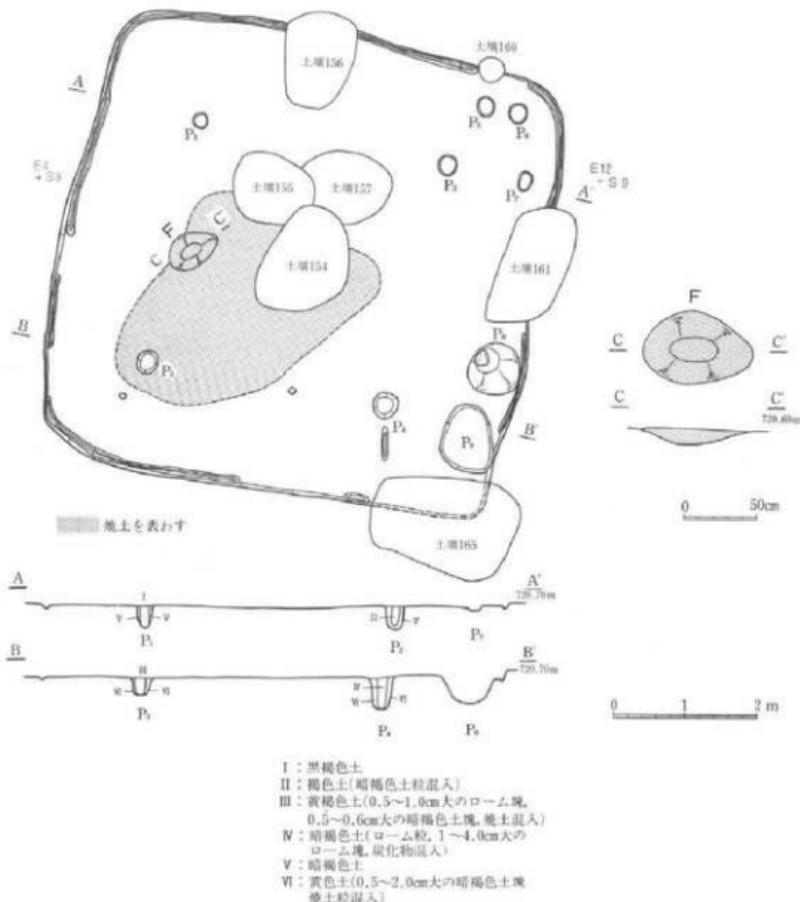
第7図 第11号住居址

#### 第11号住居址（第7図）

**遺構** 6区北西 S 7~13、W 7~12に位置し、周囲や床面を土壤124、259、128、129、130、131に切られる。東西4.9m、南北4.76mの不整円形の住居で、今回の調査では唯一の縄文時代の住居址であった。壁高は12mで壁はなだらかな立ち上がりをみせ、黄色土中に暗褐色土の落ち込みがあり、自然堆積の様相を呈していた。黄色の二次堆積ロームの床面は、やや起伏があるものの堅固で、地床炉がほぼ中央にあり、その下部の土は30×20cmの範囲にわたって約5cmの深さまで焼土の混入が認められた。P<sub>1</sub>~P<sub>8</sub>はそれぞれ柱痕を有し、位置、深さからしても主柱痕とみてほぼ間違いない。また、本址の周囲を衛星状に取り巻くP<sub>67</sub>、P<sub>72</sub>、P<sub>75</sub>、P<sub>124</sub>、P<sub>587</sub>、P<sub>588</sub>、P<sub>589</sub>、P<sub>590</sub>は本址に伴わないピットとして扱ったが柱痕が明瞭に観察されることから、本址に関係する柱穴、恐らくは支柱痕と考えられる。

**遺物** 土器と石器が合わせて数十点出土している（第55、81~84図）。土器は小片が多く、器形を復元できたのは第55図3の1点のみである。

本址の時期は、出土遺物より、縄文時代中期初頭と考えられる。



第8図 第12号住居址

### 第12号住居址（第8図）

**遺構** 5区北西S 6～S 14、E 4～E 12に位置する。本址は土壌157→155→154の順に切られ、また土壌161、156、165にも切られる。主軸方向はN→165°→W。隅丸方形をなすプランは明瞭で、6.8×6.7mの規模を有する。黄色土の地山には直の壁を以って掘り込まれており、壁の直下には全周にわたって周溝が巡らされている。南西の主柱穴の南にも溝があるが、間仕切りのものであろうと推測される。覆土は明褐色土で重機により削平され、非常に薄い。床面のピットのうちP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>はいずれも深さが25～40cmあり、明瞭な柱痕を有しており主柱穴と思料され、P<sub>5</sub>（深さ30cm）P<sub>6</sub>（深さ40cm）は、位置、規模から考え貯藏穴とみて間違いないだろう。炉は東側の主柱穴間に地床炉が橢円形に存在し、その下部に約10cmの厚さの焼土が観察された。更に炉の東側に広範囲に10cmの厚さで焼土が堆積していることは、この住居が火災に遭ったことを物語る。

**遺物** 土師器の破片数点と土製勾玉1点が出土している（第68図）。土師器はいずれも小片で、器形を復元できるのは器台（第68図25）のみである。土製勾玉（第68図30）は東側の床面上から出土した。大形で遺存状態は良好である。

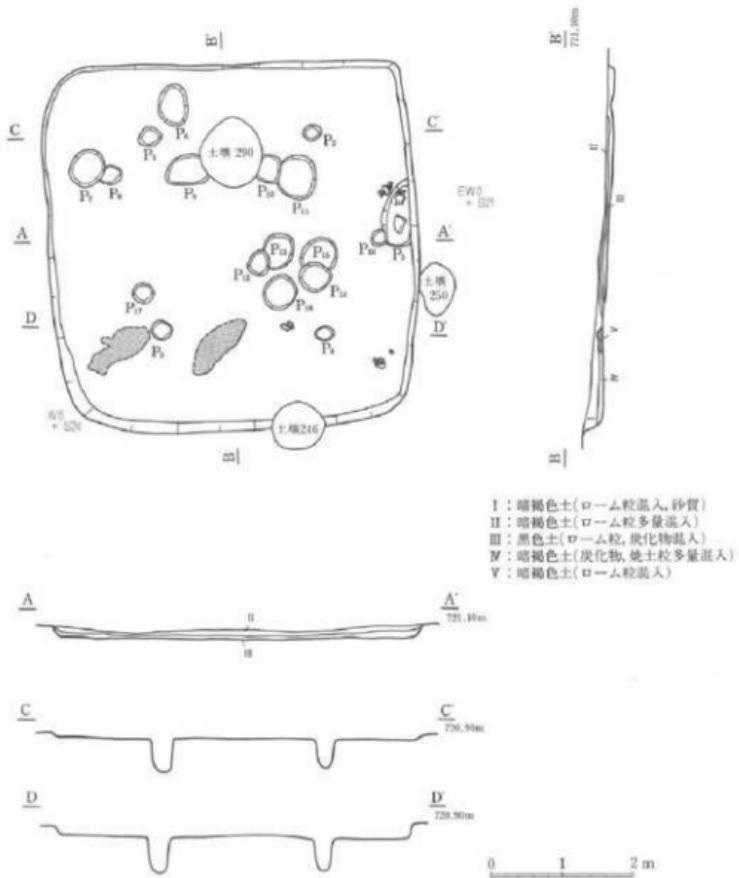
本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。

### 第13号住居址（第9図）

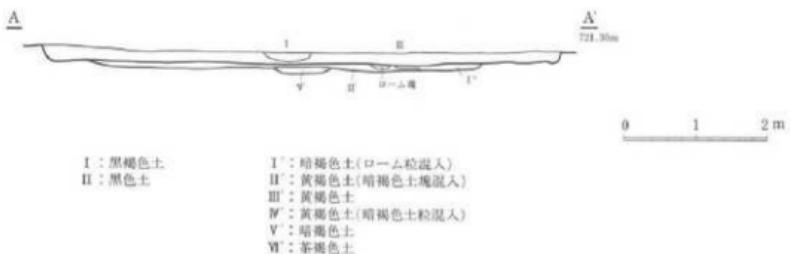
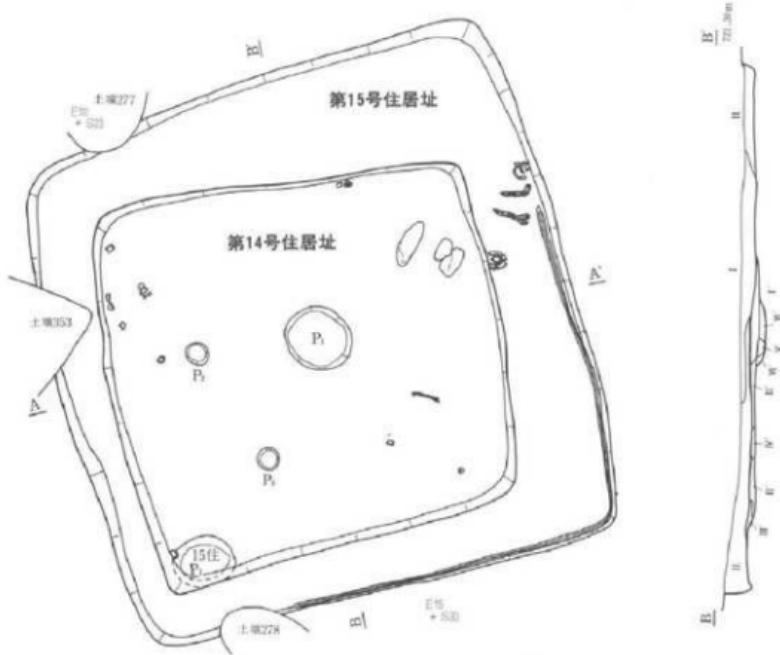
**遺構** 5区中央S 19～S 25、W 6～0に位置する。土壌246、290に切られ、土壌250を切る。主軸をN→0°にとり、南北5.2m、東西5.7mの隅丸方形を呈する。壁はゆるやかに立ち上がり、壁高15～25cmを測る。床面は、南から北へ向かってなだらかな傾斜をもつ。全体的に多量のピットが検出されP<sub>1</sub>（20×30×50cm）、P<sub>2</sub>（24×24×40cm）、P<sub>3</sub>（30×28×50cm）、P<sub>4</sub>（28×22×50cm）は、位置、規模から主柱穴と思われる。また東壁面に沿って位置するP<sub>5</sub>（90×30×34cm）は土器が出土しており、貯藏穴の可能性がある。北側半分には粘質で黄色土の平坦な貼り床が確認された。この貼り床を取り除いてみたところ、同じ範囲で窪みがみられ、さらに北壁直下に壁面に沿って細長い落ち込みがみられた。この落ち込みの覆土によって、貼り床の設置過程がわかる。2通りの可能性を考えられ、1つは構築時に掘りすぎた窪みを埋めるための貼り床である。この場合、落ち込みの覆土は人為堆積となる。もう一方は、この落ち込みを周溝ととらえ住居址を改築したときにつくられた貼り床であるという考え方である。この場合覆土は自然堆積を示す。このように2つの可能性を解明する糸口である落ち込みの覆土を確認できなかった事は残念である。炉の位置は特定できないが、南西部に焼土の広がりが確認された。

**遺物** 土師器の破片数点とミニチュアの高环1点が出土している（第68図）。遺物のはほとんどがP<sub>5</sub>より出土した。土師器は壺、鉢、甕、高环があるが器形を復元できるものは少い。ミニチュアの高环（第68図37）の破片がある。

本址の時期は遺物より古墳時代前期に比定できる。



第9図 第13号住居址



第10図 第14・15号住居址

#### 第14号住居址（第10図）

**遺構** 10区南東S23～S30、E10～E17に位置する。本址は15号住居址に全体を貼られている。主軸方向は、N-169°-Eを示し、東西5.2m南北5.7mを測る隅丸方形プランを呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は二次堆積ロームまで掘り込まれ、堅固、平坦で15住の床面より4cm程深い。ピットは確認されたが、いずれも性格不明である。

**遺物** 多量の土師器及び、筋錐車と鉄鉗各1点が出土した。土師器（第69図）は壺、甕、台付甕、器台があるが、器形を復元できたものは少ない。筋錐車は北東隅の床上より鉄鉗（第88図）は南東部の覆土中より出土した。本址の時期は出土遺物より古墳時代前期と考えられる。

#### 第15号住居址（第10図）

**遺構** 本址は、14号住居址をまるごと貼る位置にあり、土壤279、353、277にも切られる。南北7.54m、東西6.80mを測る大型の隅丸方形を呈する。壁はほとんど垂直に立ち上がり、壁高は15～25cmを測る。床面は二次堆積ロームで堅固、平坦である。南北壁直下に周溝が見られる。

**遺物** 土師器が多量に出土した（第70図）。器種は壺、甕、环、高环、壺があり、高环の数が多い。いずれも小片で器形を復元できるものではない。本址の時期は古墳時代中期と考えられる。

#### 第16号住居址（第11図）

**遺構** 10区南西部S26～S32、W14～W19に位置する。西側はわずかに調査区域外にかかりており土壤281に切られるが、全体として南北4.36m、東西4.50mの隅丸方形のプランは確認できる。壁は浅いため定かでないが、ゆるやかに落ち込む様相を呈する。床面は西側から東側へなだらかな傾斜をもつ。ピットは、11ヶ確認され、P<sub>1</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>については位置と規模からして主柱穴と見られる。

**遺物** 土師器とミニチュアがある（第71図）。遺物より本址は古墳時代前期と考えられる。

#### 第17号住居址（第12図）

**遺構** 10区南西部S30～S33、W18～W19に位置する本址は大半が区域外にかかり、平面形、規模など不明な点が多い。壁の立ち上がりは急で、壁高13cmを測る。床面は二次堆積ロームで平坦でありやや軟質であった。床面精査を行ったがピット等の施設は検出されなかった。

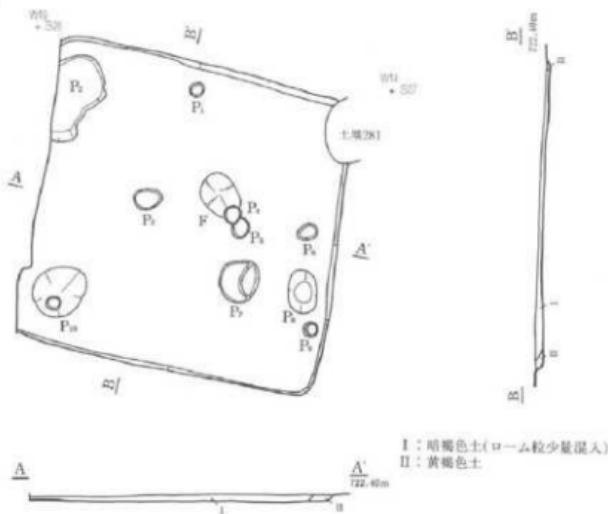
**遺物** 非常に少なく図示できたものはない。遺物より本址は古墳時代前期と考えられる。

#### 第18号住居址（第11図）

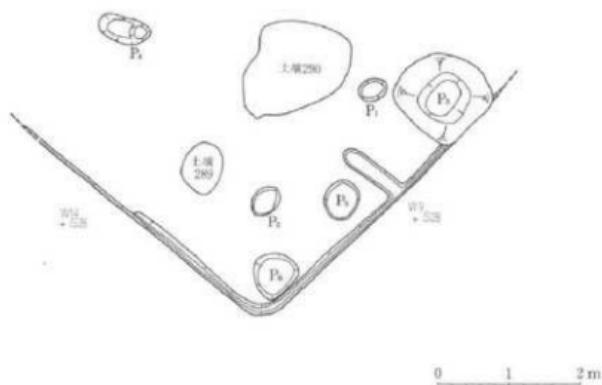
**遺構** 10区中央S26～S31、W7～W15に位置する。土壤213、214が、本址覆土中央部に掘り込まれている。主軸はN-49°-Eで、10区のはかの住居址とは異なった方向をもつ。重機の削平によって北側は床面下まで掘られているが、残存部ではやや起伏をもつ堅固な二次堆積ロームである。南西壁下に周溝がみられ、西側には間仕切りがある。P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>は位置と規模より主柱穴と断定する。

**遺物** 土師器とミニチュアがある（第71図）。遺物より本址の時期は古墳時代前期と考えられる。

第16号住居址

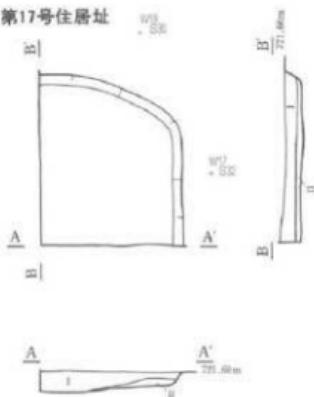


第18号住居址



第11図 第16・18号住居址

第17号住居址



I : 咬褐色土 (1~10cm大のローム塊多量混入)  
II : 黄色土 (1~2cm大の暗褐色土塊微量混入)

第20号住居址

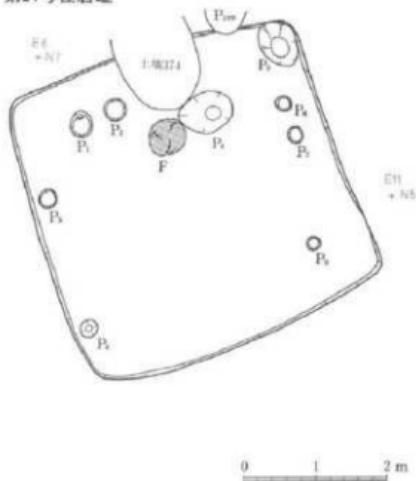


第19号住居址



I : 咬褐色土  
II : 咬褐色土 (ローム粒, 0.3~0.5cm大の白色砂混入)  
III : 黑褐色土

第21号住居址



第12図 第17・19・20・21号住居址

#### 第19号住居址（第12図）

**遺構** 10区中央S14～S18、E1～E6に位置し、土壌20に切られる。主軸方向N=0°で、不整円形を呈し、南北3.54m、東西2.76mの規模をもつ。壁面の傾斜は、西がゆるやかで、東はほぼ垂直と対照的である。床面は、非常に堅固で、西壁を除き周溝が検出された。

**遺物** わずかのみで図示できなかった。本址は遺物より古墳時代前期と考えられる。

#### 第20号住居址（第12図）

**遺構** 11区中央部N6～N11、EW0～E11に位置し、主軸方向N=158°～Eをとり、南北4.3m、東西3.8mの隅丸方形を呈す。床面は、平坦で非常に堅固な二次堆積ロームであり、覆土は検出面より0～3cmと非常に浅いため詳細は不明であったが、わずかに暗褐色土が認められた。

**遺物** 少量の土器片のみで図示できない。本址は遺物より古墳時代前期と考えられる。

#### 第21号住居址（第12図）

**遺構** 11区南東部N2～N7、S5～S11に位置し、土壌374に切られる。南北4.42m、東西4.40mの隅丸方形プランを呈する。検出面からの壁高は0～3cmと非常に浅いが、壁はほぼ垂直に立ち上がるようである。床面は、二次堆積ローム層に掘り込まれ、非常に堅固でやや起伏をもつ。また地山の傾斜に沿って北東から南東はゆるやかな傾斜を示す。

**遺物** 土師器が少量出土した（第71図）。器種は、壺、甕、S字甕がある。本址の時期は出土遺物より、古墳時代前期と考えられる。

#### 第22号住居址（第13図）

**遺構** 13区北東隅にS37～S45、E20～E23と座標をとる。大半を調査区域外に残す住居址である。主軸はN=0°をとり、29住を切って立地している。規模、プランは定かではない。壁高40cm程度を測り、ほぼ直に立ち上がる。床面は二次堆積ローム中に掘り込まれ、平坦で堅硬なものになっている。2段に掘り込まれたP<sub>2</sub>は2個体のつばが出土した事から、貯蔵穴と推定できる。

**遺物** 土師器が多量に出土した（第72図）。器種には、高壺、甕、壠がある。本址の時期は出土遺物より古墳時代前期と考えられる。

#### 第23号住居址（第13図）

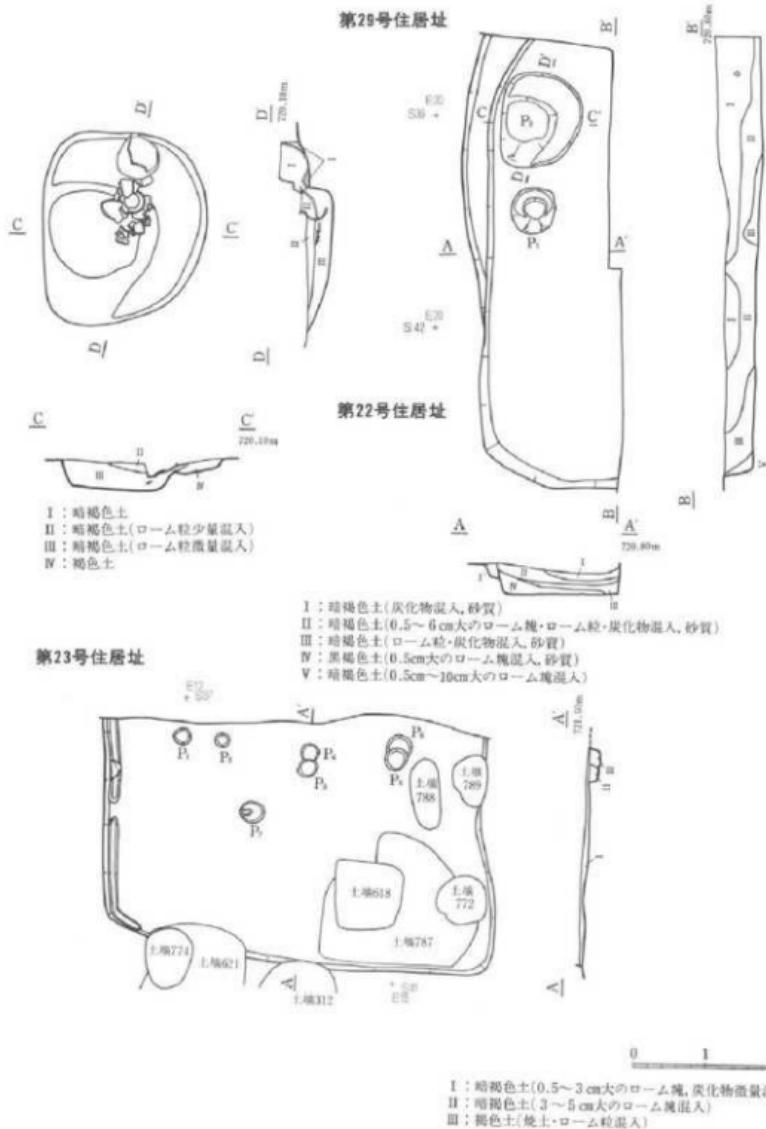
**遺構** 11区北側S37～S41、E10～E17に位置する。主軸はN=2°～Eを示す。南北5.56m、東西3.64mの隅丸方形を示す。検出面からの壁高が浅いため詳細は不明だが、壁は比較的ゆるやかに落ちる。床面は、軟質で起伏はないが東から西へ向い、地山に沿ってなだらかに傾斜する。西壁面直下に周溝が見られた。

**遺物** 土師器の小片のみで図示できたものはない。本址は遺物より古墳時代前期と考えられる。

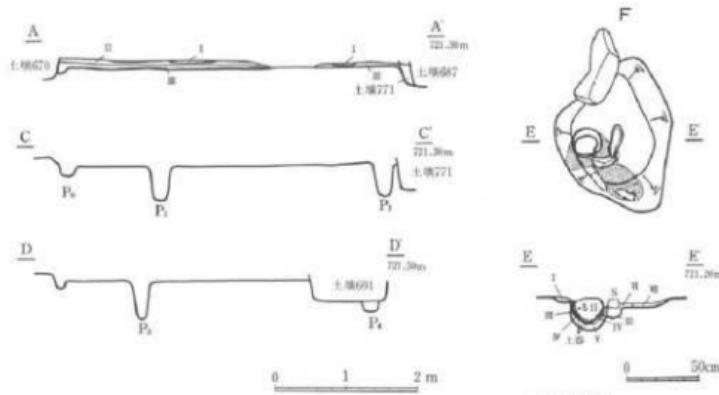
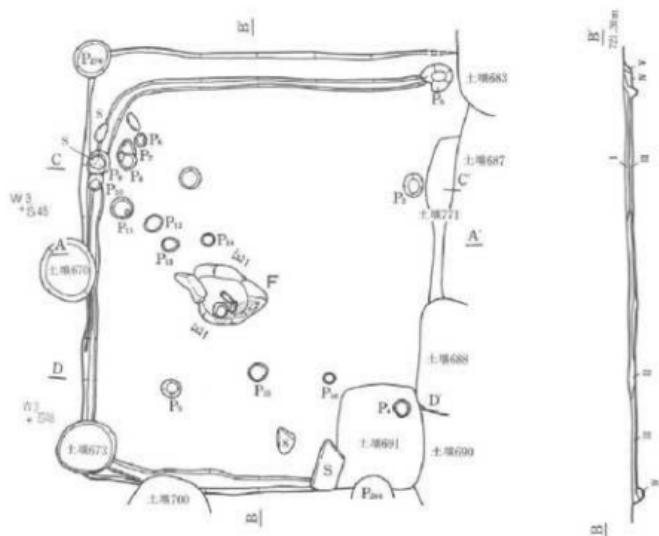
#### 第29号住居址（第13図）

**遺構** 本址は、大半の部分を22号住居址に掘り込まれ、プラン、規模とも不明である。残された西側壁と床面より、壁高は20cm、二次堆積ロームの平坦でやや軟質な床であることがわかった。

**遺物** 多量の土師器片のみで図示できなかった。本址は遺物より古墳時代前期と考えられる。



第13図 第22・23・29号住居址



- I : 黄褐色土(焼土粒, 0.5cm大の暗褐色土塊少量混入)  
 II : 細褐色土(焼土粒, 灰化物微量混入)  
 III : 黑褐色土(焼土微量, 灰化物多量混入)  
 IV : 細褐色土(灰化物, 0.5~1.5cm大のローム塊微量混入)  
 V : 暗褐色土(暗褐色土粒混入)

- I : 暗褐色土  
 II : 暗褐色土(焼土粒微量混入)  
 III : 暗褐色土(焼土粒微量混入)  
 IV : 焼土  
 V : 暗褐色土(ローム粒混入)  
 VI : 暗褐色土(焼土粒混入)  
 VII : 暗褐色土(0.5~0.7cm大のローム塊混入)

第14図 第24号住居址

#### 第24号住居址（第14図）

遺構 13区中央N43～N50、E 6～W 3に位置する。主軸をN-87°-Eにとり、南北6.20m、東西6.80mの方形プランを呈する。東側壁面は中世土壤によって切られており、全体の把握は難しかった。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は10cm～20cmと浅い。二次堆積ロームを掘り込んだ床面は平坦で堅緻であった。床面精査の結果、深さ10～20cm、幅15cm程度で壁面から60cm程内側をめぐる周溝、4本の主柱穴などが検出された。炉址は、炉<sub>1</sub>、炉<sub>2</sub>が検出された。南北100cm、東西90cmの窪みの中央部に位置する炉<sub>1</sub>は、緑石をともなった埋葬炉であり、埋設された壺は胴部のみで、その下を高杯の杯部が受けており、杯部接合部の穴をさらにおおうように土器小片2枚が出土した。壺を中心として、周囲に不整円形を呈する焼土の広がりを示している。この焼土の広がりに切りとられるようにして、炉<sub>2</sub>の焼土が、楕円形を呈して広がりを見せている。この中には抜き取られた緑石の底だろうと思われる暗褐色土の落ち込みが確認され、この位置に炉<sub>3</sub>が存在したことが推定される。

遺物 土師器の破片が少量出土したのみである（第73図）。器種は高環と甕があるがいずれも小片で器形を復元できたものはない。遺物より本址の時期は古墳時代前期と考えられる。

#### 第25号住居址（第15図）

遺構 13区南端N62～N67、W 1～W 3に位置する。主軸をN-14°-Eにとり、南北3.18m、東西2.10mの隅丸方形を呈する。土壤757、776に切られ、東壁と南壁は調査区域外にまでかかっている。壁の立ち上がりは比較的なだらかで、床面は二次堆積ロームに掘り込まれ、軟質で、ピット、炉などの施設は発見されなかった。

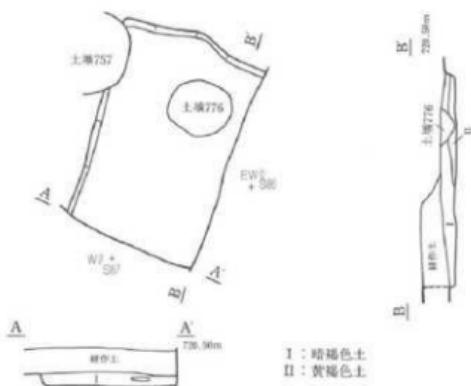
遺物 遺物の量は非常に少なく、またいずれも小片のため図示できたものはない。本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。

#### 第26号住居址（第15図）

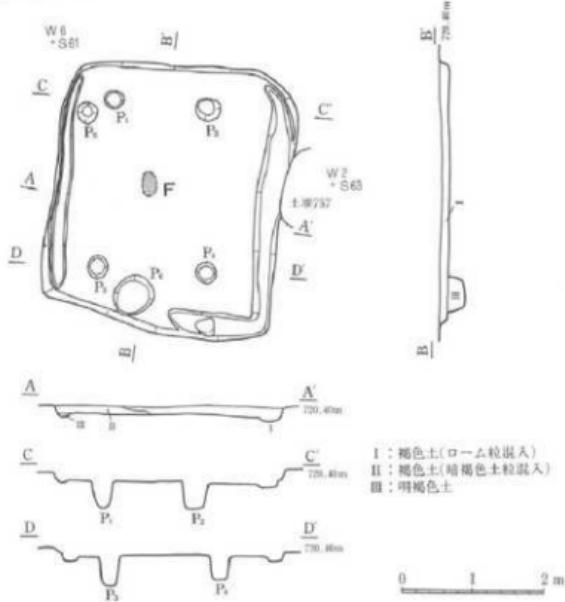
遺構 13区南端N61～N65、W 3～W 6に位置する。主軸はN-166°-Eをとり、南北3.30m、東西3.82mの隅丸方形を示し、北隅を土壤757に切られる。壁の立ち上がりはなだらかで高さは15cm前後を測る。二次堆積ロームに掘り込まれた床面を精査した結果、周溝、ピット、炉などが検出された。周溝は、北側を除いてみられ、幅20cm、深さ6cmと、住居址の規模に比べれば、大きいものであった。炉は地床炉で34×22cmの楕円形を呈し、3～9cmと浅く皿形に掘り込まれていた。

遺物 遺物の量は非常に少なく図示できたものはない。本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。

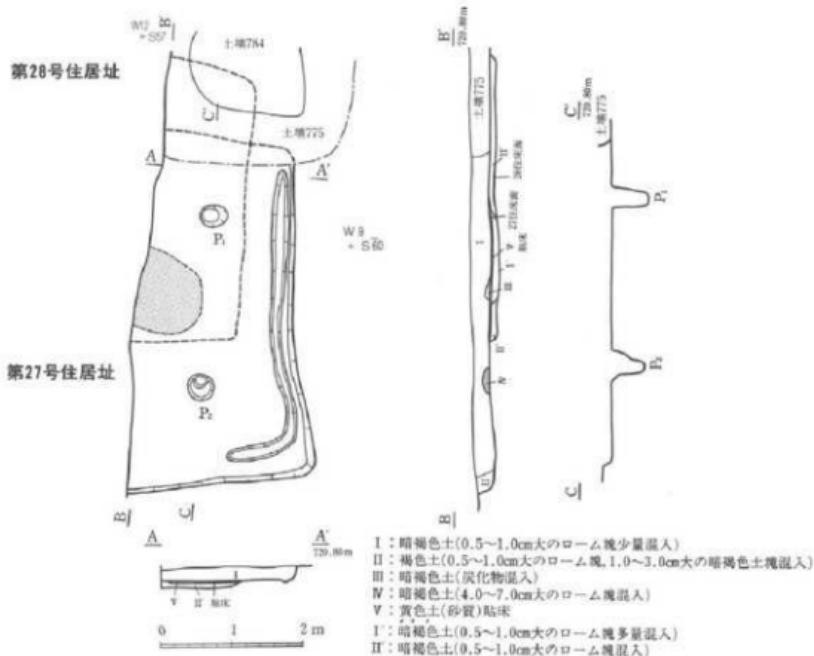
第25号住居址



第26号住居址



第15図 第25・26号住居址



第16図 第27・28号住居址

第27号住居址（第16図）

**遺構** 13区南端、N59～N63、W9～W12に位置し、主軸をN-3°Eにとり、南北5.20m、東西2.70mの隅丸方形を呈する。28住を貼り、土壤783に切られ西側を調査区域外に残す。壁はなだらかな立ち上がりを示し、床は二次堆積ロームで非常に堅固、平坦であった。28住を切る部分の床面は砂質ローム土の貼り床が厚さ8cmで貼られていた。また貼り床に重なるように、厚さ2～3cm程度の灰の層が見られ、あるいは焼失住居の可能性も残される。東側床面には幅24cm、深さ20cmの周溝が見られた。また検出されたP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>は、位置と規模から主柱穴と見られる。

**遺物** 遺物の量は少なく、いずれも小片のため図示できなかった。本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。

第28号住居址（第18図）

**遺構** 27号住居址、土壤に切られ、大半を調査区域外に残す。本址は、他の住居址に見られない人為堆積の覆土の特徴をもつ。床面は比較的堅く、二次堆積ローム中に掘り込まれている。わずかに残る床面からは、ピット、炉などの施設は確認できなかった。

**遺物** 遺物はわずかにあるのみで、図示できたものはない。本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。



第17図 第38号住居址

#### 第38号住居址（第17図）

**遺構** 12区東端N19~N25、W9~W16に位置するが、南側は区域外にかかり、全貌は明らかでない。本址は向畠7号古墳によって切られている。主軸方向はN-124°-Eを示す。南北6.20m、東西(4.60m)の隅丸方形のプランを呈する。壁はほぼ垂直に落ちている。床面は堅固であり、その傾斜は平坦である。

P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>はそれらの位置と規模より主柱穴であると断定できる。区域外にあると思われる西側主柱穴と北側主柱穴P<sub>4</sub>間より北側主柱穴P<sub>2</sub>寄りで、両主柱穴間より若干内側に炉が位置しており、炉底の被熱焼化はこの炉の使用頻度の高さをよく顯している。P<sub>3</sub>は貯蔵穴であると思われる。なお、本址北側にはベッド状の遺構があり、高さは床面より3~5cm、長さは280cmに及ぶ。

**遺物** 土師器が少量出土したのみである(第74図)。器種別では、小形甌、高杯、甌がある。本址の時期は出土遺物より古墳時代前期と考えられる。

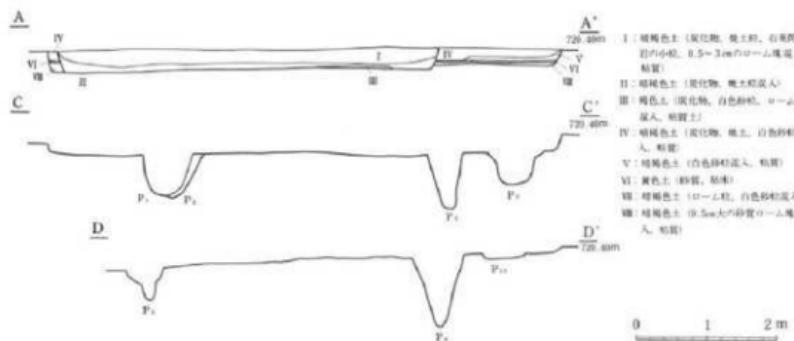
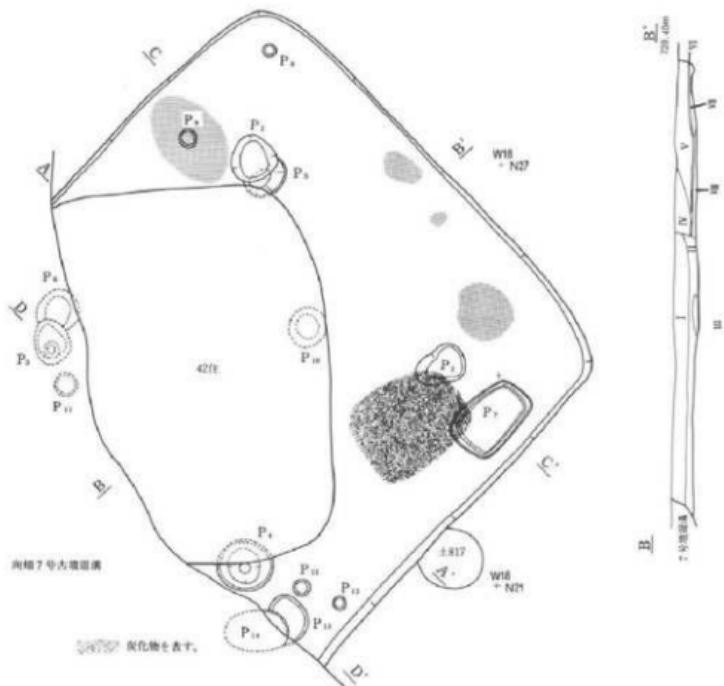
#### 第40号住居址（第18図）

**遺構** 本址は3区中央東側N20~29、W17~24に位置する。土壌794を切り中央部を第42号住居址、南西側を向畠7号古墳周溝に切られる。表土除去作業の段階で焼土を伴う暗褐色土の落ち込みを確認した。規模は切り合いのため不明確の部分もあるが一辺が7.5mの隅丸方形を呈し、本遺跡の中では大形住居址に属するもので、2時期にわたって使用されたものである。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、壁高は30cmを測る。住居址内には30本を越す炭化材が放射状に遺存しており焼失住居の跡を示していた。炭化材の最大幅は約12cmで、長さは直線上のものを同一個体としてみると最大180cmに及ぶ。東北側には170×140cmの範囲に4cmの厚さで炭化物が散乱し、北側に沿って3箇所に厚さ10cmあまり焼土があった。床面は砂質の黄色土でやや軟弱だが平坦な貼り床である。貼り床は厚さ10cm余りで上面の黄色土の下はローム粒・ローム塊の混入する暗褐色土が堆積していた。東側のP<sub>2</sub>脇には120×80cmの炭化物が充満していた貯蔵穴と思われる穴がある。ピットは新旧15本が検出された。このうちP<sub>1</sub>：円形(80×70×70cm) P<sub>2</sub>：不整円形(72×52×78cm) P<sub>3</sub>：円形(66×54×60cm) P<sub>4</sub>：円形(84×74×92cm) はその位置・規模及びピット内の断面に炭化物が観察されたことなどから新住居址に伴う柱穴と考えられる。遺物は壁近くに沿って配置されていた。旧床面は新床面より10cm余り下にあり砂質ロームで堅緻だが僅かに起伏がみられる。住居址の大きさは上面の住居址とはほぼ同一であり、柱穴もP<sub>2</sub>、P<sub>4</sub>は共通でP<sub>1</sub>に切られたP<sub>3</sub>：円形(60×?×75cm) P<sub>4</sub>：円形(60×60×41cm) の4本が考えられる。

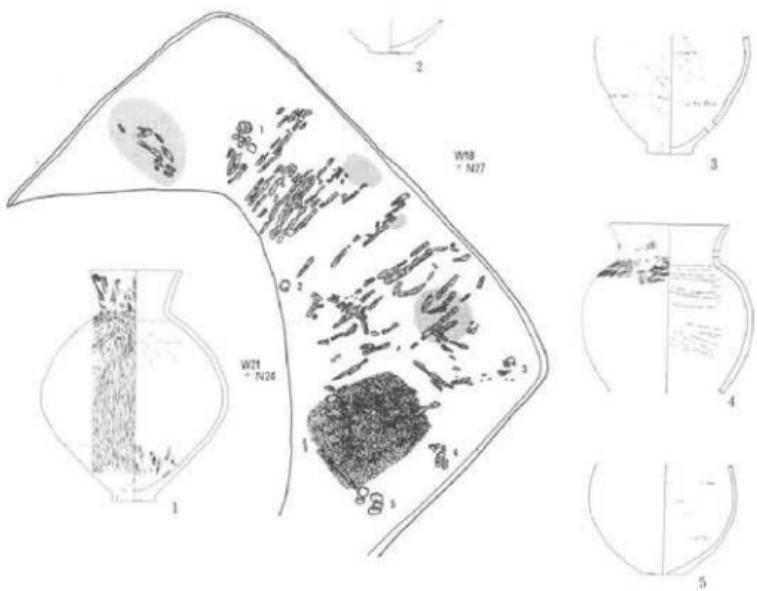
これらのことから下部の旧住居址とはほぼ同一箇所に建て直して貼り床をした住居址であり、柱穴も殆ど同一箇所に掘られたものと判断したい。旧住居址から遺物の出土はない。

**遺物** 覆土中より土器・土製品が出土した他、上記のように新住居址から半完全形以上の壺が4点出土している。特にP<sub>1</sub>脇には完形の壺があり、この壺は頭部以下に籠目がついており、籠で保護されていたものとおもわれる。覆土出土のものは小破片で器形の一部分しかわからないものが多い。これら出土土器から本址は古墳時代前期と比定できよう。ただ下部の旧住居址については直接時期決定となる資料はないが、第37号住居址の例もあり、新住居址との時間差は少ないものと思われる。

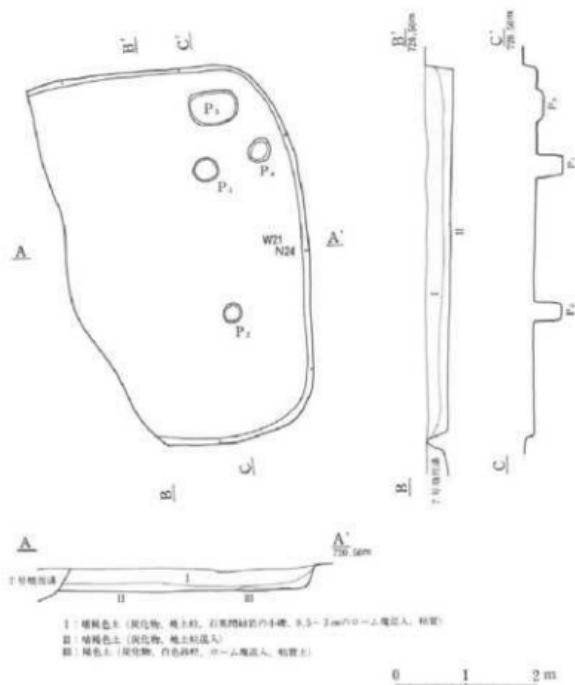
◆炭化材の樹種については、本址の数ヶ所からサンプルを採取して、大阪高校森義直教諭に鑑定を依頼したところ、すべてがエノキとの結果を頂いた。



第18図 第40号住居址



第18图 第40号住居址遗物出土图

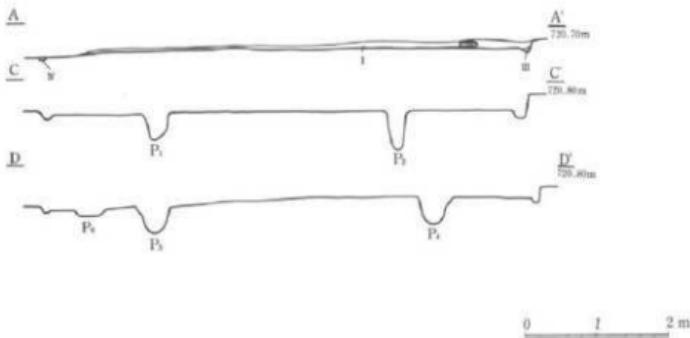
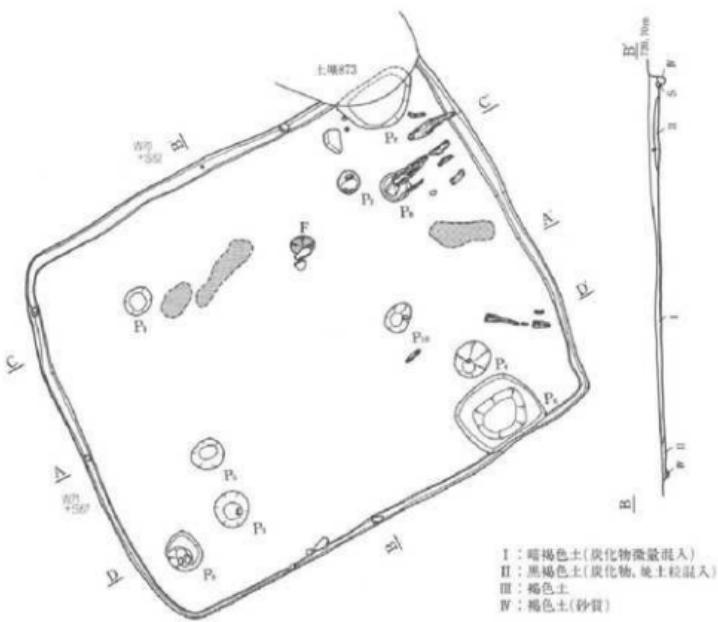


第20図 第42号住居址

#### (17) 第42号住居址（第20図）

**遺構** 3区中央東N21~27、W21~24に位置する。40号住居址を切り、西側を向畠7号墳周溝に切られる。本址は40号住居址の覆土中に掘り込まれておらず、検出時に見落としてしまった。40号の掘り下げを開始した後、炭化物が見られない部分を確認し再検出を行なった結果、その存在が明らかになった。規模は南北で5.4mを測り、隅丸方形のプランが推定される。壁は外傾気味に立ち上がり、壁高は30~40cmを測る。床面は石英閃緑岩混入のローム層まで掘り込まれ、堅緻で平坦なものとなっており、40号のものより僅かに深い。ピットはP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が検出され、このうちP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>は位置・深さから4本柱の主柱穴の2つと考えられる。

**遺物** 土師器小片が、少ないが出土している。遺物より、古墳時代前期の住居址と考えられる。



### 第21回 第44号住居址

#### 第44号住居址（第21図）

**遺構** 15区中央S 61～S 69、W63～W72に位置する。主軸はN—152°—Eをとり、南北5.9m、東西7.1mの隅丸方形のプランで、土壤873に切られる。深い耕作によって削平されて、覆土が非常に浅く、壁の立ち上がりなどは確認できない状態であった。床面は二次堆積ローム層に掘り込まれ、非常に軟弱で緩やかな起伏をもつ。炭化材が東側に方向性をもってみられる事から、焼失住居の可能性も残されるが、焼土、炭化物の量が少なく、分布状態が東部に偏向しており、遺物の量も少ない事から断定はしかねる。

床面精査の結果、壁際を全周する幅16～20cm深さ10cmの周溝、炉、ピット10ヶが検出された。炉は15×8cmの楕円形で、浅く皿状に掘り込まれていた。P<sub>1</sub>(40×36×50cm)、P<sub>2</sub>(34×30×50cm)、P<sub>3</sub>(60×30×40cm)、P<sub>4</sub>(60×50×30cm)は位置、深さから支柱穴の可能性がある。またP<sub>5</sub>(70×56×74cm)、P<sub>10</sub>(50×26×16cm)は、位置的に支柱穴の可能性がある。P<sub>6</sub>は住居全体の位置から見て南側に壁に沿って設営されており、110×90×40cmの規模をもつ方形の施設でしかも二段に掘り込まれている事から貯蔵穴と断定できる。

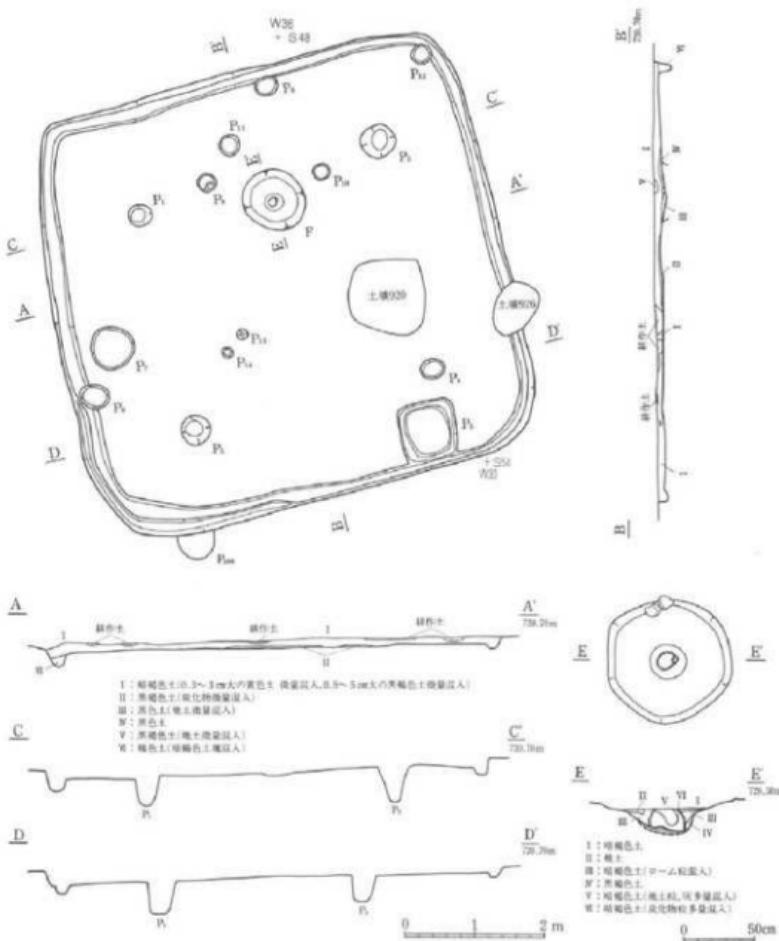
**遺物** 少量が出土したのみで、図示できたものは、ミニチュア土器2点と台付甕の3点のみである（第74図）。ミニチュア土器は共に遺存状態は良く、第74図119は完存、118は口縁を大きく欠くが器形の復元は可能である。台付甕（第74図120）は、胴と接合部がわずかに遺存するのみである。

本址の時期は遺物より古墳時代前期と考えられる。

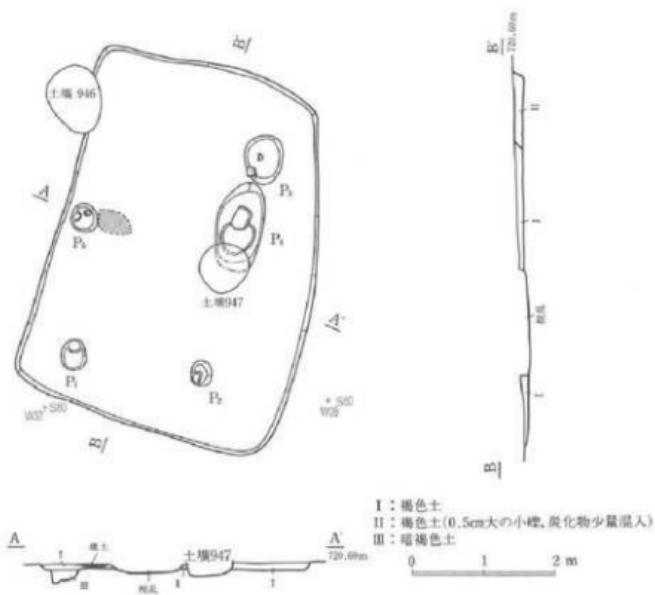
#### 第45号住居址（第22図）

**遺構** 6区西端S 48～53、W32～39に位置する。土壤930を貼り、土壤899、927、928に切られる。南北6.2m、東西6.4mの隅丸方形プランを呈し、炉址の位置からみて南側に出入口を想定でき、主軸方向はN—14°—Wを示す。壁は、ほぼ垂直に近く立ち上がり、壁高は10～20cmを測る。床面は二次堆積ローム中に掘り込まれ、平坦で堅緻なものになっている。床面精査の際に、周溝・ピット・炉址が確認された。周溝は深さ10～20cm程度で、壁際を全周する。ピットは14ヶ検出された。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、いずれも50cm前後の深さで、方形に配列されており、主柱穴と考える。南壁直下東側にあるP<sub>5</sub>は二段に掘り込まれており、貯蔵穴と考えられる。炉址は北側柱穴間に設けられ、直径45cmの円形を呈する埋甕炉であり、その掘り方の中に壺の胴部上半を正位に埋設している。底面の砂質黄色土は被熱層として残る。埋甕炉の周囲は浅く盛み、床面から6cm程掘り下げられている。

**遺物** 土師器と石器が出土している。土師器は古墳時代前期の様相をもつもので、床面北東部に集中して高壙・甕・手づくねなどが出土している。石器は砾石が3点確認されている。遺物よりみて本址は古墳時代前期に比定される。



第22図 第45号住居址



第23図 第47号住居址

#### 第47号住居址（第23図）

**遺構** 16区 S 55~61、W 28~33に位置し、主軸はN-20°-Eをとる。南北5.20m、東西3.78mの隅丸方形のプランを呈し、土壙946、947に切られる。深い耕作により覆土がかけられ、壁の状態は明確ではないが、比較的なだらかな立ち上がりであった。底面は、二次堆積ロームに掘り込まれ、軟弱で緩やかな起伏を持つ。住居址中央部に、深さ10cm程で広範間に擾乱があり、本来あったであろう施設が破壊された可能性がある。P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>は規模、位置より支柱穴と思われる。P<sub>1</sub>、P<sub>3</sub>については、二段の落ち込みがみられ、柱痕ととらえる事ができる。またP<sub>5</sub>にも柱痕がみられ、穴の配置から支柱穴と思われる。またこのP<sub>5</sub>に関しては遺物も多少出土している。土壙947に切られるP<sub>4</sub>は、二段に掘り込まれ位置と規模より、貯蔵穴ととらえることが自然かもしれない。

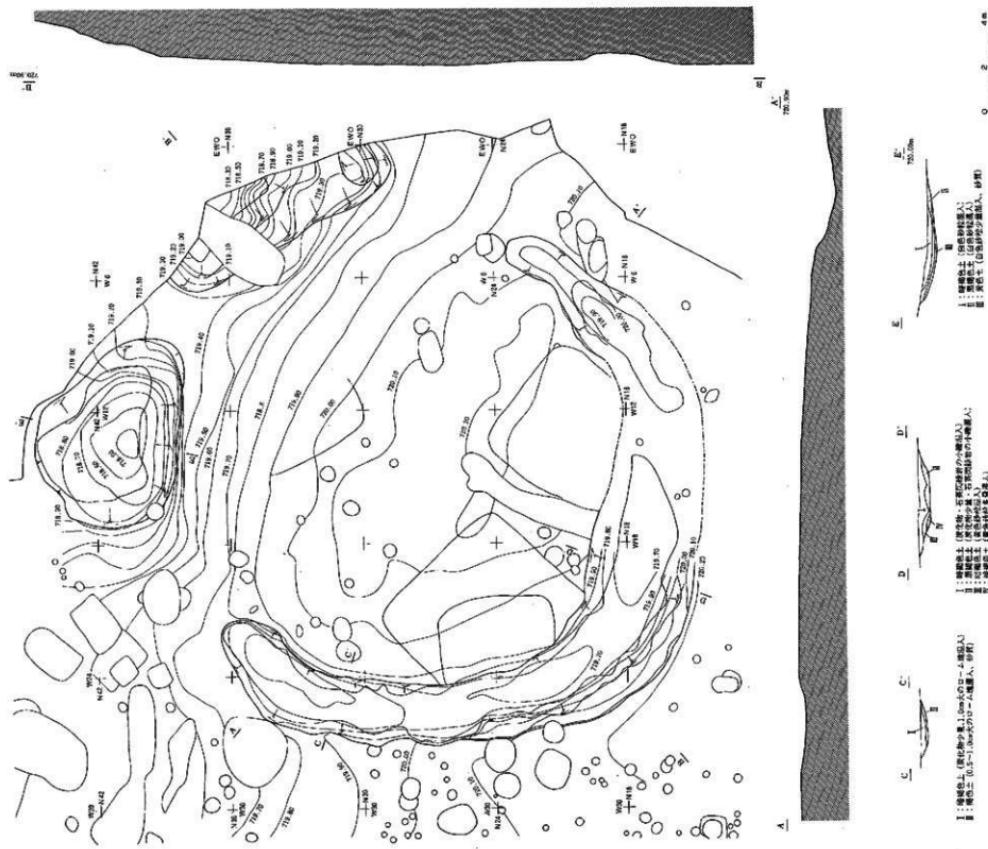
**遺物** 遺物の量はごくわずかであり、いずれも少片のため図示できたものはない。本址の時期は、遺物より古墳時代前期と考えられる。

表1

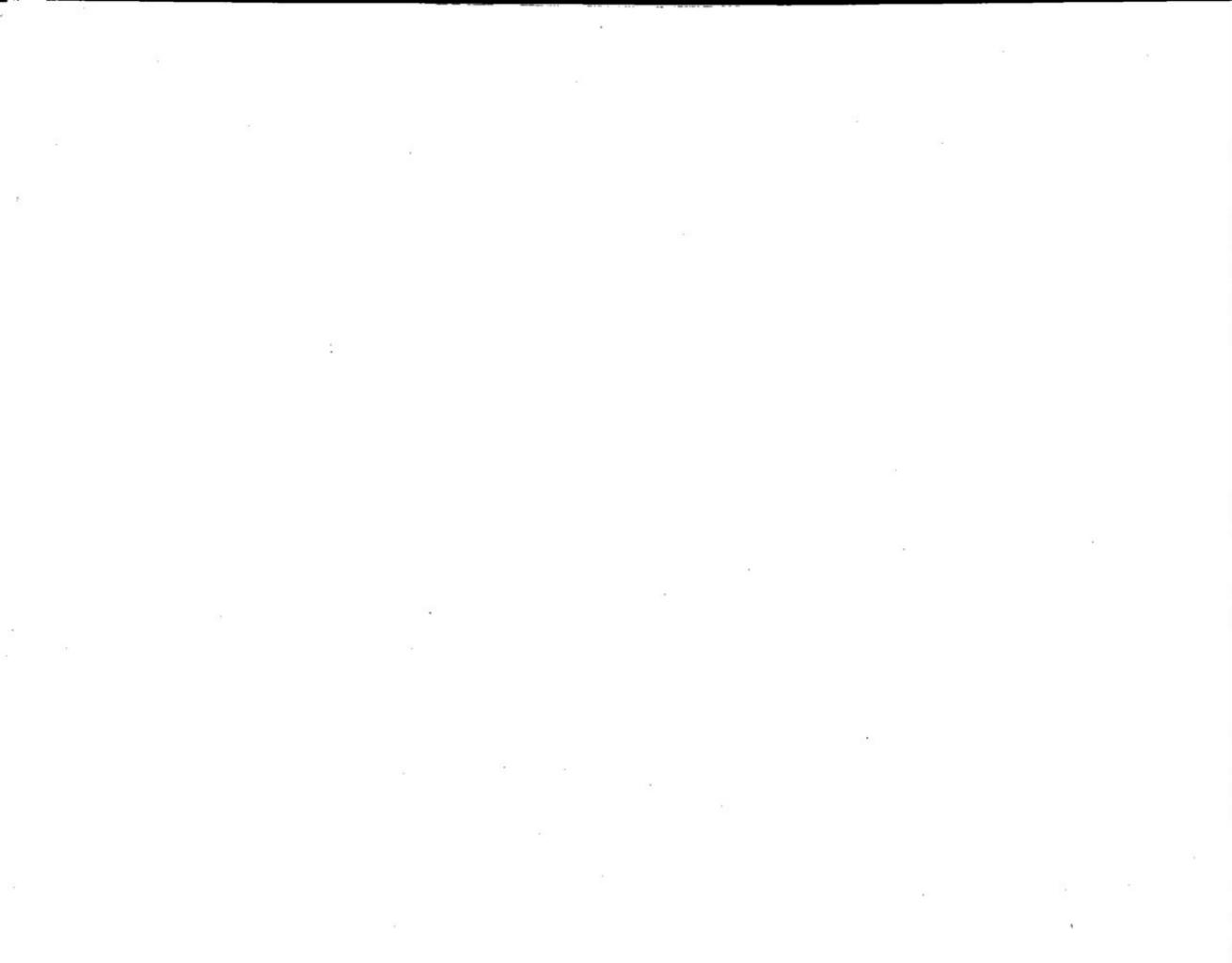
## 住居址一覧表

住居 No.	固 No.	主軸	平面形 (cm)	炉位置	炉形整規様 (cm)	出土遺物	備 考
1	4	(N-65°W)	隅丸方形 576×566	中央西 より	地床炉 42×48	土師器高环、壺	土壤27、28、31に切られる 土壤30を切る
2	5	(N-0°)	隅丸方形 376×368	柱穴間	地床炉 100×60	土師器壺、壺、甕	調4に切られる 5住を切る
3	5	(N-11°E)	隅丸方形 560×(380)	中央?	地床炉 400×40	土師器壺、甕	
4	6	(N-9°E)	隅丸方形 378×(290)	なし	—	土師器壺、甕、甕、瓦	
5	5	?	?			土師器壺	調4、2住に切られる
11	7	(N-0°)	不整円形 490×476	中央	地床炉 24×18	圓文土器、環体	土壤128、129、139、131、259、200に切られる 土壤364を切る
12	8	(N-65°W)	隅丸方形 680×670	柱穴間	地床炉 44×48	土師器高环、器台、壺、 甕、土製勾玉	焼失住居、間仕切りの構あり 土壤145に切られる 土壤154、155、156、157、161、165に切られる
13	9	(N-0°)	隅丸方形 523×522	不明	不明	土師器高环、壺、甕、 鉢、ミニチュア	土壤199、246に切られる 土壤250を切る
14	10	(N-16°E)	隅丸方形 568×516	なし	—	土師器器台、甕、効鍊 車、金扣	15住を切る
15	10	(N-162°E)	隅丸方形 754×680	不明	不明	土師器高环、壺、器台、 甕、台付甕、S字甕	土壤216、354、353、14住に切られる
16	11	(N-14°E)	方形 830×830	中央東 上9	地床炉 60×50	土師器甕、ミニチュア	土壤281に切られる 17住を切る
17	12	(N-0°)	460×400	不明	不明		16住に切られる
18	11	(N-49°E)	?	42×46	不明	土師器高环、甕、小形 壺、ミニチュア	土壤289、278、290に切られる 間仕切りあり
19	12	(N-0°)	隅丸方形 354×776	不明	不明		土壤201、202を切る
20	12	(N-158°E)	隅丸方形 430×380	なし	—		
21	12	(N-162°E)	隅丸方形 442×440	柱穴間	地床炉 54×50	土師器甕、S字甕	土壤374、P <sub>188</sub> 、P <sub>203</sub> に切られる
22	13	(N-0°)	?	620×164	不明	土師器高环、壺、甕、 台付甕	29住を切る
23	13	(N-2°E)	隅丸方形 556×364	不明	不明	土師器高环、壺、甕、 S字甕、器台	土壤788、789、787、772、618、620、621に切 られる
24	14	N-87°E	方形 620×608	柱穴間	碌石撰炉 42×32折 新田あり 35×22田	土師器高环、甕	土壤673、670、683、771、887、688、691、 P <sub>184</sub> 、P <sub>21</sub> に切られる 土壤700を切る

住居 No.	部 No.	主軸	平面形 (cm)	軸位置	軸形態規格 (cm)	古土 遺 物	備 考
25	15	(N-14°-E)	隅丸方形 (318×210)	不明	不明		土壤776、757に切られる
26	15	N-166°-E	隅丸方形 330×382	中央	地床炉 34×22		土壤757に切られる
27	16	(N-3°-E)	隅丸方形 520×(270)	不明	不明		土壤783、775に切られる 土壤758、28往を切る
28	16	(N-4°-E)	隅丸方形 402×(140)	—	—		土壤783、775、27往に切られる
29	13	?	?	不明	不明	土器器小形甕、壺、台付甕	22往に切られる
30	17	(N-124°-E)	隅丸方形 620×(460)	柱穴間	地床炉 124×100	土器器高环、甕、小形甕	北側にベット状遺構あり
40	18	(N-46°-E)	隅丸方形 750×(680)	不明	不明	土器器甕、台付甕、壺	既失往居。土壤817を切る 48往に切られる
42	20	N-175°-E	隅丸方形	不明	不明		40往を切る。7号培塿溝に切られる。土壤549 に切られる
44	21	N-152°-E	隅丸方形 590×706	柱穴間	砾石地床炉 30×28	土器器台付甕、ミニチュア	土壤873に切られる 既失往居址か
45	22	N-14°-W	隅丸方形 640×620	柱穴間	砾石地床炉 90×90	土器器高环、甕、台付甕、手づくね	土壤920、926に切れる P <sub>1m</sub> を切る
47	23	N-20°-E	隅丸方形 520×378	不明	不明	土器器甕、ミニチュア	土壤946、947に切られる



第24圖 向烟7号古墳

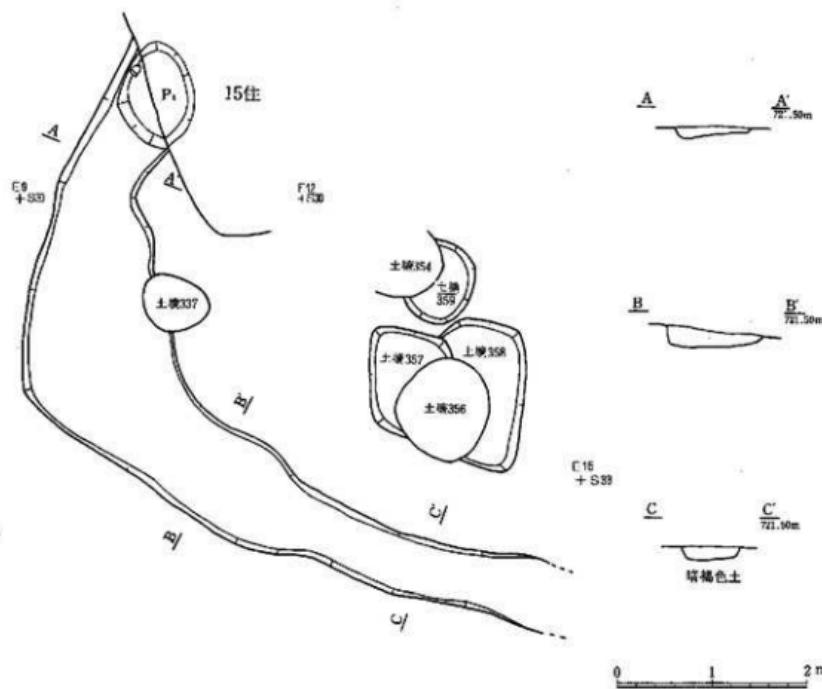


## 2. 古墳

### 向畠7号古墳（第24図）

III区東側に位置する。丘陵上の台地の北はずれにあたり、6号古墳の南東に隣接する直径22mの円墳である。調査開始以前には墳丘と思われる顯著な高まりはなく、本古墳の存在は予想されていなかったが、III区検出時に弧状に巡る周溝を確認し、古墳の存在が明らかになった。本古墳の墳丘は地山の二次堆積ロームまで完全に破壊され、周溝部分の他に本古墳を推測させるものはない。周溝は3ヶ所で途切れています。南側周溝は平坦な台地上を掘り込み、およそ半周を巡る。検出面での最大幅は480cm、最深部は52cmを測り、断面形はU字形を呈する。覆土は砂質の褐色土～暗褐色土が堆積しており、下層～底面には拳～人頭大の礫が僅かに見られた。これらが墳丘の墓石として利用されていたものか否かは明らかではない。底面は砂質の二次堆積ロームであった。周溝の両端は台地のはずれにあたり、ここから自然地形は北側に傾斜をまして下方に向っており、北側、東側の周溝部分では急激な傾斜となっている。北側周溝は、最大幅640cm、最深部90cmを測る。壁は急斜面を掘り込んでいる為、内側ではやや急に立ち上がるが外側では確認されなかった。東側周溝は東半が調査対象地外となるが北側周溝と類似すると考える。

遺物は周溝内、検出面から土師器・須恵器・石庖丁等が確認された。土師器では、南側周溝の東端から供献用土器10個体がまとまった状態で押し潰され出土している。須恵器は甕・壺が周溝から確認された。石庖丁は弥生時代のもので混入品と考えられる。遺物より本古墳は古墳時代中期に比定されるものである。



第25図 方形周溝墓

### 3. 方形周溝墓（第25図）

**遺構** N29~34、E 8 ~13に位置し、土壙333を切り、15生、土壙339に切られる。自然地形はこれより東は傾斜を増して下方へ向かっている。15生による搅乱と深耕の為に僅か瓦溝の南西コーナーを検出するに止まった。周溝は二次堆積ローム中に掘り込まれ、最深部で20cmを測り、断面皿形を呈する。東邊には  $P_1$  ( $114 \times 84 \times 50$ cm) が検出された。また主体部と断定できる落ち込みは検出できなかったが、土壙として扱った土壙357、358、359は位置、規模等の点で問題はあるが、いずれも人為堆積の状態を示しており、本址の主体部である可能性は捨てきれない。土壙357からは鉄（第88図）が出土している。遺物は少く周溝  $P_1$  の壁際から出土した培（第74図）1点を含む古墳時代前期の土師器が少量出土している。

本遺構の所属時期もそこに求めたい。

#### 4. 上墳

今回の調査では多数の穴を検出した。このうち竪穴住居址に伴わないので直径50cmを越すものを上墳とし、それ未溝をピットとして扱った。その数は発見された各種遺構の中ではとりわけ多く、本遺跡を代表する遺構と言えよう。

① 分布 今回の調査で土壙575基が確認された。並行して行った県道改良工事に伴う調査を含めて土壙の分布を見ると、1・2・8・10・13区に集中しており、これらの地区的南北方向には並がっていない。西側は本年度実施された圃場整備事業に伴う第2次調査で多数の土壙が確認された。土壙の分布集中地は地形的に見ると丘状の地形面の中央平坦地にある。(付図参照)14区の土壙については他のものとやや趣きが異なり、平面形、断面形、遺物の有無から、あるいは樹木の根柢または耕作による伐根の痕かも知れない。

② 規模 長径は最大713cm、最小50cmである。50cm単位でみると、50~100cmが245基と最も多く、約4割を占め、次いで101~150cm184基、151~200cm91基、201~250cm34基、250cm以上21基と規模が大きくなるにつれ減少している。

③ 平面形態 おおむね円形、楕円形、方形、長方形の4つに分けられるが、それぞれに不整形のものがある。円形、楕円形を呈するものは11区北西部、15区、16区に集中している。規模との関係をみると、100cm未溝のものには円形をしたものが多く、大型のものは方形、長方形のものが多い。

#### ④ 断面形

A 方形、長方形を呈するもの

底面が平坦で垂直に近い角度(斜度が85°~90°)で立ち上がるもの。

B 台形を呈するもの

底面が平坦で壁の斜度が85°以内で外傾して立ち上がるもの。浅いものはA類と近似性を持つ。

C 半円形を呈するもの

底面が徐々に浅くなり、緩やかに立ち上がっていいくもので、底面と壁面との区別が付きにくいもの。

D フラスコ状を呈するもの

検出面より下に最大径を持ったもの。袋状をしたもの。

E 二段底のもの

底面が二段になっているもの。

F その他

上記A~Eに当てはまらないもの、底面の凹凸の激しいもの、三角形を呈するもの等。

また、A~Fの他にそれらの中間型があるが、いずれか一つの分類を行った。

#### ⑤ 覆土

a 自然堆積を示すもの。各土層が上墳の形状に合わせて層的に重なり合って堆積しているもの。

- b 一時的または短期的に重なりまとまった埋没状況を示すもの。かなり深い土層でも単層であるか、ないしは不規則な土層が観察されるもので、ローム粒、ローム塊が混入している例が多い。この様な覆土はかなり特殊な状況下で形成されたものである。人為的な埋め込みが考えられる。
- c 土層の区分が不明瞭で漸移的に土色、土質が変化するもの。数は非常に少ない。中には土壌の壁と覆土の識別さえ困難なものもある。

#### ⑥ 特徴的な土壌

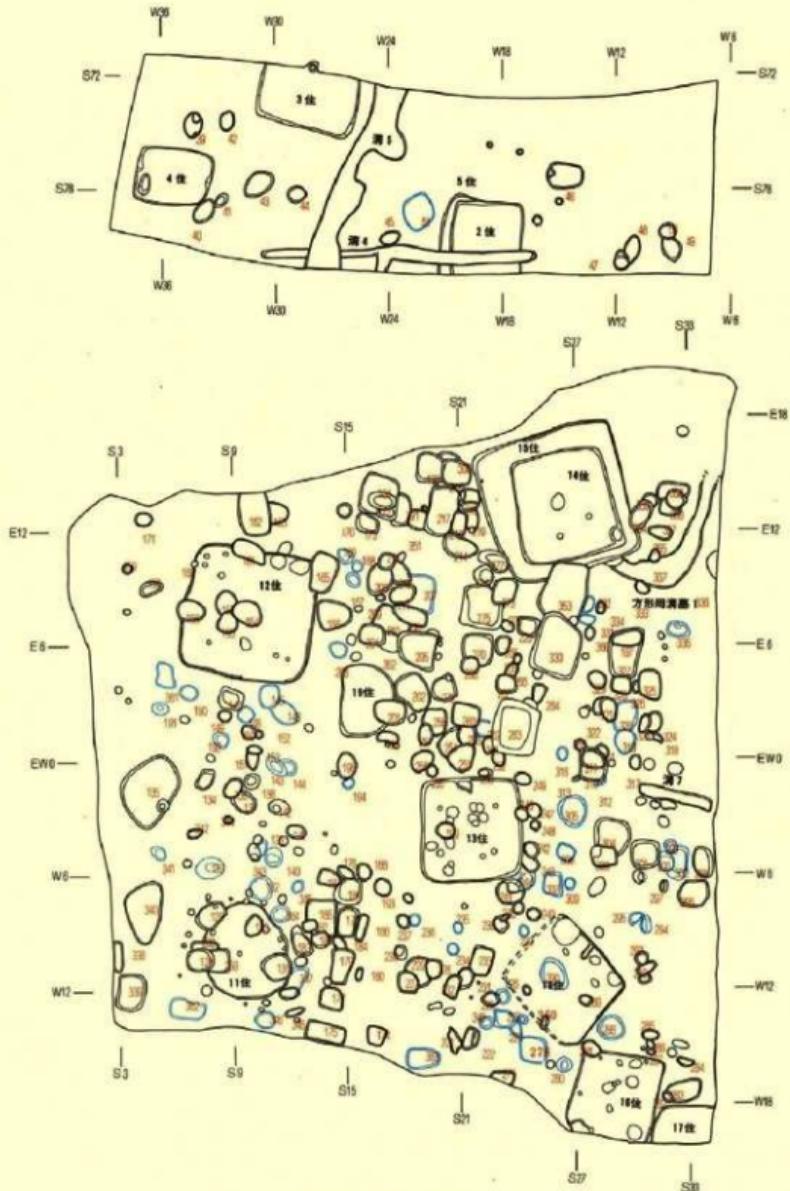
**土壌744** 13区南側に位置する。規模は123×89cmを測り、方形プランを呈する中世以降の墓地である。長軸方向はN-89°-Eを示している。壁はやや緩かに立ち上がり、覆土の暗褐色土中にはローム塊が混入していた。この覆土中には多量の人骨が確認された。人骨については詳しく後述している様に壮年期以降の男性のものと思われる。

**土壌353** 10区南側に位置し、規模は(238)×238cmを測る。平面プランは長方形を呈し、長軸方向はN-18°-Eを示している。壁は急に立ち上がり、覆土は人為堆積の様相を呈していた。底面は軟弱な2次堆積ロームで、平面形に合わせて中央に200×60×20cmを測る長方形の掘りこみが認められた。この段状の掘りこみは棺桶を設置した窓みかもしれないが人骨、釘等の遺物は確認できなかった。

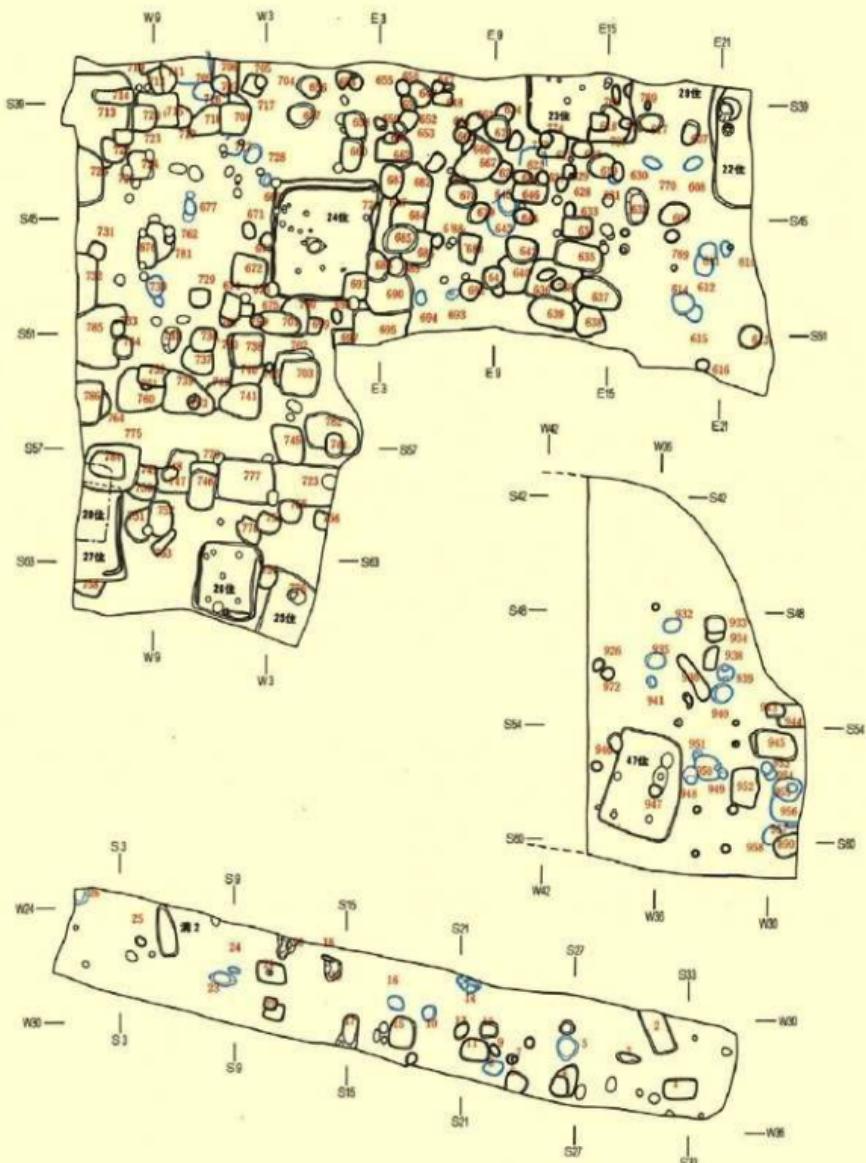
**土壌134** 10区北側に位置する。規模は102×66cmの長方形プランを呈し、長軸方向はN-22°-Eを示す。深さは検出面より17cmと浅く、壁は緩やかに立ち上がっていった。底面は被熱しておりやや浮いた状態で角礫が敷かれていた。覆土の暗褐色土中には大量の焼土と共に焼けた骨片が認められ、底面から礫の上面に最も多くみられた。覆土の様子などからみて火葬墓と捉えられるが、短期間に何回かに亘って使用された可能性もある。

⑦ 出土遺物と時期 多数の土壌からは土器、石器、銭等の遺物が出土した。土器は殆どが小破片である。他の遺構から混入したと思われるものも多い。土器には縄文時代早期、前期、中期、古墳時代前期、中期のものが見られる。石器は、石鎌、石鉋、石匙、打製石斧、凹石、磨石、磨製石鎌等が出土している。中近世の遺物は陶磁器、宋銭等僅少である。これらの出土遺物と覆土の状況等から各土壌の所産時期を推定する手掛かりとした。

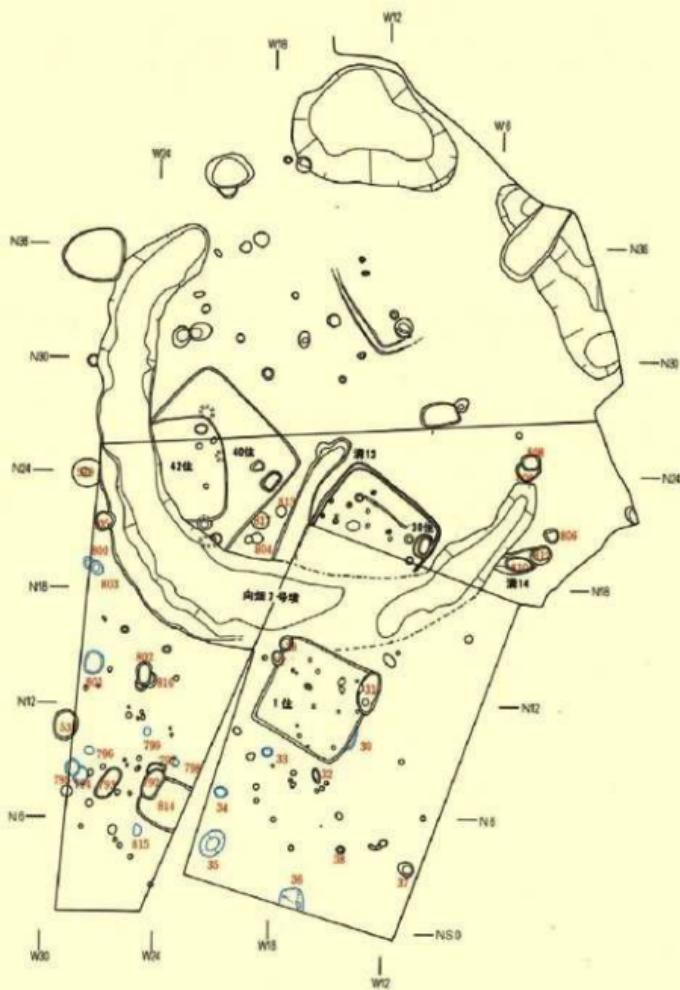
⑧ 墓道について 中世以降の土壌は比較的規模が大きくて方形、長方形を呈するものが多く、数ヶ所に集中が見られる。その集中地区では、はっきりと土壌群と空地とが識別でき、空地は墓道と判断したい。しかし石敷き、踏み固め等の確認は出来なかった。



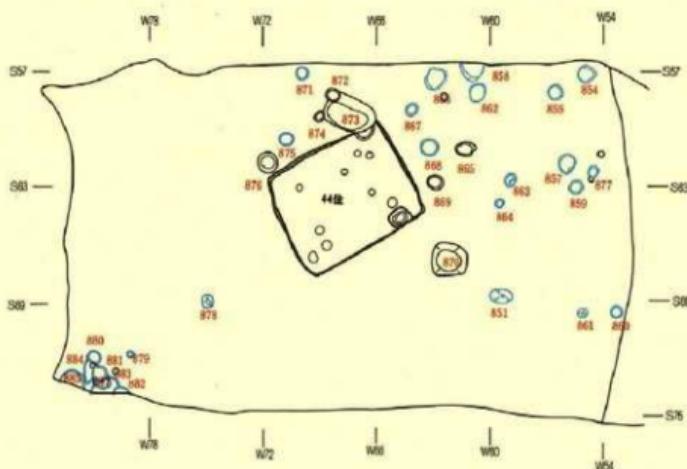
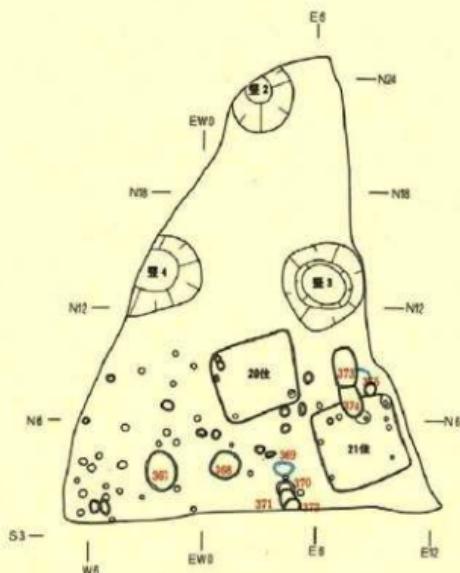
第26図 土壌配置図(1)



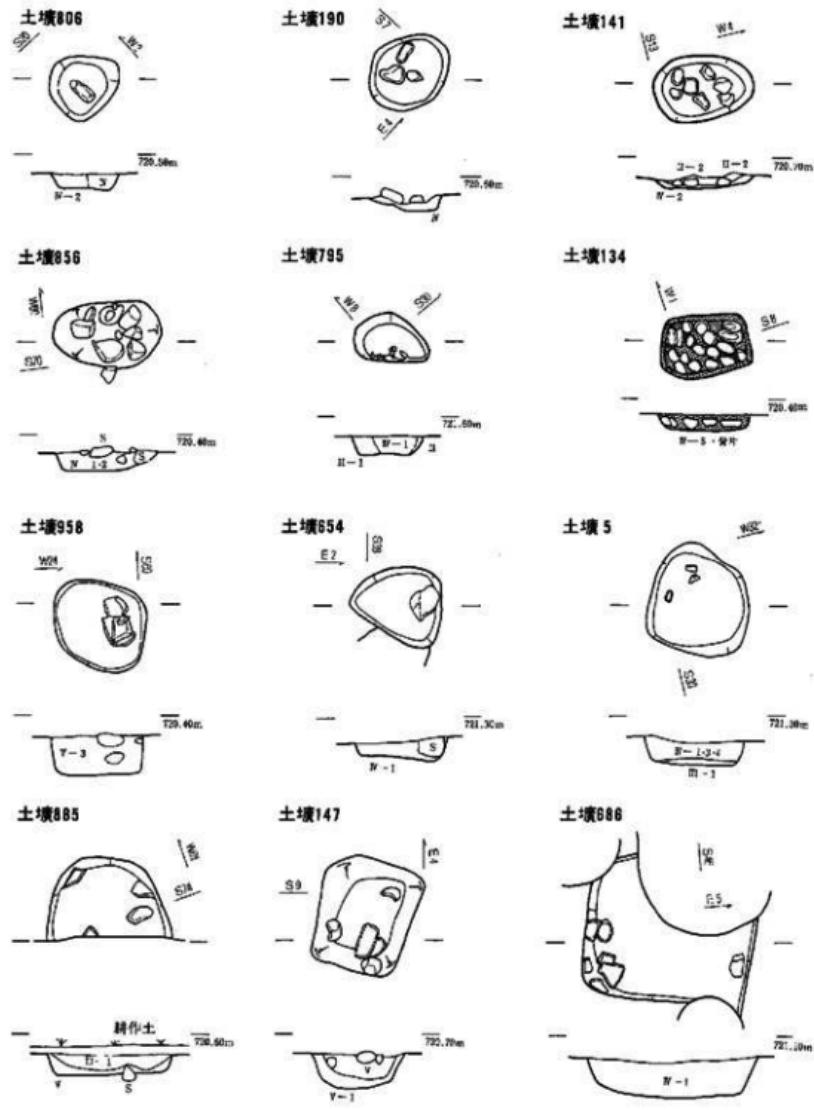
### 第27回 土壌配置図(2)



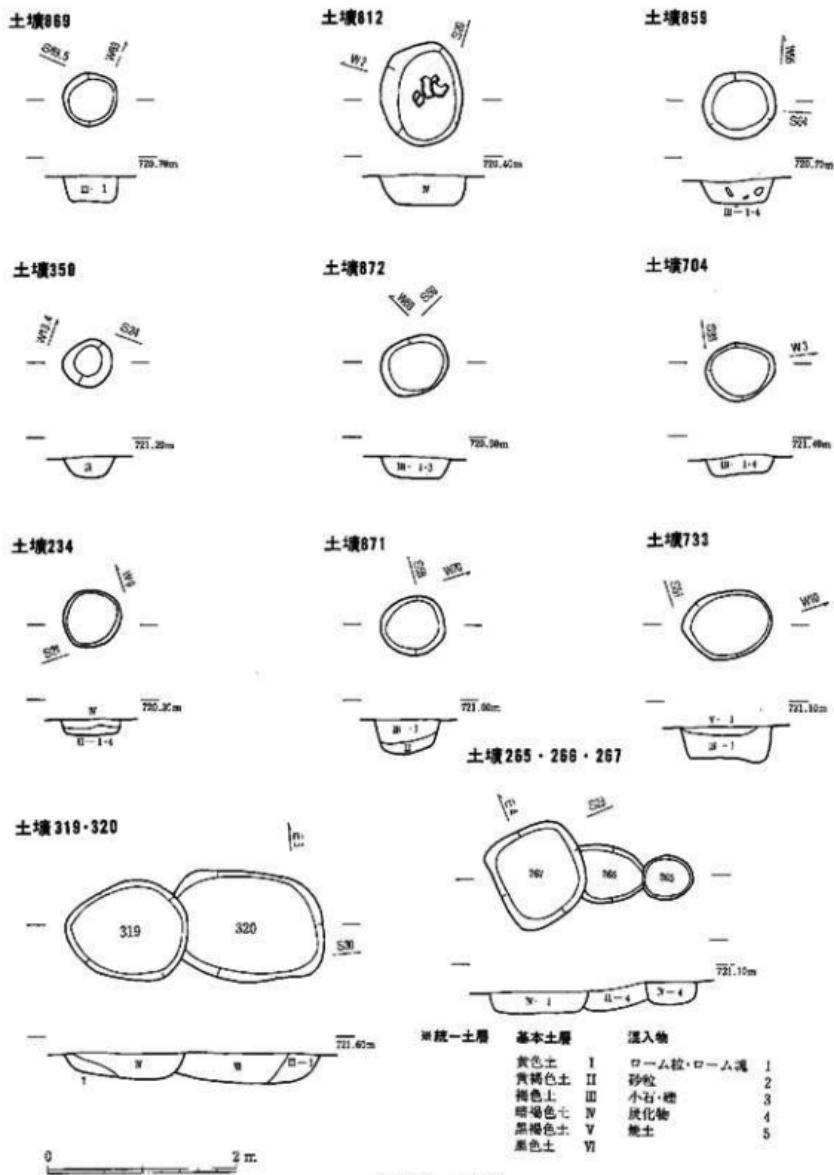
第28図 土壌配置図(3)



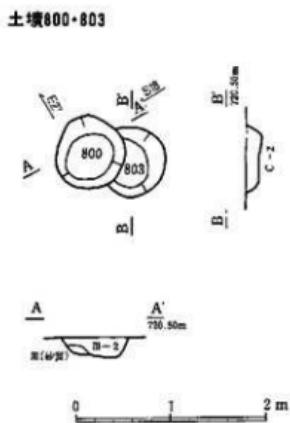
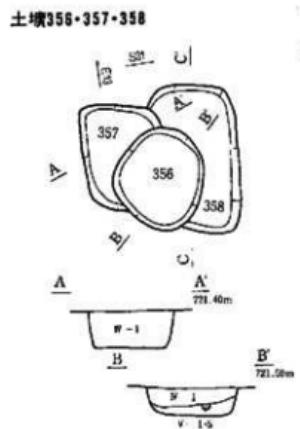
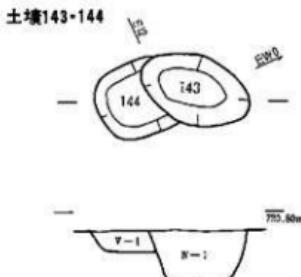
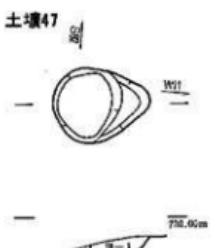
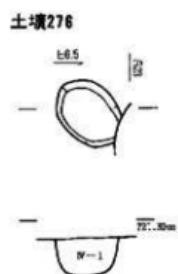
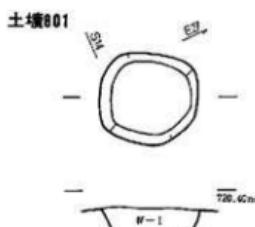
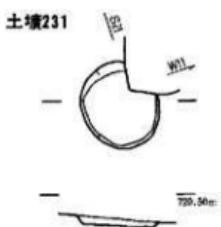
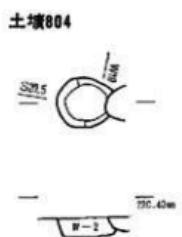
第29図 土壌配置図(4)



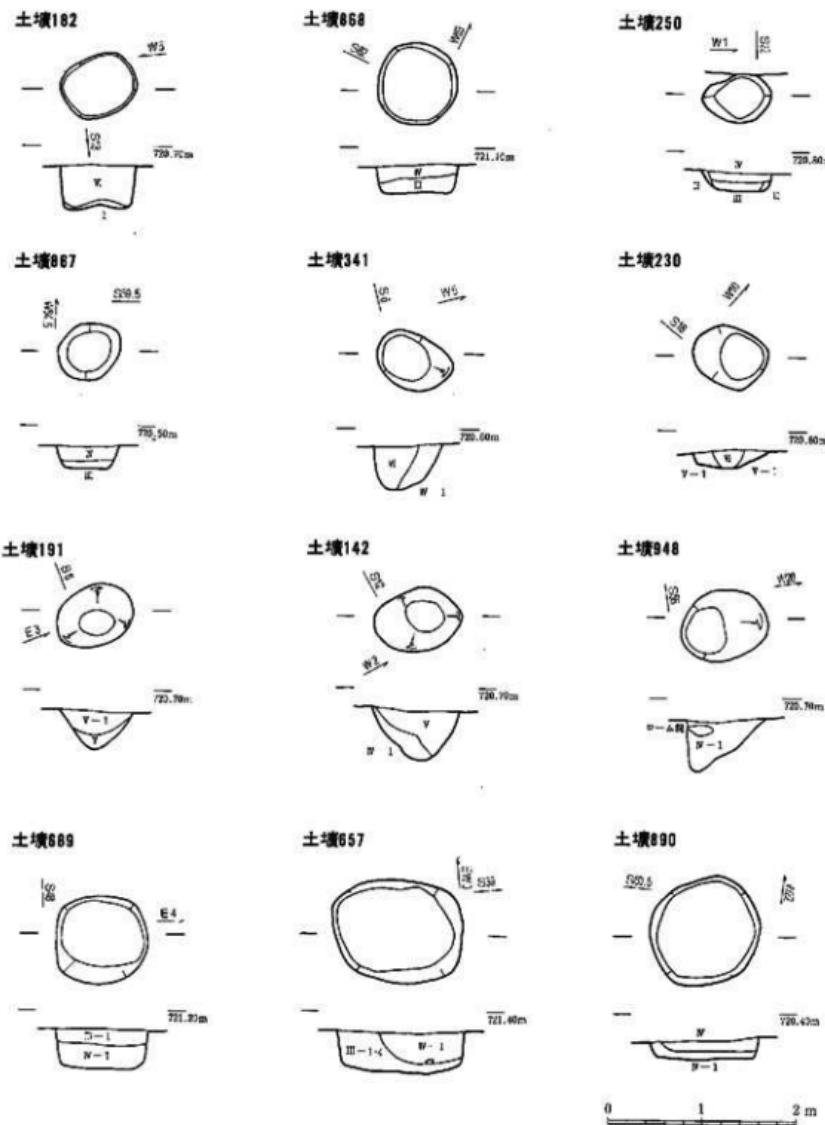
第30図 土壌(1)



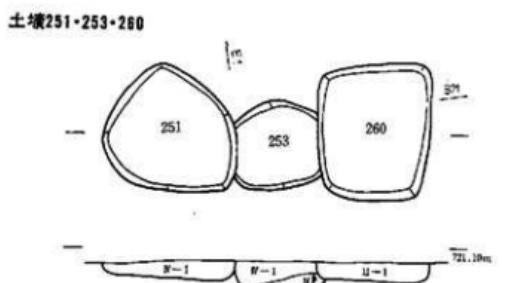
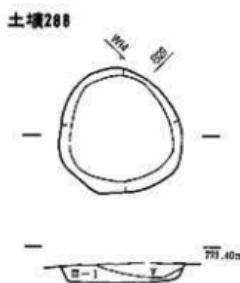
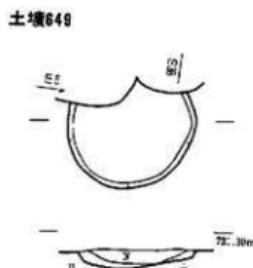
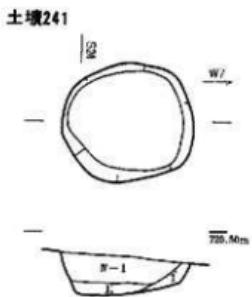
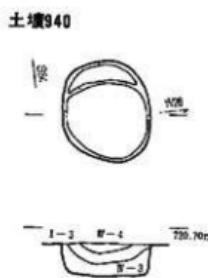
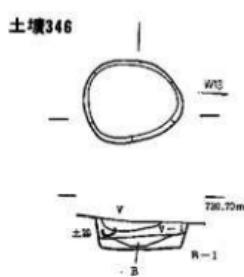
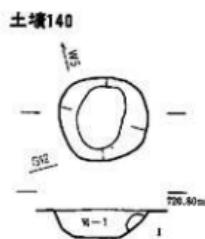
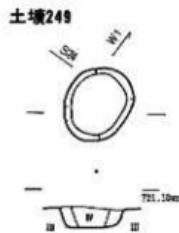
第31図 土壌(2)



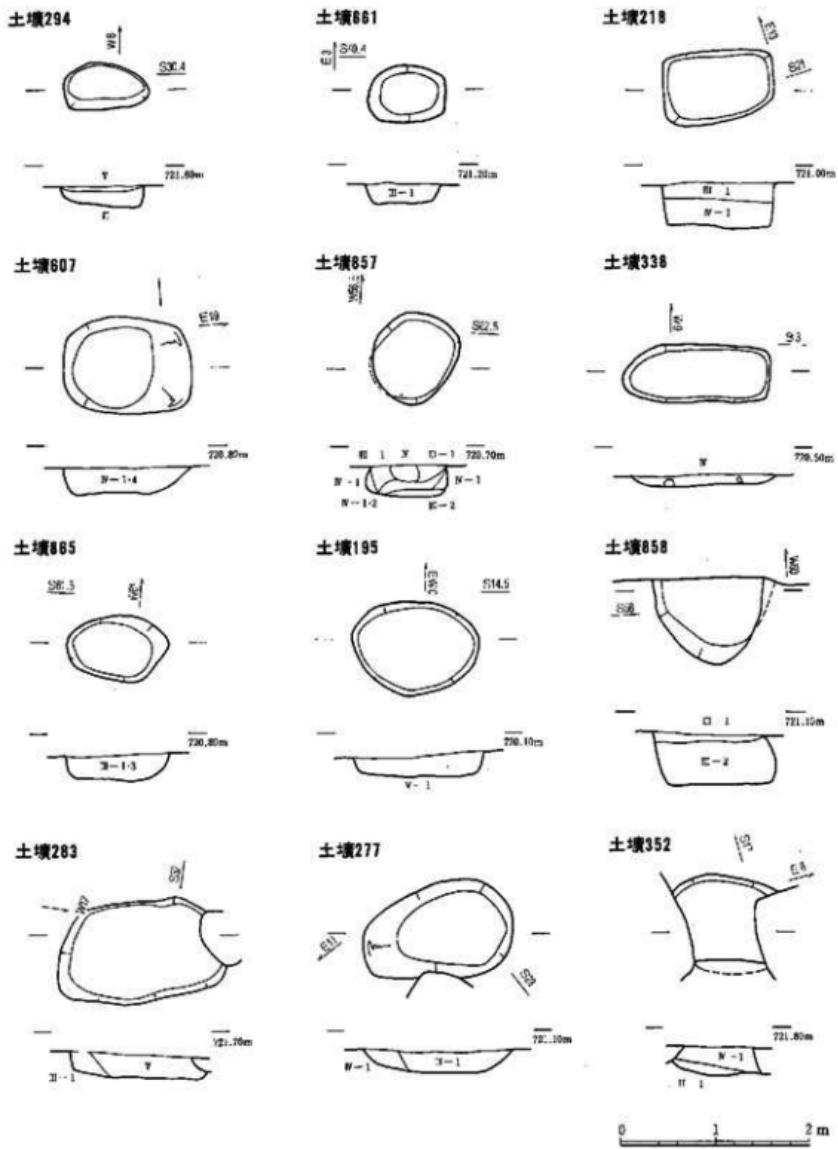
第32図 土壌(3)



第33図 土壌(4)

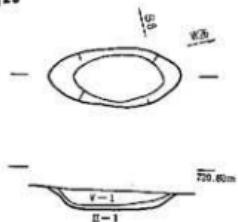


### 第34圖 土壤(5)

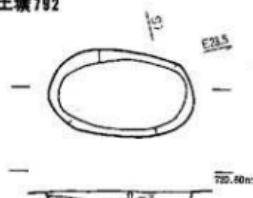


第35図 土壌(6)

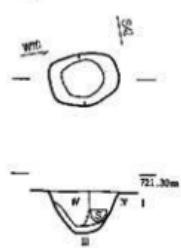
土壤23



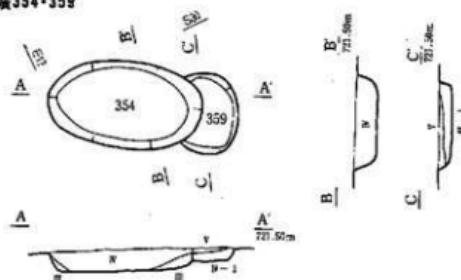
土壤792



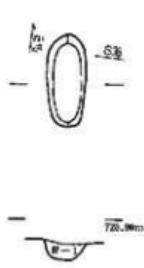
土壤725



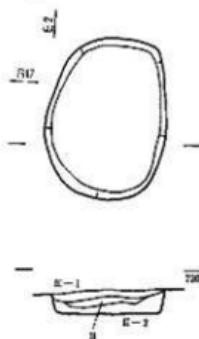
土壤354+359



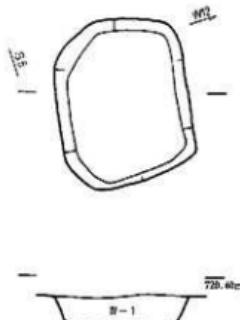
土壤788



土壤201

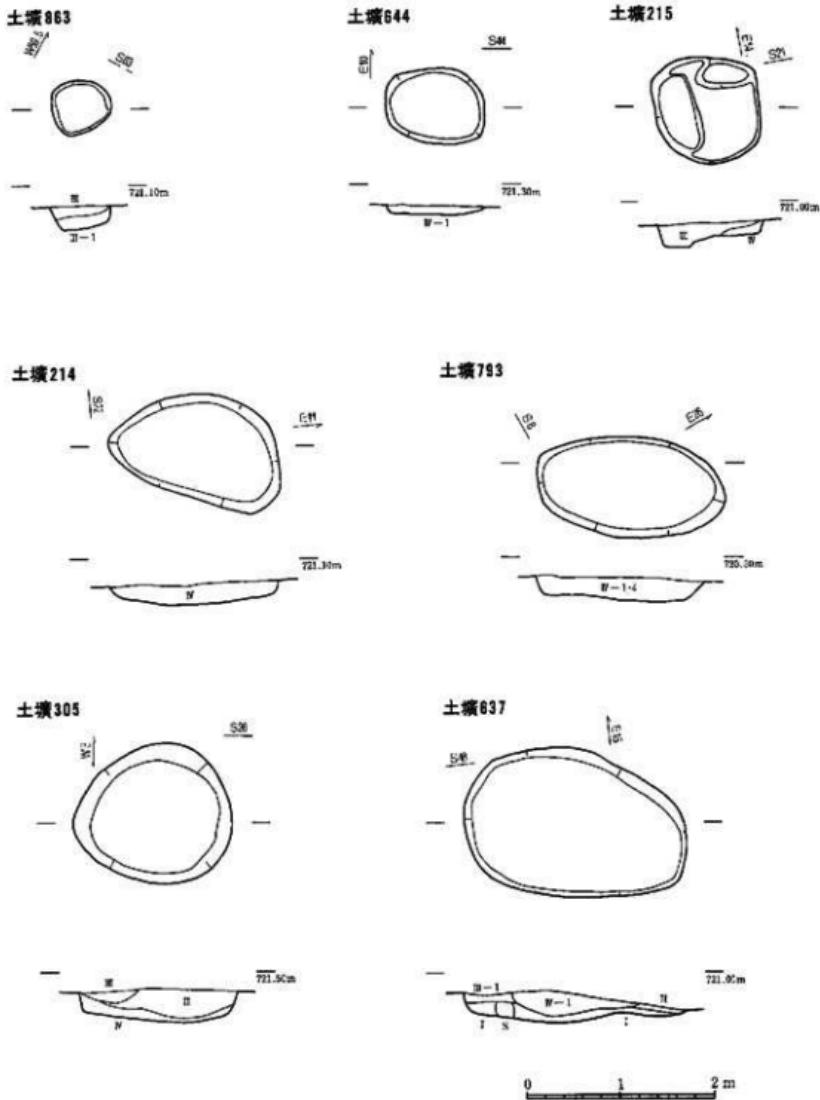


土壤339

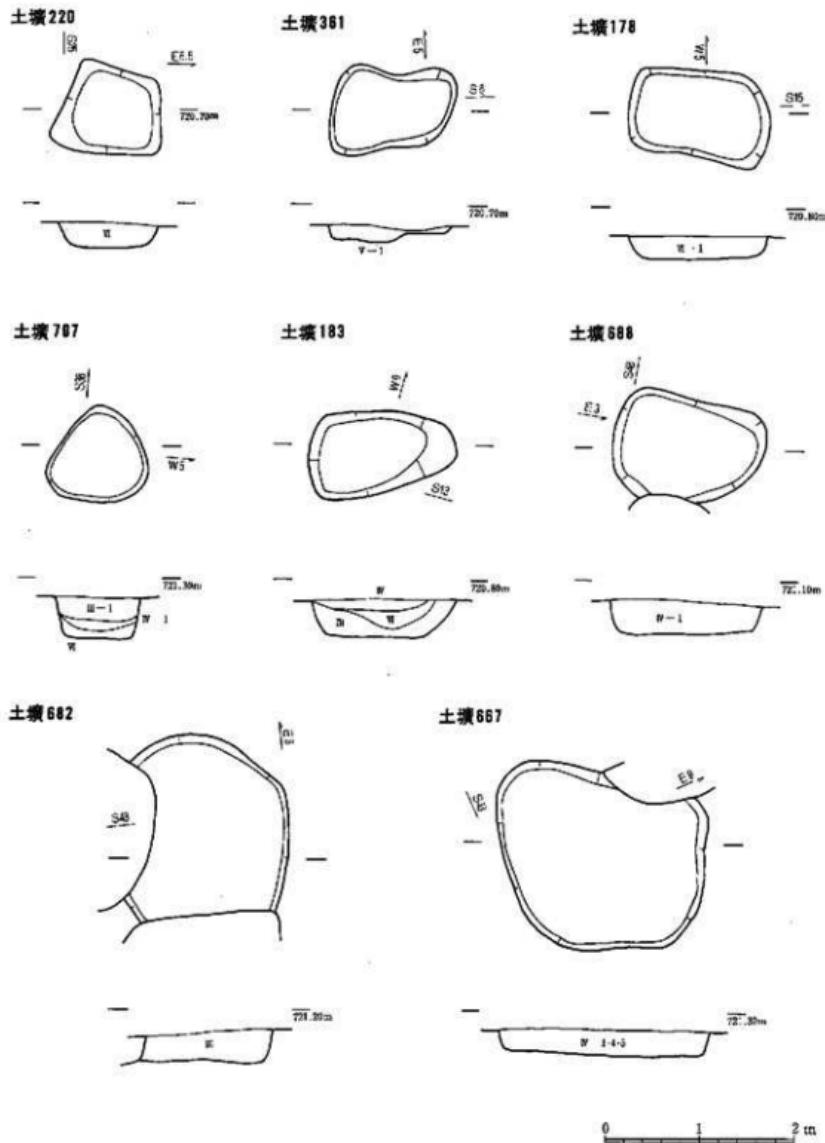


0 1 2 m

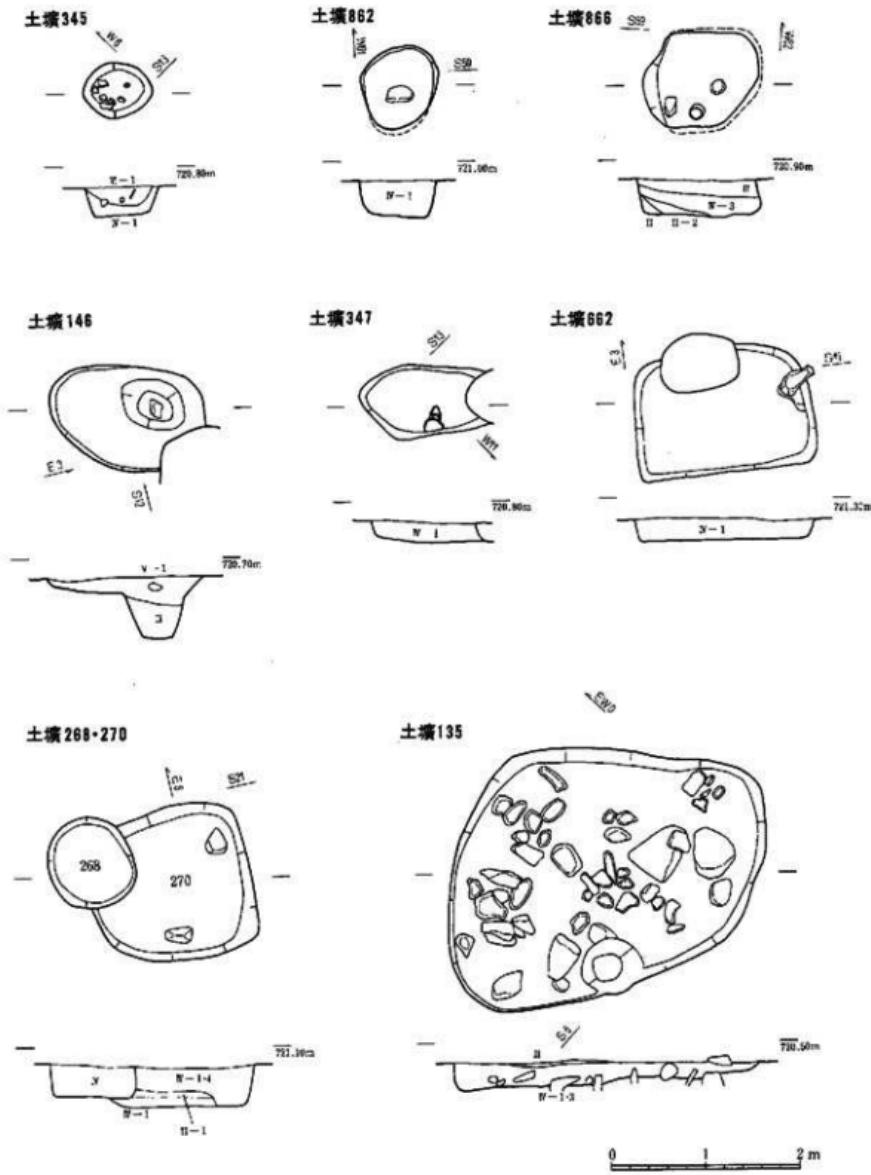
第36図 土壌(7)



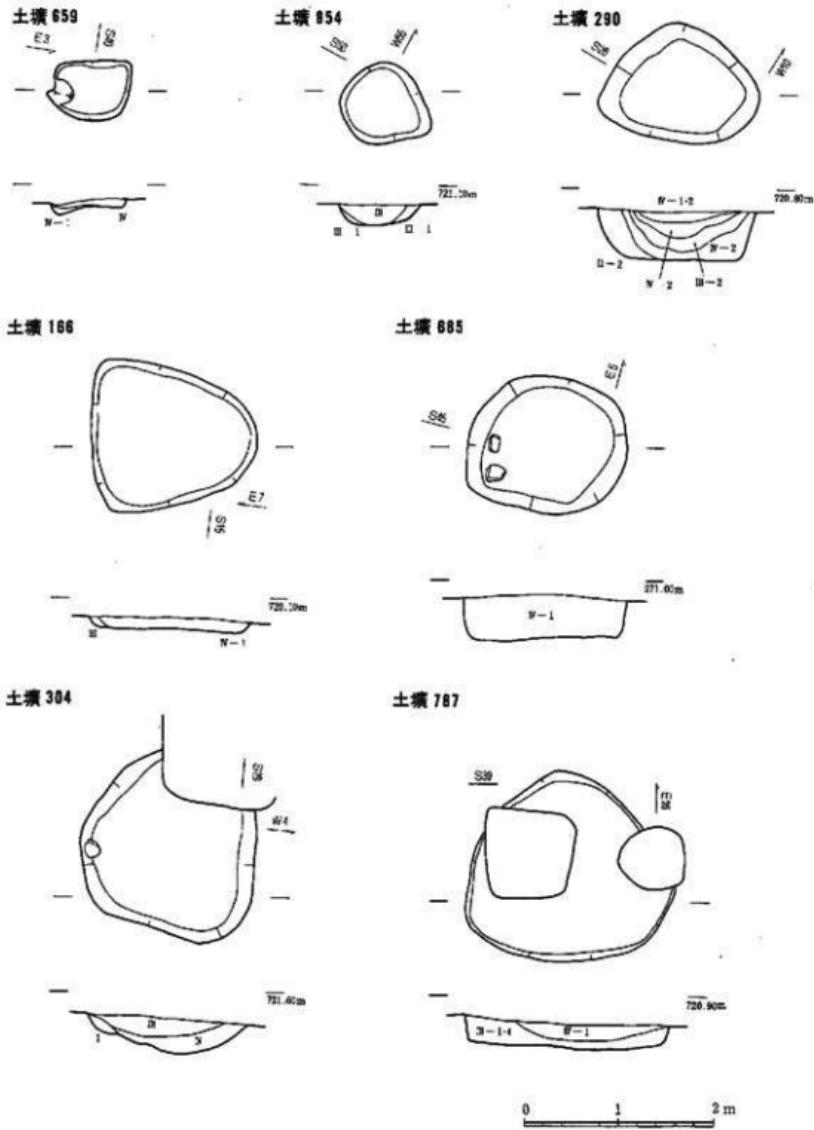
第37図 土壌(8)



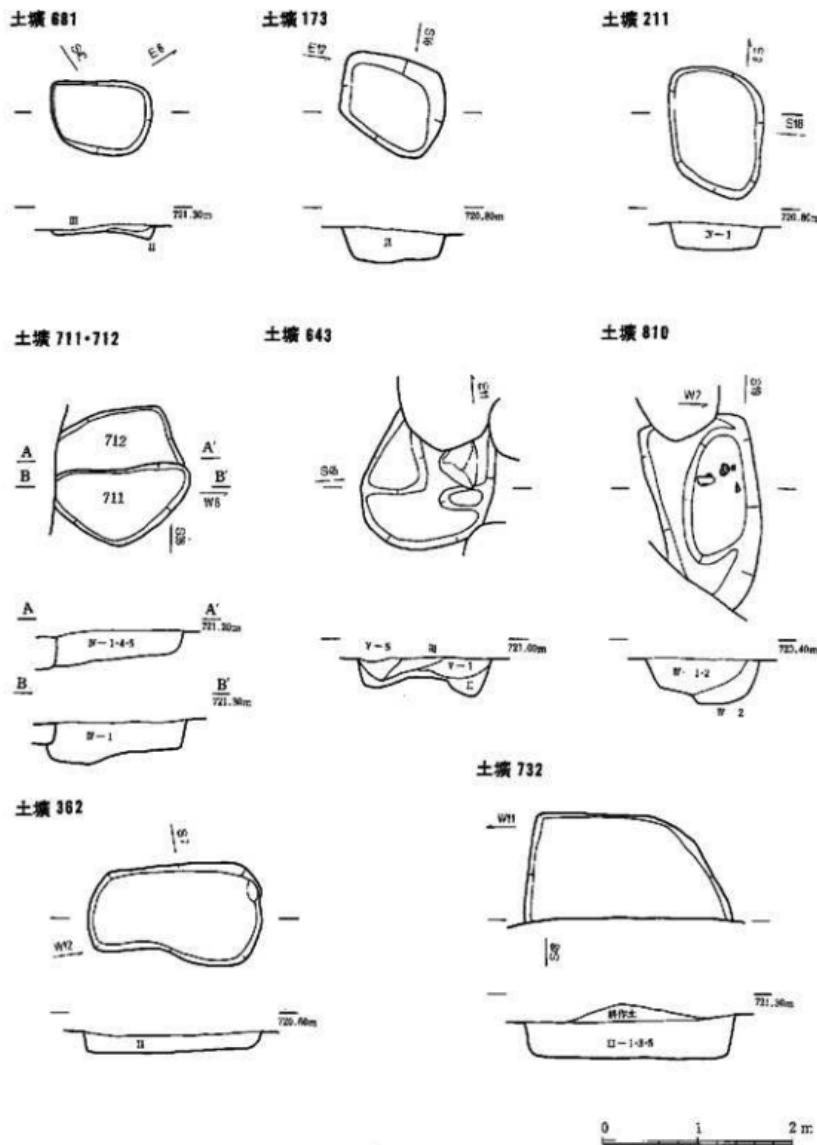
第38図 土壌(9)



第39図 土壌345

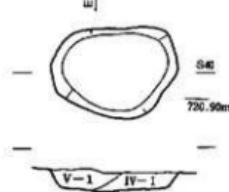


第40図 土壌(1)

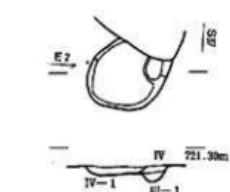


第41図 土壌(2)

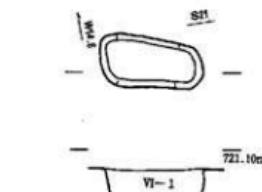
土壤617



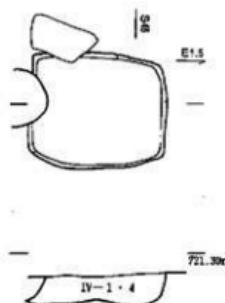
土壤655



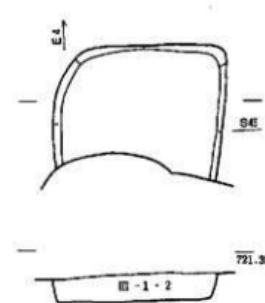
土壤222



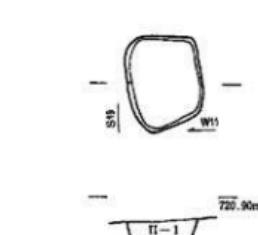
土壤691



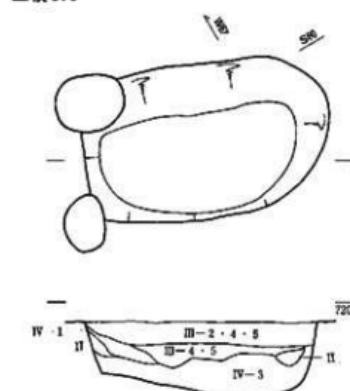
土壤884



土壤228



土壤873

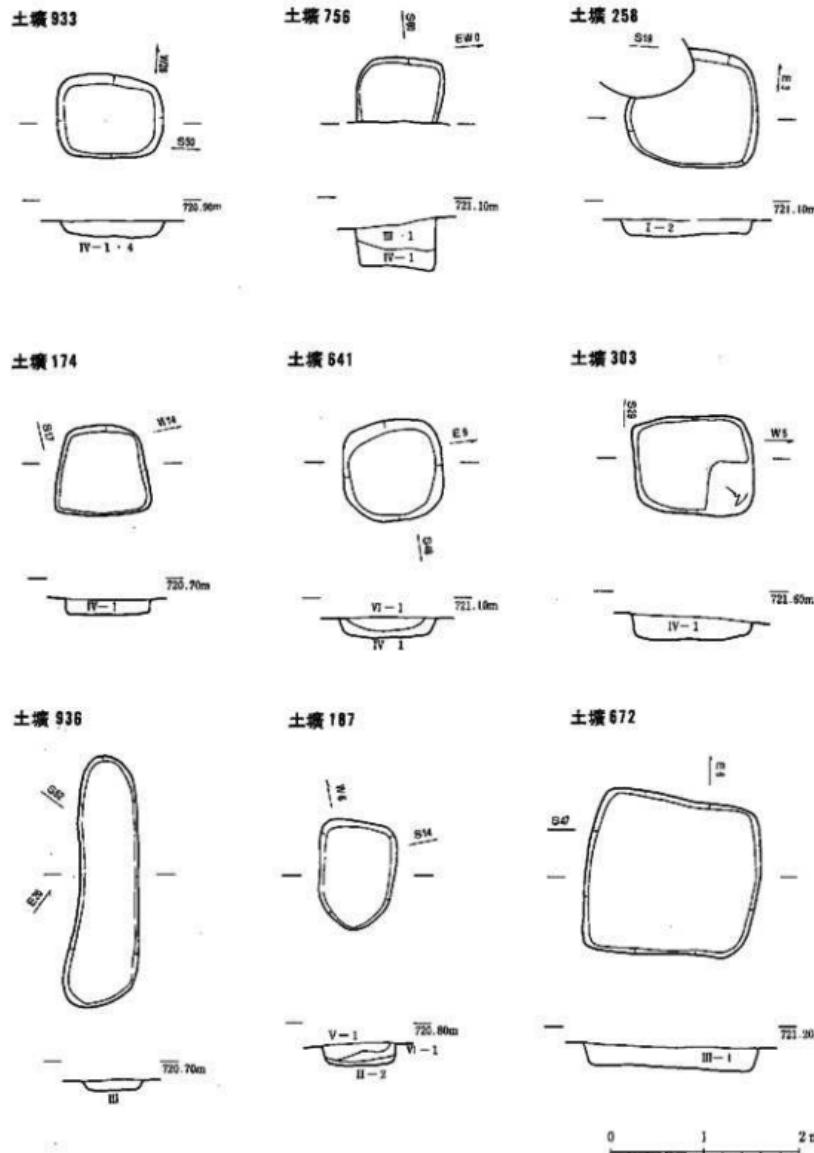


土壤782

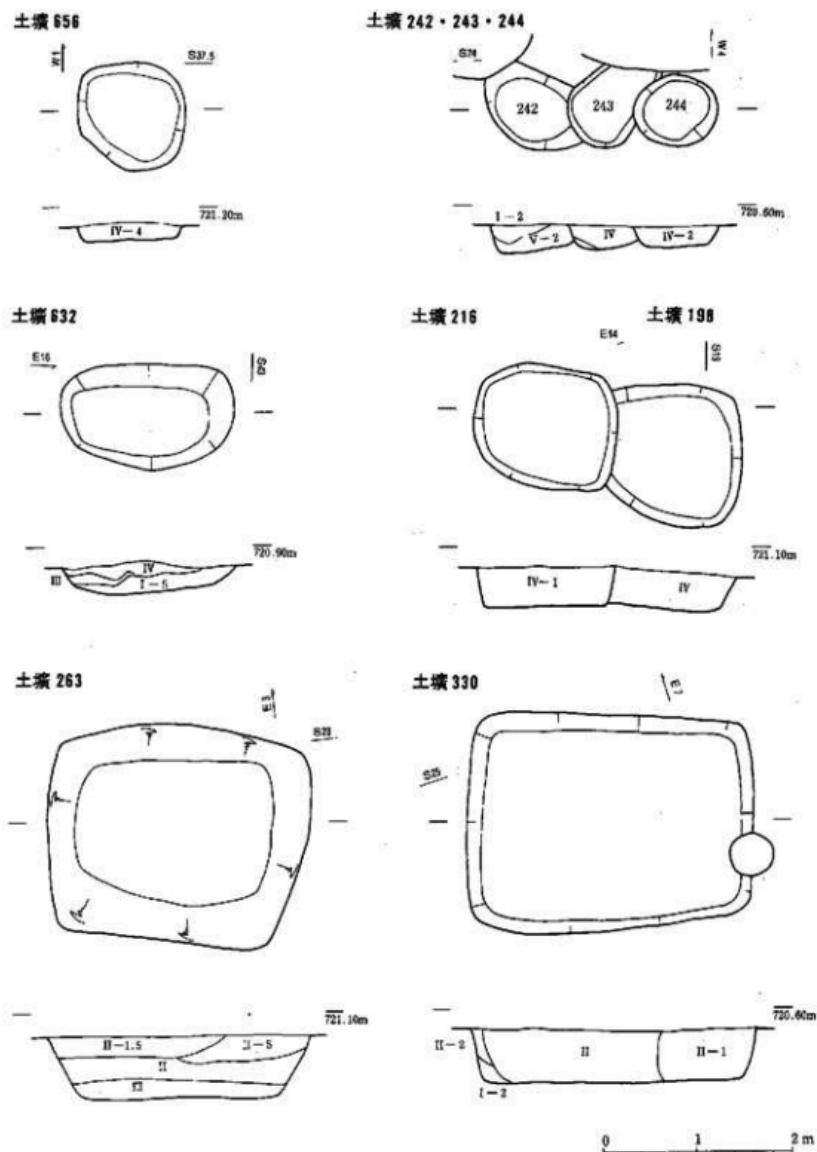


0 1 2 m

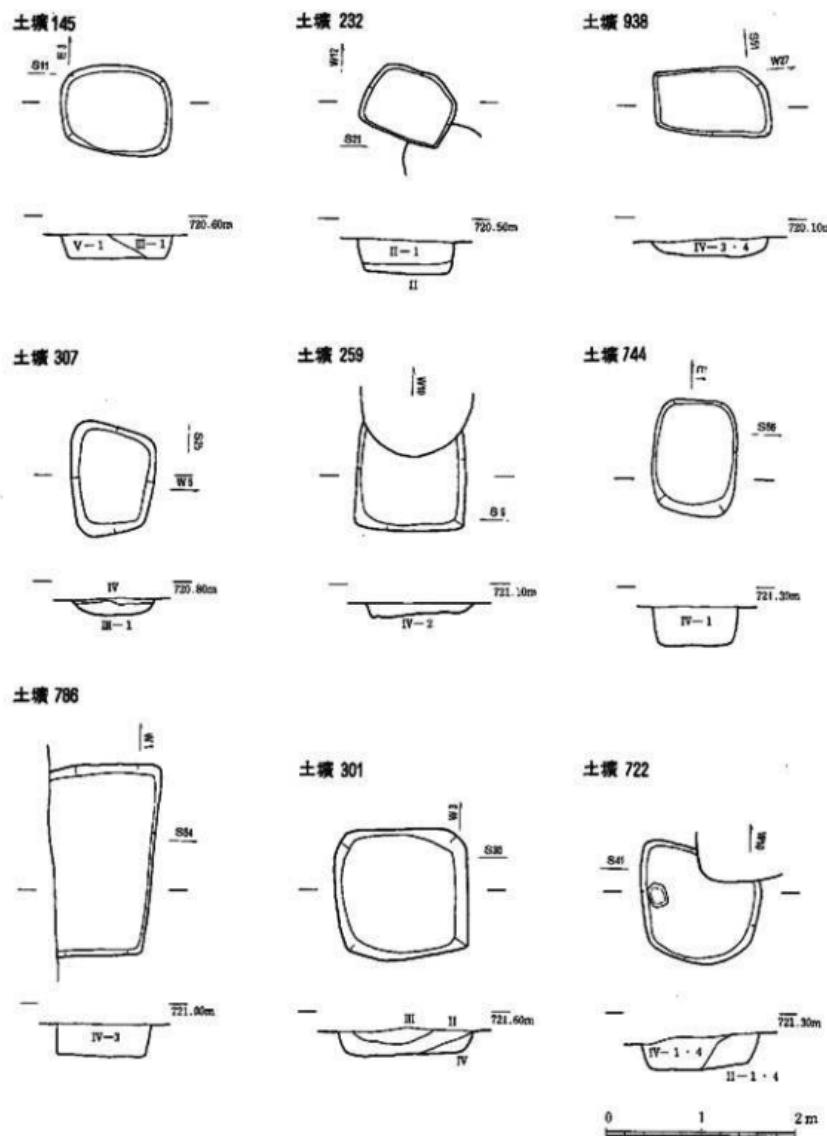
第42図 土壌(1)



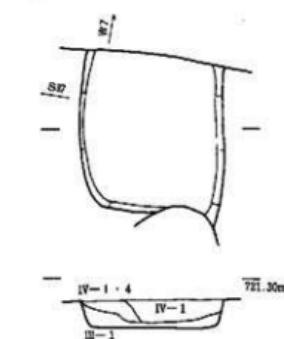
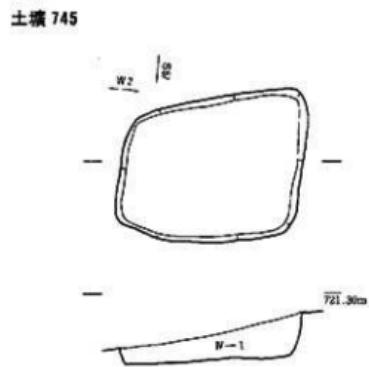
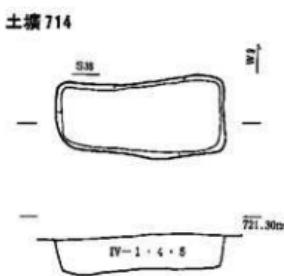
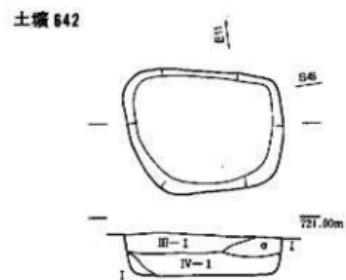
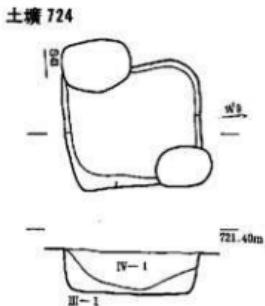
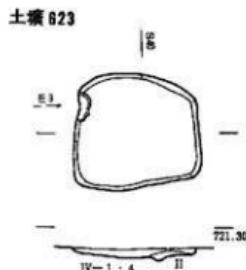
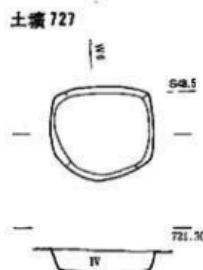
第43図 土壌図



第44図 土壌 19

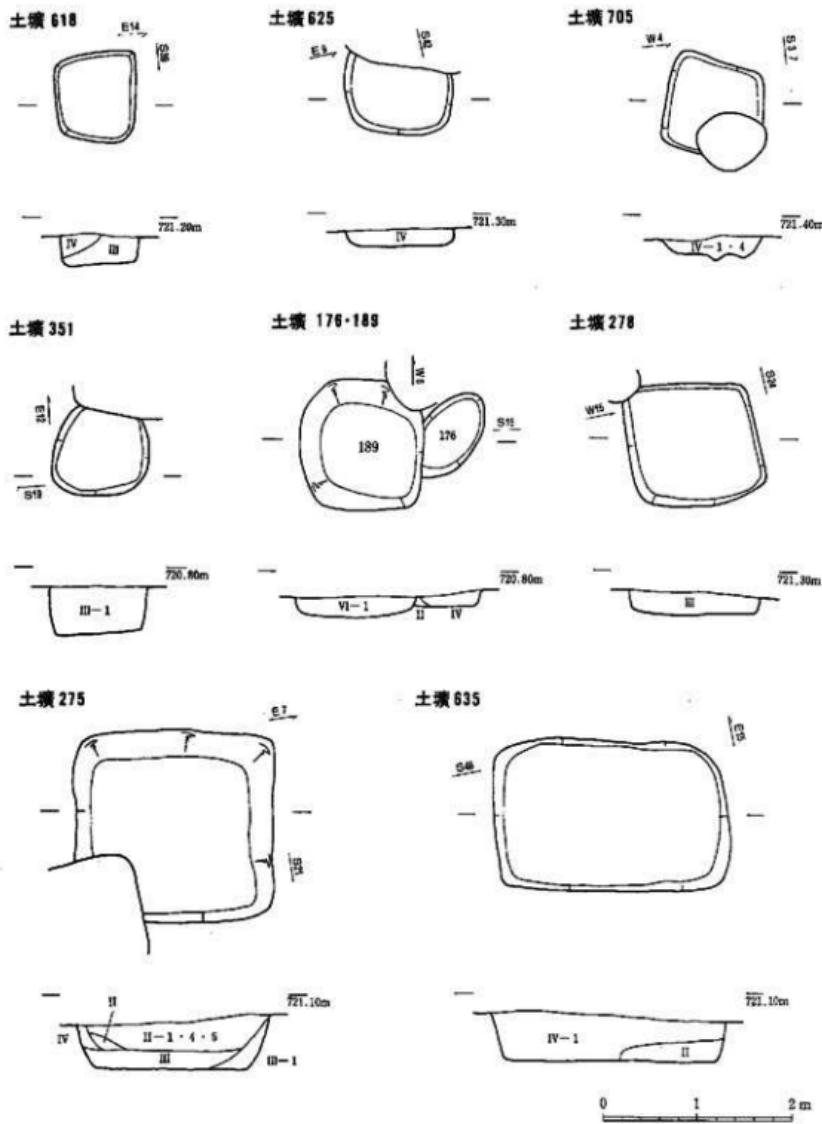


第45図 土壌 06

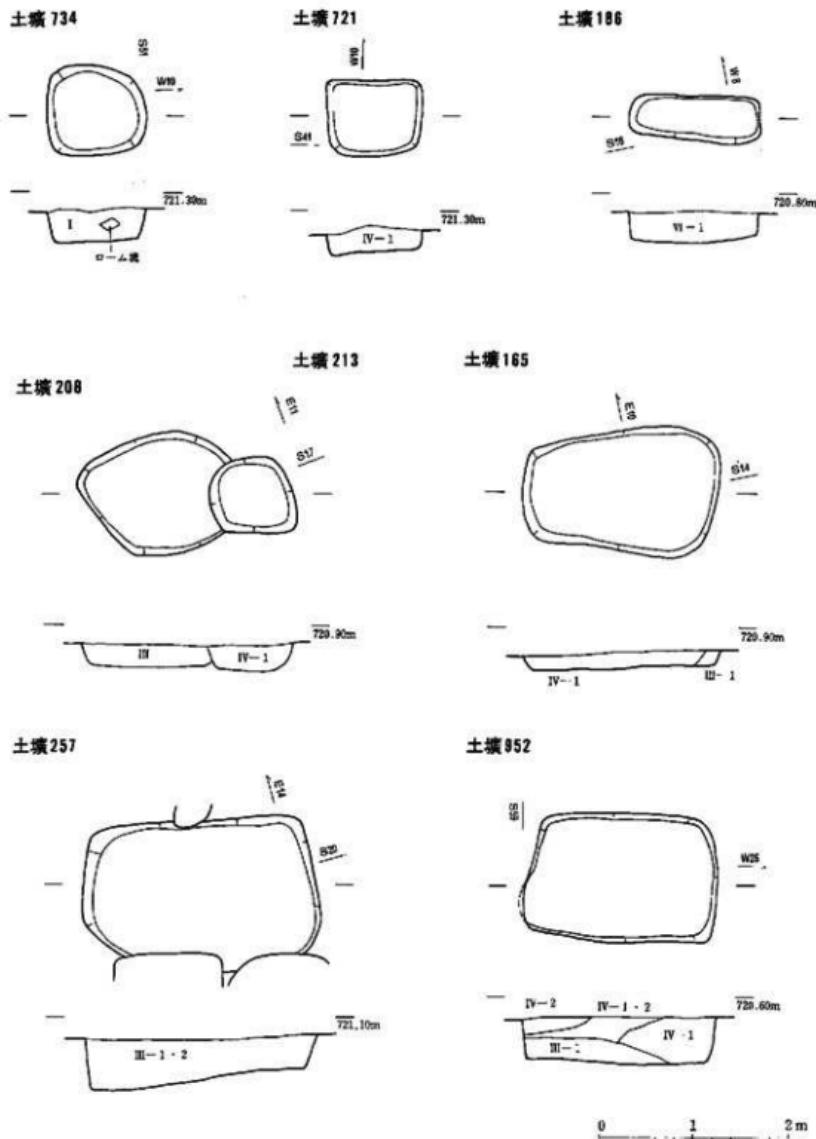


0            1            2 m

第46回 土壌(1)

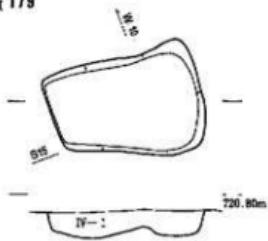


第47図 土壌⑩

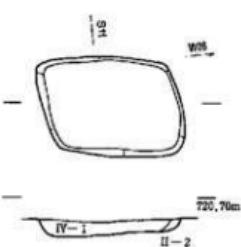


第46図 土壌図

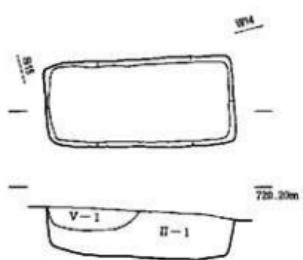
土壤 179



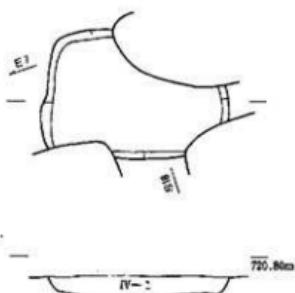
土壤 21



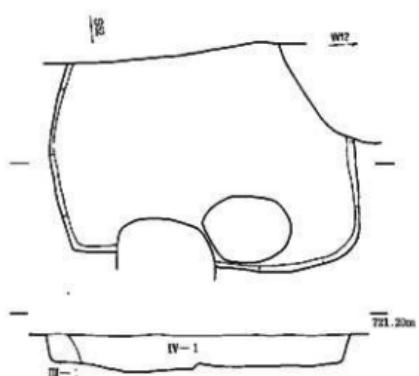
土壤 175



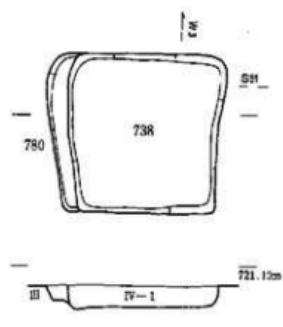
土壤 210



土壤 785



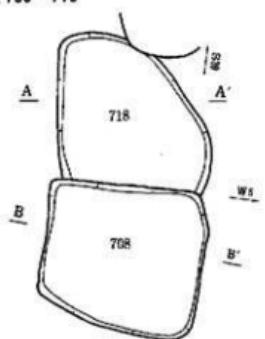
土壤 738 + 780



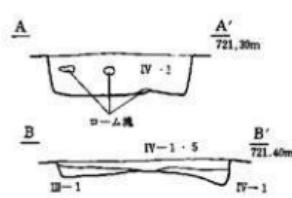
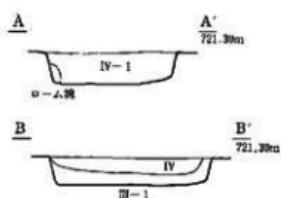
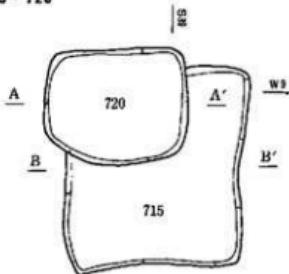
0 1 2 m

第49図 土壌(2)

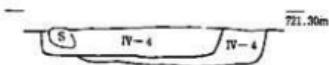
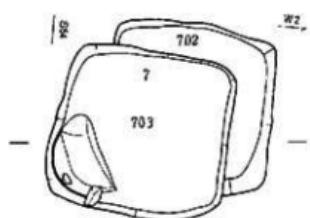
土壤 708・718



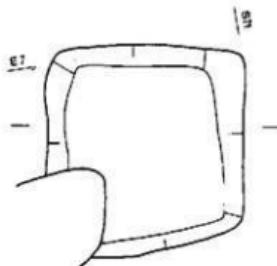
土壤 715・720



土壤 702・703



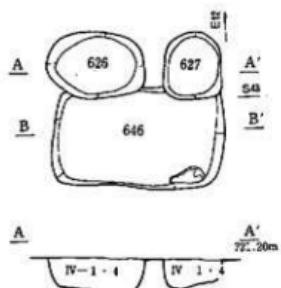
土壤 275



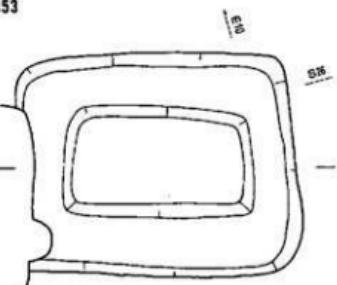
0 1 2 m

第50図 土壌(2)

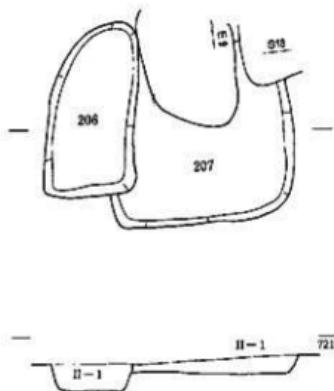
土壤 626・627・646



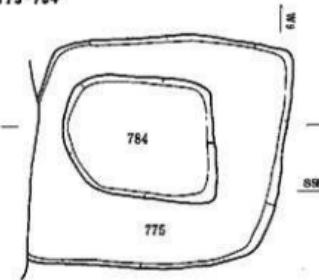
土壤 353



土壤 206・207



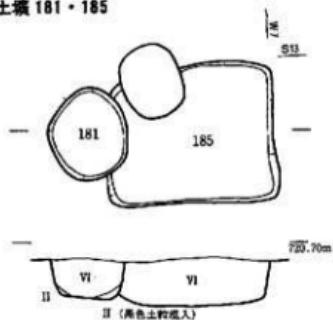
土壤 775・784



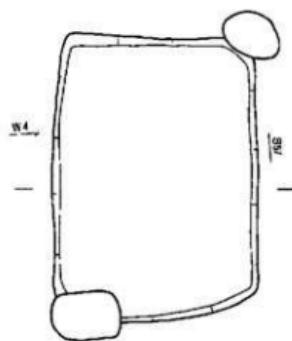
0 1 2 m

第51図 土壌図

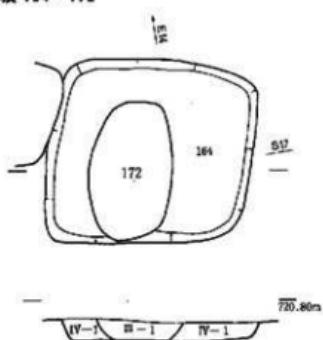
土壤 181・185



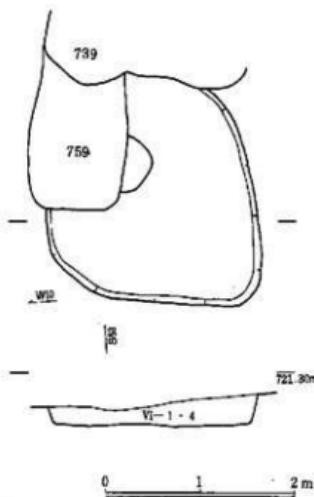
土壤 777



土壤 164・172



土壤 760



第52図 土壌(2)

表2

## 向 烟 II 土 壤 一 覧 表

番号	持続回	位 置	平 面 形 状 態 (cm)	断面形 状 態 (cm)	覆土の 特 徴	切り 合 い >…は切る	開 係 <…は切られる	備 考
1		S 30-W30	楕丸長方形179×108	E20	b			中世以降
2		S 30-W30	長方形(234)×124	F20	b			中世以降
3		S 30-W30	楕円形18×52	B30	b			中世以降
4		S 24-W30	楕丸方形119×99	B14	b			中世以降
5	30	S 24-W30	六角形113×107	B36	a			縄文時代
6		S 24-W30	方形116×(112)	B18	b			中世以降
7		S 24-W30	円形58×53	B30	b			中世以降
8		S 24-W30	円形56×51	B12	a			縄文時代
9		S 24-W30	円形60×57	E14	a			縄文時代?
10		S 18-W24	円形74×74	A36	a			縄文時代
11		S 24-W30	不整方形148×110	B18	b			中世以降
12		S 24-W30	方形96×78	B12	b			中世以降
13		S 24-W30	不整方形80×64	B18				
14		S 24-W24	不整方形110×(58)	D24	a			縄文時代
15		S 18-W30	方形154×136	B14	b			中世以降
16		S 12-W24	不整方形82×72	10	a			縄文時代
17		S 12-W30	長方形(162)×107	B20	b			中世以降
18		S 12-W24	不明(70)×(19)	C46	b			中世以降
19		S 12-W24	不整方形(105)×86	C20	b			中世以降
20		S 6-W24	不整方形(118)×94	E34	b			中世以降
21	49	S 6-W24	長方形147×106	B18	b			中世以降
22		S 6-W24	不整方形108×72	C14	b	< P14		中世以降
23	36	S 6-W24	椭円形103×64	B21	a			縄文時代
24		S 6-W24	楕円形57×35	6	a			縄文時代
25		N S0-W24	楕円形58×47	9				
26		N S0-W24	方形80×71	A18	a			縄文時代
27		N 18-W12	楕丸方形73×57	B48	b	> 1 住		古墳時代前期
28		N 18-W12	楕丸方形89×69	B60	b	> 1 住		古墳時代前期
29		N 21-W 6	不整方形82×(54)	B10	b			中世以降
30		N 12-W12	不整方形(125)×(33)	B10	a	< 1 住		縄文時代
31		N 12-W12	楕円形246×106	B20	a	> 1 住		古墳時代前期?
32		N 12-W12	楕円形86×40	B22	a			縄文時代?
33		N 12-W12	円形52×50	C10	a			縄文時代
34		N 12-W18	円形68×58	E14	a			縄文時代
35		N 6-W18	楕円形163×110	41	a			縄文時代
36		N 6-W22	不整方形119×(112)	72	a			縄文時代
37		N 6-W 6	楕丸方形78×72	40				古墳時代土器出土
38								
39		S 72-W30	楕円形137×95	E20	a			縄文時代?
40		S 78-W30	楕円形143×89	E20	b			中世以降
41		S 78-W30	楕円形87×50	E26	b			中世以降
42		S 72-W30	楕丸方形98×75	B24	b			中世以降
43		S 72-W24	楕円形173×123	B26	a			縄文時代?
44		S 78-W24	楕丸方形102×86	B22	b			中世以降

番号	掲載図	位 置	平面形 規格(cm)	断面形 規格(cm)	覆土の 厚 勘	切り合ひ >…は切る <…は切られる	備 考
45		S 78-W18	楕円形107×68	B12	b		中世以降
46		S 72-W12	楕丸方形166×129	B22	a		調文時代?
47	32	S 78 W 6	不整椭円形103×80	F42	a	>土壙48	調文時代?
48		S 78-W 6	楕円形(110)×84	C16	a	<土壙47	調文時代?
49		S 78-W 6	楕円形127×100	E22	b	<土壙50	中世以降
50		S 78-W 6	円形92×76	B 8	b	>土壙49	中世以降
51		S 78-W18	楕丸方形167×164	21	a		調文時代
128		S 6-W 6	楕丸方形139×119	B34	b	>土壙259-260,>11住	中世以降
129		S 6-W 6	楕丸方形151×114	E14	a	>11住	古墳時代前期
130		S 6-W 6	楕円形118×89	B24	b	>11住	中世以降
131		S 6-W 6	小椭円形(130)×130	C10		>11住	古墳時代前期?
132		S 6-W 6	円形136×121	B10	a	<P67	調文時代
133		S 6-EW0	椭円形150×111	C20	a		調文時代
134	30	S 6-EW0	長方形102×66	B17			
135	39	NS 6-EW0	楕丸方形239×269	B32	a		調文時代?
136		S 6-EW0	楕丸形97×80	F 6	a	>土壙136	調文時代?
137		S 6-EW0	椭丸形(120)×98	E16	a	<土壙137	調文時代?
138		S 6-EW0	椭円形72×62	13			
139		S 6-EW0	楕丸形(83)×67	C 6	a	<土壙343	調文時代
140	34	S 6-EW0	楕丸方形95×90	C44	a		調文時代
141	30	S 12-EW0	椭円形105×71	B16	b		中世以降
142	33	S 6-EW0	椭円形88×88	C45	b		中世以降
143	37	S 6-EW0	椭円形108×77	B28	a	>土壙144	調文時代
144	32	S 12-EW0	椭丸形80×(62)	B62	a	<土壙143	調文時代
145	45	S 6-E 6	楕丸方形118×98	B26	a	>土壙146	調文時代
146	39	S 12-E 6	不整形(165)×112	F66	a	<土壙145	調文時代
147	30	S 6-E 6	方舟123×100	B38	b		中世以降
148		S 6 R 6	円形85×84	E20	a		調文時代?
149		S 6-E 6	椭円形75×60	C 8	b		中世以降
150		S 6-E 6	椭丸形86×65	B 2	a	<土壙153	調文時代?
151		S 6-E 6	不整形(90)×76	E22		<土壙153	調文時代?
152		S 6-E 6	椭円形50×(36)	C 4	a	>土壙150	調文時代?
153		S 6-E 6	椭円形29×50	B12	b	>土壙151	中世以降
154		S 6-E 12	椭円形158×121			>12住,>土壙155-157	
155		S 6-E 12	椭円形114×101			>12住,>土壙157<土壙154	
156		S 6-E 12	椭丸形135×101			>12住	
157		S 6-E 12	椭円形(116)×105			>12住,<土壙154-155	
158	NS 6-E 12		椭円形107×104	C16	a		調文時代?
159	NS 6-E 12		方舟60×59	C 6			
160		S 6-E 12	円形60×44			>12住	
161		S 6-E 12	椭丸方形156×97	4		>12住	
162		S 6-E 18	長方形230×159	B64	b	>土壙163	中世以降
163		S 6 R 18	椭丸方形108×(94)			<土壙162	
164	52	S 12-E 18	方舟208×195	7		<土壙172	

番号	発掘洞	位 置	平 面 形 規 呼 (cm)	断面形 規 呼 (cm)	覆土の 特 徴	切 り 合 い 観 察 >…は切る <…は切られる	備 考
165	48	S12-E12	隅丸方形234×139	B19	b	>12住	中世以降
166	49	S12-E12	隅丸方形175×160	B13	a		調査時代
167		S12-E12	円形75×70		7		調査時代
168		S12-E12	円形64×57		13		調査時代
169		S12-E12	椭円形76×70		10		調査時代
170		S12-E18	円形74×73	C16	a		調査時代?
171		N S0-E18	楕円形90×74	B24	b		中世以降
172	52	S12-E15	楕円形150×92	B21	a	> 土壙164	調査時代?
173	41	S12-E15	隅丸方形63×52	B36	a		調査時代?
174	43	S12-W12	合形100×97	A16	b		中世以降
175	49	S12-W12	長方形900×98	A49	b		中世以降
176	47	S12-EW0	楕円形(95)×60	B18	a	< 土壙189	調査時代?
177		S12-W6	隅丸形119×112	B14	b		中世以降
178	38	S12-W6	隅丸方形150×93	B32	a		調査時代?
179	49	S12-W6	隅丸形161×112	B26	b	> 七塙184	中世以降
180		S12-W6	椭円形65×38	C6	c		奈良の跡?
181	52	S12-W6	椭円形100×83	B44	a	> 土壙185	調査時代?
182	33	S12-W6	椭円形82×65	A46	a	> 土壙185	調査時代?
183	38	S12-W6	不整形157×88	B38	a		調査時代?
184		S12-W6	隅丸方形(78)×59	E24	b	< 上塙179	中世以降
185	52	S12-W6	方形183×150	B50	b	< 土壙181-182	中世以降
186	48	S12-W6	長方形85×47	A42	a		調査時代?
187	43	S12-EW9	隅丸方形115×100	B28	a		調査時代?
188		S12-EW9	椭円形85×75	B10	b		中世以降
189	47	S12-W6	不整形138×132	C30	a	> 土壙176	調査時代?
190	30	S6-E6	楕円形93×79	B16	b		調査時代
191	33	S6-E6	椭円形85×64	F42	a		調査時代
192		S6-E6	不整形81×77	C8	a		調査時代
193		S12-W6	円形88×86	B12	b		中世以降
194		S12-EW0	円形79×62	B16	b		調査時代
195	35	S12-EW0	椭円形136×101	B25	b		中世以降
196		S12-E6	隅丸方形118×60	B6	a		調査時代
197		S24-E12	椭円形175×99	29		> 1.塙322	
198		S18-E18	隅丸形(181)×149	40		< 土壙216. > 1.塙308	
199		S18-EW0	椭円形109×87	B12		> 13住	
200		S6-E6	方形140×(44)	22		> 11住 < 土壙228-259	
201	36	S12-E6	椭円形172×132	B25	a	> 19住	古墳時代前歴?
202		S18-E6	椭円形261×150	C10	b		中世以降
203		S12-E6	円形92×83	B18	a		調査時代
204		S12-E12	方形132×102	B24	a	> 土壙210-352	調査時代?
205		S18-E6	合形201×188	B38	b	> 土壙210-352	中世以降
206	51	S18-E12	隅丸方形192×93	B20	b	> 上塙210	中世以降
207	52	S18-R12	方形(197×196)	B29	b	< 土壙206-211-212	調査時代
208	48	S12-E12	椭円形(135)×136	B23	b	> 土壙212. < 1.塙213	中世以降

番号	埋蔵場	位 置	平 面 形 横幅(cm)	断面形 厚さ(cm)	覆土の 特 徴	切 り 合 い 戻 係 >…は切る <…は切られる	備 考
209		S12-E12	楕円形68×38	10			
210	49	S12-E12	方形202×(120)	B22	b	<土壇204-205-206, >土壇352	中世以降
211	41	S12-E12	楕丸形133×100	B30	b	>土壇207	中世以降
212		S12-E12	椭円形113×100	26		>上塙207, <土壇208-213	
213	48	S12-E12	隅丸形91×80	B21	b	>土壇212-208	中世以降
214	37	S18-E18	楕円形189×111	B22	b	<土壇218	中世以降
215	37	S18-E18	隅丸形115×112	B25	b	>土壇217-219	中世以降
216	45	S18-E18	方形159×134	B38	b	>土壇198-308	中元以降
217		S18-E18	隅丸形255×(158)	F48	b	>土壇308, <土壇131-215-219	中世以降
218	35	S18-E18	長方形117×78	A50	b	>七塙214-217-219	中世以降
219		S18-E18	楕円形(96×65)	42		<土壇215-218-P101	
220	38	S24-E12	方形109×96	B28	b		中世以降
221		S18-W12	不整形141×57	10		(土壇222に接する)	
222	42	S18-W12	隅丸形116×75	B36	b	(土壇221に接する)	中世以降
223		S18-W12	隅丸形105×69	B22	a	>上塙224	绳文時代
224		S24-W12	楕円形(79)×61	B28	a	<下塙223	绳文時代
225		S18-W6	方形83×78	20		<土壇226	
226		S18-W6	円形84×75	E28	a	>土壇225	绳文時代
227		S18-W6	隅丸形100×90	B22	b	>土壇229	中世以降
228	42	S18-W6	方形104×80	B14		>土壇229	
229		S18-W6	楕円形125×(110)	B8	a	<土壇228-227	绳文時代?
230	33	S12-W6	隅丸形75×64	B17	a		绳文時代
231	32	S18-W6	楕円形92×82	B9	b	<土壇232, >土壇233	中世以降
232	45	S18-W6	隅丸形101×82	A36	b	>土壇231	中世以降
233		S18-W6	方形145×111	B18	b	<上塙231	中世以降
234	31	S18-W6	円形64×61	B18	a		绳文時代
235		S18-W6	円形60×50				绳文時代
236		S18-W6	隅丸形50×50	B10	a		绳文時代
237		S12-W6	楕円形76×67	B12			
238		S18-W6	不整形104×80	14			
239		S24-W6	円形74×65	E22	a		绳文時代
240		S24-W6	楕円形65×53	A26	a		绳文時代?
241	34	S18-W6	円形144×126	B46	a	>上塙244-245	绳文時代?
242	44	S24-EW0	楕円形99×77	B25	a	>土壇243	绳文時代?
243	44	S24-EW0	隅丸形(96)×80	B28	a	<13往・土壇242, >上塙244	绳文時代?
244	44	S24-EW0	楕円形(125)×80	B30	a	<土壇241-243	绳文時代
245		S18-W6	楕円形(64)×57	B16	a	<土壇241	绳文時代
246		S24-EW0	円形77×67	5		>13往・土壇247	中世以降
247		S24-EW0	楕円形(67)×79			<土壇246	
248		S24-EW0	円形66×52				
249	34	S24-EW0	円形83×69	B23	a	13往に接する	绳文時代?
250	33	S18-EW0	楕円形73×52	A20	b	<13往	古墳時代前期?
251	34	S18-E6	隅丸形143×138	B21	b	>七塙253-254	中世以降
252		S18-R6	楕円形(74)×68	D22	b	<土壇263	中世以降

番号	地盤区分	位 置	平 基 形 横幅(cm)	断面形 高さ(cm)	覆土の 特徴	切 り 合 い 関 係		備 考
						>…は切る	<…は切られる	
253	34	S18-E 6	楕円形90×(88)	B30	b	<土壤251-254-260		中世以降
254		S18-E 6	隅丸方形132×(117)	B36	b	<土壤251>土壤253		中世以降
255		S18-EW6	円形66×60	5		土壤256に接する		
256		S18-E 6	隅丸方形111×104	C18	a	土壤255に接する		縦文時代?
257	48	S18-E 6	楕円形113×77	9		>土壤258		
258	43	S18-E 6	隅丸方形149×127	B20	b	<土壤257		中世以降
259	45	S 6-W 6	方形118×(78)	B15	b	>11位・土壤200、<土壤128		中世以降
260	34	S18-E 6	方形145×122	B20	b	>土壤253-262		中世以降
261		S18-E 6	隅丸方形83×(55)	C30	b	<土壤263、+土壤262-262に接する		中世以降
262		S18-E 6	楕円形83×(76)	B30	b	<土壤260-263、+土壤261に接する		縦文時代
263	44	S18-E 6	方形277×231	B68	b	>土壤262-261-262-P106		中世以降
264		S24-E 6	凸形(98)×69	B16	a	< P106		縦文時代?
265	31	S18-E 6	円形54×46	A14	a	>土壤266		縦文時代
266	31	S18-E 6	椭円形64×61	22	b	<土壤265-267		中世以降
267	31	S18-E 6	方形165×97	B24	b	>土壤266		中世以降
268	39	S18-E 6	円形99×91	A36	b	>土壤270		中世以降
269		S18-E 12	楕円形98×78	D36	b			中世以降
270	39	S18-E 6	方形173×167	B44	b	<土壤268		中世以降
271		S18-E 12	椭円形60×34	5				
272		S18-E 12	不整形142×138	F22	b			中世以降
273		S18-E 12	方形133×123	B40	b	>土壤275、15位に接する		中世以降
274		S18-E 12	方形98×97	C22	b	>土壤277		中世以降
275	50	S18-E 12	方形221×213	B62	b	<土壤273、>土壤276		中世以降
276	32	S18-E 12	椭円形72×60	B42	b	<土壤275		中世以降
277	35	S18-E 12	楕円形163×106	B14	b	>15位、<土壤274		中世以降
278	47	S24-W12	方形137×135	B27	b	< P109		縦文時代
279		S18-W12	凸形122×72	17		区域外にかかる		
280		S24-W12	凸形78×73	B24	a			縦文時代
281		S24-W12	椭円形93×82			>16位		
282		S30-W12	椭円形63×47	B31		>土壤283		
283	36	S30-W12	方形185×106	B21	a	<土壤282		縦文時代?
284		S30-W12	椭円形83×45	3				
285		S30-W12	椭円形85×63	B22	b	>土壤286		中世以降
286		S30-W12	円形50×(34)	E16	a	<土壤285-287		縦文時代
287		S30-W12	椭円形50×40	5		>土壤286		
288	34	S24-W12	円形140×129	B22	a			縦文時代
289		S24-W12	隅丸方形67×56	B12	a	>18位		縦文時代?
290	40	S24-W 6	隅丸方形165×135	B53	a	>18位		縦文時代
291		S12-E 18	楕円形163×(73)	25		>土壤351、<土壤164-172		
292		S30-W 6	方形(67)×62			<土壤293		
293		S30-W 6	長方形109×54	1		>土壤292-P116		
294	35	S30-W 6	椭円形91×52	B24	a			縦文時代
295		S24-W 6	椭円形94×53	B19	a			縦文時代
296		S30-W 6	隅丸方形150×147					

番号	施設名	位 置	平 面 形 模様(cm)	断面形 幅さ(cm)	地土の 特 徴	切 り 合 い 関 係		備 考
						>…は切る	<…は切られる	
297		S39-W 6	楕円形60×42	C 6	c			繩文の跡か
298		S39-EW0	楕円形157×95					
299		S39-EW0	円形67×65	C10	a	>土壌302		縄文時代
300		S39-EW0	隅丸方形98×87	B10	a	>土壌302		縄文時代
301	45	S39-EW0	方形143×140	B22	a			縄文時代?
302		S39-EW0	合形153×103	20		<十脚299-300		縄文時代
303	43	S24-EW0	方形126×105	B26	b	>土壌304		中世以降
304	40	S24-EW0	隅丸方形187×(144)	C34	b	<土壌303		中世以降
305	37	S24-RW0	楕円形170×150	C36	a			縄文時代
306		S24-EW0	隅丸方形97×87	B16	a			縄文時代
307	45	S24-W 6	合形124×91	B16	a			縄文時代
308		S18-E 18	楕円形(179)×150	B18	a	<土壌198-216-217		縄文時代?
309		S24-W 6	円形65×61	B26	a			縄文時代
310		S24-EW0	方形141×(67)	C16	b	<土壌311,>土壌312-313		中世以降
311		S24-R 6	隅丸方形142×106	C36	b	>土壌310-314-315		中世以降
312		S24-EW0	楕円形(80)×70	B22	a	<上脚310		縄文時代
313		S24-EW0	楕円形(57)×40	E38	a	<十脚315		縄文時代?
314		S24-E 6	円形75×(40)			<土壌311		
315		S24-E 6	円形65×62			<土壌311		
316		S24-E 6	円形73×60	C12	a			縄文時代
317		S24-E 6	円形74×60	C12	b			中世以降
318		S39-E 6	楕円形(61)×38	F14	a	<P118		縄文時代?
319	31	S24-E 6	楕円形131×107	B29	a	>上脚329		縄文時代
320	31	S24-E 6	隅丸方形170×120	B32	a	<十脚319		古墳時代前期
321		S24-E 6	隅丸方形123×89	B14		>土壌322		
322		S39-E 6	楕円形163×58			<土壌321		
323		S39-R 6	楕円形99×52			>土壌324		
324		S39-E 6	楕円形111×84			<上脚323		
325		S39-E 6	隅丸方形154×120	B20	b	>土壌326		中世以降
326		S24-E 6	隅丸方形66×(28)			<土壌325		
327		S24-E 6	合形(172)×156	I8	b	<土壌197,>土壌328		中世以降
328		S24-E 6	方形102×(86)	B20	b	<土壌327		中世以降
329		S24-E 6	円形85×95	C16	b			中世以降
330	44	S24-E12	方形287×231	B54	b	>土壌353,P107,P126に接する		中世以降
331		S24-E12	楕円形92×53	B 8	a			縄文時代
332		S24-E12	楕円形100×58	C10	a	>土壌334と接する		縄文時代
333		S39-E12	円形77×75	10		>方形周溝墓1		
334		S24-E12	楕円形70×49	7		>土壌332と接する		
335		S39-E12	隅丸方形109×81	C18	a			縄文時代
336		S39-E12	円形148×52	4		区域外にかかる		
337		S39-E12	円形69×57	C 6	c	>方形周溝墓1		繩文の跡か
338	35	N S9-W 6	長方形154×62	B19	a			縄文時代?
339	36	N S9-W 6	隅丸方形178×160	B31	b			中世以降
340		N S9-W 6	合形267×230	E14	a			縄文時代

番号	揭露面	位 置	平面形 規格(cm)	断面形 厚さ(cm)	裏土の 特 徴	切り合ひ 関係 >…は切る <…は切られる	備 考
341	33	N S 0-EW 0	横円形84×60	B 46	a		縄文時代
342		S 6-EW 0	横円形82×53	5			
343		S 6-EW 0	横円形90×60	23		>上層139	
344		S 6-EW 0	円形55×44	4			
345	39	S 12-W 6	円形74×60	B 44	b		縄文時代土器多量出土
346	34	S 12-W 6	円形105×88	B 33	a		縄文時代
347	39	S 12-W 6	方形(115)×76	B 24	b	< P 73	縄文時代
348		S 12-W 12	横円形106×42	B 12	b		中世以降
349		S 18-W 12	円形75×63	C 26	a		縄文時代
350	31	S 18-W 12	円形64×48	C 24	a		縄文時代
351	47	S 18-E 18	円形(163)×84	A 48	b	< 土壌291-217-131	中世以降
352	35	S 12-E 12	横円形105×(74)	C 30	b	< 土壌204-205-210	古墳時代初期
353	51	S 24-E 12	矩方形(283)×238	B 48	b	> 14往。< 土壌330-P 126	近世以降の入骨出土
354	36	S 30-R 18	横円形166×93	B 26	b	> 14生。土壌359	中世以降
355		S 30-E 12	横円形122×69	B 16	b		中世以降
356	32	S 30-E 18	円形111×98	B 32	b	> 土壌357-358	中世以降
357	32	S 30-E 18	隅丸方形114×88	B 42	b	< 土壌356。> 土壌358	古墳時代前段？
358	32	S 30-E 18	長方形157×(93)	B 28	b	< 土壌356-357	古墳時代前段？
359	36	S 30-E 18	円形88×76	B 16	b	< 土壌354	古墳時代前段？
360		S 24-E 12	円形75×55	B 22	b		中世以降
361	38	S 6-E 6	隅丸方形131×99	B 18	b		縄文時代
362	41	S 6-W 12	隅丸方形188×111	B 23	a		縄文時代
363		S 18-W 12	隅丸方形196×120	B 32	a		縄文時代
364		S 6-W 6	円形100×89	22			縄文時代
367		N 6-EW 0	円形203×159	7			
368		N 6-E 6	円形160×151	5			
369		N 6-E 6	横円形108×73	24			縄文時代
370		N 6-E 6	合方形102×94	13		< 土壌371	
371		N 6-E 6	方形100×97	20		> 土壌370-土壌372-P 192	
372		N 6-E 6	円形83×(63)	26		> 土壌371-P 192	
373		N 6-E 12	長方形211×129	7		> 土壌374-375	
374		N 6-E 12	横円形(163)×113	14		< 土壌373-375。> 21往	
375		N 6-E 12	方形(145×82)	8		< 土壌373-374-P 193。> 21往	
607	35	S 36-E 24	横円形183×108	B 26	b		中世以降
608		S 42-E 24	横円形102×64	C 2	a		縄文時代
609		S 42-E 24	横円形176×116	C 12	b		中世以降
610		S 42-E 24	隅丸方形72×57	F 14	a	P 315と接する	縄文時代
611		S 42-E 24	円形115×107	E 24	a	> 土壌612	縄文時代
612		S 42-E 24	円形130×105	C 20	a	< 土壌611	縄文時代
613		S 48-E 24	円形129×118	C 18	a		縄文時代？
614		S 48-E 24	横円形138×109	F 10	a	> 土壌615	縄文時代
615		S 48-E 24	円形85×(67)	C 6	a	< L 壁614	縄文時代
616		S 48-E 24	円形72×65	9		区域外にかかる	縄文時代
617	42	S 36-E 18	隅丸方形135×105	B 20	b		中世以降

番号	地蔵図	位 置	平 面 形 規 模(cm)	断面形 規 模(cm)	覆 土 の 特 徴	切 り 合 い 関 係 >…は切る <…は切られる	備 考
618	47	S36-E18	方形108×99	B32	b	>土壇787・23年	中世以降
619		S42-E18	円形150×120	A22	b	<土壇630, >土壇631	中世以降
620		S36-E18	円形111×92	B 8	a	>42佳・土壇787	绳文時代?
621		S36-E18	円形152×140	B 8	b	<土壇622-774, >42佳	中世以降
622		S36-E12	方形140×140	A26	b	<土壇626-627, >土壇621	中世以降
623	46	S36-E12	方形144×124	B13	b	>土壇624-663	中世以降
624		S36-E12	円形113×95	E18	a	<土壇623	绳文時代?
625	47	S42-E12	方形118×(70)	B18	b	<土壇667	中世以降
626	51	S42-E12	椭円形105×73	B38	b	>土壇622-646	中世以降
627	51	S42-E12	隅丸方形72×62	A34	b	>土壇622-646	中世以降
628		S42-E18	隅丸方形76×68	C18	a	<土壇629	绳文時代?
629		S42-E18	方形73×65	E26	a	>土壇628	绳文時代?
630		S42-E18	椭円形101×61	B 6	a	>土壇619-631	绳文時代?
631		S42-E18	円形(62)×58	B 6	a	<土壇630-619	绳文時代
632	45	S42-E12	隅丸方形185×114	C35	b		中世以降
633		S42-E18	椭円形(78)×63	A46	b	<土壇634	中世以降
634		S42-E18	方形158×115	23		>土壇633	
635	47	S42-E18	長方形253×169	B53	b	>土壇636-P310	中世以降
636		S48-E18	方形280×203	R30	b	<土壇635-637-639-768-P313, >土壇640	中世以降
637	37	S48-E18	椭円形244×160	F35	b	>土壇636-638	中世以降
638		S48-E18	隅丸方形161×(154)	7		<土壇637-638	
639		S48-E18	隅丸方形258×155	C18	b	>土壇636-638	中世以降
640		S42-E12	方形230×(195)	C12	a	<土壇642-636-641-P312	绳文時代?
641	43	S48-E12	方形112×105	B28	b	>土壇640-P312	中世以降
642	46	S42-E12	隅丸方形170×130	A46	b	>土壇642-640	中世以降
643	47	S42-E12	不整形148×(140)	F41	a	>土壇642, <土壇645-679-692-644	绳文時代
644	37	S42-E12	椭円形105×81	B 9	b	>土壇643-645	中世以降
645		S42-E12	円形129×97	F40	a	<土壇644, >二壇643	绳文時代
646	51	S42-E12	長方形163×110	B26	b	<土壇626-627	中世以降
647		S36-E12	円形68×66	C 8	b	>P298-土壇648	中世以降
648		S36-E12	方形106×72	E20	b	<土壇547	中世以降
649	34	S36-E6	円形139×(120)	C19	b	<土壇650-651	中世以降
650		S36-E6	円形90×75	C12	b	>土壇649-661	中世以降
651		S36-E6	椭円形(86)×75	B10	b	<土壇650-652	中世以降
652		S36-E6	隅丸方形(121)×97	E14	b	<土壇653, >土壇651	中世以降
653		S36-E6	椭円形86×62	C14	b	>土壇652	中世以降
654	30	S36-E6	隅丸方形99×83	B18	b	>土壇655	中世以降
655	42	S36-E6	椭円形97×76	F18	b	<土壇654	中世以降
656	44	S36-EW0	円形130×112	B13	b		中世以降
657	33	S36-EW0	隅丸方形142×111	A44	b		中世以降
658		S36-E6	隅丸方形164×105	B48	b	>P293-294-295, <二壇660	中世以降
659	49	S36-E6	方形87×65	B16	b		中世以降
660		S36-E6	隅丸方形109×114	B14	b	<P292, >土壇658	中世以降
661	35	S36-E6	円形82×61	B24	b	>土壇662	中世以降

番号	説明	位 置	平 面 形 状	断 面 形 状(cm)	覆 土 高 さ(cm)	覆 土 の 特 徴	切 り 合 い 関 係 >…は切る <…は切られる	備 考
662	39	S 36-E 6	方形194×136	B13	b	< 土壙661		中世以降
663		S 36-E 12	方形(118)×98	B30	b	< 土壙623-664-665		中世以降
664		S 36-E 12	円形65×47	25		< 土壙665, > 土壙663		
665		S 36-E 12	円形97×97	B40	b	> 土壙664-663-666		中世以降
666		S 36-E 12	隅丸方形168×82	B28	b	< 上壙665, > 土壙667		中世以降
667	38	S 36-E 12	方形231×193	B27	b	< 土壙665, > 土壙625-668		中世以降
668		S 42-E 12	円形100×(55)	C16	b	< 土壙667-678		中世以降
669		S 42-E W0	円形62×62	B38	a			縦文時代
670		S 42-E W0	円形90×80	A30	b	> 24住		中世以降
671		S 42-E W0	隅丸方形92×70	C 4	c			環状の跡か
672	43	S 42-E W0	方形184×171	B25	b			中世以降
673		S 48-E W0	円形87×78	B16	b	> 24住		中世以降
674		S 48-E W0	方形140×94	B20	b	> 土壙675-767-P 281		中世以降
675		S 48-E W0	方形(71)×66	B14	b	< 土壙674-P 281		中世以降
676		S 42-W 6	楕円形178×98	B14	b	< P 275-P 271, > 土壙781		中世以降
677		S 42-W 6	円形85×61	E18	a	> P 274, P 273と接する		縦文時代
678		S 42-E 12	円形162×127	E20	b	> 土壙668		中世以降
679		S 42-E 12	円形137×98	E22	a	> 上壙643		縦文時代?
680		S 42-E 12	方形163×117	B24	b			中世以降
681	41	S 42-E 12	方形108×80	B16	b			中世以降
682	38	S 42-E 6	隅丸方形207×(178)	B36	b	< 土壙683-684, > 土壙687		中世以降
683		S 42-E 6	楕円形179×123	28	b	> 土壙682-687		中世以降
684	42	S 42-E 6	方形190×(144)	A30	b	> 土壙682-687, < 土壙685-686		中世以降
685	40	S 42-E 6	円形188×160	B45	b	> 土壙684-686-687		中世以降
686	30	S 42-E 6	方形186×(156)	B44	b	> 土壙684-687, < 土壙685-689-696		中世以降
687		S 42-E 6	方形(336)×74	B50	b	> 土壙687, < 土壙682-683-684-686-685-688-689		中世以降
688	38	S 42-E 6	隅丸方形165×118	B40	b	> 土壙687-771-699-24住, < 土壙689, 土壙691と接する		中世以降
689	33	S 42-E 6	円形102×96	B42	a	> 土壙688-687-696-690		縦文時代?
690		S 48-E 6	方形(249)×215	B40	b	< 土壙689-688-691, < 土壙695		中世以降
691	42	S 48-E 6	方形148×125	B35	b	> 土壙690-24住, < P 288, 土壙688と接する		中世以降
692		S 48-E 12	円形121×104	B10	a			縦文時代?
693		S 48-E 12	円形72×49	C16	a			縦文時代
694		S 48-E 6	円形85×59	B 7	a			縦文時代
695		S 48-E 6	方形296×(186)	40		< 土壙690-P 288, > 土壙697, 区域外へかかる		
696		S 42-E 12	円形71×64	B16	a	> 土壙686		縦文時代?
697		S 48-E 6	方形(114)×107	B20	b	< 上壙695, 区域外にかかる		中世以降
698		S 48-E 6	円形77×55	C 6	b			中世以降
699		S 48-E W0	方形90×(74)	E16	b	< 土壙700		中世以降
700		S 48-E W0	楕円形210×137	C14	b	> 土壙699-63住, < 土壙701		中世以降
701		S 48-E W0	隅丸方形206×127	B20		< 土壙759, > 土壙700		
702	50	S 48-E W0	方形137×175	39		< 土壙703		
703	50	S 48-E W0	方形191×188	B40	b	> 土壙702		中世以降
704	31	S 36-E W0	円形75×64	B23	b	> 土壙706		中世以降
705	47	S 36-E W0	方形104×103	B25	b	< 土壙705		中世以降

番号	地點	位 置	平 面 形 状 模 (cm)	面面形 状 模 (cm)	裏の特徴	切り合 い 製 作 …>は切る <…は切られる	備考
706		S36-EW0	方形177×130	B48	b	<土壌707-717, 区域外にかかる	中世以降
707	38	S36-EW0	吉形107×98	A45	b	>土壌706	中世以降
708	50	S36-EW0	丸形178×162	B32	b	>土壌718-717	中世以降
709	46	S36-W6	長方形(229×168)	B32	b	<土壌711-710-716, 区域外にかかる	中世以降
710		S36-W6	円形115×(68)	B10	b	<土壌711-712, 区域外にかかる	中世以降
711	41	S36-W6	方形152×82	B42	b	>土壌712-709-710, <土壌715	中世以降
712	41	S36-W6	方形(121×65)	B34	b	<土壌711-715, >土壌710, P255に接する	中世以降
713		S36-W6	方形(460×335)	B42	b	<土壌714-721-722-726, 区域外にかかる	中世以降
714	46	S36-W6	長方形195×83	B40	b	>土壌713	中世以降
715	50	S36-W6	方形215×206	B30	b	<土壌720, >土壌711-712-719	中世以降
716		S36-EW0	円形115×97	B20	b	>土壌709	中世以降
717		S36-EW0	吉形93×(64)	E12	b	<土壌708, >土壌706	中世以降
718	50	S36-EW0	吉形170×(168)	B34	b	<土壌708-719	中世以降
719		S36-W6	円形117×(72)	B16	b	<土壌715, >土壌718	中世以降
720	50	S36-W6	方形157×124	A45	b	>土壌715	中世以降
721	48	S36-W6	方形103×83	B23	b	>土壌713-722	中世以降
722	45	S36-W6	隅丸方形134×119	B39	b	<土壌721, >土壌713	中世以降
723		S54-EW0	方形(329)×214	23		<土壌745-777-755-P285, 区域外にかかる	
724	46	S42-W6	方形147×126	B44	b	<土壌725-P256, >P268	中世以降
725	36	S42-W6	円形75×56	C44	b	>土壌724	中世以降
726	52	S42-W6	方形275×(125)	B52	b	>土壌713, 区域外にかかる	中世以降
727	46	S36-EW0	円形120×104	C30	a	<P259-P266-P262	绳文時代
728		S36-EW0	横円形107×80	B20	a		绳文時代
729		S48-EW0	隅丸方形112×102	B25	b		中世以降
730		S48-W6	四形113×92	F22	a	<P278	高文時代
731		S42-W6	隅丸方形(79)×75	B22	b	<土壌732	中世以降
732	41	S48-W6	方形221×(121)	B42	b	>土壌731-785, 区域外にかかる	中世以降
733	31	S48-W6	円形99×71	B39	b	>土壌785	中世以降
734	48	S48-W6	隅丸方形107×95	B40	b	>土壌785	中世以降
735		S48-W6	楕円形134×100	C18	b		中世以降
736		S48-EW0	隅丸方形133×126	10		>土壌737	
737		S48-EW0	隅丸方形177×(113)			<土壌736	
738	49	S48-EW0	方形171×170	B27	b	>土壌780-740	中世以降
739		S48-W6	吉形213×226	B36	b	>土壌742-759-760, <土壌763	中世以降
740		S48-EW0	方形166×(93)	E56	b	<土壌738-780-765-741, >土壌742	中世以降
741	43	S54-EW0	吉形223×191	B4	a	>土壌749-742	绳文時代?
742		S48-EW0	楕円形(117)×91	B44	b	<土壌739-741-740	中世以降
743		S54-EW0	円形67×60	C16	b		中世以降
744	45	S54-E6	方形123×89	B42	b	>土壌782, 区域外にかかる	中世以降
745	46	S54-EW0	吉形190×173	B46	b	>土壌723	中世以降
746		S54-EW0	方形207×143	B29	b	>土壌747-779-777	中世以降
747		S54-W6	方形216×200	B20	b	<土壌746-749-779-748	中世以降
748		S54-W6	円形91×73	B16	b	>土壌747	中世以降
749		S54-W6	方形108×(106)	A38	b	>土壌747-760, <土壌775	中世以降
750		S54-W6	方形(143)×67	B30	b	<土壌749-775	中世以降

番号	掲載回	位 置	平 壁 形 構成(cm)	断面形 高さ(cm)	覆土の 特徴	切 り 合 い 間 隙		考
						>…は切る	<…は切られる	
751		S 60-W 6	方形(184)×168	B24	b	<土壤752-P282		中世以降
752		S 60-W 6	長方形175×128	B12	b	<P282,>土壤751		中世以降
753		S 60-W 6	不整形174×68	B18	b	<土壤753		中世以降
754		S 60-EW0	方形127×99	F14	a	>土壤778		縄文時代?
755		S 58-EW0	円形139×137	B20	a	>土壤723		縄文時代?
756	43	S 60-E 6	方形94×(70)	A56	b	区域外にかかる		中世以降
757		S 60-EW0	円形120×92	B28	a	>25往-26往		縄文時代?
758		S 60-W 6	方形(152)×95	59		<27往		
759		S 48-W 6	長方形(163)×105	B30	b	<土壤739,>土壤760-761		中世以降
760	52	S 54-W 6	方形245×230	B32	b	<土壤759-761		中世以降
761		S 48-W 6	円形58×(30)	B24	b	<土壤759,>土壤760		中世以降
762		S 42-W 6	円形55×(41)	C22		<P272,>土壤781		
763		S 54-W 6	円形68×70	B14	b	>土壤739		中世以降
764		S 54-W 6	円形(154×46)	B30	b	<土壤766		中世以降
765		S 48-EW0	円形53×48	11		>土壤740		
766		S 48-EW0	円形(86×49)	C 4		<土壤674		
768		S 48-E 18	円形79×67	C18	a	>土壤636		縄文時代?
769		S 48-E 24	円形87×70	C12	b			中世以降
770		S 42-E 18	楕円形98×56	C 6	a			縄文時代
771		S 42-E 6	方形(229×39)	27		<土壤687-688,>24往		
772		S 36-E 18	円形77×70	B22	b	>土壤787-23往		中世以降
773		S 36-E 12	楕円形115×70	C12	b	>土壤787-23往		中世以降
774		S 36-E 12	円形65×67	B12	b	>土壤621-23往		中世以降
775	51	S 54-W 6	方形(270)×248	A32	b	>土壤784-27往-28往		中世以降
776		S 60-W 6	円形(89)×80	C 8		<25往		
777	52	S 54-EW0	方形301×217	B42	a	<土壤746-P283-P285,>土壤723-729-733		縄文時代?
778		S 60-EW0	不整形160×125	F22	b	<土壤754		中世以降
779		S 54-EW0	方形148×(70)	19		<土壤777-746-P283,>土壤747		
780	49	S 48-EW0	方形170×(23)	15		<土壤738,>740		
781		S 42-W 6	円形200×(96)	F 8		<土壤678-762-P271-P272,>P270		
782	42	S 54-E 6	円形(63)×56	B30	b	<土壤744,区域外にかかる		中世以降
783		S 60-W 6	方形(201)×160	22		<27往		
784	51	S 54-W 6	隅丸方型165×130	18		<土壤775-28往		
785	49	S 48-W 6	方形326×(247)	B40	b	<土壤733-734-732,区域外にかかる		中世以降
786	45	S 54-W 6	方形206×(127)	A36	b	>土壤764,区域外にかかる		中世以降
787	40	S 36-W 18	不整形223×225	B31	b	<土壤618-772-820,>23往		中世以降
788	36	S 36-W 18	楕円形180×43	B22	b	>23往		中世以降
789		S 36-W 18	円形73×45	C38	b	>23往		
790	36	N 12-W 18	楕円形155×91	B22	a	>土壤797-814		縄文時代?
793	37	N 12-W 24	楕円形218×105	C24	b			中世以降
794		N 12-W 24	円形97×80	B20	a	<土壤795		縄文時代
795	30	N 12-W 24	円形94×70	C16	a	>土壤794-597-P241		縄文時代
796		N 12-W 24	円形65×64	12	a			縄文時代
797		N 12-W 18	楕円形94×70	19		<土壤792		
798		N 12-W 18	円形65×53	21				縄文時代

番号	発掘場	位 置	平 面 形 規模(cm)	断面形 規格(cm)	裏土の 特徴	切 り 合 い >…は切る <…は切られる	関 係	備 考
799		N12-W24	円形63×59	C16	a			縄文時代
800	32	N24-W24	円形87×74	B18	a	<上塙803, 区域外にかかる		縄文時代
801	32	N18-W24	隅丸方形105×97	B27	a			縄文時代
802		N18-W24	楕円形122×70	C14	b	>七塙416		中世以降
803	32	N24-W24	円形78×75	B21	a	>土塙800		縄文時代
804	32	N24-W18	円形65×55	C14	a	< P207		縄文時代
805		N24-W24	円形105×98	C18	a	>7号塙809		古墳時代?
806	30	N24-EW0	円形79×69	E26	a			縄文時代?
808		N30-EW0	方形93×71	C 8	a	>土塙809		縄文時代?
809		N24-EW0	円形131×103		14	<上塙808		
810	41	N24-EW0	椭円形148×66	F46	a	>溝14		古墳時代前期
811		N24-E 6	椭円形(93×50)	B36	a	区域外にかかる		縄文時代?
812	31	N24-EW0	椭円形113×90	B41	a	>溝14		古墳時代前期
813		N24-W12	円形58×50	C10	a			縄文時代
814		N12-W18	方形289×220	F16		<土塙792, 区域外にかかる		
815		N 6-W24	円形98×90		24			縄文時代
816		N18-W24	円形97×(84)	E14	a	<土塙802, >P213		縄文時代?
817		N24-W18	円形92×89		a	<2住		縄文時代?
846		S90-W18	椭円形226×59	C25				
841		S90-W18	円形84×73	B12	c			深鉛の跡か
842		S90 W18	円形65×62	C 9	c			深鉛の跡か
843		S90 W12	椭円形167×100	E23	c	>溝22		深鉛の跡か
844		S102-W36	隅丸方形100×98	B31	a or b			
845		S114-W30	方形257×130	E12	c			深鉛の跡か
846		S144 W30	椭円形175×113	F12	c			深鉛の跡か
847		S108-W24	円形62×62	C 4	c	< P327		深鉛の跡か
848		S96-W36	円形60×55	C15	a			縄文時代?
851		S60 W48	円形65×54	B 5	b			帰還にかかる
854	45	S54-W54	円形103×90	B23	a			縄文時代
855		S54-W54	円形81×80	B16	a			縄文時代
856	30	S66-W54	椭円形106×72	F20	a			縄文時代?
857	33	S66-W54	円形98×88	B34	a			縄文時代
858	35	S54-W60	円形130×(93)	D66	a	区域外にかかる		縄文時代
859	31	S60-W54	円形78×71	B20	a			縄文時代
860		S66-W48	円形64×60	A18	a			縄文時代
861		S66-W54	円形51×47	E10	b			縄文時代
862	39	S54-W60	円形98×81	B40	a			縄文時代
863	37	S60-W54	円形65×57	F23	a			縄文時代
864		S60-W54	円形50×44	B54	b			縄文時代
865	35	S66-W60	椭円形109×71	B28	a			縄文時代
866	39	S54-W60	隅丸方形147×115	B42	a			縄文時代
867	33	S60-W60	円形72×60	B24	a			縄文時代
868	33	S60-W60	円形81×90	B30	a			縄文時代
869	31	S60-W60	円形58×58	B28	a			縄文時代?
870		S66 W60	方形187×168	E76	b			中世以降

番号	持綱同	位 置	平 西 形 度(cent.)	断面形 度(cm)	偏土の 持 綱	切 り 合 い 関 係		考
						>…は切る	<…は切られる	
871	31	S54-W66	円形70×63	B37	a			绳文時代
872	31	S54-W66	円形73×61	B25	a	>上綱873		古墳時代前期
873	42	S60-W66	隅丸方形267×167	B78		<土綱872-874, >46往		古墳時代前期
874		S60-W66	円形63×44	38		>土綱873		古墳時代前期
875		S60-W66	円形70×65	E66	a			绳文時代
876		S60-W66	円形115×100	19				
877		S60-W54	円形65×52	B36		>P339		绳文時代
878		S66-W72	円形74×60	24				绳文時代
879		S72-W78	円形37×36	10				绳文時代
880		S72-W78	円形78×61	B12	a	>土綱884		绳文時代?
881		S72-W78	円形65×80	B60	a	>土綱884-883-887, <P335		绳文時代
882		S72-W78	円形64×47	B22	a	>上綱883, 区域外にかかる		绳文時代
883		S72-W78	台形141×(125)	B16		<土綱881-887-882, 区域外にかかる		绳文時代
884		S72-W78	不整形75×(66)	15		<土綱880-881-P335		绳文時代
885	30	S72-W78	吉形133×(84)	B22	b	区域外にかかる		绳文時代
887		S72-W78	椎円形93×73	F45		<土綱881, >二横883		绳文時代
890	33	S60-W38	椎円形(132)×116	B22	b	<十横958, 区域外にかかる		中世以降
906		S48-W20	円形77×53					古墳時代前期
932		S48-W24	椎円形100×75	14				绳文時代
933	43	S48-W24	方形114×90	B17	b	>土綱934		山世以降
934		S48-W24	方形101×(43)	B10	a	<上綱933		绳文時代?
935		S48-W24	円形105×88	59				绳文時代
936	43	S48-W24	椎円形269×76	B12	a			绳文時代?
937		S48-W24	椎円形75×42	10	a			绳文時代?
938	45	S48-W24	長方形121×74	B20	a			绳文時代?
939		S48-W24	円形69×89	F28	a			绳文時代
940	34	S48-W24	円形111×95	B36	a			绳文時代
941		S48-W24	円形62×54	15				绳文時代
942		S48-W30	円形72×69	12				
943		S48-W18	長方形103×70	18		>上綱944		
944		S48-W18	方形(164)×120	42		<土綱943, 区域外にかかる		
945		S54-W18	長方形250×145	41				
946		S48-W30	椎円形100×75	C14	a			古墳時代前期
947		S54-W24	円形72×68	F58		>47往		
948	33	S54-W24	円形94×76	F53	a	>土綱950		绳文時代
949		S54-W24	円形66×55	C42	a	>上綱950		绳文時代
950		S54-W24	隅丸形140×130	B28	a	<土綱948-949, >土綱951		绳文時代
951		S54-W24	円形51×(30)	F12		<土綱950		绳文時代
952	48	S54-W24	長方形212×148	A49	a			绳文時代?
953		S54-W18	円形69×63	10		>上綱954		绳文時代
954		S54-W18	円形68×60	7		<土綱953		绳文時代
955		S54-W18	隅丸形154×116	19		>上綱955		绳文時代
956		S54-W18	方形(106)×(130)	45		<上綱955, >土綱957, 区域外にかかる		绳文時代
957		S54-W18	方形(73)×35	7		<土綱956, 区域外にかかる		绳文時代
958	30	S54-W18	隅丸形112×95	A44	a	<土綱950		绳文時代

## 5. 溝

今回の調査で確認された溝は、8区1基、9区2基、10区2基、12区1基、14区6基の計12基である。調査地南側の9・14区に集中が見られるが、9区の溝4以外は他の溝とは区別されるものである。次に代表的な溝址について簡単に触れたい。

溝2 8区北側S5～6、W24～26に位置し、東側は調査区域外にかかる。幅は最大120cm、深さは20cmを測り、底面はほぼ平坦であった。断面形は台形を呈し、覆土の褐色土には焼土粒が混入していたが砂粒、小砾等は確認されなかった。遺物は覆土下層に古墳時代前期の土師器片少量が見られた（第76図）。本溝址の所属時期もそこに求めたい。

溝4 9区南端S81～82、W15～29に位置し、第2・5号住居址を貼り、溝5に貼られる。長さは1414cmで、東西に延び、最大幅で74cmを測る。ほぼ中央で直角に枝分かれして南側に延びてゆくが調査区域外にかかり、全形は知り得ない。底面の傾斜は東西方向には認められないが、南へ延びる部分では自然地形に沿って北から南へと傾斜している。断面形は台形を呈し、暗褐色～黒褐色土が堆積していた。覆土には砂、小砾等は混入していなかった。遺物は古墳時代前期に比定される土師器片（第76図）等が少量出土しており、本址の時期もそこに求める。

溝7 10区南端S30～34、W1～3に位置する。南北に延びる長さは380cmで、最大幅は74cmを測る。断面は台形を呈し覆土には暗褐色土が堆積していたが水を伴っていた様相は窺えなかった。底面の傾斜は南から北へ傾いているが自然地形は僅かだが南に向かって傾斜を持つ。本址からは遺物の出土はなく所属時期は不明である。

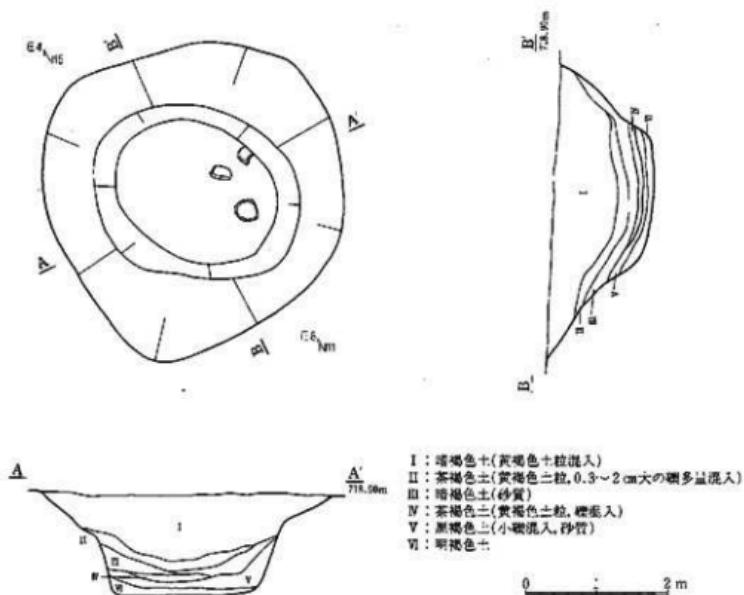
溝13 12区北側N20～26、W14～16に位置し、南側は区域外にかかっている。長さは510cm、幅は最大で150cmを測る。東壁はほぼ直に掘り込まれているが、西壁は2段掘りになっている。覆土の暗褐色土、黒褐色土は自然堆積の様相を呈し、また水を伴っていた状況は認められなかった。底面には起伏はなく、平坦であった。遺物は少ないが、底面より古墳時代前期に比定される土師器が出土しており本溝址の所属時期もそこに求めたい。

溝19 14区S94～113、W20～40に位置する。今回の調査では最大の規模をもつ溝址で、長さ2610cm、最大幅283cmを測り、自然地形の傾斜に沿って北東への方向を持つ。昨年度刊行した向畠遺跡Iの地形、地質の節で詳しく記述されている様に暗渠排水路と考えられるものである。

以上、代表的なものについて概観してみたが、多様なあり方を示していた。これらの所属時期は古墳時代から近代に亘るものである。その中で溝7は中世以降の土壌集中区内にあり、それらとの切り合い関係もないことから、あるいは何らかの関連も考えられるが推測の域を脱し得ない。

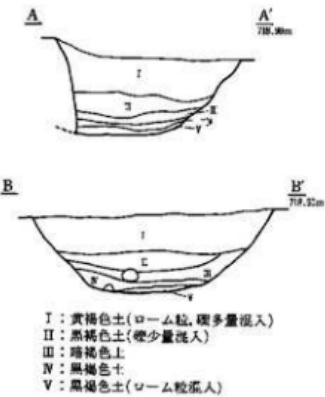
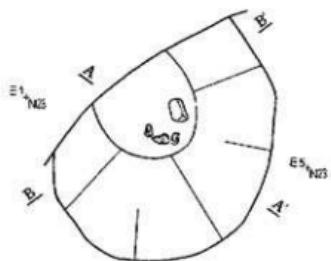
## 6. 穫穴状遺構

今回の調査で3基確認され、いずれも11区北部にあり、竪2、竪4は調査区域外にかかる。3基とも非常に酷似しており、ここでは竪3をとりあげて報告したい。N10~E16、E4~E9に位置し直径4mの不整円形を呈する。壁高は1.2mとかなり深く、すり鉢状に二段に掘り込まれており、壁、底面ともに二次堆積砂質ロームで、底面に関しては砂質が強く軟質であった。覆土から底面にかけては10~30cm程の大きさの礫がみられた。出土遺物としては、覆土中に古墳時代前期の土器、底面に平安時代の土器片が少々あった。よって竪3は平安時代の遺構と判明できた。竪2、竪3も、この土器片を根拠に平安時代に限られたものと断定したい。

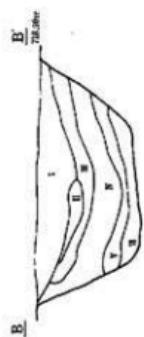
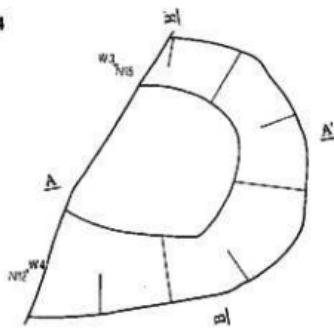


第53図 穫穴状遺構3

豊穴状造構 2



豊穴状造構 4



第54図 豊穴状造構 2・4

### 第3節 遺物

#### 1 土器・陶磁器

##### (1) 縄文時代の土器 (第55~57図)

今回の調査において出土した縄文土器は、遺構に帰属するものも含め、その大半が小破片であった。従って実測図および拓影により出来るだけ多くを図示するよう努めたが、その数は全体の半数程にとどまっている。以下、時期毎に群別、類別を行う。

##### 第1群 早期末~前期初頭の土器

23点を図示した。遺構に伴うものは見られない。以下の2類に分類される。

第1類 (17~19) 胎土に多量の纖維を含み縦縄体圧痕の付されるもので、早期末に位置付けられる。いずれも口縁部の破片で、若干外反気球に開く器形を呈する。17は厚い口唇部に直交して、口縁部外面には横位に右巻きの原体を押す。18・19は口縁部側面に横走する隆帯を有する。隆帯上には直交して縦縄体を押すが、齊滅により原体は不明である。さらに口唇部にも押すを行っており、19は深い圧痕を残す。これらは胎土に纖維を含む他、石英・長石粒が顕著に観察される。

第2類 (21~33) 前期初頭に含まれ、纖維を含んだ胎土、縄文を特徴とする。24は唯一口縁部の破片で、端部は薄くおさめるが波打っている。20~26は外面に縄文の施文が観察される。器面荒れにより原体の判読は難しいが、20はR L、21はL R、22はR L (直前改多条) をそれぞれ横位に施文し、また23・24はL Rを縦位に回転するようである。この他、27~31は内外又は外面に擦痕が観察される。

##### 第2群 前期中葉の土器

調部片2点を図示した。両者胎土に砂粒を含むが、纖維の混入は認められない。34はL R (前々段多条) の原体を横位に、35はL R、R L原体を横位に施文し羽状縄文としている。

##### 第3群 中期初頭の土器

本群は出土した縄文土器の7割以上を占めている。実測図16点、拓影図129点を示したが、拓影図の大半は縄文時代以外の遺構ないしは検出面の出土である。尚縄文中期初頭に属し、実測図・拓影図を掲載し得た遺構は11件、土壙10・132・226・230・294・295・309・320・345・347・857・859・860・866・885・887である。そのうち11件・土壙10等からは復原可能な個体がまとまって出土している。

显示資料は全体に小破片が多く、全形が窺い知れるものは少ない。従って全体を一括して、口縁部文様帶のあり方により分類を行った。器形はほぼ深鉢に限られる。

第1類 地文に細線文や縄文を多用する、所謂「細線文系」土器を一括する。本類は量的に第3群の主体を占め、文様帶のあり方により以下に細分される。

A (10・61・79・89・90・94・99・101・102・104・124・146・168)

口縁部の地文に主として細線文が用いられる一群である。器形は1段ないし2段に膨らむキャリバー形の口縁部に、直ないしはやや裾の張る胴部が取り付く（2段に膨らむキャリバー形の場合、下段の膨らみはむしろ胴部といえる）ものと、円筒形を呈するものが存在する。文様帶は口縁部文様帶と胴上部文様帶に分かれ、口縁部文様帶はさらに端の狭い上段と、下段により構成される。

上段は縦位の細線文（61・99）の他、格子状に細線を付すもの（101・102）、無文のもの（104）、繩文を付すもの（10）が見られる。上下段の区画は普通1～2条の平行沈線によるが、101・102は結節平行沈線で行う。下段は細線文を施した後平行沈線や沈線による施文を行うもの（61・99・104・124）、瓦状押引文（ないしは竹管腹部による刺突文）を充填するもの（10）がみられる。前者には三角印刻文が伴う場合が多いが、本遺跡では出土していない。尚104・124は推定4単位の突起を有している。104は突起上にも細線文を付す。

胴上部文様帶も横位に展開される。口縁部との区画は平行沈線により行い、横状把手が4単位付されるようである。10は繩文を施す隆帶で区画をしている。区画線下にはY字状文（137）の他、平行沈線による構図（10・89）も見られる。胴部の地文は縦位の帯繩文で、一帯ずつやや間隔をおいて施す。両端に結節をもつ單節繩文が多いが、94・146の様に羽状繩文も存在する。89は細線文を地文としており、また79・168は細線文による格子目文と三角印刻文が施される。

B（1・2・4・7・13・40～42・48～55・58・59・65・67・68・76～78・80～88・91・93・98・100・103・105～120・123・125～136・138～139）

口縁部の地文が繩文となる一群である。器形はAと同様である。文様帶もAと同様口縁部2段、胴上部1段であるが、口縁部下段は41・81・113を除き無文が圧倒的に多く、本類の特徴として挙げられる。上段の繩文は横位に施す。上下段の分割は1～2条の平行沈線ないし単沈線によるが、下ないし上に接して刻目を入れるものが多い（1・2・41・67・84・98・100・105）。明瞭な三角印刻文も少数存在している（40・108）。この他、口唇部に刻目を施すもの（67・68・84・103・106・107）、小突起を付すもの（83・105・112）、爪形文を付すもの（4・120）がある。口縁部下段に少數見られる施文は瓦状押引文（41）、平行沈線による山形、円、菱形等の構図（81・113・126）等で、他に横状把手や突起を施すものが多く見られる（2・4・103）。

口縁部、胴部の区画は隆帶によるものが多い。隆帶上には繩文（1・42・50・54・105・126）の他、三角印刻文（4）、細線文（53）が施され、また横状把手（53・54）も見られる。胴部文様帶はAと同様Y字状文をもつものの（3・52・53・76・80）や、他にY字状文の変化したと考えられる弧線文（4・138・139）、平行沈線や単沈線により横帶区画を行い、玉抱き三叉文（1・135・136）、U字形、菱形、円等のモチーフを縦位に連ねたもの（48・73・78）、弧線（54・55）等を描出するものが見られる。105は縦状に平行沈線を引く。又、6はミニチュア上器であるが、胴部に玉抱き三叉文ないしは円形、菱形のモチーフを横位に連続させている。尚胴部は地文としてA同様縦位の繩文を施すが、繩文の間隔が狭く、接したり重なるものが見られる。

#### C (14・92・121・142・143)

4片のみ抽出された。全形は不明であるが、器形はキャリバー形、口縁部のやや外反する円筒形が存在する。文様帶は、口縁部上段はBと同様、横位の縦文を施し、口縁部下段は巾広の単沈線による弧線文が横位に展開される。胴部は隆帯又は沈線により4単位に縦分割される。各区画は無文が多いようである。地文は口縁部横位、胴部縦位に行うが、雜なものが多く、施文されないものも見られる。

121は波状口縁となるもので、単沈線により波状部に三角形の区画を行い、下抱き三叉文を施す。地文は省略されている。143は胴部の懸垂隆帯で、上端がY字状となる。14は懸垂隆帯に沿って単沈線、印刻により三角形の構図を描く。142は懸垂文に沿って刻目を施している。

**第2類** 主として平行沈線文により加飾される一群で、縦文は基本的に用いられない。量的には第1類より少ない。以下のように細分されるが、細片が多いため分別困難なものが多い。

#### A (11・43・45・47・56・57・60・62・63・66・69・72・74・75・95・140・141・149～167)

大きく外開する頸部に、くの字形に内折する口縁部が取り付く器形を基本とする。胴部は筒状となる。口縁部の内折部分が省略され、キャリバー状になるものも見られる(43・44・156)。

文様帶は口縁部・頸部・胴部の3段に分けられ、横位の構図を展開する。口縁部文様帶はさらに上(端部)下段に分かれる。上段は爪形文(44・45・150・151・154)を施すものが多く、無文となるもの(43・69・128・156)は少數である。下段は平行沈線により格子目文(45・47・62・149～153)、結節平行沈線文(3・294・295・154)を施す。

頸部文様帶は口縁部および胴部文様帶と平行沈線により分離されるが、隆帯によるものが少數ある(47・151・155)。文様帶内は縦位の平行沈線で満たされるが、密に行うもの(151・157・158)と間隔をおくもの(3・44・57・71・149・156)の2者が存在する。後者は地文に縦文が施される比率が高い。

胴部文様帶は多段になるものと、1～2段のものとがあるが、細片が多く識別できない。各段には平行沈線により格子目文(5・56・137・160～162)、斜線文(163)、瓦状押引文なしし結節平行沈線文(57・66・75・165～167)が施され、最下段には縦位の施文を行うものも見られる(5・11・60・140・141)。縦位施文は平行沈線により山形文、直線文が描かれ、5は胴上位近くまで占めている。

#### B (96・122)

Aの規格に合致しない2点を挙げる。96は口縁部破片で、キャリバー形の口頸部である。平行沈線により逆U字形の区画をし、格子目文で埋めている。122は頸部に縦位の平行沈線文を充填するが、口縁部には横位に5条の角状押引文を施している。

**第3類** 第1類と第2類の特徴を兼ね備える、折衷された一群である。折衷は文様帶の交換、器形の交換、地文の交換によりなされている。今回示した資料では、第1類Bと第2類Aの折衷形態が見られる。(3・5・137)

3は器形および口縁部下段～頸部の文様帶は第2類Aの特徴を示すが、地文として繩文を施し、胴上部にY字状文を施す点は第1類Bの特徴と言える。5は口縁部の屈折が省略されてはいるが、基本的には第2類Aの器形として捉えられる。第2類Aと異なる点は、地文および口頭部の刻目を付した弧線文帶であり、これらは第1類Bの要素である。

その他、地文として繩文を施している第2類土器(11・44・57・60・71・140・141・149・156)も折衷形態とすることが出来よう。

**第4類 外来系の要素をもつもの**である。46は口縁部に突起を有し、縦部側面および横走隆帯上に爪形文を施す。胎土に白色粒子を多量に含み、器肉が薄く、硬い焼きである点他と識別される。東海地方の北義C I式に類似するものと捉えられる。147は縦位の木目状撫糸文が観察され、胎土は在地の特徴を示す。北陸地方との関連を示すものである。5は直前段反撫および前々段反撫の繩を用いるようであり、これらも北陸地方等との関連を考えるべきかも知れない。

#### 第4群 中期後葉の土器

土壤14出土の2個体3片を拓影で示した。いずれも唐草文系土器の深鉢で、169・170は同一個体である。169・170は隆帯により頸部に横帯区画を、胴部には大柄の渦巻文を施す樽形の深鉢である。区画内は交互刺突で埋め、胴部渦巻文の余白には沈線を充填させる。171は縦位に条線を施した後、沈線により渦巻文を描くものである。

**まとめ** ここでは繩文土器の主体である第3群土器について簡単にまとめておく。今回中期初頭土器の分類に当たっては、三上徹也氏の研究成果に従った。<sup>(30)</sup> 氏の繩年観によれば、本遺跡第3群第1類AはI段階、第1類BはII a段階、第1類CはII b・c段階、第2類土器はAがI・II段階となる。氏はこれら繩文系(第1類)および沈線文系(第2類)の並行関係については、文様要素の共通・類似点、梨久保遺跡での共伴関係、折衷土器の3点をもって説明されている。本遺跡では、破片中心の資料ながら11件、土壤10、土壙295からまとまって出土しており、三上氏の繩年観と本遺跡資料の適合性について確認しておく。

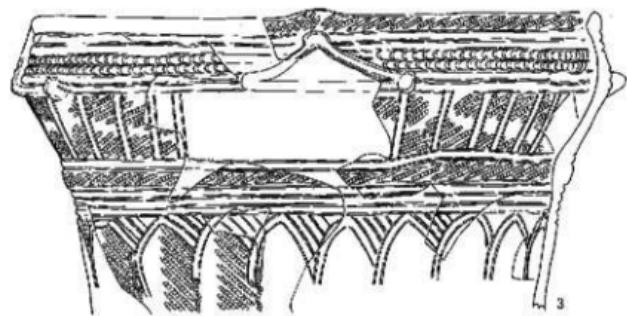
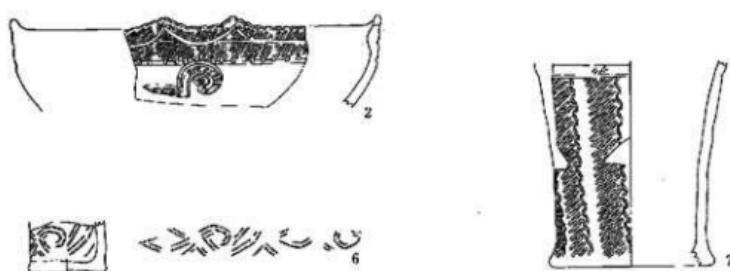
11件1・2等は繩文系II a段階の特徴を備え、3・45は沈線文系I～II a段階の口頭部のあり方を示す。

土壤10・5の胴部は沈線文系II a段階の特徴を示す。口縁部の弧線文及び刻目のあり方は繩文系II a段階、共伴する4も同様である。

土壤295 繩文系の67はII a段階の特徴を良く表し、沈線文系69・71・75はII b・cまでは下らない。

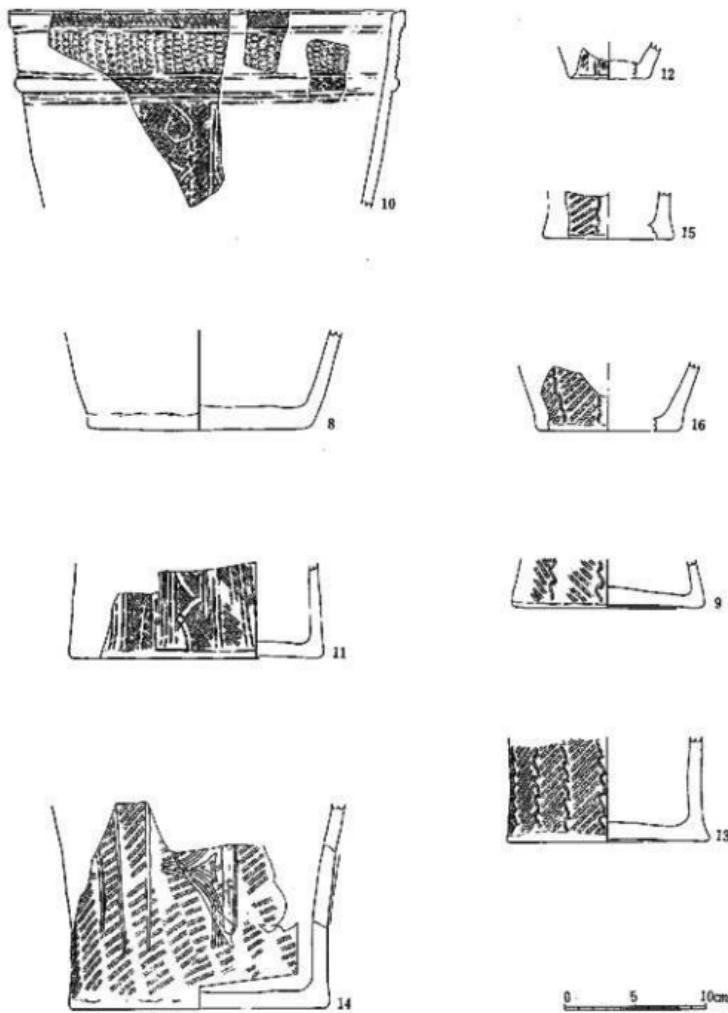
以上の伴出関係は、乏しいながらも、三上氏の提えたI・II a段階の並行関係と矛盾しない。II b・c段階については資料が少なく不明である。向畠遺跡出土土器は、上記の遺構も含め、「梨久保式」II a段階に主体をおくものとまとめられよう。

注 三上徹也 1987 「梨久保式土器 再考」『長野県埋蔵文化財センター 記要』1。

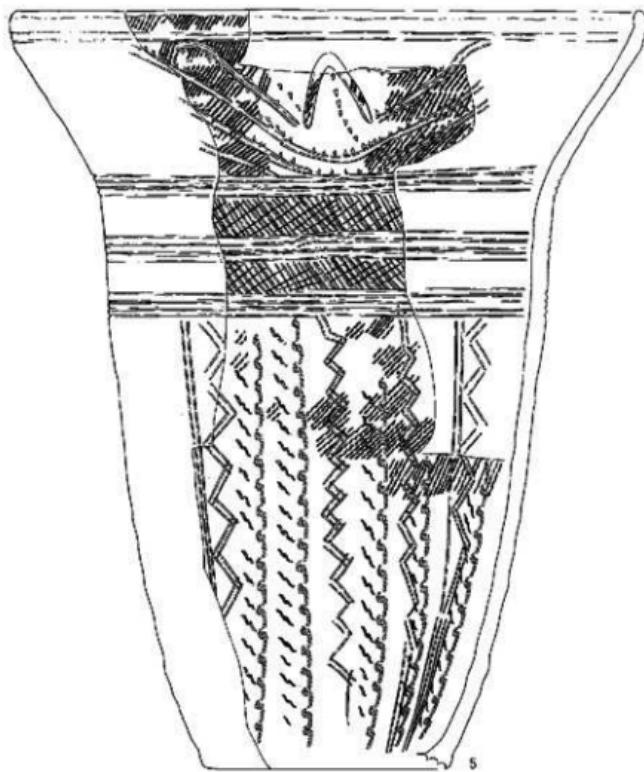


0 5 10 cm

第55図 縄文時代出土土器(1)

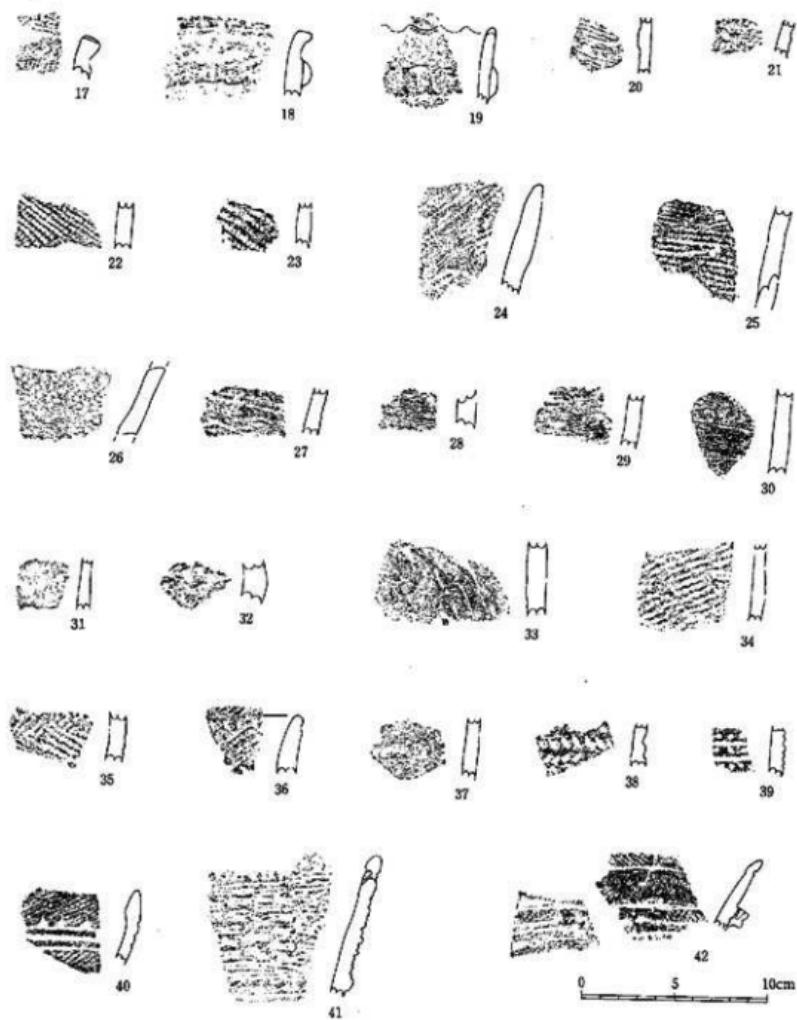


第56図 縄文時代出土土器(2)

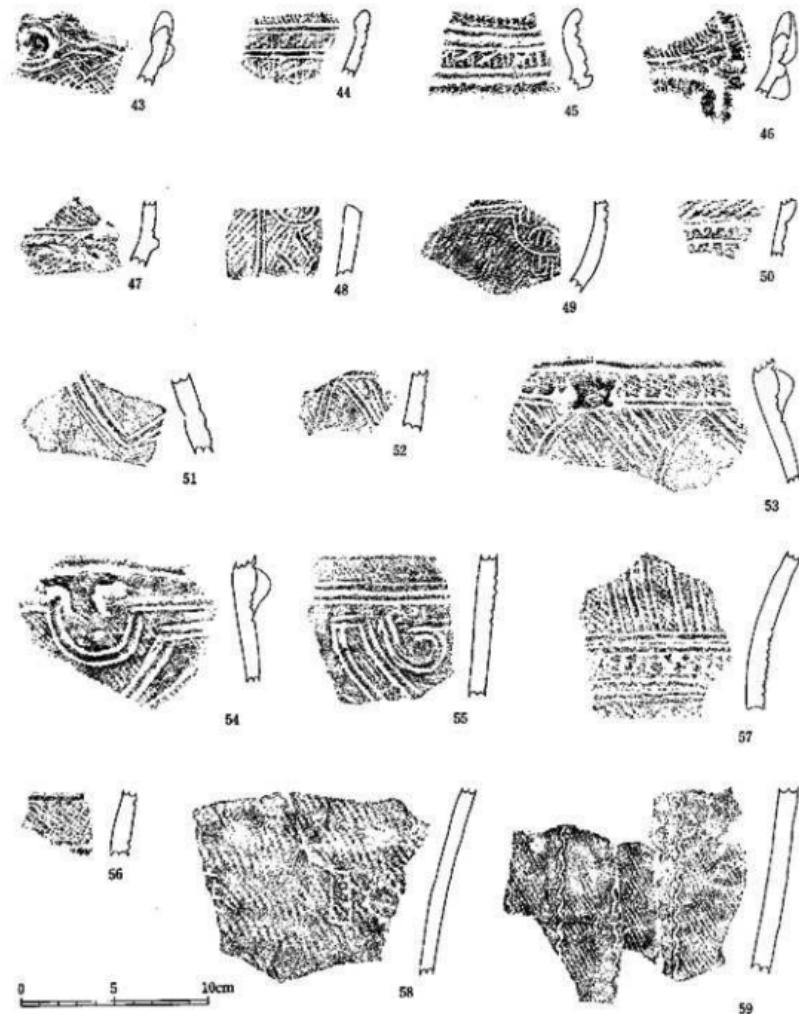


0 5 10cm

第57図 縄文時代出土土器(3)



第58図 繩文時代出土土器拓影(1)



第59図 縄文時代出土土器拓影(2)



60

61

62

63



64

65

66

67



68

69

70

72



71

73

74



75

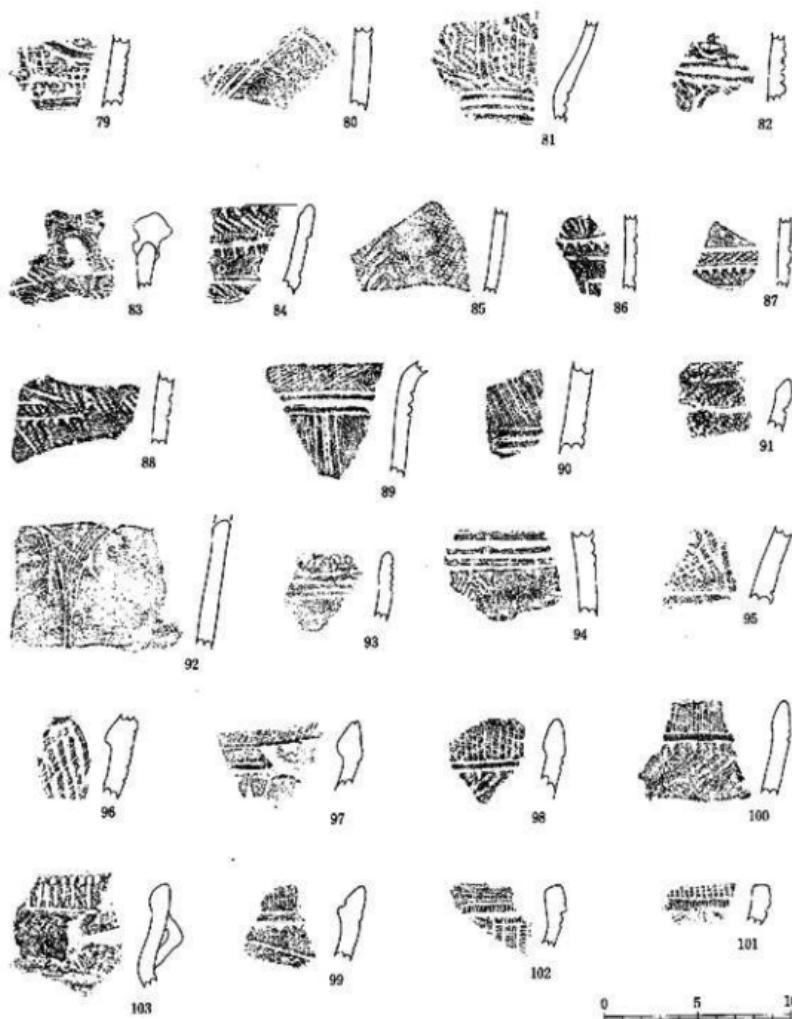
76

77

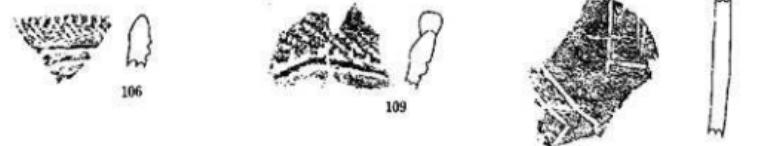
78

0 5 10cm

第60図 鑄文時代出土土器拓影(3)

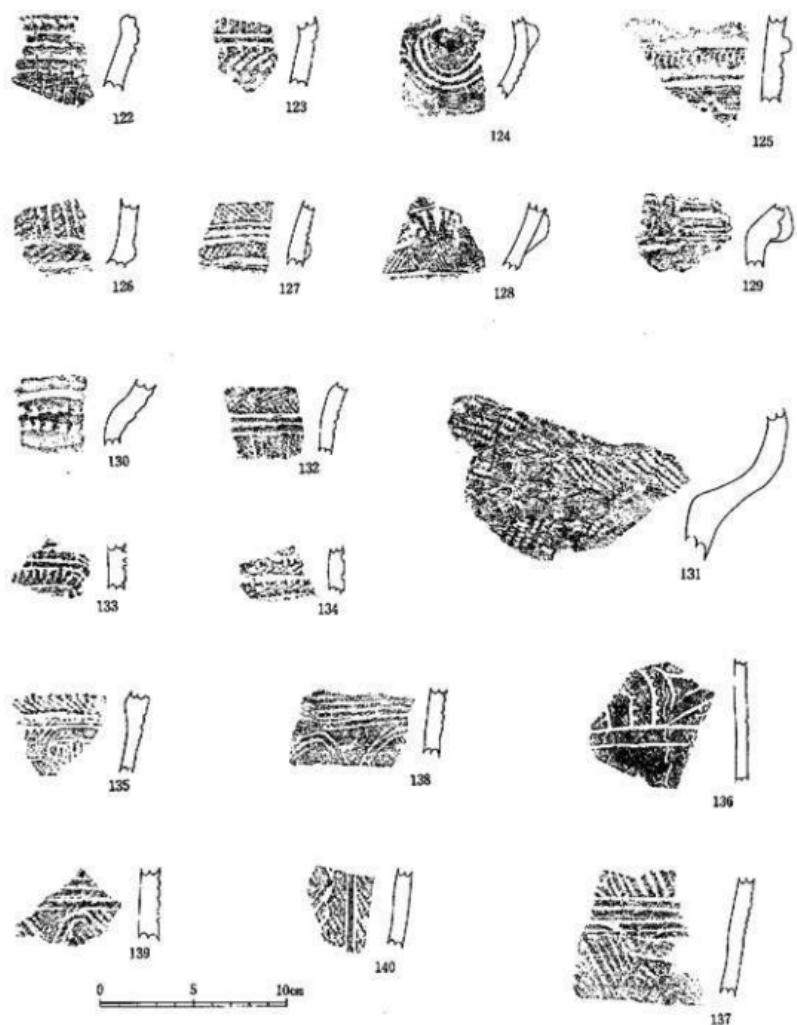


第61図 縄文時代出土土器拓影(4)

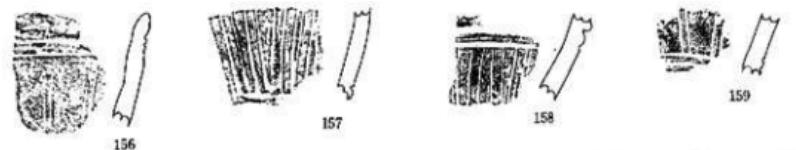
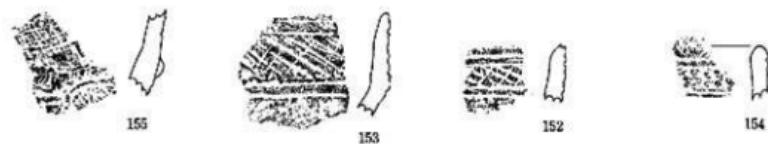
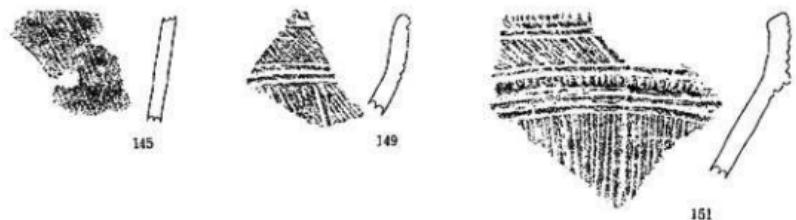
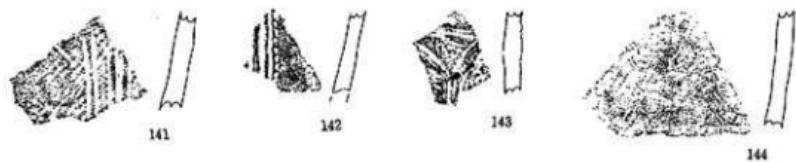


0 5 10cm

第52図 繩文時代出土土器拓影(5)

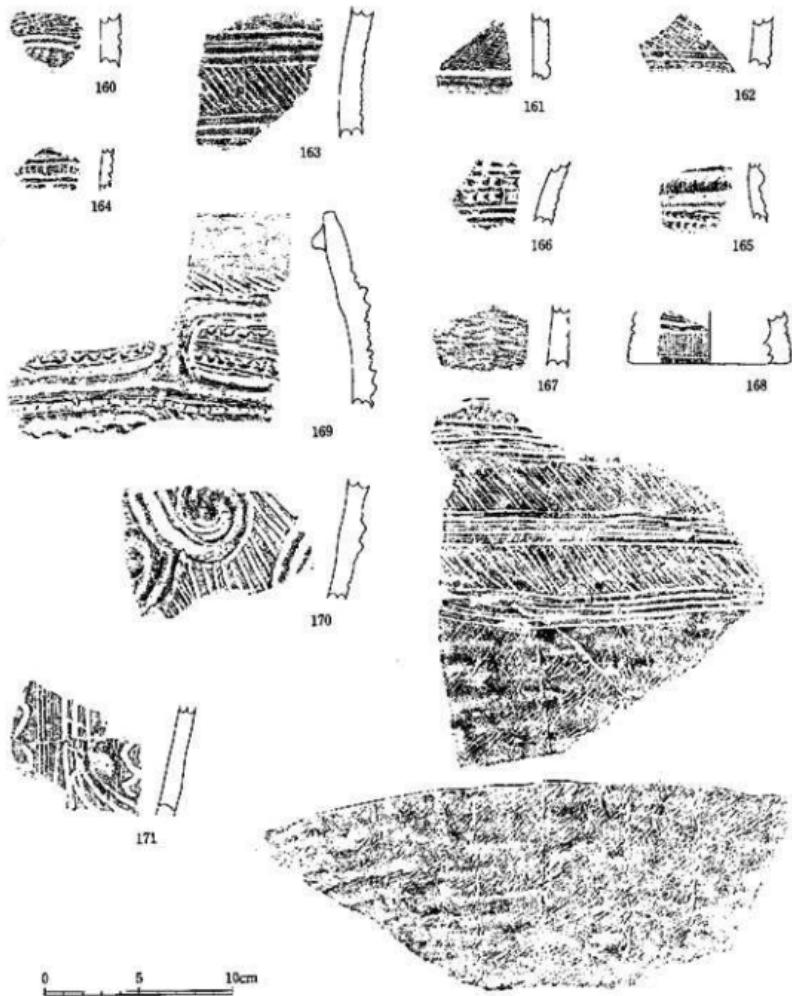


第63図 繪文時代出土土器拓影(6)



0 5 10cm

第64図 繩文時代出土土器拓影(?)



第65図 縄文時代出土土器拓影(8)

## (2) 占墳時代の土器

本報告で扱う占墳時代の遺構より出土した土器は、第1次報告に準ずるものである。第1次報告と同様、各遺構から、少量の弥生土器片と数点の須恵器片が認められた他は、土師器が出土している。さらに、その大半は、前期に属するものと考えられる土器群である。ただ、第15号住居址より出土した土器群は、前期土器群と様相を異にし、次時期のものと考えられる。

器種は、壺、甕、台付甕、高坏、小形高坏、埴、小型丸底土器、器台、鉢、手捏ね土器があげられる。なかでも甕が多く、高坏がこれに次ぐ。

壺、壺形土器は、完形土器が2点であり、口縁、底部破片がほとんどであった。これらは、器形から、口縁径が小さく、側に明確な肩部をもち、球形の胴となるもの、広口の口縁となり、肩部が緩やかな器形となるもの(18、32)の2つに分類される。さらに、前者は、口縁部の形態から、折り返し口縁をもつもの(15)、有段口縁をもつもの(10、23)、逆ハの字状に開く口縁をもつもの(119)、棒状貼付を施すもの(31)の4つに分類される。広口壺形土器(32)は、在地の櫛描文が施される土器群の器形に類似するものであり、器面全面に磨きが施されることから壺と考えた。本遺跡から数多く出土している輪台状の上げ底をもつ底部破片は、大半が、この形態に属する土器と考えられる(54、143他)。逆ハの字状に開く口縁をもつものは、胴部が球形となり、器面全面に磨きが施される。16は、この形態に属するものと考えられ、この時期の壺形土器を示す器形となるであろう。31は、222、223と同様、東海地方に系譜をもつ土器群と考えられる。粗雑な作りであるが、口縁部に棒状の貼付を3条で1組として、4ヵ所に付している。この他に、第14、15号住において、弘法山古墳より出土したパレススタイル壺の口縁部と類似した破片が出土している。

甕、台付甕は、出土土器の中で最も数量が多く、器形、口縁部形態、器面調整においていくつかに分類が可能であるが、全貌を引き出せる資料は数点に限られる。よって、器形と口縁部形態から分類を行なう。器形よりみると、平底甕と台付甕に分けられる。

平底の甕は、103のごとく、単純口縁をもち、肩部に櫛描波状文を施すものと、184等、数多く破片で出土している叩き甕に分類される。前者は、球形に近い胴部となり、逆ハの字状の口縁部をもつ壺形土器に近い器形となる。調整も、副下端は削り、他は磨きを施しており、櫛描波状文だけが、在地の系譜をひくものとして残っていると考えられる。後者は、全て口縁部を欠損しているため、口縁部の形状は不明である。叩きは、全て左下がりとなり、叩き目をハケにより横す調整が加えられている。これらは、畿内系の土器群の流入を示す資料といえる。

台付甕は、口縁部の形状から、単純口縁のもの、「S」字状の口縁をもつものとに分類される。前者は、頸部が巾をもち、緩やかに外反するもの(12、93、183)、くの字状に開くもの(8、113、43、148)等に分類される。これらは、器面全面にハケで調整を行ない、口縁部または、口唇部がヨコナデされるものが大半である。小形の甕類は、ほぼこの器形に属すると考えられる。後者については、全様を知る資料はないが、口唇部が緩やかに外反し、胴部に斜位のハケを施すものである。

(147)。これらは、東海地方に広く分布する土器であり、系譜は、東海地方に求められよう。

この性に器形は明らかでないが、頸部がくの字状に強く外反し、短かい口縁部となり、口唇部をつまみ上げ、面を作り強いナデを施す上器群がある。これには、41. 42. 49. 100. 172が該当し、北陸地方の系譜を引くものと考えられる。

高不、小形高坏、大半が坏部あるいは脚部のみの出土であり、器種の判別ができない脚部破片も多い。坏部の形態より3種類に分類される。

坏部の底部と口縁部との境界に弱い稜を形成し、口縁部が外上方へ外反するもので、坏部は比較的浅くなる形態。これには、4. 118. 166が該当する。緻密な磨きが加えられているもので、これらには直線的に広がりをもつ脚部が付くと考えられる。

坏部に明瞭な稜をもち、口縁部が外上方へ強く外反するものには、第15号住居址出土土器が該当する。72. 81. 82は、放射状に磨かれ口唇部が尖る形態となる。これらには、柱状部にふくらみをもち脚部がハの字状に開く脚部(75)が接合するものと考えられる。

坏部の底部に稜をもち、直立気味に立ち上がった坏部中段より口縁部が強く開く形態のもの(73. 149)もある。高坏の形態から後述二者は、中期段階の様相といえよう。

小形高坏は脚部底盤が坏部口徑より大きなもので、坏部に稜をもたず、丸く内弯して立ち上がる形態をもつものである。第1号住居址出土土器がこれに該当する。小形高不は、畿内庄内式期に分布することが知られており、畿内地方あるいは東海地方の系譜を引くものと考えられる。

増、小型丸底土器、これらの土器群は完形に近い形で出土したものが多かった。増形土器は、胴部は球形となり、口縁部は内弯気味に立ち上がるもので、底部は突出せずにやや凹む形態である。13. 14は口縁部が短かく全体的に扁平となる。ハケによる調整が加えられている。88. 132は、口縁が長く、調整は磨きが施されている。

小型丸底土器は、いずれも脚部に比して、大きく開く口縁部をもつので、胴部が球形を呈するものに、21. 38. 55. 56がある。この内、38. 55. 56は、直線的に開く口縁部となり、ハケ調整が残されている。21は器面調整が緻密で口縁部が脚部より窪かい形態となる。134は扁平気味の脚部に短かい口縁部をもつ形態、135は、長い口縁部をもつものである。いずれも磨滅により調整は不明である。

鉢、器台、ミニチュア 鉢形土器は、平底の底部が直線的に開く口縁部をもち、逆台形を呈するもの(22)、圓形態を取りながらも底部が上位底状になるもの(36)、半球形の形状となり口縁部が内弯して立ち上がるもの(133)が出土した。

器台は、4個体それぞれ異なる形態のものが確認された。いずれも貫通孔をもつものである。25は大形のもので、粗雑な作りである。109は器受部は不明であるが、短い貫通孔をもち、緩やかに脚部が開くものと考える。158は器受部に稜を有するもので小形器台に属するであろう。44はやや堅間もあるが器台と考えられよう。

ミニチュア土器は平底の容器形を模したもの90、91、127、128と高杯を模したものと考えられる37、86が出土している。

その他の土器としては、137にみる底部を焼成前に穿孔した斐形土器、185にみる孔を有する蓋が出土している。

上器以外の土製品としては、線刻文のある紡錘車(47)、勾玉(30)の出土があり古墳との結びつきを示唆するものである。

#### まとめ

本遺跡出土の古墳時代の土器は、第15号住居址を除くと、ほぼ4世紀代に属する土器群と考えらる。土器群に関する詳細な分析、検討は、第1次報告と第3次調査報告から総合的になされるべきところなので、昭和63年度調査の結果をもってまとめとしたい。ここでは、本報告からいえる課題を取り上げることとする。

住居址個々にみるといくつか器種の欠落が指摘されるが、これらを時期差以外の要因とし、ほぼ同時期に遺構が存在していたと考えたい。出土土器群から時間的変遷を導き出せる資料は、第15号住居址出土の高杯、小型丸底土器と他群土器との形態変化にみい出せるのみである。器形形態の違いは、在地系土器群と外来系土器群との影響によるものと考えられよう。古墳時代前期、当地域に広範囲域から土器が流入されていることが報告されている。<sup>註1)</sup> 本遺跡にも同様のことが認められた。東海、北陸、畿内の各地域に主体をもつ土器群が、弥生時代から継続してきた在地土器と融合したと解釈できる。外来系、在地系土器の判別の慎重さと、詳細な分析が必要となるであろう。

遺構の時期を4世紀代と前述したが、出土土器群の編年的位置づけが必要となるであろう。当地域では今まで古墳前期、中期の良好な資料に乏しく、櫛文土器群からの経緯が明確でなかった。編年的位置づけを、東海、北陸、畿内系の土器をもってすることは、十分な検討が必要となるであろう。

住居址内よりパレススタイル壺と思われる破片が2点(199、208)出土し、文様構成が弘法<sup>註2)</sup>1136号古墳のものと近似することがいえる。また第13号住居址内出土の棒状貼付をもった壺(31)は中山36号古墳出土の壺口縁部形態の変化を思わせるものである。出土遺物とともに集落全体の分析を行ない周辺古墳との結びつきが考察されよう。

前期出土遺物と同様、全国的に齊一性をもつ第15号住居址等から出土した中期土器群がある。

中期初頭の資料は、県内でも稀薄なものであり、住居址出土遺物として資料価値も高い。集落、古墳とともにこれらの検討も必要である。

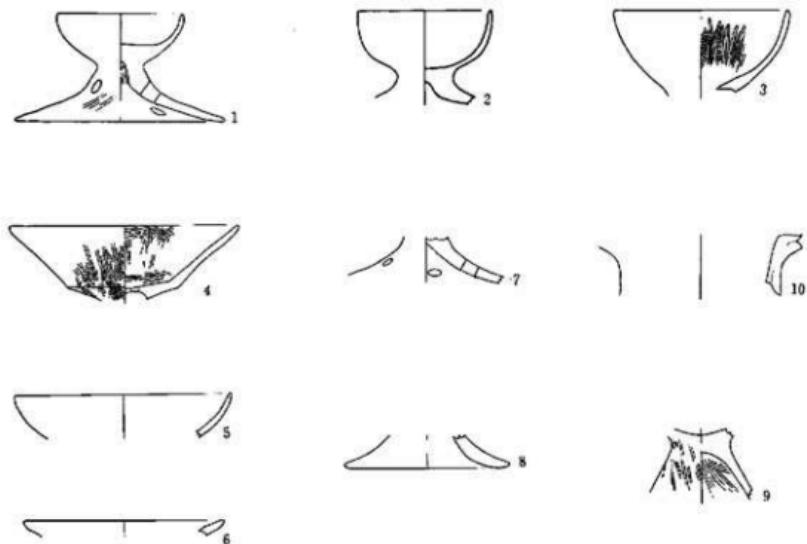
詳細な分析、検討が十分になされなかつたが、今後いくつかの課題をもって結論が導き出されよう。

註1) 秋本市南湖遺跡Ⅰ、1988、秋本市教育委員会

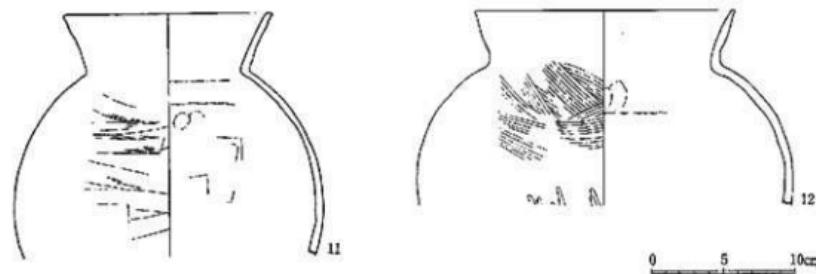
註2) 同上書

註3) 中央自衛官道長野縣現文化財発掘調査報告書Ⅱ、1988、長野県教育委員会

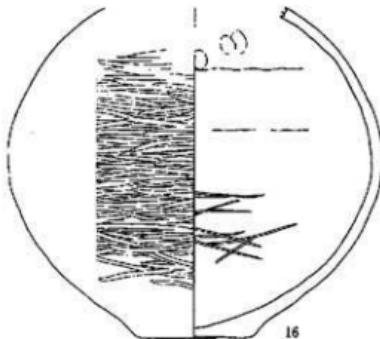
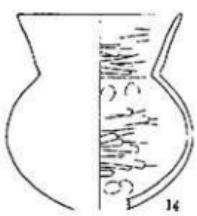
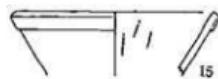
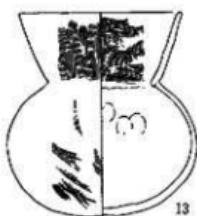
第1号住居址



第2号住居址



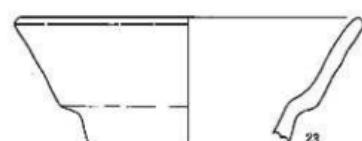
第66図 古墳時代出土土器(1)



第3号住居址



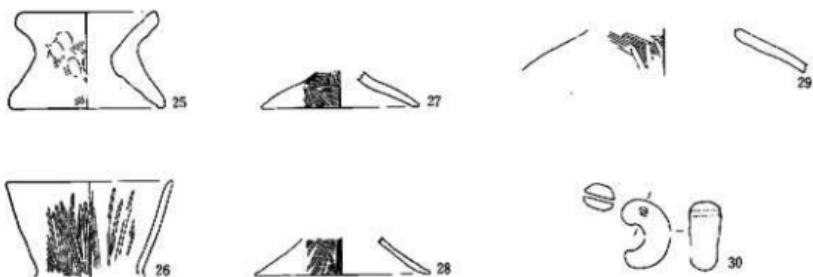
第4号住居址



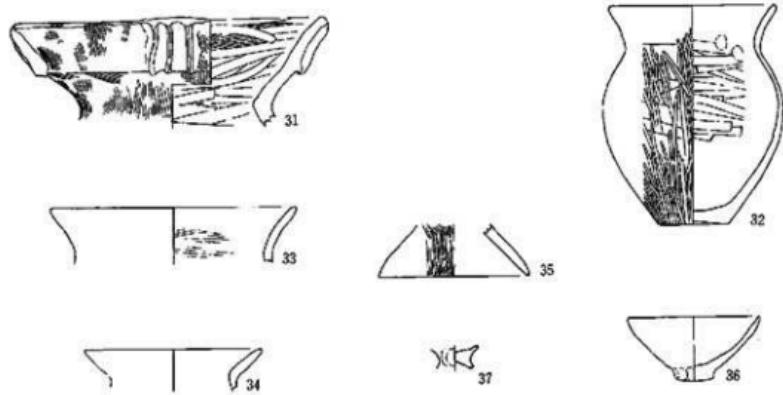
0 5 10cm

第67図 古墳時代出土土器(2)

第12号住居址



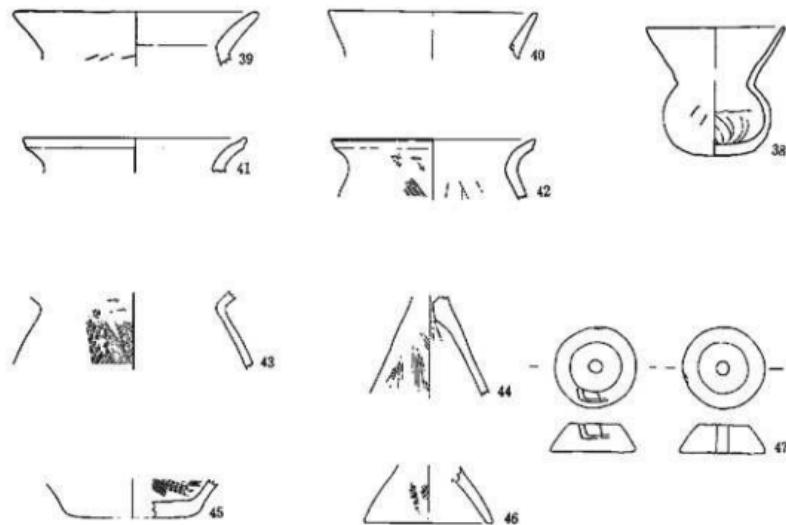
第13号住居址



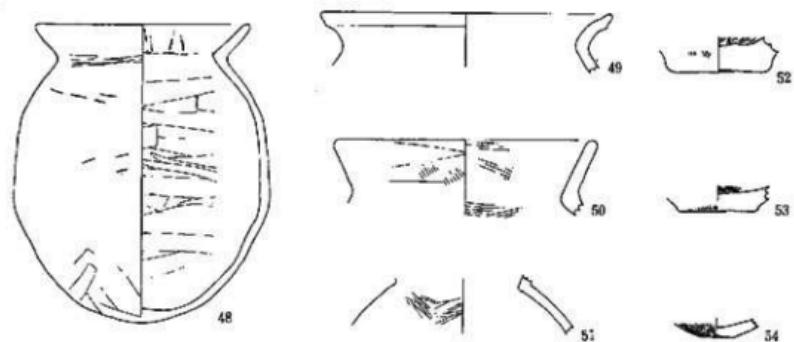
0 5 10cm

第58図 古墳時代出土土器(3)

第14号住居址

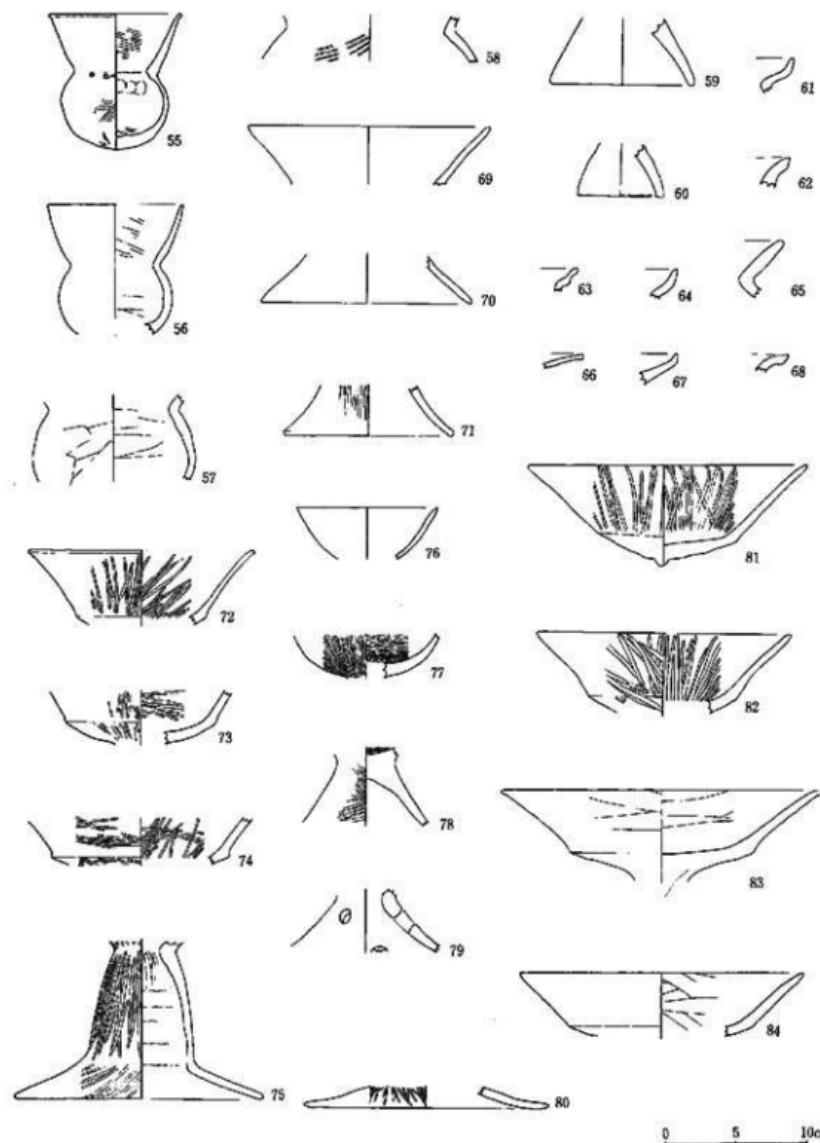


第15号住居址



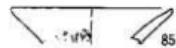
0 5 10cm

第69図 古墳時代出土土器(4)



第70図 古墳時代出土土器(5)

第16号住居址

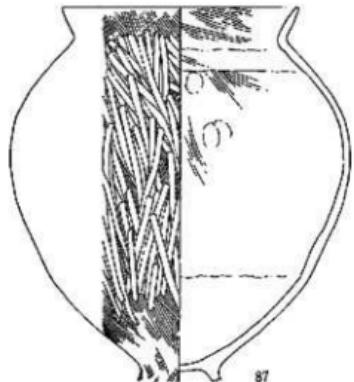


85

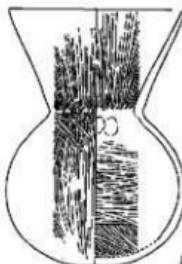


86

第18号住居址



87



88



89



90



91



92

第21号住居址



93



94

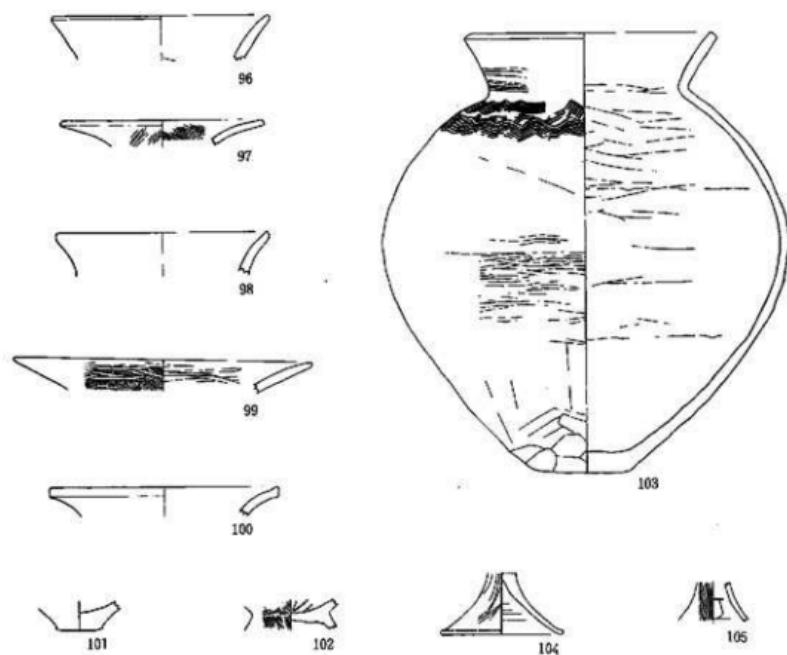


95

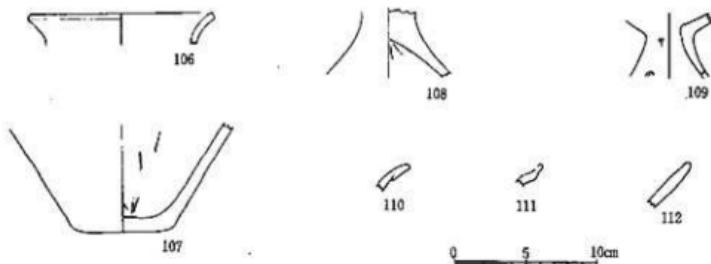
0 5 10cm

第71図 古墳時代出土土器(6)

第22号住居址

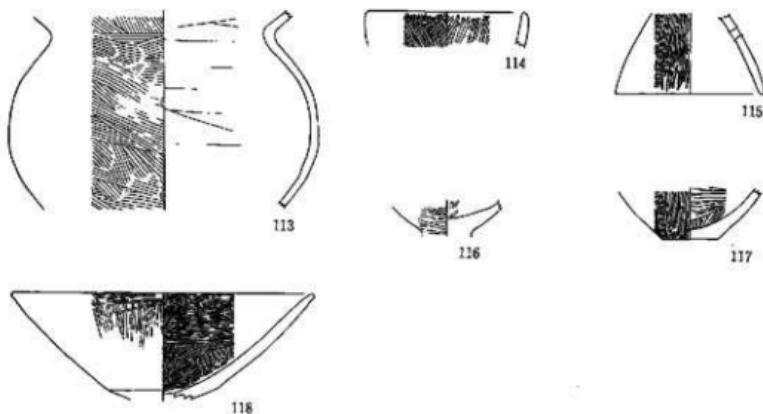


第23号住居址

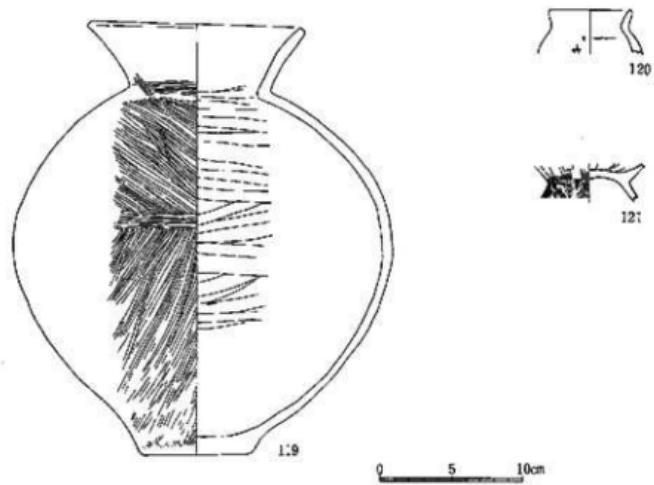


第72図 古墳時代出土土器(7)

第24号住居址

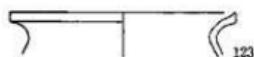
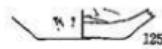


第29号住居址



第73図 古墳時出山土土器(8)

第30号住居址



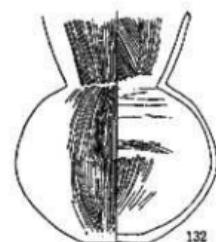
第44号住居址



第47号住居址



方形周溝墓 1



0 5 10cm

第74図 古墳時代出土土器(8)

土壙



133-±37



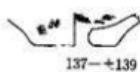
134-±37



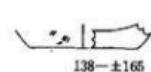
135-±97



136-±139



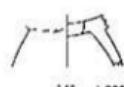
137-±139



138-±165



139-±165



140-±199



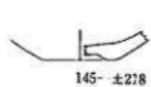
142-±216



143-±216



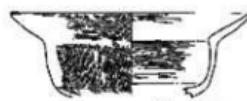
144-±216



145-±218



148-±291



149-±291



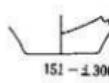
146-±275



147-±280



150-±296



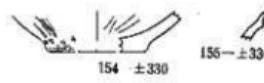
151-±300



152-±327



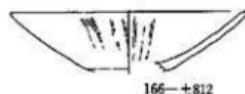
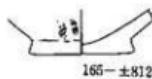
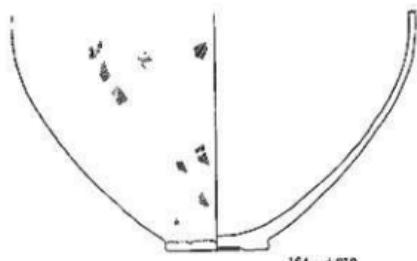
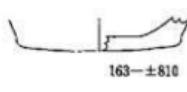
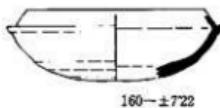
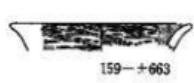
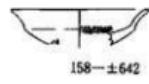
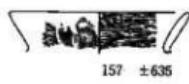
153-±330



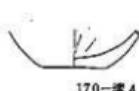
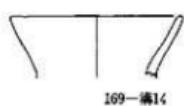
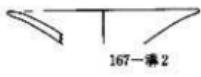
154-±330 155-±330

0 5 10cm

第75図 古墳時代出土土器(1)



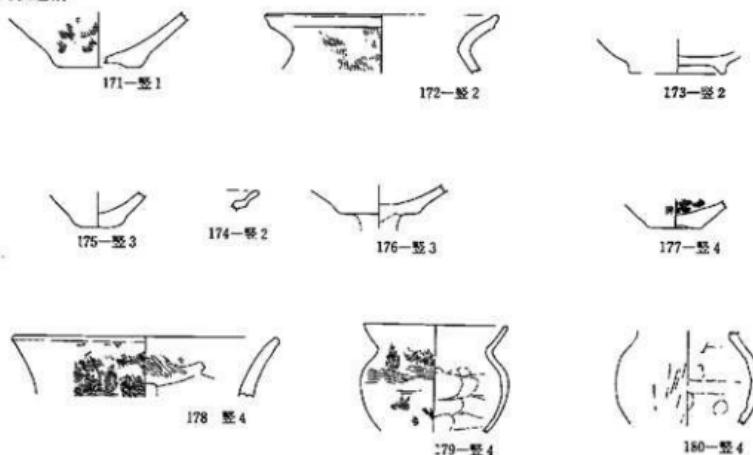
溝



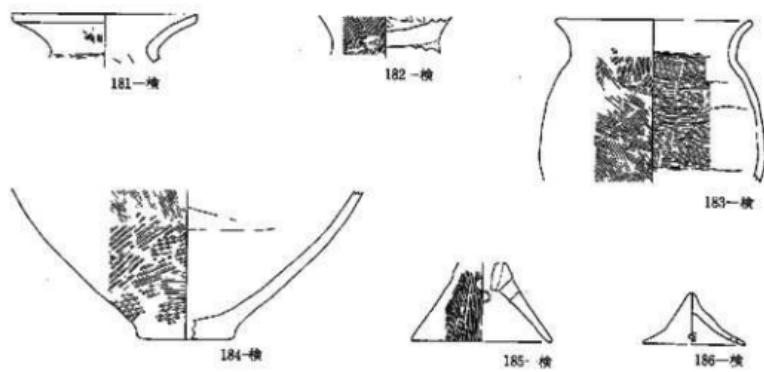
0 5 10cm

第76図 古墳時代出土土器(II)

竪穴状遺構



検出面



0 5 10cm

第77図 古墳時代出土土器



第78図 古墳時代出土土器(3)

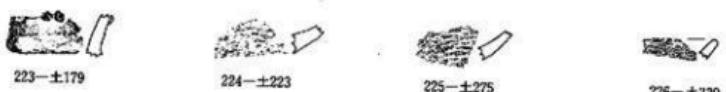


219-1.37

220-土139

221-土151

222-土175



223-土179

224-±223

225-±275

226-±339



227-±752

228-±810

229-±810

230-±857



231-溝14

232-溝14

233-堅2

234-堅2



0 5 10cm

第79図 古墳時代出土土器04

古墳時代土器一覧表

表3

番号	器種	残存度	法巻	色調焼成	胎土	調査報告	備考
住居址				器高 口延 底径	色調 焼成	外国 内面	-
土器 灰				7.6 (8.8) 66	明褐色 灰色 灰褐色 灰褐色 灰褐色 灰褐色	白色、赤褐色 灰褐色多量 混入	口唇部ヨコナデ 脚部ハケ(?) 口唇部ヨコナデ
1	高 坯	坏部片 脚部片破片		14.8			脚部への穿孔は6孔上、下段各3孔と考えられる。 器面著しく摩滅
2	高 坙	坏部片 脚部接合破片		19.2			器面著しく摩滅 内面剥離
66							
1	高 坯	坏部完存		暗褐色 やや堅緻	白色、黒褐色 石英細粒多量 混入	口唇部ヨコナデ	
3	高 坯	坏部完存		12.0		口唇部ヨコナデ 脚部ハケのちミガキ	
56							
1	高 坯	坏部片破片		16.2	淡褐色 やや堅緻	白色、灰色 粒多量混入	口唇部ヨコナデ 口縁部ハケ(複数)・ミガキ 被膜上にハケ目残存
4	高 坯	坏部片破片		15.2			被膜下に径0.5cmの 穿孔あり
66							
1	高 坯(?)	坏部片			明褐色 やや堅緻	灰色、赤褐色 大粒多量混入	器面著しく摩滅 内外面の剥離あり
5	高 坯	坏部片破片					
66							
1	高 坯	坏部片		14.2	淡褐色 堅緻	白色、灰色 石英細粒多量 混入、 雲母少量混入	ヨコナデ
6	高 坯	坏部片					器面著しく摩滅
66							
1	高 坯	脚部片破片			淡褐色 やや堅緻	白色・赤褐色、 灰色、石英細 粒多量混入	脚部への穿孔は5孔、 器面著しく摩滅
7	高 坯	脚部片破片					
66							
1	高 坯	脚部片破片			淡褐色 やや軟質	赤褐色、灰色 粘料多量混入	器面著しく摩滅
8	高 坯	脚部片破片		11.8		同上	
66							
1	白付 黑	脚部片破片			淡褐色 やや堅緻	白色、灰色 粒少量混入	ハケ(複数)
9	白付 黑	脚部片破片					
66							
1	有段口縁 壺	脚部片			茶褐色 堅緻	白色、灰色 粘少量、空母 砂等混入	器面著しく摩滅
10							
66							
2	壺	口縁片は光存		14.2	暗茶褐色 堅緻	白色、赤褐色 石英細粒 少量混入	口縁部ヨコナデ 脚部へラ状工具によるナデ 脚部ヨコナデ 指痕おさえ
11							外縁スリ行筋、口 縁内面黒泥
66							
2	壺	口縁片破片		18.0	暗茶褐色 堅緻	白色、灰色、 石英細粒多量 混入	口縁部ヨコナデ 脚部ハケ(斜位→横位)脚 下部へラ状工具によるナデ 口縁部ヨコナデ 脚部指痕おさえ・ナデ
12							口縁部から脚部に かけてスリ行筋
66							
2	壺	壳存		14.4	黄褐色 堅緻	白色、灰色、 石英、灰岩 粒少量混入	口縁部ハケ(複数)→口唇部ヨコナデ 脚部ハ ケ(複数)
13				11.2			口縁部ハケ(複数) 脚部指痕おさえ、底部ナデ
67				2.2			
2	壺	底部欠損		11.4	褐褐色 堅緻	白色、灰色 粘液等混入	ミガキ(?)
14	壺	底部欠損					外面摩滅・破壊 による基変あり。内 縁は直線的に開く
67							

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
佐賀縣	二 器 國			高 温 度	白色 灰 色	外因	
15				口縁 底	成 形	内因	
67				底	底		
2	壺	山根部有光 有	(14.0)	實 白 色	白色、灰色、 赤褐色、長石 鉱物混入	口縁部コナデ 口縁部 板状工具によるナデ	外壁厚減、被熱に よる黒斑あり 二重口縁
16				實 褐 色	白色、灰色、 石英、長石相 鉱物少量混入	底部板状工具によるミガキ(縫合)	
67				堅 硬	8.0	底部板状工具によるミガキ(縫合) 底部板状工具によるナデ 成部へク状工具による 縫合表	
2	甕	底部完存	5.6	實 褐 色	白色、灰色相 鉱物多量混入	ハケ(縫合) 成部ナデ(?)	外面スス付着、被 熱による黒変
17				堅 硬		ナデ	
67							
3	壺	(10.0)	5.6	實 褐 色	白色、赤褐色 鉱物少量、微 少量混入	口縁部ハケ・縫合工具によるミガキ(縫合) 底部ミガキ(縫合)	
18				堅 硬		口縁部ミガキ(縫合) 底部ハケ(縫合)	
67							
3	甕	山根部有光 有	(11.8)	實 褐 色	白色、石英、 長石鉱物少量 混入	口縁部・底部ハケ(縫合) → 口縁部コナデ	頭部内面に輪模み 痕
19				堅 硬		口縁部・底部ハケ(縫合) → 口縁部コナデ	
67							
3	甕	(17.2)	5.6	實 褐 色	白色、灰色相 鉱物多量混入	口縁部ハケ(縫合) → 口縁部コナデ	
20				やや軟質		口縁部ハケ(縫合)	
67							
4	小形丸底壺	完存	6.5 8.0	實 褐 色	白色、灰色相 鉱物、長石、空 氣孔多量混入	口縁部コナデ、口縁部ハケ(縫合) + ミガキ 底部ミガキ(縫合)	口縁部直線的に開 く、底部半面黒斑 あり
21				堅 硬		口縁部板状工具によるナデ(?) 底部板状工具によるナデ(?)	
67							
4	甕	底部中央欠損	6.2 12.2 6.5	實 褐 色	白色相鉱物多量 混入	口縁部板状工具によるナデ(縫合)	縫厚が均一でなく 凹凸著しい。粗鈍 な作り
22				やや軟質		指摸もしくは板状工具によるナデ	
67							
4	有段口縁壺	口縁部有光片	(24.0)	實 褐 色	白色、灰色相 鉱物多量混入	ナデ(?)	表面滑らかで 摩擦感無
23				堅 硬		ナデ(?)	
67							
4	古 甕	底部完存	10.0	實 褐 色	白色鉱物、石 英鉱物少量混 入	ハケ(縫合)	
24				堅 硬		ハケ(縫合)	
67							
12	甕	口縁部有光 有	(9.3)	實 褐 色	白色、灰色、 赤褐色相鉱物 多量混入	受部下半から底部ハケ(縫合) + 指摸によるナデ	内面滑らかで 凹凸あり
25				堅 硬			
68							
12	甕	口縁部有光片	(11.4)	實 褐 色	白色相鉱物多 量混入	口縁部コナデ 口縁部ハケ(縫合) + ミガキ(縫合)	
26				やや軟質		同上	
68							
12	高 甕	脚部有光片	(11.2)	實 褐 色	白色、石英相 鉱物少量、赤 褐色鉱物少量 混入	底部ハケ(縫合) → ミガキ(縫合) + ナデ	
27				堅 硬			
68							
12	高 甕	脚部有光片	(12.2)	實 褐 色	長石鉱物多量 混入	脚部ミガキ(縫合) → 脚部コナデ	
28				堅 硬		ヘラ状工具によるナデ	
68							

番号	器種	残存度	法面 色調	色調成 色調 成	粘土	開 帳	備考
12	甕	側部破片	褐色	表面			
29			白色	内面			
68			灰色	成			
12	甕	側部破片	褐色	灰色・赤褐色	ハケ(横位)→ヘラ状工具によるナデ		
29			白色	粗粒・石英粒 やや軟質	ナデ		
68			灰色	多量混入			
12	土製勾玉		茶褐色	白色・灰色細 粒微細混入			
30			白色				
68			灰色				
13	甕	口縁部破片 (22.5)	黄褐色	白色・石英粒 やや堅硬	粗粒なハケ(横位)→棒状點付→ヨコナデ	全般的に粗粒を作り、口縁部は半径に凹取り、棒状點付部は3部位、4の所に點付けられる	
31			白色	粒多量混入	ハケ(横位)→ヘラ状工具によるナデ		
68			白色				
13	甕	口縁部外縁 (15.6) (11.6) 4.8	暗茶褐色	白色・石英粒 粒多量混入	口縁部ココナデ・崩部ヘラ状工具によるナデ (横位)→棒状工具によるミガキ(横位)	底部ドーナツ状上げ底。口縁部の厚さ大きい	
32			白色				
68			灰色		崩部指擦れさえ・崩部板状工具によるナデ		
13	甕	口縁部破片 (17.4)	茶褐色	白色・石英粒 やや軟質	口縁部ヨコナデ		
33			白色	粒少量混入	口縁部ハケ(横位)→口縁部ヨコナデ		
68			白色				
13	甕 (?)	口縁部破片 (12.5)	暗褐色	白色・赤褐色 やや軟質		背面著しく厚減	
34			白色	粒多量混入			
68			白色				
13	高 杯	脚部(破片) (10.8)	黄褐色	白色・石英粒 粒多量混入	脚部ヨコナデ	内面厚減	
35			白色				
68			灰色				
13	甕	口縁部外縁 底部外存 (4.5) (9.2) 2.6	茶褐色	白色・細粒少量 やや堅硬	指擦れさえ・ナデ ヘラ状工具によるナデ	器底の凹凸が著しい。やや粗粒を作り	
36			白色	混入			
68			白色				
13	ミニチュア	环状と脚部接合部破片	黄褐色	白色細粒少量	指擦れさえ・ナデ		
37			白色				
68			白色		環部指擦れナシ		
14	小形丸底壺	ほほ突出 (9.1) (9.4)	暗褐色	白色・石英・ 粘土細粒改進量 混入	口縁部ヨコナデ・剥離板状工具によるナデ 脚部指擦れ2具によるナデ・絆状→ナデ	口縫部は直角的に開く。外表面化物付着	
38			白色				
69			白色				
14	甕	口縁部外縁 (16.8)	茶褐色	白色粗粒・石 英・長石細粒 多量混入	脚部ハケ(?)→口縁部ヨコナデ	外表面付着	
39			白色				
69			白色				
14	甕	口縁部外縁 (14.4)	茶褐色	白色・灰色・ 石英細粒多量 混入	口縁部板状工具によるナデ→口縁部ヨコナデ		
40			白色				
69			白色				
14	甕	口縁部外縁 (15.4)	黄褐色	白色・長石根 粒多量混入	口縁部強烈なヨコナデ	外表面付着	
41			白色				
69			白色		ナデ		
14	甕	口縁部外縁 (14.2)	暗茶褐色	白色・灰色・ 石英・長石根 粒少量混入	口縁部強烈なヨコナデ・口縁部ハケ(斜位)		
42			白色				
69			白色		脚部板状工具によるナデ→ヨコナデ		

番号	器種	残存度	法環	色調成因	胎土	調査	備考
任所			器表 口縁 底环	色調 成因	外面 内面		
土器							
因							
14	甌	類・肩部石破片	深茶褐色	白色・灰色	刷毛ハケ(継位)→頭部ヨコナデ		
43			石英・長石相混入		刷毛ナデ		
69			粒状少量混入				
14	器	台脚部	棕褐色	白色網粒	輪部ミガキ→ナデ	高坪の脚部の可塑性もある	
44			堅 硬	白色泥灰	ナデ		
69				微量混入			
14	甌	底部石破片	棕褐色	白色・灰色	ハケ(継位)→ナデ	周底部平坦面を作らる	
45			石英・長石相混入	褐色	ナデ		
69			(8.2)	多量混入	ハケ		
14	丘付甌	肩部石破片	黄褐色	白色・赤褐色	ナデ	口唇部面を作る	
46			石英・長石相混入	褐色	ハケ		
69			(8.4)	粗粒多量混入			
14	粘土器	完全	黄褐色	灰色網粒、石英粒少量混入	ナデ→ヘラ状工具による直線文	径1.0cmの穿孔	
47			3.6				
69			5.8	堅 硬	石英粒微量混入		
15	甌	肩部石破片	21.2	棕褐色	口縁部ナデ→頭部ヘラ状工具によるヨコナデ	口唇部面を作る	
48			(5.1)	やや堅硬	底部ヘラ削り		
69					口縁部ヘラ状工具によるナデ厚底窓 刷毛板状工具によるナデ		
15	甌	口縫部石破片	29.6	青褐色	口唇部強いヨコナデ	口唇部面を作る 器面美しい漆滅	
49				白色・赤褐色			
69				粗粒多量混入			
15	甌	口縫部石破片	18.0	青褐色	口縫部、板状工具による強いナデ→ハケ(継位)	口唇部面を作る 器面美しい漆滅	
50				白色・反石相粒多量混入	ハケ(横位)		
69							
15	甌	頭部二半石破片	51	青褐色	頭部ナデ 刷毛ミガキ	頭部ナデ 刷毛板状工具によるナデ	
52				白色・灰色			
69				網粒少量混入			
15	甌	頭部完存	53	青褐色	頭部ハケ(継位) 底部ナデ	頭部ハケ(継位)	
54				白色・赤褐色			
69				石英・長石相混入			
15	甌(?)	底部完存	55	青褐色	強いハケ	強いハケ	
56				白色・赤褐色	ハケ(継位)		
69				石英・長石相混入	ハケ		
15	甌	底部密存	56	青褐色	底部ミガキ(緻密)	口縫部底窓的に薄く。全般的に粗糙な作り。外表面質	
57				石英・長石相混入	ナデ		
69							
15	小形丸底器	完存	58	青褐色	口縫部ヨコナデ 刷毛板状工具により粗粒ナリ→ヘラ状工具によるナデ	口縫部底窓的に薄く。全般的に粗糙な作り。外表面質	
59				白色細粒少量混入	口縫部ハケ(横位) 刷毛指頭おさえ 底部板状工具によるナデ		
70				堅 硬			
15	小形丸底器	口縫部石 頭部石	60	青褐色	口縫部ヨコナデ 刷毛板状工具によるナデ	口縫部底窓的に薄く。全般的に粗糙な作り。外表面質	
61			(9.4)	白色・赤褐色	口縫部ハケ(斜位) ヨコナデ		
70				網粒少量混入	口縫部指頭おさえナデ 底部板状工具によるナデ		

番号	器種	現存高	法量	色調規式	胎土	測定	備考
住居址 十 ノ 岡				器高	色調	外面	
				口径			
				底厚	成形	内面	
15	甕	脚部瓦砾片		褐褐色	白色・灰色 粗粒・石英・長 石粒多量混入	板状工具によるナデ 同上	内・外面とも黒塗 箇所あり
57				墨			
70							
15	甕	調整部瓦砾 片		暗茶褐色	白色・灰色 右美・長石粒 粒多量混入	脚部叩き目 頸部ナデ	
58				墨		ナデ	
70							
15	台付甕	脚部瓦砾片		黄褐色	白色・赤褐色 粗粒・灰色粒	脚部ヨコナデ	器開口部の事実
59				墨		同上	
70				(9.6)	堅	粒少量混入	
15	台付甕	脚部瓦砾片		褐褐色	白色斑紋、次 色細粒多量混	ナデ	脚底部平坦面を作 る
60				墨		同上	
70				(6.1)	堅	粒少量混入	
15	甕	口縁部瓦砾片		暗茶褐色	白色斑紋、次 色細粒多量混	ナデ	
61				墨		脚部ヨコナデ 体部ハケ	
70						体部ハケ	
15	甕	口縁部瓦砾片		淡黃褐色 灰色	白色・石英粒 少量混入	口縁部ナデ	
62				墨			
70							
15	S字甕	口縁部瓦砾片		淡褐色 淡茶褐色	白色・石英粒、 露地少量混入	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	
63				墨			
70							
15	小形甕	口縁部瓦砾片		暗茶褐色	白色・灰色粒 少量混入	口縁部ヨコナデ	
64				墨			
70							
15	甕	口縁部瓦砾片		淡黃褐色 淡茶褐色	白色・石英粒 少量混入	口縁部ナデ (?)	
65				墨		口縁部ハケ 体部ナデ	
70							
15	甕	口縁部瓦砾片		明黄色	白色細粒少量 混入	口縫部ヨコナデ→商取り 口縫部ミカキ(現位)	
66				墨		口縫部ミカキ(横位)	
70							
15	器	口縫部瓦砾片		淡黃褐色	米色細粒少 量混入	口縫部ヨコナデ 口縫部ナデ	
67				墨		口縫部ミカキ(放射狀)	
70							
15	甕	口縫部瓦砾片		淡茶褐色 淡茶褐色	白色・石英粒 少量混入	口縫部ミカキ	
68				墨			
70							
15	高环	口縫部瓦砾片	(17.1)	褐褐色	白色・赤褐色 粗粒少量、灰 色細粒少量混 入	板状工具によるナデ 口縫部ヨコナデ	
69				墨		同上	
70							
15	高环	脚部瓦砾片		淡褐色	白色・灰色細 粒、石英粒多	ミカキ (?)	器表面に黒塗 箇所あり
70				墨			
70				やや灰質	量混入		

番号	器種	残存度	法善色調成	粘土	測量	備考
15 17. 70	环 环	脚部瓦破片 (11.4)、壁 壁	茶褐色 白色、灰色 粘微量混入	外壁 内壁		
15 72 70	环 环	脚部瓦破片 (15.8) 壁 壁	褐褐色 白色、灰色 粗粒、石英粒 少量混入	ミガキ(横位) ヨコナデ		
15 73 70	环 环	环部瓦破片 壁 壁	褐褐色 白色、赤褐色 粗粒、石英粗 やや軟質	口縁部ミガキ(横位) → ヨコナデ 环下部ナデ ミガキ(横位)	环部に縫を有する	
15 74 70	环 环	环部瓦破片 壁 壁	明褐色 赤褐色、石英 粗粒微量混入	輪状工具によるミガキ(横位) 輪状工具によるミガキ(放射状→横位)	环に縫を有する	
15 75 70	环 环	脚部瓦片 壁 壁	暗褐色 白色、灰色 亦褐色細少 等級	輪状工具によるミガキ(横位) 脚部指削ナデ 脚部板状工具によるナデ		
15 76 70	环 环	口縁部瓦破片 (10.0) 壁 壁	明褐色 白色、赤褐色 粗粒微量混入 やや軟質	口唇部ヨコナデ 元上	器面著しい摩擦	
15 77 70	环 环	环部瓦片 壁 壁	暗褐色 白色、石英 長石細粒微量 混入	ミガキ(横位) ミガキ(横位→軸位)		
15 78 70	环 环	环脚部複合 部瓦破片 壁 壁	茶褐色 白色、赤褐色 石英、長石粗 粒微量混入	脚部ミガキ(横位→軸位) 複合部ナデ 环部ヘラ状二刃によるミガキ 脚部ナデ		
15 79 70	环 环	脚部瓦破片 等型脚 壁 壁	明褐色 白色、赤褐色 粗粒微量混入		脚部穿孔は上、下 段各3ヵ所の6ヵ所 に有る。器面著 しく摩擦	
15 80 70	环 环	底部瓦破片 (17.5) 壁 壁	黄褐色 白色、灰色 粗粒少被混入 やや堅硬	ミガキ ヨコナデ		
15 81 70	环 环	环部瓦片 壁 壁	暗褐色 赤褐色粗粒多 量、白色、灰色 やや堅硬	輪状工具によるミガキ(横位) → 口唇部ヨコナデ 輪状工具によるミガキ(放射状) → 口唇部ヨコナデ	环部に弱い縫を有 する。口縁部平面 形状挖凹形となる	
15 82 70	环 环	环部瓦破片 (18.0) 壁 壁	暗褐色 白色、赤褐色 粗粒、石英粒 少量混入	輪状工具によるミガキ 輪状工具によるミガキ(放射状)	环部に縫を有する	
15 83 70	环 环	环部瓦片 壁 壁	暗褐色 白色、灰色 粗粒微量混入 やや軟質	輪状工具・指によるナデ・ミガキ(?) 口唇部ヨコナデ 板状工具によるナデ	口唇部黒蜜蠟所有 り	
15 84 70	环 环	口縁部瓦 片 (20.1) 壁 壁	黄褐色 白色、赤褐色 粗粒、雲母粒 少量混入	板状工具 元上		

番号	器種	保存度	法集	色調洗成	胎土	調査	備考
後周	土器 罐		器高 口徑 底径	黄褐色	灰色粗粒、石英・長石・母粒多量混入	外面	内面黒変
16						内側	
85						ハケ(斜位)→ヨコナデ	
71	ミニチュア	口縁部欠損片	11.4	灰褐色	白色粗粒混入	ヨコナデ	全体的に粗粒な作り
16						-	
86						-	
71	ミニチュア	調節充存	2.8	墨綠	白色粗粒混入	-	山形部「く」の字状に外反。外面肩部中心に全体的にスヌ付造
18						口縁部ハケ(斜位)→斜筋ハケ(斜位)→ヘラ状工具によるナデ(斜位)	
87						口縁部ハケ(斜位) 内部板状工具によるナデ、頭部挖頭おさえ	
71	罐	口縁部欠損 肩部充存	16.4 (12.4)	灰褐色	白色・灰色・ 石英・長石・ 母粒多量混入	山形部鉛状工具によるミガキ(根付) 鉛錠棒状工具によるミガキ(斜位)	口縁部直線的に彎く。头部やや平底となる
18						山形部鉛状工具によるミガキ(根付) 鉛錠棒状工具によるミガキ(斜位)	
88						直線へテ状工具によるミガキ→直線へラ状工具によるミガキ 口縁部鉛状工具によるミガキ(斜位)	
71	ミニチュア	小形座(?)	3.0	墨綠	白色粗粒混入	ミガキ	山形部にゆがみがあり手造
89						ヘラ状工具によるミガキ	
71						ヘラ状工具によるミガキ	
18	ミニチュア	口縁部欠損	2.5 2.1 2.4	灰褐色	白色粗粒少量 混入	頭部挖頭おさえ、内部板状痕	山形部にゆがみあり手造
90						頭部挖頭おさえ	
71						ヘラ状工具による擦状痕(巻状)	
18	ミニチュア	直部充存	3.6	中や軟質	白色粗粒多量 混入	頭部挖頭おさえミナナ 直線へラ状工具によるミナナ	表面新しく摩滅
91						ヘラ状工具による擦状痕(巻状)	
71						-	
18	高环	口縁部欠損片	18.4	黄褐色	白色・灰色・ 石英粗粒多量 混入	口部ヨコナデ	弥生中期土器片
92						ミガキ(?) 口部ヨコナデ	
71						-	
21	甕	口縁部光	18.4	明褐色	白色・空母・ 石英粗粒多量 混入	頭部ハケ(斜位)→ヨコナデ 口部ヨコナデ	外一部黒変
93						板状工具によるケズリ状ナデ	
71						-	
21	甕	口縁部光		青白	白色粗粒、空母少量混入	口部横造、口縁部擦痕状文	弥生中期土器片
94						-	
71						-	
21	甕	口縁部光		墨綠	白色粗粒、空母少量混入	口部横造、口縁部擦痕状文	弥生中期土器片
95						-	
71						-	
22	甕	口縁部光	15.2	灰褐色	白色・灰色・ 粗粒微量混入	ヨコナデ	外一部黒変
96						板状工具によるナデ	
72						-	
22	甕	口縁部光	14.0	青褐色	白色・灰色・ 粗粒、石英粒 微量混入	ミガキ 口部ヨコナデ	外一部黒変
97						ハケ(斜位)→口部ヨコナデ	
72						-	
22	甕	口縁部光	14.7	茶褐色	白色・赤褐色 長石粗粒微量 混入	ヨコナデ	外一部黒変
98						指ナデ	
72						-	

番号	形種	残存度	法面	色調焼成	胎土	調整	備考
159	柱 土器 甌	底面 口徑 底径	表面	白色	外面		器底の凹凸著しい
99			内面	灰色			
72			底面	褐色 赤褐色、石英 細粒多量混入	口縁部ハケ(縫合)→ミガキ(擦合)		
22	甌	口縁部瓦礫片 (21.2)	表面	白色、灰色、 赤褐色、石英 細粒多量混入	ミガキ		器底の凹凸著しい
100			内面	白色、灰色、 石英細粒多量 混入	口縁部ヨコナデ		
72			底面	同上	口唇部面を作る		
22	甌	口縁部瓦礫片 (15.8)	表面	白色、灰色、 石英細粒多量 混入	外唇部面を作る		外唇・底部底
101			内面	同上	同上		
72			底面	同上	同上		
22	盆	底部充合	表面	白色、灰色、 石英、長石細 粒多量混入	鋸状工具によるナデ	鋸状痕	外唇摩滅
101			内面	同上	同上	同上	
72			底面	同上	同上	同上	
22	古 釜 壺	胴部接合部 (破)	表面	白色、灰色、 石英、長石細 粒多量混入	ハケ		外唇
102			内面	同上	同上	同上	
72			底面	同上	胴部板状工具によるナデ様状痕	胴部板状ナデ	
22	甌	4315充合	表面	白色、灰色、 石英少量混入	口縁部ヨコナデ→施毛文一起模る	施毛文一起模る	底部被熱により制 理一部厚実、口唇 部面を作る
103			内面	同上	胴下部ミガキ	同上	
72			底面	同上	板状工具によるナデ→口縁部ヨコナデ	板状工具によるナデ	
22	高 壺	胴部充合 底部有欠損	表面	白色、赤褐色 板状少量混入	ミガキ		外唇摩滅
104			内面	同上	板状工具によるナデ	同上	
72			底面	同上	同上	同上	
22	高 壺	胴部破片	表面	白色、灰色、 石英細粒微量 混入	ミガキ(密)		外唇摩滅
105			内面	同上	ケスリ		
72			底面	同上	同上	同上	
23	甌	口縁部瓦礫片 (12.8)	表面	白色、灰色、 石英細粒多量 混入			器面著しく摩滅 口唇部底を作る
106			内面	同上			
72			底面	同上			
23	甌	底部瓦礫片	表面	白色、灰色、 石英細粒微量 混入			底部大摩滅 外唇著しく摩滅
107			内面	同上			
72			底面	同上	板状工具によるナデ	同上	
23	高 壺	胴部	表面	白色、灰色、 石英細粒細粒 多量混入			外唇著しく摩滅
108			内面	同上			
72			底面	同上	板状工具による摩狀底現る	同上	
23	甌	口縁部	表面	白色、赤褐色 粗粒少量混入	ハケ(縫合)		器底摩滅。胴部穿 孔1ヶ所確認
109			内面	同上			
72			底面	同上			
23	S字甌	口縁部破片	表面	白色、灰色、 粗粒多量混入	ヨコナデ		器底摩滅
110			内面	同上			
72			底面	同上			
23	甌	口縁部破片	表面	白色、石英、長石 細粒多量混入	口縁部ハケ(縫合)→コ唇部ヨコナデ		折り返し口縁
111			内面	同上			
72			底面	同上			
23	甌	口縁部破片	表面	白色、石英、長石 細粒多量混入	口唇部施毛おさえ→ナデ		折り返し口縁
112			内面	同上			
72			底面	同上			

番号	器種	残存度	法量	色調形状	粘土	測定	備考
住居址				基底 色 調		外面	
土器				口徑 燒成		内面	
四				底径			
24				茶褐色	白色細粒多量 混入	頭部ハケ(横位)→胴部ハケ(斜位)	外側被熱により剥 離一部黒皮 埋窓
113	甕	底部		堅 細		胴部・板状工具によるナデ	
73							
24				檻褐色	赤褐色斑點	口縁部ミガキ→口部ナデ	
114	高 壺	口縁部及破片	(10.6)		白色細粒少量 混入	口縁部ミガキ	
73				堅 細	混入		
24				明褐色	白色粗粒、赤 褐色細粒多量 混入	ミガキ(横位)	脚部穿子。1カ所複 数
115	高壺(?)	脚部及破片	(10.4)	堅 細		ナデ	
73							
24				暗褐色	白色・灰褐色 細粒多量混入	環部ミガキ(横位)	
116	高 壺	环部及破片		堅 細		環部ミガキ(横位)	
73							
24				淡黃褐色 燒成	白色細粒多量 混入	ミガキ(横位) 底部ナデ	外観無記
117	甕	底部充存	3.9	やや堅細		脚部ミガキ(横位)	
73							
24				茶褐色	白色細粒少量 混入	口縁部ミガキ(横位) → 口唇部ミガキ(横位)	口縁部や凹状 となる。底部に 小穿孔あり
118	高 壺	环部充存	21.2	堅 細		環部ミガキ(横位) → 口縁部ミガキ(横位)	
73							
29				檻褐色	白色・灰褐色 石英細粒少量 混入	口縁部ヨコナデ 築部ミガキ(斜位) → 脇部中央 脚部ミガキ(横位)	口縁部に面を作る
119	甕	底部及欠損	30.5	堅 細			
73							
29				黃褐色	白色・灰褐色 細粒少量混入	口縁部ヨコナデ 脇部ミガキ(横位)	
120	小形甕	口縁部及 底	(5.7)	堅 細		口縁部ヨコナデ	
73							
29				檻褐色	白色・灰褐色 絹糸、金雲母 多量混入	脚部ハケ(横位) 脇部ハケ→ケズリ吹ナデ	器身が薄く S字型 の脚部の可能性あ り
121	吉付甕	調、脚部接合 部		堅 細			
73							
30				暗褐色	白色細粒、石 英細粒多量混入	口縁部ヨコナデ 脇部板状工具によるナデ	
122	小形甕	口縁部及 底部充存	(10.2)	堅 細		ヨコナデ→棒状工具によるミガキ状のナデ	
74							
30				檻褐色	白色・灰褐色 石英細粒多量 混入	ミガキ(横位)	口縁部外反し口唇 部に面を作る 器 面著しく摩滅
123	甕	口縁部及破 片	(15.8)	やや軟質		ヨコナデ	
74							
30				檻褐色	白色・灰褐色 細粒、石英、 長石粒多量混入	ヨコナデ(?)	器面著しく摩滅
124	甕	口縁部及破片	(19.8)	堅 細			
74							
30				黃褐色	白色・右英細 粒、致多量混入	ハケ(横位) 板状工具によるナデ	器面著しく摩滅
125	甕	底部	6.0	堅 細			
74							
30				檻褐色	白色・赤褐色 細粒少量、金 雲母細粒混入	ミガキ(?)	外観摩滅
126	高 壺	脚部及破片	(17.0)	やや堅細		細かいハケ(斜位)	
74							

番号	器種	残存度	法数	色調洗成	胎土	調査 整備 参考
住居址				鉛色 山型 直造	外皮 内面	
土器						
四						
44			3.35	褐色	白色・灰色	手捏 <small>口唇部等でつまみ出す</small>
127	ミニチュア	窓存	4.1		鉛粒少量混入	
74			3.0	堅	鐵	
44		口縁部欠け	3.15	黒褐色 黄褐色	白色細紋、石英粒少數混入	手捏
128	ミニチュア	模	3.6			器形は不規則で背面の凹凸が多い
74		調部以下充育	2.9	堅	鐵	底部棒状工具によるナデ
44				暗褐色	白色	ナデ
129	合付器	調部接合部		白	石英粒少數混入	
74		破片		堅	鐵	底部へラ状工具による擦状痕、脚部ハケ
47				褐色	白色・石英・長石細粒少數混入	口縁部ハケ(複数)、口唇部ヨコナデ
130	壺	口縁部分	(14.8)			外側一部にスス付着
74				堅	鐵	口縁部ハケ(複数)→棒状工具によるミガキ、口唇部ヨコナデ
47				黄褐色	白色・赤褐色	ナデ 底部ナデ
131	ミニチュア	底部充	3.15	堅	鉛粒少數混入	ナデ
74						
方切削器				15.9	白・石英細粒少數混入	口縁部ミガキ(複数) 体部ミガキ(複数)
132	壺	調部欠				
74			4.0	堅	鐵	口縁部ミガキ(複数) 体部ミガキ(複数)
±37		口縁部欠け	4.1	褐褐色	白色細紋、石英粒少數混入	口唇部ヨコナデ 底部ミガキ(複数)
133	鉢	模	9.7			外側一部スス付着
75		底部充存	2.5	堅	鐵	ヘラ状工具によるナデ
±37				6.6	黄褐色	白色・灰色
134	小形丸底壺	口縁部欠損	11.2		石英細粒多量混入	口唇部ナデ
75		底部充存	3.0	堅	鐵	底部上げ底、静かに厚底。口縁部直線的に開く。内面黒塗
±37						
135	小形丸底壺	口縁部調部欠	11.9	黄褐色	白色・石英細粒少數混入	器形著しく厚底 内外面執離あり
75						
+139					やや執離	
136	壺	底部充破片		黄褐色	白色・石英・長石細粒多量混入	底部棒状工具によるミガキ、底部棒状工具によるナデ
75			(5.2)	堅	鐵	ナデ
±139						
137		口縁部欠		暗褐色	白色・灰色・長石細粒多量混入	ハケ 底部ナデ
75			(6.0)	堅	鐵	ハケ
±165						底部中央穿孔
138	壺	底部充破片		褐褐色	白色・赤褐色	
75						
±165					粗粒多量混入	
139						
75			(7.6)	堅	鐵	ナデ
±199						
140	S牛車	口縁部破片		黒褐色	白色・灰色粗粒混入	ミガキ 外出漏窓
75						
				明褐色	青母細粒混入	ヨコナデ
				堅	鐵	ヨコナデ

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址 土器 甕		基底	深高	褐色	外面		
			口徑	褐色	内面		
			底	褐色	断続合部ハケ		
±202 141 75	台付甕 開口部片		暗褐色	白色細粒、チャート、石英 粒多量混入			表面著しく摩滅
			堅板		环部との接合部ハケ状工具の様状痕 ミガキ		
			堅板	白色・赤褐色 粒多量混入	ナデ		
±216 142 75	高环 壁上部と の接合部		暗褐色	白色・長石粒 多量混入	环部へラ形状工具によるミガキ 底部ナデ		底部穿孔3カ所不規則に穿孔
			堅板		棒状工具によるミガキ		
			堅板	白色・長石粒 多量混入			
±216 143 75	甕 壁部欠損 底部完存	8	暗褐色	白色・長石粒 多量混入	底部へラ形状工具によるミガキ 底部ナデ		底部ドーナツ状上げ底 内因黒変
			堅板		棒状工具によるミガキ		
			堅板	白色・灰色 粒多量混入	ナデ		
144 75	甕 (?) 底部片	(4.7)	堅板				表面著しく摩滅
			やや堅板	白色・赤褐色 長石細粒多量 混入			
			やや堅板				
±218 145 75	甕 底部片	(5.2)	暗褐色	白色・赤褐色			底部ドーナツ状上 げ底。表面著しく 摩滅
			堅板				
			堅板	白色・灰色 粒多量混入			
±275 146 75	高环 脚上部		暗褐色	白色細粒少量 混入	ハケ状工具による横線		脚部穿孔1カ所 内因摩滅
			堅板				
			堅板				
±280 147 75	S半甕 口縁部片	(15.0)	暗褐色	白色細粒、全 青母液量混入	口唇部ヨコナデ 制部棒状工具による沈積 軽微レリフ(斜位)→ナデ		外面スス付着 口唇部外寄気味に 附く
			堅板		口唇部ヨコナデ 棒状工具によるミガキ		
			堅板		口唇部ヨコナデ 棒状工具によるケズリ		
±291 148 75	甕 口縁部片	(17.6)	暗褐色	灰色細粒少量 混入	口唇部ヨコナデ 口縁部ハケ(斜位) 制部板状 工具によるナデ		
			堅板		口縁部ハケ(斜位) 制部へラ工具によるケズリ		
			堅板				
±291 149 75	高环 底部片	(17.2)	暗褐色	白色細粒少量 混入	口唇部ヨコナデ 口縁部ミガキ(横位) 壁部ミ カキ(横位)		外因一部崩落 口縫内寄気味に 附く。环部に板をもつ
			堅板		ミガキ(横位)		
			堅板				
±296 150 75	甕 (?) 底部片	(5.6)	暗褐色	白色・褐色・ 長石細粒多量 混入	壁部ナデ		
			やや堅板		横状痕		
			堅板				
±300 151 75	甕 底部片	(4.8)	黒褐色	白色・長石細 粒混入			表面著しく摩滅
			堅板				
			堅板				
±327 152 75	高环 环部片		暗褐色	白色・茶褐色 粗粒混入	ヨコナデ→ミガキ(噴丸)		
			堅板		ヨコナデ・ミガキ		
			堅板				
±330 153 75	甕 底部片	(6.6)	暗褐色	白色粗粒多量 混入	棒状工具によるミガキ(横位)		
			堅板		ハケ状工具による横状痕		
			堅板				
±330 154 75	甕 底部片	(6.7)	司褐色	白色・褐色 粗粒多量混入	底部接合部ハケ→ナデ		底部木葉痕
			堅板				
			堅板				

番号	器種	残存度	法量	色調焼成	胎土	調整	看名
作原址				器高 色 に僅 燒成 底	外國		
土器				色 に僅 燒成 底	内國		
圓							
±330	S字型	口縁部破片		明褐色 石英・雲母少 量混入 堅硬	口唇部刮み 口縁部ヨコナデ 口縁部ヨコナデ		
155							
75							
±609	合付裏	脚部 縫合部		褐色 白色・赤褐色 石英細粒多量 混入 堅硬	白色・赤褐色 石英細粒多量 混入 ヘラ状工具の痕跡痕		器面著しく摩滅
155							
76							
+635	変	口縁部ノギ破片	(12.5)	暗褐色 白色・灰色、 赤褐色細粒、 石英粒少量混 入 堅硬	白色・灰色、 赤褐色細粒、 石英粒少量混 入 ヘラ状工具によるミガキ	口縁部ハケ(變位)→口唇部ヨコナデ ヘラ状工具によるミガキ	外面スス付着
157							
76							
±642	小形器台	環部ノギ破片	(9.7)	褐色 白色・石英粗 粒少量混入 堅硬	白色・石英粗 粒少量混入 堅硬	ミガキ・ナデ 環部放射状のミガキ・口唇部ヨコナデ	
158							
76							
±663	塊	口縁部ノギ破片	(12.8)	褐色 白色・灰色、 石英細粒少量 混入 堅硬	白色・灰色、 石英細粒少量 混入 ヘラ状工具によるミガキ	ミガキ(積位) ミガキ(瓶位・斜位)	内面黑色処理
158							
76							
J.722	頭身器	脚部 环		暗灰色 白色・砂粒混 入 堅硬	白色・砂粒混 入	剥離ナデ 底部凹凸へ削り	外面の一部に自然 軸が付着
160							
76							
±726	壺	底部		暗褐色 白色・灰色、 赤褐色細粒少 量混入 3.2 厚	白色・灰色、 赤褐色細粒少 量混入 底部ハーケ→ヘラ状工具によるナデ	ミガキ ミガキ(瓶位)	外面一部黒変 底部上げ底状とな る
161							
76							
±740	甌	口縁部ノギ破片	(21.0)	暗褐色 白色・赤褐色 石英細粒多量 混入 堅硬	白色・赤褐色 石英細粒多量 混入 ヘラ状工具によるミガキ	コ縁部ハケ(瓶位)→口唇部ヨコナデ コ縁部ハケ(瓶位)→口唇部ヨコナデ	コ縁部平底面を作 る。口縁「く」の 字状に聞く
162							
76							
±810	甌	底部ノギ破片	(11.8)	暗褐色 白色・赤褐色 石英細粒少 量混入 堅硬	白色・赤褐色 石英細粒少 量混入 ヘラ状工具によるナデ	ナデ(7)	器面著しく摩滅
163							
76							
±812	甌	脚部下半 底部充存	7.4	暗褐色 白色・褐色 粘土多量混入 心形軟質	白色・褐色 粘土多量混入 心形軟質	脚部ハケ(斜位)	器面著しく骨殖跡変 の剥離著しい。底部 ドーナツ状に行進
164							
76							
±812	甌(?)	底部ノギ	(7.6)	黃褐色 白色・赤褐色 石英細粒多量 混入 堅硬	白色・赤褐色 石英細粒多量 混入 ヘラ状工具によるナデ	ハケ(瓶位) ナデ	器面摩滅
165							
76							
±812	高	環部ノギ破片	(16.8)	暗褐色 白色・赤褐色 石英細粒少 量混入 堅硬	白色・赤褐色 石英細粒少 量混入 ヘラ状工具によるナデ	ミガキ ミガキ(瓶位)	外面一部黒変 内面摩滅
166							
76							
透2	甌	脚部ノギ破片	13.8	淡褐色 白色・赤褐色 石英細粒少 量混入 やや軟質	白色・赤褐色 石英細粒少 量混入 やや軟質	海部ヨコナデ	器面著しく摩滅
167							
76							
透2	林	底部充存	3.4	暗褐色 白色・石英粒 子少量混入 やや軟質	白色・石英粒 子少量混入 やや軟質		器面著しく摩滅
168							
76							

番号	器種	残存度	法被	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址 土器 区				器皿 色調	外因		
14				口桂 燒成			
169				明高麗色 (12.4)	白色粗粒多量 混入		
76	壺	口縁部光破片	堅 繩	堅 繩	ナデ ナデ	器面著しく厚誠 器面著しく厚誠	底部ドーナツ状土 底。外因一部無効 内曲率強
4				青 鳴 色	白色粗粒多量 混入		
170				4.8	やや軟質		
76	小形甕	底部光存	(6.0)	堅 繩 色	白色、灰色、 赤褐色粗粒、 石英粒多量 混入	ハケ(複数)	底部ドーナツ状土 底。外因一部無効 内曲率強
171				青 鳴 色	コ縁部ハケ(複数) → 口部ココナデ		
77				藍 繩	ヨコナデ		
堅2	壺	口縁部光破片	(16.6)	青 色	白色、灰色、 赤褐色、右英 粒少量混入	口縁部コロナデ 底部凹板未切直→付け高台	口部曲面をつくり
172				青 鳴 色	白色、灰色、 赤褐色、右英 粒少量混入	高台色強ミガキ	
77				6.8	やや堅強		
堅2	S字甕	底部光存	(3.0)	青 鳴 色	白色、赤褐色 粗粒、含母粒 少量混入	ヨコナデ	器面著しく厚誠
173				青 鳴 色	白色、赤褐色 粗粒、石英粒 多量混入	ナデ(?)	
77				藍 繩	多量混入		
堅2	壺	口縁部光破片	(16.6)	青 鳴 色	白色、赤褐色 粗粒、含母粒 少量混入	ミガキ(?)	器面著しく厚誠
174				青 鳴 色	白色、赤褐色 粗粒、含母粒 少量混入		
77				藍 繩			
堅3	壺	底部光存	(3.0)	青 鳴 色	白色、赤褐色 粗粒、含母粒 少量混入	ナデ(?)	器面著しく厚誠
175				青 鳴 色	白色、赤褐色 粗粒、石英粒 多量混入		
77				藍 繩			
堅3	壺	口縁部下半	(16.6)	青 鳴 色	白色、灰色、 赤褐色粗粒、 石英粒多量混 入	ミガキ(?)	器面著しく厚誠
176				青 鳴 色	白色、赤褐色 粗粒、含母粒 少量混入		
77				やや堅強			
堅4	壺	底部光存	(16.2)	青 鳴 色	白色、赤褐色 粗粒、右英 粒少量混入	ハケ(複数) → 口縁部ココナデ	底部ドーナツ状土 け底 内曲率強
177				青 鳴 色	白色、赤褐色 粗粒、右英 粒少量混入	ハケ	
77				藍 繩			
堅4	壺	口縁部光破片	(18.6)	青 鳴 色	白色、赤褐色 石英粒少量 混入	調部ハケ(斜位) → 口縁部ココナデ	器面全体に薄い 口縁部平坦面を作 る
178				青 鳴 色	白色、赤褐色 石英粒少量 混入	調部ヘラ状工具によるナデ一部ミガキ状となる	
77				堅 繩			
堅4	壺	口縁部光破片	(16.2)	青 鳴 色	灰色、赤褐色 粗粒、右英 粒少量混入	素部ハケ(變位) → 周縁ハケ(複数) 口縁部ココナデ	器面全体に薄い 口縁部平坦面を作 る
179				青 鳴 色	灰色、赤褐色 粗粒、右英 粒少量混入	素部指痕おさえ → 周縁ヘラ削り 口縁部ココナデ	
77				藍 繩			
堅4	壺	周縁部光破片	(13.0)	青 鳴 色	白色、赤褐色 粗粒、右英 粒少量混入	調部ハケ	器面著しく厚誠
180				青 鳴 色	白色、赤褐色 粗粒、右英 粒少量混入	調部指痕おさえ ナデ	
77				藍 繩			
後出面	壺	口縁部光破片	(13.0)	明高麗色 色	白色、右英 粒少量混入	口部ココナデ → 口縁部ハケ	器面著しく厚誠
181				やや軟質			
77				やや堅強			
横山面	台代 瓢	接合部破片		灰黃褐色 色	白色、灰色、 右英粒多量 混入	ハケ	
182				やや軟質			
77				やや堅強		ヘラナデ	

番号	器種	残存度	法蓋	色調焼成	胎土調	堅	備考
住居址 土器 四 検出箇 183 77				緑褐色 白色 焼成 近接	外面 内面		
	板	口縁部泥被 片	(14.0)	暗黄褐色	白色・灰色 細粒少量混入	口縁部ヨコナダ 唐部ハケ	粉白質感
						口縁部ヨコナダ 唐部ハケ	
検出箇 184 77	甕	底部片破片	(6.8)	暗褐色 斑状 やや堅緻	白色・灰色 細粒多量混入	下部タタキ→上部ハケ ナダ(?)	
検出箇 185 77	器 台	側部片破片	(10.0)	暗褐褐色 斑状 やや堅緻	白色細粒少量 混入	ミガキ 側部ナダ(横方向) ナダ	4カ所穿孔あり 器面著しく摩滅
検出箇 186 77	蓋	頂部片 底部完存	(3.6)	淡黄褐色	白色・石英細 粒多量混入		器面著しく摩滅
1 187 78	甕	頭部(拓本)		暗褐色	白色細粒混入	叩き目 ナダ	
1 188 78	甕	胴部(拓本)		暗褐色	白色細粒混入	叩き目	内面著しく摩滅
1 189 78	甕	胴部(拓本)		暗褐色	白色細粒混入	叩き目 ナダ	
1 190 78	甕	剥離部(拓本)		茶褐色	白色細粒少量 混入	擦損波状文	
1 191 78	甕	胴部(拓本)		灰褐色	白色細粒少量 混入	叩き目 ナダ	
1 192 78	甕	口縁・剥離部 (拓本)		灰褐色	白色・褐色 細粒少量混入	頭部からの接着部ナダ 剥離叩き目	
2 193 78	甕	口縁部(拓本)		暗褐色	白色増粒混入	擦損波状文 口唇部ナダ	
11 194 78	甕	口縁部(拓本)		褐色	白色・赤褐色 石英細粒少量 混入	擦損波状文 ヨコナダ	
12 195 78	甕	口縁部(拓本)		暗褐色	白色・石英微 粒少量混入	擦損波状文 ミガキ	
14 196 78	甕	口縁部破片		暗褐褐色 暗褐色	砂粒少量混入	擦損波状文	炭化物付着

番号	器種	残存度	法蓋	色調焼成	胎土	調整	備考
住居址 + 段 段	甕		器高 口径 底径	褐色 褐色 褐色		外形 内面	
14			甕部(拓本)	褐色	白色細粒少量 混入	器底成状文→縦状文	
197				褐色		ヨコナデ" 斜部ハケ→ナゲ"	
78	甕		山捺部(拓本)	褐褐色	白色・褐色 細粒少量混入	器底成状文	器底掌紋
14				褐色		口沿部ヨコナデ	
198				やや褐褐色			
78	甕		山捺部(拓本)	褐褐色		器底成状文	パレススタイル七 唇口捺部
14				堅 細		器底成状文	
199				堅 細			
78	甕		肩部(拓本)	明褐色	白色・褐色 細粒多量混入	器底成状文 下半部ハケ	
14				堅 細			
200				堅 細			
78	甕		肩部(拓本)	灰褐色	白色・褐色 細粒多量混入	印き目	
14				堅 細		ハケ	
201				堅 細			
78	甕		口捺部(拓本)	褐色	白色細粒混入	器底成状文 山捺部ヨコナデ	外形スス付着
14				堅 細		ミガキ→口捺部ヨコナデ	
202				堅 細			
78	甕		肩部(拓本)	明褐色	白色・灰色 石英細粒多量 混入	印き目	
14				堅 細		ハケ	
203				堅 細			
78	甕		肩部(拓本)	灰褐色	石英粒多量、 白色・灰色細 粒少量混入	印き目	内面スス付着
14				堅 細		ナゲ	
204				堅 細			
78	甕		肩部(拓本)	灰褐色	白色・灰色、 褐色細粒少量 混入	器底成状文	
14				堅 細		ハケ	
205				堅 細			
78	甕		肩部(拓本)	黄褐色	白色微粒、石 英粒少量混入	印き目	
15				堅 細		ナゲ	
206				堅 細			
78	甕		肩部(拓本)	褐褐色	白色・水褐色 石英細粒少量 混入	印き目	
15				堅 細		工芸によるナゲ	
207				堅 細			
78	甕		口捺部(拓本)	褐褐色		ハケ	パレススタイル七 唇口捺部
15				堅 細			
208				堅 細		器底成状文に2段落部	
78	甕		肩部(拓本)	灰褐色	白色・灰色 細粒多量混入	印き目	
21				堅 細		ナゲ	
209				堅 細			
78	S字甕		口捺部(拓本)	淡褐色	白色・灰色細 粒、透明石英 ・當母多量混 入	器底成状文	
21				堅 細			
210				堅 細			
78	甕		肩部(拓本)	灰褐色	白色・灰色 細粒多量混入	印き目	
21				堅 細		ヨコナデ	
210				堅 細			
78	甕		肩部(拓本)	灰褐色	白色・灰色 細粒多量混入	印き目	
21				堅 細		ヨコナデ	
210				堅 細			

番号	器種	保存度	法量	色調成因	胎土	病害	備考
往路址				高 色 調	外面		
七 器				中 性 成	内面		
四	甕	胴部(拓本)	明 褐 色	白色・灰色、 褐色粒子少量 混入	叩き目 ヨコナデ		
21				堅 練			
211							
78	甕	胴部(拓本)	灰 褐 色	白色・經粒強 烈混入	叩き目 ナデ		
23				堅 練			
212							
78	甕	胴部(拓本)	明 褐 色	白色・灰色、 粗粒少量混入	叩き目 ヨコナデ		
24				堅 練			
213							
78	甕	胴部(拓本)	暗 褐 色	白色・褐色、 紅粒少量混入	叩き目 ヨコナデ		
24				堅 練			
214							
78	甕	胴部(拓本)	暗 灰 褐色	白色・褐色、 紅粒少量混入	細指紋状文 ヨコナデ		
30				堅 練			
215							
78	甕	胴部(拓本)	灰 褐 色	白色・灰色、 粗粒少量混入	細指紋状文 ヨコナデ		外観やや寒感
47				やや軟質			
216							
78	甕	胴部(拓本)	暗 褐 色	白色・赤褐色、 石英粗粒少量 混入	叩き目 ヨコナデ		
47				堅 練			
217							
78	甕	胴部(拓本)	明 褐 色	白色・石英粗 粒少量混入	細指紋状文 ヨコナデ		
47				堅 練			
218							
78	甕	胴部(拓本)	明 褐 色	白色・灰色、 石英粗粒少量 混入	細指紋状文 ヨコナデ		
±37				堅 練			
219							
79	甕	胴部(拓本)	暗 灰 色	白色・灰色、 粗粒混入	叩き目 ナデ		
±139				堅 練			
220							
79	甕	胴部(拓本)	灰 褐 色	白色・灰色板 混入	叩き目→カキ目(叩きを複数) ナデ		器面著しく厚感
±151				堅 練			
221							
79	甕	胴部(拓本)	暗 褐 色	白色・灰色粗 粒混入	叩き目 ナデ		
±175				堅 練			
222							
79	甕	胴部(拓本)	やや軟質	白色・赤褐色、 粗粒少量混入	ボタン状貼付		
±179				やや軟質			
223							
79	甕	胴部(拓本)	暗 褐 色	白色粗粒少量 混入	ナデ・ボタン状貼付 ミガキ(?)		底部付近
±223				堅 練			
224							
79							

番号	器種	残存度	状態	色調焼成	土	調査	備考
住居址	土器	表面 底面	器高 口径 底径	白色 赤褐色 烧成	外側 内側	叩き目 ナデ	底部分近
7. 鍋							
88	甕	底部 (拓本)	青赤茶褐色 堅 織	白色・赤褐色 繩粒少量混入	叩き目 ナデ	叩き目 ミガキ	底部分近
±275							
225	甕	コ隆部 (拓本)	褐色 藍 織	灰色・赤褐色 石英繩粒微量 混入	叩き目 ナデ	叩き目 ミガキ	底部分近
79							
±339	甕	底部 (拓本)	明褐色 堅 織	白色・石英・ 長石繩粒混入	叩き目 ナデ	叩き目 ミガキ	底部分近
226							
79	甕	底部 (拓本)	暗褐色 堅 織	白色・灰色・ 赤褐色繩粒少 量混入	叩き目 ナデ	叩き目 ミガキ	底部分近
1,752							
227	甕	底部 (拓本)	堅 織	白色・灰色・ 長石繩粒混入	叩き目 ナデ	叩き目 ミガキ	底部分近
79							
±810	甕	底部 (拓本)	暗褐色 堅 織	白色・灰色・ 赤褐色繩粒少 量混入	叩き目 ナデ	叩き目→カキ目 (叩き目を消す) ハケ	底部分近
228							
79	甕	底部 (拓本)	堅 織	白色・灰色・ 長石多量混入	叩き目 ナデ	叩き目 ミガキ	底部分近
±810							
225	甕	底部 (拓本)	堅 織	白色・灰色・ 長石多量混入	叩き目 ナデ	叩き目 ミガキ	底部分近
79							
±857	甕	底部 (拓本)	堅 織	白色・赤褐色 繩粒少量混入	叩き目 ナデ	叩き目 ミガキ	底部分近
230							
79	甕	底部 (拓本)	堅 織	白色・赤褐色 繩粒少量混入	叩き目 ナデ	叩き目 ミガキ	底部分近
1,4							
231	甕	底部 (拓本)	堅 織	白色・石英 紺少量混入	叩き目 ナデ	叩き目 ミガキ	底部分近
76							
源14	甕	底部 (拓本)	堅 織	白色・石英 紺少量混入	叩き目 ナデ	叩き目 ミガキ	底部分近
232							
76	甕	底部 (拓本)	堅 織	白色・灰色 紺少量混入	叩き目 ナデ	叩き目 ミガキ	底部分近
堅2							
233	甕	底部 (拓本)	堅 織	白色・灰色 紺少量混入	叩き目 ナデ	叩き目→ハケ (叩き目を消す) ナデ	底部分近
79							
堅2	甕	底部 (拓本)	堅 織	白色・灰色 紺少量混入	叩き目 ナデ	叩き目 ミガキ	底部分近
234							
79	甕	底部 (拓本)	堅 織	白色・灰色 紺少量混入	叩き目 ナデ	叩き目 ミガキ	底部分近
堅3							
235	甕	底部 (拓本)	堅 織	白色・灰色 紺少量混入	叩き目 ナデ	叩き目 ミガキ	底部分近
79							
堅3	甕	底部 (拓本)	堅 織	白色・灰色 紺少量混入	叩き目 ナデ	叩き目 ミガキ	底部分近
236							
79	甕	底部 (拓本)	堅 織	白色・灰色 紺少量混入	叩き目 ナデ	叩き目 ミガキ	底部分近
堅3							
237	甕	底部 (拓本)	堅 織	白色・灰色 紺少量混入	叩き目 ナデ	叩き目 ミガキ	底部分近
79							
横出面	甕	底部 (拓本)	堅 織	白色・灰色 紺少量混入	叩き目 ナデ	叩き目 ミガキ	底部分近
238							
79							

### (3) 陶磁器

中世の土器・陶磁器は土師質十器1点を含めて24点である。そのうち測定可能なものを9点図示したが、遺物の量は少ない。1は土師質の皿で口縁部は小さく立ち上がり、内側に調整痕がある。中世後半のものか。土壙775出土である。2・3は東海系の捏鉢である。2は直線的に立ち上がり、口縁は上端部に浅い凹線をもって肥厚している。胎土にはかなり砂粒を含み、内面下部は磨耗している。3は底部で高台は横ナデにより貼り付けられている。内面は強く磨耗している。この他図示しなかったが捏鉢脇部破片が1点ある。これらは13C後半から14C前半のものと思われる。出土遺構は2は土壙339、3は7区検出面である。4は無釉の壺底部であるが、内外ともに明るい褐色を呈している。内面はヨコナデ、外面は斜めに工具をはしらせている。土壙368出土。5は焼締の壺らしいが底部には糸切痕があり、底部外側は削りにより調整している。内面には灰釉が付いているが、外面は無釉である。土壙785出土。ほかに常滑壺片2点が出ている。これらは中世後半のものと思われる。6は折縁深皿である。口縁部は直に立ち上がり、強く外側に折れる。灰釉は薄黄緑色で内外上半に厚くかかる。胎土は灰白色で焼成はよい。瀬戸美濃系の15C頃のものである。土壙657出土。7は鉄釉の皿で釉が内外上部にしかかっていない。口縁部はくの字状に開いている。瀬戸美濃系と思われるが時期は不明。土壙179出土。図以外のものでは瀬戸系の瓶破片、灰釉の碗の破片、鉄釉の德利破片などがある。

8・9は磁器である。8は黒ゴスで草状の文様が描かれ、高台内には字が書かれている碗である。12区検出面出土。9は杯で内面に金文字で「五(+)」と「星」が書かれているらしい。松本五十連隊の杯ではないか。13区検出面出土。8・9とも大正・昭和のものと思われる。

### 2. 石器・石製品

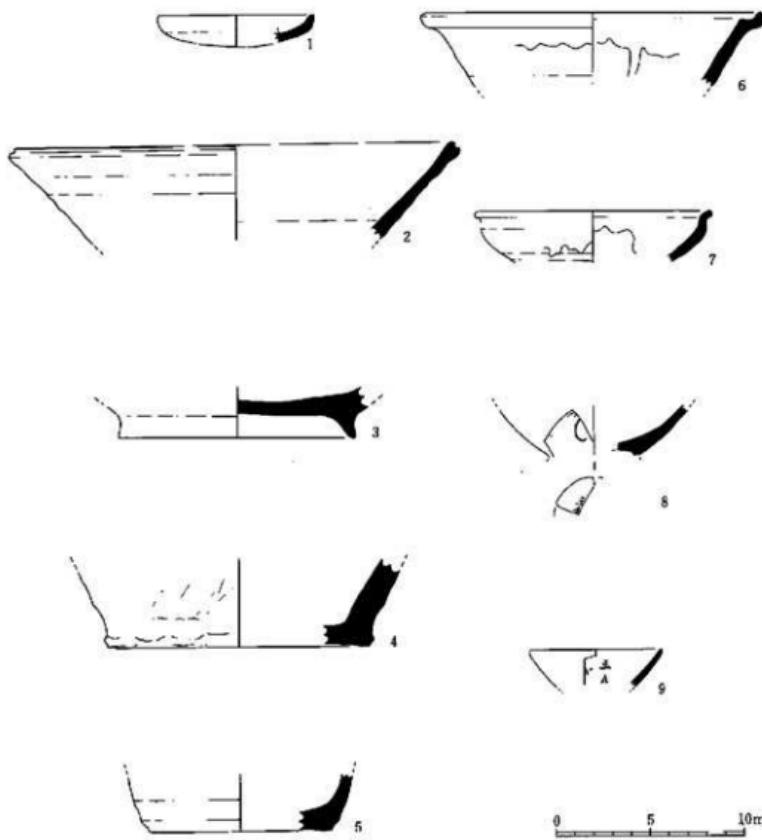
今回報告する石器は1987(昭和62)年の発掘調査のうち、県営は場整備事業予定地内出土の石器である。石器は定形的な石器のほか、2次加工のある剥片・使用痕のある剥片・剝片・碎片が多数出土している。このうち今回は定形的な石器に限って報告する。向畠遺跡では1988(昭和63)年にも継続して発掘調査が行われ、来年度に報告書が刊行される予定なので、向畠遺跡の石器群全体についてはそれに譲りたい。

整理にあたっては実測できるものはすべて図化し、掲載することにした。また、すべての石器について出土地点・法量・石質・欠損状況などを一覧表に登載している。

今回の調査では縄文時代の石器、古墳時代の砥石、それから石製品として現1点が出土している。このうち特徴的なものとして、前回同様に縄文時代早期後半に多くみられる特殊磨石1点が出土している。また、石器のなかに有茎鍬3点があり、そのうち1点はいわゆる飛行機鍬である。このことから付近には後・晩期の遺構の存在が推測される。

#### 1) 石器(1~17)

17点出土している。石器は基部の形態と茎の有無から分類できる。本遺跡では凹基・無茎鍬、凹



第80図 陶磁器

基・有茎鎌、円基鎌、平基鎌が出土している。凹基・有茎鎌は3点(1・4・15)出土している。有茎鎌はこの地域では縄文時代後期後半以降に出現する。また、4については両側縁に張り出しをもつ、晚期に特徴的な飛行鎌鎌の一種である。實査地周辺に該期の遺構があるかもしれない。なお、1は片側に整形の刃離がみられないこと、主要剥離面側から茎部を作り出すための剥離が粗いことから未製品と考えられる。円基鎌(2)はシンメトリーだが、先端が尖らないこと、整形剥離が粗くて横断面が厚いことから未製品の可能性がある。平基鎌は2点(12・16)出土している。このうち12は左右非対称、整形剥離が粗く横断面が厚いことから未製品と考えている。

凹基・無茎鎌は11点出土している。このうち、9は整形剥離が粗いことから未製品と考えている。11は先端からの加擊で上半を失っている。破損面に不純物が見えていることから、これが原因で破損してしまったと考えられる。

石材については、1がチャート製で、他は黒曜石である。

## 2) 石錐(18~21)

調整剥離によって先端部を作り出している石器で、石錐以外のものを石錐として扱った。4点出土している。18は棒状を呈するチャート製である。19~21はつまみ部をもつ黒曜石製のものである。19は片側刃に剝離を加えて錐部を作り出す途中の未製品と考えている。19~21にはポジティブなバルブ・バルバースカーを一部に残していることから、剝片のバルブのふくらみを利用してつまみを作り出していることがうかがえる。また、いずれも片側縁の片面にのみ剥離を加えて錐部を作り出している点が共通している。

## 3) 石匙(22・23)

横形・直刀タイプが2点出土している。22はつまみに接続する側縁部につぶれがある。着柄または紐等を缚った際にできた痕跡と考えられる。黒曜石製。23は縦長削片を素材にする石匙である。つまみは剥離方向に対して直角に取り付けられている。刃部は両面加工である。しかし、背面側が斜度の急な剥離であるのに対し、腹面側は浅い剥離であるため、断面でみると片刃状を呈している。

## 4) ピエス・エスキュー(24~30)

7点出土している。すべて黒曜石である。このうち25・27・28は上・下端につぶれが生じている。いずれも上からの加擊によると思われるが、平坦な打面は伴っていない。また、加撃の結果生じた剥離面はネガティブである。なお、28の片側縁には2次加工が行われている。24・30は截断面をもつもので、30の上端にはつぶれが観察される。

## 5) スクレイパー(31~38)

8点出土している。石材・素材の剝片・刃部の形態等にバラエティーがある。31はチャートの縦長削片を素材にしている。2側刃に両面加工の刃部をもつが、石匙の製作途上で失敗したものかもしれない。32は剝片の薄い縁辺を利用して刃部としている。整形のための剥離は両側に行われてい

るが、背に当たる部分は背面のみ剥離が集中している。33は打面・ポジティブなバルブをもつ剝片の末端に両面加工により刃部を作り出している。背面側は急斜度の剥離なので、断面では片刃を呈している。35は横長剝片を素材にしている。打面側の厚い側邊に凹面から浅い剥離が行われている。36は黒曜石の縦長剝片を素材にしている。背面の片側邊に急斜度の剥離を行って刃部としている。37はチャートの縦長剝片を素材にしている。片側邊に両側から浅い剥離を行っているが、背面側の調整のうが丁寧な剥離を行っている。38は横長剝片を素材にしている。刃部加工は片側邊に両面から行われている。

#### 6) 打製石斧 (39~53)

15点出土している。平面・刃部の形態から分類することができる。内訳は平面形態では楔形10・匙骨形3・不明2点、刃部の形態では凹刃7・偏刃2・不明6点である。また、ほとんどの石器には使用痕が観察されている。使用痕には着柄痕と考えられる側縁部のつぶれ、実際の使用でできる刃部の摩耗があった。欠損状況を見ると完形品ではなく、頭～側部を残すものが多い。頭部だけのものは5点(43・48・49・51・52)あるが、刃部のみ・下半部が残っているものはない。

次に特徴的なものについて述べる。40は頭頂部からの加熱で頭～側部の一部が縦長剝片状に剥離しているため、刃部に比べて側部が薄くなっている。この剥離された面にも側縁調整のための剥離が行われている。着柄のために頭～側部の厚さを減じる例はないので特殊なものである。45は側縁～刃部にかけて丁寧な剥離を行って整形している。ところが、刃部の末端には平坦面(おそらくは礫の表皮一自然面)があり、V字状の刃部を呈していない。使用には不向きなので未製品かと思われたが平坦面と体部が作り出す稜のところが摩耗している。また、側縁部にはつぶれが見られる。このことから、実際に使用されていたことが考えられる。

#### 7) 磨製石斧 (54・55)

5点出土している。いずれも小片で頭～側部の一部と考えられるが、石斧の形状・刃部は全くわからない。ほとんどのものが使用の際に破損してしまったものと考えられる。

#### 8) 敲・磨・凹石 (56~63)

9点出土し、実測可能な8点を図示している。一般に敲石・磨石・凹石と呼ばれるものは、それぞれ単独で敲打痕・磨面・凹部をもつものは少ない。多くは複数の使用痕をもっている。そのため、個々の名称は付けず、敲・磨・凹石として扱った。これらの石器は自然礫をそのまま、あるいは横領的に加工することなく使用されるので認定が難しい。使用頻度が多い石器は礫の表面が平滑になったり、色調が変わったり、非使用部分との境に穢が生じてくるので識別は可能である。しかし、使用頻度の少ないものについては自然礫との区別が難しい。したがって、今回の調査では9点が出土しているが、実際はもっと多いのかも知れない。

実測図については、磨面を———(平面)・△—→(断面)、敲打痕は———(平面)・←—→(断面)で表現している。個々の石器の使用痕・寸法等については一覧表を参照されたい。以

下、特徴的なものに付いて述べる。

60は偏平な円錐を素材にしている。そして、この側縁部は円周に沿って敲打されている。また、両面の平坦部には磨面がみられる。さらに、片面の中央には敲打痕も残されている。ただし、この敲打痕は、側縁部の敲打痕とは異なり、台石としてつかわれたものと考えている。61は特殊磨石である。<sup>1)</sup>本石器では機能磨面2面のほかに、上・下端に敲打痕、頭部両面には凹部を伴っている。一般に特殊磨石の機能磨面と呼ばれているものはザラザラとしていて、機能磨面と調整磨面との境に小剥離痕が観察されるものが多い。これらのことから機能磨面は磨（す）る以外に敲（たた）くことに近い動作が行われていたことが考えられている。61では機能磨面と敲打痕の2種類の使用痕があるが、敲打痕のほうが機能磨面よりもザラつきが粗く、両者は明確に区別される。この2つの使用痕が1つの目的の中で使い分けられていたのか、それぞれ別の用途があったのかは今後の検討課題である。

なお、被熱により赤色化・表面の剥落がみられるものが5点ある。このうち、57・62は破損部分にも被熱による赤色化がみられた。

#### 9) 砕石（64～68）

7点出土し、実測可能な5点を図示している。65～67は大きさ・重量から置き砾石と考えられる。65は被熱により赤色化と煤の付着がみられるが、底面と研磨面にはほとんど及んでいない。66は砾石を置きやすくするために、螺を割って底部としている。67は底面が4面もあるが、手で保持するには重すぎるので置き砾石と考えられる。64・68は手持ちの砾石である。ともに、よく使い込まれている。このほかに、研磨痕をもつ小破片が2点出土している。

#### 10) 砕（69）

ピット123から1点出土している。製作時の研磨痕や使用時の墨痕はよく残っている。特に、研磨痕については、側面部分に長軸に直交する非常に粗い研磨痕と長軸に平行する仕上げの細かい研磨痕が観察される。底面は花弁様の輪郭に作られている。また、上面には沈線で底面を長方形に囲んで、さらに文様を四隅に彫り込んでいる。

註1 特殊磨石の各部の名前については、

八木光則「いわゆる『特殊磨石』について—中部地方における绳文早期の石器研究への問題提起—」、「信濃」第28巻第4号1976を参考にした。

なお、実測図では機能磨面をスクリーントーンで表現している。

表4 石器一覧表

## 石 鐵

No.	区 No.	分類	注記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備考
1	1	凹基・有茎	1往No.3	(3.77)	1.87	0.35	(2.12)	黒曜石	先端部欠	未製品
2	2	円基・無茎	1往覆土	1.72	1.86	0.54	1.75	黒曜石	完形	未製品か
3	3	円基・無茎	2往北西	(1.29)	(1.38)	0.29	(0.45)	黒曜石	上半・片側欠	
4	4	凹基・有茎	2往北東	(2.64)	1.43	0.49	(1.49)	黒曜石	茎部欠	飛行機集
5	5	円基・無茎	2往検出面	1.95	(1.15)	0.32	(0.44)	黒曜石	片側欠	
6	6	凹基・有茎	11往No.42	2.23	(1.37)	0.31	(0.51)	黒曜石	片側邊刃欠	
7	7	凹基・無茎	11往北西	(2.32)	(1.33)	0.42	(0.82)	黒曜石	両側欠	
8	8	円基・無茎	11往北西	(1.52)	(1.23)	0.32	(0.52)	黒曜石	先端・両側欠	
9	9	凹基・無茎	土壤12	1.88	2.06	0.62	1.66	黒曜石	完形	未製品
10	10	円基・無茎	土壤21	(1.26)	(1.39)	0.25	(0.39)	黒曜石	上半・片側欠	
11	11	凹基・無茎	土壤26	(1.91)	1.81	0.49	(1.24)	黒曜石	上半欠	未製品か
12	12	平基・無茎	土壤216	1.99	1.48	0.47	1.26	黒曜石	完形	未製品か
13	13	円基・無茎	土壤216	1.39	1.07	0.38	0.42	黒曜石	完形	
14	14	凹基・無茎	9往検出面	(1.83)	1.52	0.29	(0.69)	黒曜石	両側欠	
15	15	円基・有茎	9往検出面	1.93	(1.34)	0.50	(0.65)	黒曜石	片側欠	
16	16	平基・無茎	10往検出面	2.02	(1.09)	0.40	(0.93)	黒曜石	片側邊欠	
17	17	凹基・無茎	13往検出面	2.01	1.08	0.27	0.46	黒曜石	完形	

## 石 鐸

No.	圆 No.	分類	注記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備考
1	18	棒状	5往No.1	3.03	1.23	0.54	1.99	チャート	完形	
2	19	つまみ	11往No.45	(3.01)	1.49	0.49	(1.55)	黒曜石	全体端欠	
3	20	つまみ	11往No.45	1.56	1.14	0.36	0.35	黒曜石	完形	
4	21	つまみ	11往床面	2.26	1.12	0.41	0.73	黒曜石	完形	

## 石 鍔

No.	圆 No.	分類	注記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備考
1	22	横形・直刃	11往横土	(2.23)	(2.16)	(0.57)	(1.98)	黒曜石	両側欠	削葉器 つぶれ
2	23	横形・直刃	7往検出面	3.55	4.39	0.87	12.58	チャート	完形	

ピエス・エスキュー

No.	図 No.	注 記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	欠損状況	備 考
1	24	土壤14	2.35	1.22	0.82	1.94	黒曜石	完形	
2	25	土壤251	2.21	1.37	0.76	1.96	黒曜石	完形	
3	26	土壤339	2.21	1.35	0.65	1.63	黒曜石	完形	
4	27	土壤866	1.63	1.49	0.69	1.56	黒曜石	完形	
5	28	ピット11	3.42	2.12	0.73	4.59	黒曜石	完形	
6	29	1区検出面	2.41	1.55	0.66	2.09	黒曜石	完形	2次加工あり
7	30	9区検出面	2.81	1.45	0.68	2.19	黒曜石	完形	

スクレイバー

No.	図 No.	注 記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	欠損状況	備 考
1	31	1住覆上	( 2.16 )	( 2.77 )	( 0.33 )	( 2.05 )	チャート	片側邊欠	
2	32	11住No.44	5.18	7.26	0.99	49.65	砂 岩	完形	
3	33	土壤128	3.13	3.23	0.75	9.12	チャート		
4	34	土壤177	( 4.86 )	( 5.53 )	( 1.27 )	( 37.92 )	砂質泥岩	両側邊欠	
5	35	土壤584	3.88	7.77	0.75	25.85	砂質泥岩	完形	
6	36	土壤871	4.86	2.03	0.82	6.45	黒曜石	完形	
7	37	9区検出面	3.56	5.62	0.82	22.89	チャート	完形	片側に抉りあり
8	38	9区検出面	( 3.71 )	( 4.42 )	( 0.53 )	( 12.29 )	砂質泥岩	両側邊欠	

打製石斧

No.	図 No.	分類	注 記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	欠損状況	備 考	
1	39	椎・円刃	2住	( 9.35 )	7.40	1.85	( 186.98 )	硬 砂 岩	上半欠		
2	40	椎・円刃	11住No.35	( 11.24 )	( 4.24 )	( 2.04 )	96.81	緑色蛇紋岩	頭～胸部欠	側縫部つぶれ	
3	41	短柄・円刃	11住	( 9.34 )	3.64	1.42	( 56.44 )	緑色蛇紋岩	上端欠	側縫部つぶれ、頭部摩擦耗	
4	42	短柄・不明	11住	( 8.32 )	( 4.28 )	( 1.73 )	( 99.10 )	千枚岩	下半欠	側縫部つぶれ	
5	43	椎?	不明	14住	( 6.55 )	( 4.16 )	( 0.87 )	( 29.83 )	砂質泥岩	上端・下半欠	
6	44	短柄・偏刃	14住	( 2.71 )	3.74	1.30	( 79.30 )	砂岩(ホルシヘルス)	頭部欠	側縫部つぶれ、刃部摩耗	
7	45	椎・円刃?	土壤132	( 9.36 )	( 4.13 )	1.14	( 72.54 )	硬 砂 岩	頭部欠	側縫・刃部摩耗	
8	46	椎・円刃	土壤203	( 9.22 )	( 4.63 )	( 2.00 )	( 105.50 )	硬 砂 岩	刃部欠	側縫部つぶれ、刃部摩耗	
9	47	椎・偏刃	土壤320	( 7.95 )	4.33	1.42	( 55.91 )	硬 砂 岩	頭部欠	刃部摩耗	
10	48	不 明	土壤584	( 8.35 )	( 3.87 )	( 1.48 )	( 48.74 )	硬 砂 岩	頭～刃部欠		
11	49	椎・不 明	7区検出面	( 10.69 )	( 9.37 )	( 2.41 )	( 37.80 )	安山岩	頭～刃部欠	側縫部つぶれ	
12	50	椎・円刃	7区検出面	( 14.40 )	7.25	2.89	( 278.12 )	砂岩(ホルシヘルス)	刃部端欠	側縫部つぶれ、頭部摩耗	
13	51	不明・円刃	9区検出面	( 7.08 )	( 5.49 )	( 1.67 )	( 91.49 )	硬 砂 岩	上端・刃端部欠	側縫部つぶれ	
14	52	椎・不 明	9区検出面	( 7.69 )	( 4.43 )	( 2.12 )	( 87.39 )	硬 砂 岩	下半欠	側縫部つぶれ	
15	53	椎・不 明	15区検出面	( 9.14 )	( 4.61 )	( 1.79 )	( 95.83 )	硬 砂 岩	刃部欠	側縫部つぶれ	

## 磨製石斧

No.	区 No.	注 記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備 考
1		13住	(2.83)	(3.20)	(0.41)	(3.21)	砂質泥岩	一部残	
2	54	14住南東	(4.45)	(5.10)	(1.99)	(14.78)	砂質泥岩	一部残	
3		15住	(5.59)	(3.94)	(0.91)	(23.01)	砂岩(細粒)	一部残	
4		土壤755	(5.97)	(3.77)	(0.93)	(14.78)	砂岩	一部残	
5	55	16区検出面	(7.30)	(2.53)	(1.34)	(33.92)	砂質泥岩	一部残	

## 凹・縫・磨石

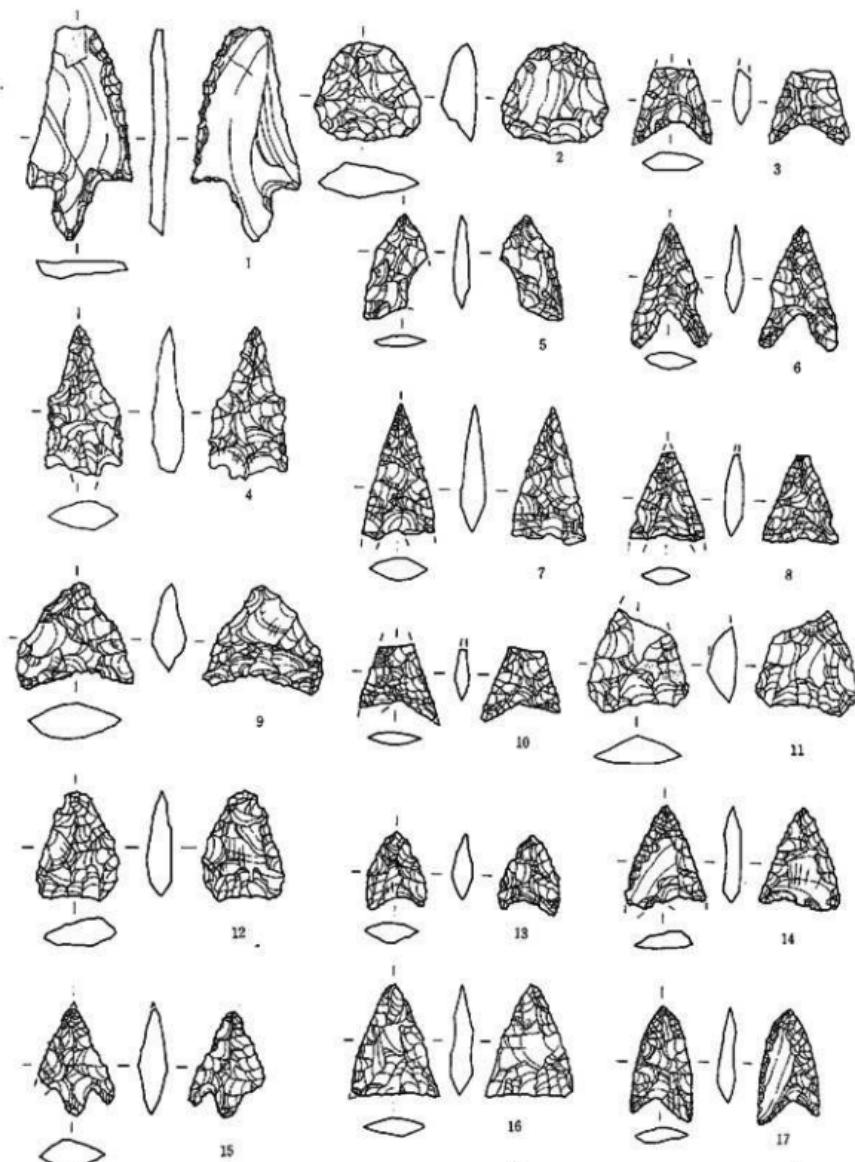
No.	区 No.	凹 部	縫石痕	磨面	注 記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備 考	
1				○	11住横山面	(3.54)	(4.43)	(1.93)	(34.61)	安山岩	一部残	板熱、石棒	
2	56		○	○	11住No.43	(9.49)	(7.31)	(4.30)	(354.50)	安山岩	1/2欠	板熱	
3	57			○	上横205	(12.53)	(10.66)	2.89	(464.80)	石英閃綠岩	1/2欠	板熱	
4	58		○	○	下横205	(9.33)	(4.84)	(3.18)	(169.23)	硬砂岩	1/2欠		
5	59			○	土壤275	6.85	6.60	2.17	139.05	砂岩	光形		
6	60			○	○	ピット80Nol.	13.01	9.75	4.32	849	砂岩	光形	
7	61	○(2+1)	○	○	ピット134	13.85	7.33	5.49	926	石英閃綠岩	光形	板熱、特熱	
8	62	○(2+2)	○	○	10区拂土	(9.67)	(6.01)	(4.25)	(314.80)	安山岩	1/2欠	板熱	
9	63			○	10区拂土	11.63	8.44	2.33	282.82	砂岩	光形		

## 砥石

No.	区 No.	注 記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備 考
1	64	14住	5.90	1.06	1.57	28.13	泥岩	完形	砥面4
2		14住西北床面	(6.30)	(4.88)	(1.02)	(31.55)	砂岩	一部残	(砥面1)
3	65	24住	(34.20)	(20.10)	(8.35)	(7250)	石英閃綠岩	側面欠	砥面1、置き場
4	66	30住ピット14	32.30	9.65	8.15	3680	硬砂岩	完形	砥面1、置き場
5	67	土壤810	(24.95)	(12.05)	(6.85)	(3250)	硬砂岩	下部欠	砥面4、置き場
6	68	11区検出面	(5.01)	2.11	1.93	(44.91)	疊灰岩	両端欠	(砥面4)
7		13区検出面	(4.79)	(3.66)	(1.02)	(9.25)	砂岩	一部残	(砥面1)

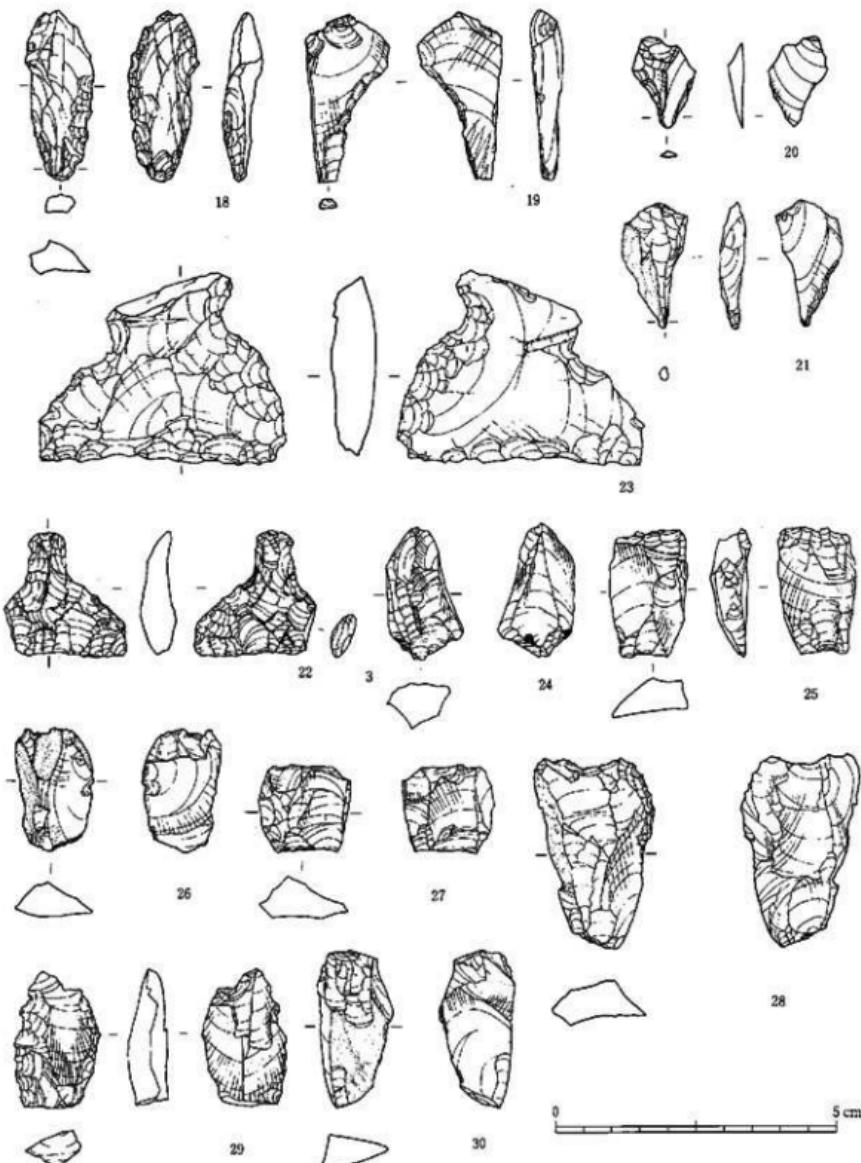
## 板

No.	区 No.	注 記	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	欠損状況	備 考
1	69	ピット123	9.92	4.51	1.61	24.86	粘板岩	完形	

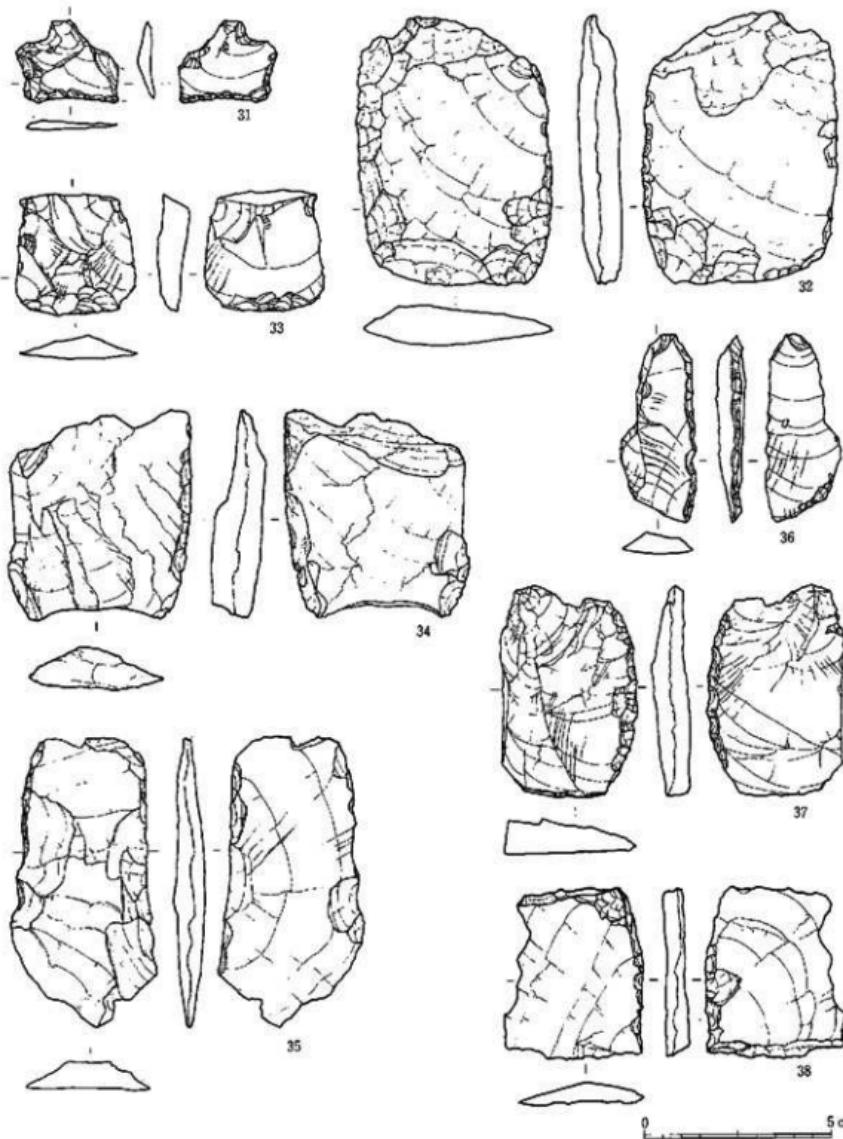


第81図 石器(1)

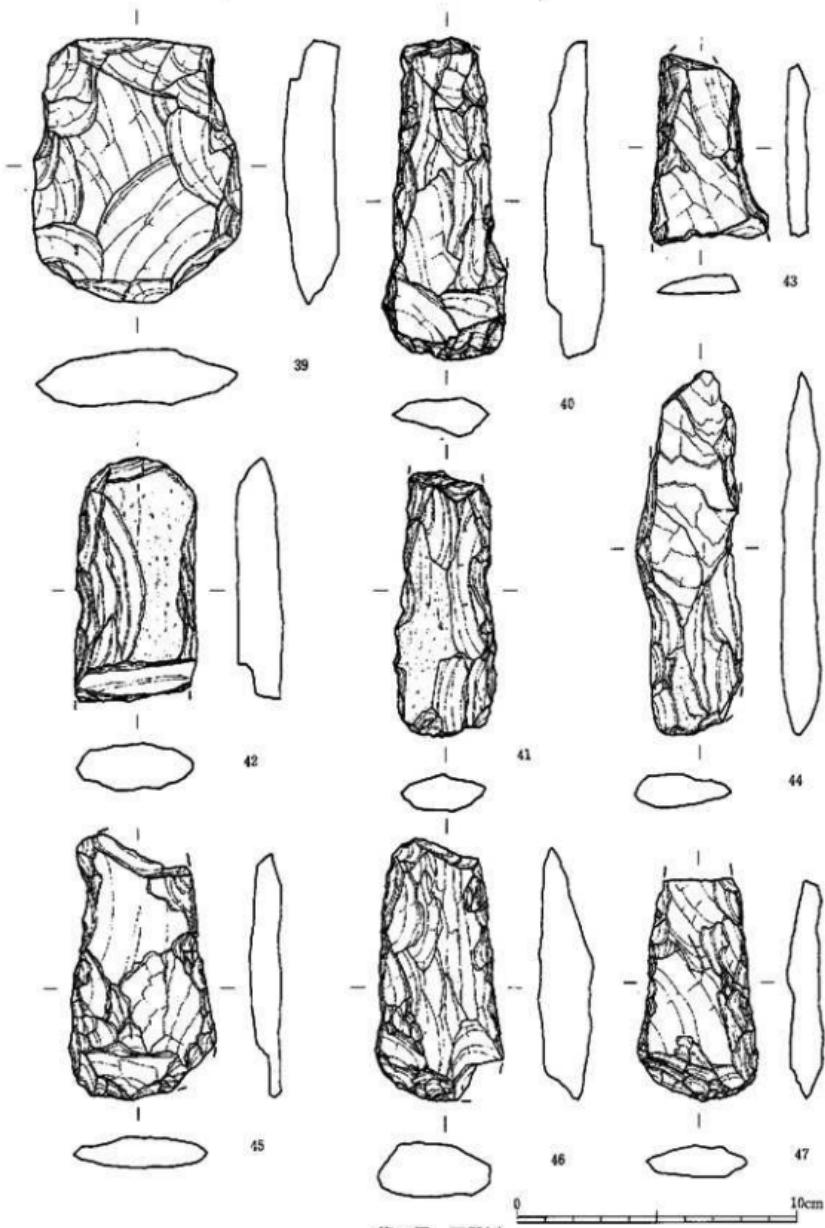
0 5 cm



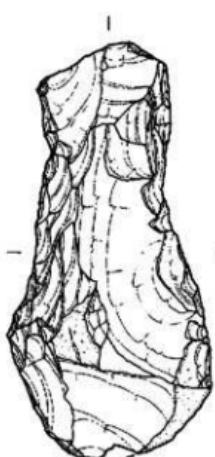
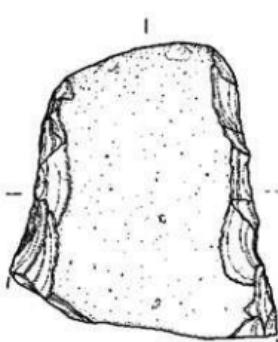
第82図 石器(2)



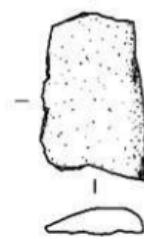
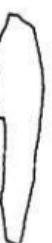
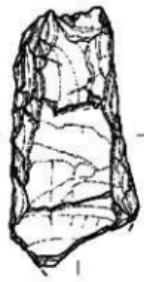
第83図 石器(3)



第84図 石器(4)

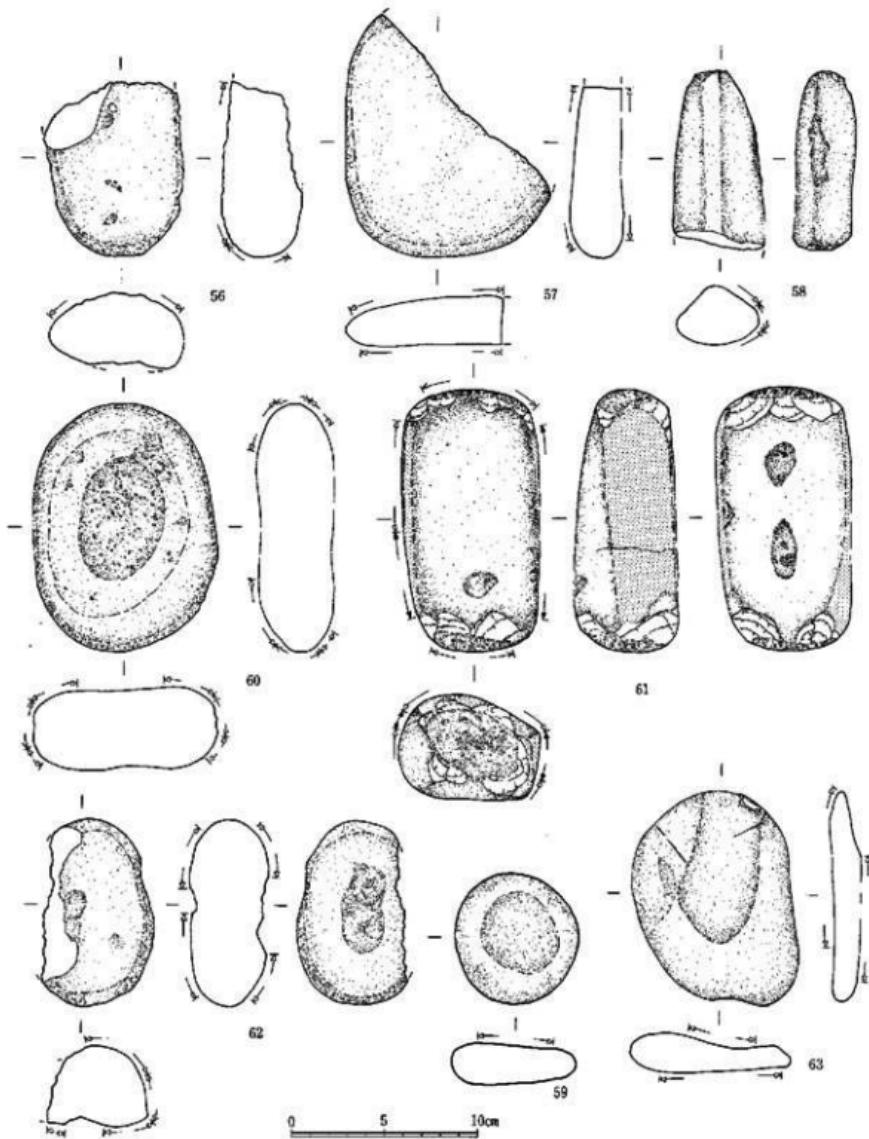


54

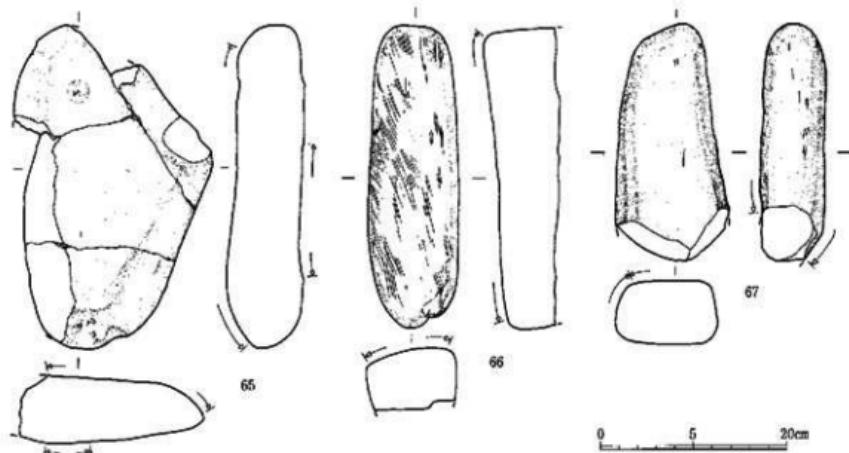
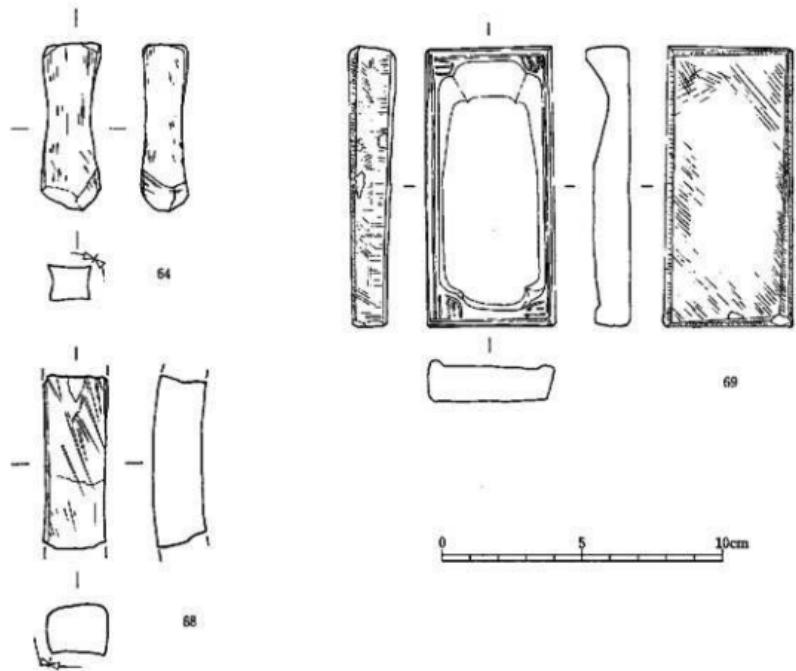


0 10cm

第85図 石器(5)



第86図 石器(6)



第87図 石器(7)

### 3 鉄器・銭貨

検出された鉄器・古銭は19点で殆どが土壤より単独出土している。1は長さ42.5cmの大きな鉄鋸で、古墳時代の第14号住居址より出土したものである。ただこの住居址のすぐ南には方形馬溝墓があり、あるいはその遺構のものが混在したということも考えられる。鉄鋸は明らかに鍛造時に用いられたものであるが、鉄封以外鍛造に関するものの出土がない。鉄鋸は長野県内では飯田市竜丘古墳群<sup>(1)</sup>と佐久市の周防畠遺跡（H2号住居址、平安時代）<sup>(2)</sup>からの2例が見られる。この2例の鉄鋸の大きさは37~38cmで本址の方がやや大きい。刃部と柄部のバランスを見ると、竜丘例に似ているが、刀と柄との比率は本址例が1:2であるのに対して、竜丘例では1:1.6である。刃部の先端は握りやすく幅広に作られ、柄部分は四角であるが、先端に行くにしたがって丸くなる。現状では刃部が中心部より大きく反りかえって曲がっている。2~6は釘状のものであるが、確實に釘と言えるものは4・5である。4は頭が丸く現代の釘と似た形であり、5は角釘で頭も四角い。6は上部2cmあまりまで中空のもので煙管の吸い口状をしているが、用途不明である。7は鎌の先端部で古墳時代のものと言えよう。8も同様の鎌とも見えるが、断面は扁平である。9は穴の開いた薄い板状のものであるが、形状・用途不明である。10は扁平な鉄板で鉄製矢ともいえるが、一端は丸みをもって、やや反っている。他方の端も切損時に曲ったものか角が反っている。用途については不明である。

古銭は9枚出土しているが、1枚は劣化が激しく図示できない。11~14は図示出来なかった1枚と共に六道銭として用いられたもので、土壤623より出土している。図Noの順に銭名を並べると、政和通宝、元祐通宝、至元通宝、政和通宝、図示できなかった1点は元豊通宝らしい。何れも火がかかるでいる。15は元〇通宝で土壤640出土。16は元豊通宝で土壤642出土。17も元豊通宝で土壤667出土。18は熙寧通宝で土壤708出土である。土壤については墓址と見ているので、これらの鉄器・古銭は埋葬時に死者とともに葬られたものと考えられる。釘類については木栓等木製品に使われていたものであろう。土壤の多さに比して、遺物の少ないことが特記される。

(1) 土屋長久「周防畠遺跡」長野県佐久市緊急発掘調査報告書 1980 佐久市教育委員会

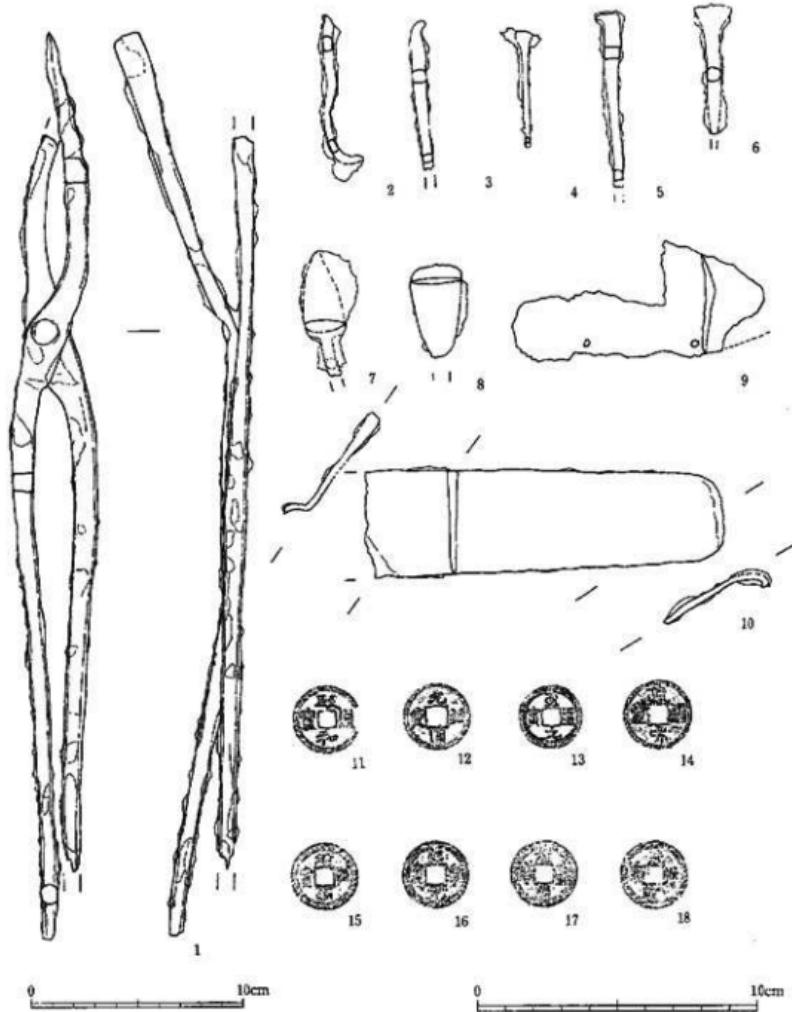
(2) 岩崎重也・松尾昌彦「長野県史・考古資料編 第一巻(四) 説明・遺構」1988 長野県史刊行会

なお、これらの資料については官下総司氏から表示をうけた。

## 鉄器・古銭

表5

図 No.	出 土 遺 物	種 別	寸 法(cm)			重 量 (g)	備 考
			長 さ	巾	厚 さ		
1	14号住居址	鐵 鋸	42.5	41	1.4	345	一方両端欠失
2	10区	釘状鐵器	(5.9)	< 0.6 >	< 0.4 >	(5.0)	
3	土壤251	#	(5.3)	< 0.5 >	< 0.5 >	(3.3)	
4	土壤621	釘	(4.1)	< 0.25 >	< 0.2 >	2.0	
5	土壤703	#	(6.2)	< 0.6 >	< 0.45 >	6.8	
6	土壤263	不 明	4.5	0.5	0.5	6.1	
7	豎穴3	鐵 銭	(4.5)	(身1.3) (茎0.4)	< 0.4 >	7.2	
8	16号住居址	#	(3.2)	< 1.9 >	< 0.15 >	4.4	
9	土壤716	不 明	8.9			10.0	形状については全く不明
10	土壤357	鐵 板	(12.7)	< 3.8 >	< 0.4 >	(51.7)	
11	土壤623	古 銭					政和通宝
12	#	#					元祐通宝
13	#	#					聖元通宝
14	#	#					政和通宝
	#	#					元豐通宝か
15	土壤640	#					元祐通宝
16	土壤642	#					元豐通宝
17	土壤667	#					#
18	土壤708	#					熙寧元宝



第88図 鉄器・銭貨

#### 4 土壙353出土の人骨について

**埋葬状態：**出土した人骨は頭部・胸郭部分などが全く欠失し、骨盤から下肢を主に残存する。最下方に骨盤が位置し、骨頭を同一レベルとする大腿骨・脛骨（左）が膝関節で強く屈曲され、土中で直立した形をとっている。右の下肢はやや散乱するが、胫骨下部に足骨が左右混在して一括されることから、両下肢は同じ状態で揃えられたものと判断される。手骨はこれらの骨の側方に集中するが、上腕骨はかなり東方に離れた位置で出土し、しかも同一骨の断片がさらに四散した箇所で発見されている。また2本の歯がこれらの骨のやや南寄りでレベルも浮上した遊離歯として出土している。頭蓋骨や脊椎骨・肋骨など個数の多い骨の残存が全く認められないことは、或る時期にかなり画然とした切り取りや搅乱が行なわれた可能性もあり、判断し難いところである。残された各骨の位置で見る限り、坐位臥葬の埋葬位が推定される。

**各骨の形状：**すべての骨は骨表面の剥落が生じ、海綿質の露出が崩壊を早めている。

歯一下顎左第3大臼歯（智歯）、歯冠が残り、冠内に歯根の一部が付着している。咬頭にわずかな咬耗を認める。他は上顎第3大臼歯と見なされるものであるが歯冠のみで一部を欠いている。上腕骨一左、骨体の下半分で滑車の一部を欠く。手骨一舟状骨・有頭骨・大菱形骨などと第1中手骨（いずれも右）に若干の指骨が残る。寛骨一右、寛骨臼とその周縁部分。左もほぼ同様であるがやや大きな断片である。寛骨臼は広く、坐骨結節は強度に発達し粗糙性に富む。大坐骨切痕の鋭く深い形態は極めて男性的な特徴を示す。仙骨一破砕された細片で一括されている。大腿骨一右、骨頭・骨幹・遠位関節部と離断するが、ほぼ原型を保つ。左、大転子や内・外側上頸を欠くが、全体の形狀を残している。骨体は伸直で頑丈な形態である。しかし、粗線や歯槽粗面の発達は中等度で、外側頸上線も弱い。骨体中央横断示数は103.5でピラステルの形成はかなり弱度、同上部横断示数73.5は超広型に属し、前後の扁平性が著しく強い傾向を示す。胫骨一右、左ともに胫骨粗面を欠くがほぼ完存する。比較的頑丈な形態である。前縁は直状であるが鋭くなく、各縁も鈍で、ヒラメ筋線の発達は極めて弱度である。栄養孔部横断示数67.7で中脛であり、同中央横断示数70.0は正脛に属する。腓骨一右、骨体中央部分のみ。左、腓骨頭の一部を欠くが完存する。足骨一距骨（右、左）、蹠骨（左）、舟状骨、楔状骨（内・中・外側）、立方骨はすべて左。第1中足骨（右、左）、その他若干の指骨が残存する。

**結語：**本人骨は両側下肢を主に残し、膝を屈曲・直立させた姿勢を保つが、上半身の部分の骨が悉く失なわれ、墓壙内での本来の埋葬状態は明確でない。残された骨の形質や第3大臼歯の咬耗の程度から壯年期以降の年齢が推測される。長骨の頑丈さや、大坐骨切痕の形態からは明らかに男性とみられる。しかし、筋附着部位の発達は極めて弱度で、下脛筋群はさほど発達していなかったものと考えられる。

大腿骨の形質のなかで骨体横断示数をみると、上部横断示数（右）が73.5で著しい扁平性を示す。

中世（鎌倉材木座）では78、江戸時代（湯島無縫板）78、現代日本人（中部地方）で83とされ、この形質が消失していく過程で、本例の場合は同部の矢状径がほぼ通常なのに比して、横径の値がかなり大きいのが要因である。なお、この形質は繩文時代人では扁平性と柱状形成が相伴なうという特徴が顕著で、以後、柱状性が消失する結果となるが、本例の中央横断示数103.5は弱度で柱状形成は殆んど失なわれている。胫骨の骨体横断示数は坐骨孔部で67.7、同中央部で70.0を示し、前者で中脛、後者で中脛と正脛の中間の値を示し、扁平胫骨の範囲には入らない。一般的に扁平胫骨は扁平大腿骨に伴なう傾向があるとされるが、本例の場合は大腿骨の扁平性のみ残るのが特徴的である。しかし、他の項目では、おおむね現代日本人より大きな数値を示すが、形態の頃丈さによる結果とみられる。大腿骨（右）からPearsonの公式による推定身長は160.3cmとなる。

本人骨の残存程度はかなり良好で、細かな骨まで保存され、その形質は現代日本人に通じる特徴もみられ、断定できないが、近世以降の比較的新しい時期の埋葬人骨である可能性が高い。

信州大学医学部第二解剖学教室

西沢寿光

#### 参考文献

- 高橋誠 現代日本人腿骨の人類学的研究（英文）、人類学報83:3 1975  
 同上 現代日本人腿骨の人類学的研究（英文）、信州医学雑誌14:2 1969  
 香原志勢 四肢骨特に大腿骨の形質、鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨、1956  
 香木若太郎 江戸時代人の骨、季刊考古学13、1965

表-1 大腿骨計測値と比較資料

大 腿 骨			
	土 壤 353(mm)	中 世(鎌倉) 平均値(mm)	現 代(中部) 平均値(mm)
最 大 長(1)	420	417.1	409.6
中 央 矢 状 径(6)	30	27.3	27.8
中 央 横 径(7)	29	26.5	26.6
中 央 周(8)	93	84.5	85.3
上 横 径(9)	34	31.3	30.5
上 矢 状 径(10)	25	24.2	25.2
中央横断示数(6/7)	103.5	104.9	104.8
上 横 断 示 数(10/9)	73.5	77.9	83.0

表-2 胫骨計測値と比較資料

胫 骨		
	土 壤 353(mm)	現 代(中部) 平均値(mm)
全 長(1)	344	325.7
中 央 矢 状 径(8)	30	29.0
當 隆 部 矢 状 径(8a)	31	33.2
中 央 横 径(9)	21	21.3
當 卷 孔 部 横 径(9a)	21	24.0
骨 体 周 径(10)	80	78.7
當 卷 孔 部 周 径(10a)	85	89.0
中 央 横 断 示 数(9/8)	70.0	73.6
當 隆 部 横 断 示 数(8a/8)	67.7	72.9

※ 香原志勢 (1956)

※※ 高橋 譲 (1969, 1975)

## 第4章 結語

向畠遺跡は丘状の台地上に位置しており、向畠古墳群の一部でもある。今回の開発整備事業に伴う第1次調査の総面積は5200m<sup>2</sup>であり、県道建設工事に伴う発掘調査を加えると総面積は8100m<sup>2</sup>に及び、調査で確認された遺構は竪穴住居址48、竪穴状遺構6、古墳2、方形周溝墓1、土壙941基、溝18、特殊遺構1になる。時代的に見ると縄文時代中期・古墳時代前期・中期・平安時代・中近世に亘っている。以下主な遺構を簡単に記述していく。

1. 竪穴住居址 縄文時代中期の11号住、古墳時代中期の15号住、住居址でない可能性が高い39号住を除いた他の45軒は古墳時代前期に属するものである。全体図(付図)を見ると調査地全体に平均的に分布しており台地上の平坦地に広く形成された様相を呈している。古墳時代前期の住居址で炉を伴うものは16軒、そのうち床炉13軒、埋甕炉4軒で、縁石埋甕炉は2軒で確認された。位置的には柱穴間が11軒、中央にあるものが5軒である。埋甕はすべて柱穴間に位置している。土柱穴間を確認できたものはほとんどが4本柱で、隅丸長方形を呈する37号住のみが6本柱であった。特徴的な施設が認められたものでは、30号住にベッド状の段があるがその性格はわからない。床面・施設等から、改築の痕跡が認められるものには、13、17、40号住の3軒がある。焼失住居と断定できたものは40号住1軒であるが、12、44号住もそうであったかも知れない。本遺跡北、ほら貝山の北西端にある弘法山古墳を作った人達の生活基盤がまだつきとめられていないので、本遺跡の発掘成果が何かの手掛かりとなって、解明の糸口になればと思っている。今回の調査に引き続き、63年度に実施された第2次調査の整理が終了した時点で考えたい。

2. 古墳 向畠古墳群はカニ沼沢に沿って延びる丘陵状に東西に連なり、西側は坪の内古墳群に続き、尾根の先端で南に回っていると見てきたが、今回の2基の発見により東端も南に向かっていることが判った。

また第2次調査では新たに5基が発見され、このうち1基は丘陵から離れた南斜面に確認された。従来考えられていた丘陵上ばかりではなく台地の斜面にまで分布が及んでいたことになる。遺物より向畠6、7号古墳は5C後~6C初めのものと思われるが、造営者の生活基盤はまだつきとめられておらず、今後の課題である。

3. 土壙 向畠遺跡を代表する遺構であり、縄文時代中期・古墳時代前期・中~近世に亘る。中近世の墓址が殆どであるが、配石、封土等は確認されなかった。前項で詳述した様にいくつかの集水域と、その中に墓道と思われる空地を検出出来たことは大きな成果であった。尚第2次調査でも今回の調査区域西側約10,000m<sup>2</sup>を調査し、やはり中近世の墓址を含む多数の土壙を検出している。

発掘調査にあたっては松本建設事務所、中山土地改良区、中山公民館等関係者の方々にご協力頂いた。また松本市文化財審議委員桐原健氏、東京大学史料編纂所千々和利氏、長野県史編纂委員井原今朝雄氏他多くの方々にご教示頂いた。記して謝意を表します。

1982年、島田哲男氏は井戸尻縄年に基き、松本市牛の川・西堀遺跡の出土土器を分析、松本平Ⅰ期～XⅢ期の変遷を設定された。そのうち縄文中期初頭については、松本平Ⅰ期（九兵衛尾根Ⅰ式）、Ⅱ期（九兵衛尾根Ⅱ式）に分けられたが、当時良好な資料に恵まれなかつたため、Ⅰ期は空白期、Ⅱ期は前半の様相が不明となっており、資料増加が待たれていた。

その後、1987年林山腰遺跡・向畠遺跡・前田木下遺跡、1988年向畠遺跡Ⅱと中期初頭の遺構・遺物の調査が相次ぎ、松本平Ⅰ・Ⅱ期の空白を埋め得る良好な資料が整ってきたと言える。また近年、当該期の土器研究も飛躍的に進歩し、從来混亂を招いていた既存型式が整理され、その系統、変遷が明らかになりつつある。

ここでは、近年最も整理がなされている三上徹也氏の研究成果に基き、西堀・林山腰・向畠・前田木下遺跡の資料を主に用いて、松本平の中前期初頭土器について考えたい。変遷は大きく4段階となり、第1段階は三上徹也氏のI段階（今村啓爾氏の五領ヶ台Ⅰ式）、第2～4段階はIIa～IIc（五領ヶ台Ⅱ式、神谷原・大石式）に相当する。尚第1段階については、未だ資料が少なく、表採品も含んでいる点をおことわりしておく。

#### (1) 第1段階（第89図1～9）

林山腰土壙51出土資料他が挙げられる。器形・文様帶のあり方により縄文系・沈線文系の2者に分類される。これは各段階とも同様で、後者は踊場系とされた一群である。

#### 縄文系土器（5・3・8・9）

①器形 深鉢、鉢が存在する。深鉢は3に代表される2段ないし1段くびれるキャリバー形と、9の様な円筒形がある。前者の胴部は裾でやや張り出するものがある（5）。2段にくびれるキャリバー形は、文様帶のあり方により、下段のくびれが口頸部とも胴部とも受けとれるが、ここでは胴部としておく。尚キャリバー形には4単位の波状口縁をもつものも存在する。鉢は林山腰で1点知られる（8）。口縁部が直立しないしやや内湾し、小径の平底をなすものである。

②文様 口縁部の細線文、胴部の縱位帶縄文が特徴的である。文様帶は基本的に口縁部2段、胴部1段に分かれ、横位に展開される。口縁部上段は縱位に細線文が施され（3・8）、時に格子目となる事もある。8は口唇に爪形文を施している。9は横位に縄文を施し、新しい様相と考えられる。下段は細線文と三角印刻文の組合せや、山形押引文、瓦状押引文ないし半載竹管先端による刺突文（3・9）が充填される。下段～胴部にかけて、橢状把手が4単位付加されるのも特徴である（3）。胴部は地文として、西堀ないしは片縁に結節をもつ縄文を縱位に並転する。縄文帯の間隔は十分にとり、羽状縄文も存在する。施文は肩上部に行われ、口縁部と同様細線文や平行沈線・三角印刻文の組み合せによる区画文や、「Y」字状文（8）が多く見られる。5は底部付近まで、平行沈線による区画が見られ、細線文による格子目文上に三角印刻文や逆「U」字形の構図が描かれる。

## 沈線文系土器（1・2・4・6・7）

①器形 全形の判明する資料はない。大きく外開する頸部に、「く」の字形に内屈する口縁部が取り付くものである。頸部の形態は6の様にストレートなものである。

②文様 いわゆる「集合沈線文」を特徴とする。文様帶は口縁部、頸部、胴部に3分される。各文様帶内へは、半截竹管状工具により縦位、斜位、格子目、羽状、山形、瓦状押引等の平行沈線が充填される。口縁部文様帶は格子目（1）、斜位沈線（4）、瓦状押引文の他、羽状沈線も見られる（2）。口縁部には突起が1単位付加され（4）、口唇部に八形文を施すもの（7）も多い。1の格子目文は斜位沈線上にソーメン状の粘土紐を貼付して描出し、古い手法と言える。推定4単位の櫛状把手を有する点は、繩文系の要素と考えられる。頸部文様帶は斜位（2）ないし縦位（1・4・7）の平行沈線文が施される。縦位の場合密に行うものと間隔をおくもの（1・4・7）があり、後者は地文に繩文を施すものが多い（1・7）。胴部文様帶は3分帶の構成となるものが多く、上2分帶には格子目文、山形文が多く描かれる。最下段は縦位の構成となり、縦位沈線、山形文、羽状文等が施されるようである。6は雑な施文だが、胴部全体が縦位の構成と考えた方が良さそうな土器である。

以上、本段階の土器は出土例が未だ少なく、松本平での様相は判然としない。本段階内の新旧は、ソーメン状粘土紐貼付の見られる1がより古い段階、口縁部に帯繩文の施される9を新しい段階に位置づけることができよう。沈線文系・繩文系の共伴関係は、林山腰遺跡土壙51で捉えられる他は、一括資料が見られない。

## (2) 第2段階（第89図10～19、第90図20～37）

林山腰遺跡上壙21等遺構内・括資料が多く出土している。

### 繩文系土器（10～12・18・20・22・24～35・37）

①器形 前段階同様キャリバー形と円筒形の深鉢が見られる。前者は2段にくびれるもの（18）が減り、後者はその量を増す。波状口縁（19・25）も存在する。底部の張り出しある少ないとある。

②文様 口縁部の直繩文が特徴的である。文様帶のあり方は前段階と同様である。

口縁部文様帶は上段に細線文に代わって横位繩文が施されるが、八形文（10-37）、無文（18）もある。又、口唇部に刻目を入れるものも多い（11・12・18～20・31）。上下段の区画は平行沈線、単沈線で行われ、後者には刻目が施される場合が多い。（11・12・18・21・28・32）がこれは三角印刻文の変化と考えられる。下段の文様帶は基本的に無文となる。櫛状把手や貼付突起がしばしば見られる（10・11・16・20・25・26・27・28・35・37）。一方施文されるものも少數あり（22・35）、胴部と同様の文様が展開されるようである。35は地文に細線文を用いている。頸部との境には隆帯が横走するものが多く見られ（10・12・20・22・25・27・28・31・33・35）、突起を4単位貼付する（18・19・21・22）。胴部文様帶は「Y」字状文及びその変化と考えられる弧線文（10・14・18・22・33）の他、横帶区画内に玉抱き三叉文（27・28）、鍵形・菱形・「B」字文等の構図を描くもの（12・35・

37) も存在する。無文となるものも多い (20・24・31・32)。地文の縄文は隙間なく施されるようになる。尚33は4単位の懸垂隆帯を有しており、新しい要素として捉えられる。

以上その他、全く施文されない一群も少数存在する (29・30・34)。

#### 沈線文系土器 (13~17・19・36)

良好な資料がなく、図示したものの多くは縄文系・沈線文系の両要素をもつ土器である。

①器形 基本的には前段階と同様で、「く」の字形に屈折する口頭部及びストレートな胴部形態を呈する (14)。13は屈折部を省略した形態と言えるが、他はキャリバー形を呈し縄文系の器形と言えよう。

②文様 文様帶のあり方は第1段階と比べ大きな変化はない。口縁部文様帶は格子目文・斜線文・瓦状押引文ないし結節平行沈線文 (14) が見られる。口唇部の爪形文もある (23・36)。頭部は縦位ないし斜位の平行沈線が施される (14・15・16・23・36)。頸～胴部の区画は隆帯で行っている (14・16・36)。胴部文様帶は下段の縦位施文が拡大され (13・36)、36では懸垂隆帯が付される。一方上位1段のみ施文され下段が省略されるものも多い (16・19・21)。区画内は格子目文 (13)・縦位平行沈線文 (16・19・21・36) が充填される。

本段階内での新旧は、10の三角印刻文、13の胴部文様帶区画が3段である事等、向畠遺跡上層10出土資料に古い様相が窺え、逆に林山腰遺跡出土資料、特に土壤21の一括資料中、33・36に胴部縦位懸垂隆帯が存在、新しい様相を示すものと捉えられよう。

#### (3) 第3段階 (第91図38~48、第92図49~54)

兩堀遺跡II次土器一括発掘資料が挙げられる。沈線文系土器及び浅鉢は続く第4段階との差分が出来ない。従って本段階で述べることとする。

#### 縄文系土器 (38~43・49~53)

①器形 浅鉢はキャリバー形と円筒形が認められるが、両者に胴部の膨らむものが存在する (39・41~43)。浅鉢は直線的に強く聞くもので、内面の肥厚部に施文される。

②文様 口縁部の半沈線による弧線文が特徴である。口縁部文様帶は上段の幅が狭くなり、横位施文は下段へも施文される。42は縦位に捺糸文を施している。下段の弧線文は2段階の胴部弧線文の転移と考えられ单沈線3条を一束とし、上向きに施文される。弧線の谷には玉抱き三叉文が例外なく施される。上下段を区画する横位沈線は、刺突を施すものが減り、弧線文との間に交互に行う連続「コ」の字文となる (40・41・43)。38は下向きの弧線文が描かれるもので、前段階27・28からの変化が考えられよう。円筒形土器は口縁部文様帶が省略傾向にある (39~41)。胴部の文様帶は隆帯ないし沈線の4単位の懸垂文が一般化する (38~40)。懸垂隆帯の上端には、「Y」字状文の変化したと考えられる「V」字状の貼付 (40) ないし「Y」字状に施されるものが存在する。区画内は頭部の横走隆帯に沿って2~3条の沈線文が施される程度のものと、41の様に弧線文が施文されるものがある。

この他、無文の土器群（49～51）が前段階同様存在する。浅鉢は口縁部内面肥厚部分に3条前後の幅広の結節沈線文が施文され、連続「コ」の字文や三叉文が時に付加される。波状口縁も存在する。

**沈線文系土器（44～48）**

資料が少なく、第4段階との細分もできない。前田木下遺跡2住出土資料を呈示する。

①器形 深鉢は前段階の形態を基本的に継承するが、口縁部の内折は幅が狭くなり、頸部も同様に短くなる。肩部はストレートなものと、上位の張るもの（45・48）が存在する。尚47は口頸部が省略され、本段階以後多く見られるものである。

②文様 文様帶のあり方は口縁部・頸部・胴部の3段に分別される。口縁部は上下に爪形文を施す太い隆帯を有し、狭い区画内に連続「コ」の字文を行う。施文されないもの（48）や、内折部分が省略される形態も存在する。又、隆帯による4単位の突起が付されるのも特徴的である。

頸部は縱立の平行沈線文、格子目文（48）が施文される。44は逆「V」字形の区画内に格子目文を行っている。胴部文様帶は縄文系同様、4単位の懸垂文が顯著となる（46～48）。これらは隆帯で行うもの（47・48）と数条の平行沈線によるものがあり、後者には連続「コ」の字文が伴う（46）。47は隆帯上端が「Y」字状になり、地文、突起とともに縄文系との関連を思わせる。区画内には横位の文様帶が描かれるが、これは前段階の13・16等が懸垂文により分断された形となる。1～2段の区画を行うものと多段に行うものがあるが、上段には斜線文（47）や格子目文（45）、横位平行沈線文（45）が多い様である。45・48の様に逆「U」字形ないし「コ」の字形の区画を行うものも頗るある。又横位平行沈線文には連続「コ」の字文が付加されるものも多く存在している。

第3段階の資料は、縄文系・沈線文系の二者がまとまって出土した例がない。雨堀遺跡IIは前者が主体で、後者は少量伴っている。前田木下遺跡ではその逆である。

#### (4) 第4段階（第91図44～48・第92図49～65）

兩堀遺跡I次B1住、同II次一括土器廃棄資料を呈示し得る。

#### **縄文系土器（55～65）**

①器形 深鉢・浅鉢がある。深鉢はキャリバー形の口縁部が狭くなり、円筒形は口縁部が外反する。56・57は特に顯著である。両者に波状口縁が見られる（56・57・64）。浅鉢は前段階同様で、54は外傾する口唇に角押文が施文されている。

②文様 キャリバー形土器は口縁部の弧線文が隆帯により描出されるが、良好な資料を呈示し得ない。一方新しい手法として、口縁部に「T」字状文や角押文を用いるものが存在する（58・60・64・65）。これらの頸部には狭い横凹区画文が見られ（55・58・60・64）、懸垂隆帯がクランク状になるものが現れる（58）。円筒形も同様で、38の弧線文の変化と考えられる63は隆帯化・重三角区画文化している。59・62は横円区画文・「Y」字状の懸垂隆帯が見られる。口縁部文様帶は縄文が顯著（56・59・63）だが、62は角押文による斜位沈線、57は部分的に押引を施す单沈線により玉抱き三叉文を描く。これらの土器には金雲母を多く含むものを見られる点も特徴的であろう。

**沈線文系土器** 前段階で呈示した。雨堀Ⅰ次B1住では口縁部の内折が省略されたものが破片で出土している。

本段階も、沈線文系、縄文系の良好な伴出資料を欠く。しかし縄文系が主体的ではあるが、確実に沈線文系も伴っている。資料の一括性としては雨堀Ⅰ次B1住が良好だが弧線文ないし重三角区画文の系列が欠除している。

以上各段階を概観してきたが、最後にまとめとして松本平の地域性について問題点を列記する。

- ①第1段階 資料不足ではあるが、塩尻市竜神平、女夫山ノ神遺跡資料も含め検討すると、沈線文系の頸部綫位平行沈線文が間隔をおき、縄文地文となるものが顕著である点（1・4・7）。
- ②第2段階 a 沈線文系が少なく、多くが縄文系との折衷で存在すること。b「B」字文等が縄文系に顕著である事。
- ③第3・4段階 第2段階に増して沈線文系が極めて少ない。但し前田木下遺跡は例外的だが、一部の調査のため全容は不明である。
- ④各段階を通じ、在地の系統の中に撚糸文や反撚、付加条等の原体を地文にもつものが抱地域より多い事。

以上の諸点のうち、①・②b・④については、当地域が地理的に北陸に近く、北陸地方の朝日下層式・新保式の影響が強いという点で理解されるのではないだろうか。ちなみに①・②bについては、朝日下層式や新保式に多く見られるようである。

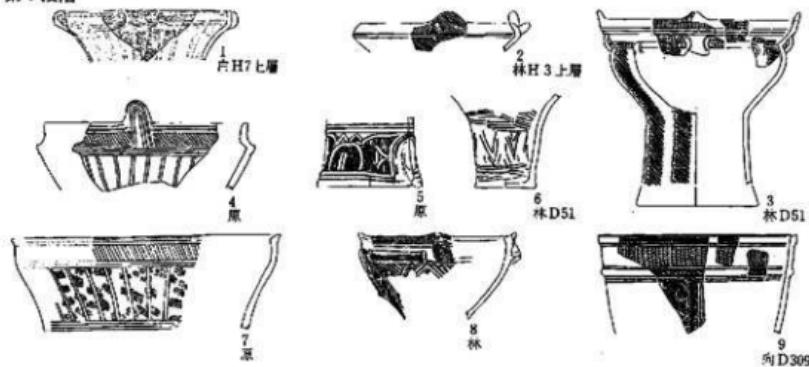
②a・③については、八ヶ岳山麓の大石遺跡等とは全く逆であるが、同じ八ヶ岳山麓および諏訪湖盆地の頭殿沢遺跡や船蓋社遺跡は大石遺跡程顕著ではない。遺跡毎の差異が激しいが、統く平出3類Aの分布域の北段が松本平である点を考えれば沈線文系の減少も理解されるのではないだろうか。今少し各遺跡での実態を見る必要があろう。これらの点を除けば、松本平での中期初頭土器の変遷過程は、諏訪湖盆地や八ヶ岳山麓と基本的には同じ流れをたどると言えそうである。

まとめとしては簡略に過ぎるが、紙幅の都合もありしめくくりとしたい。 (竹原 学)

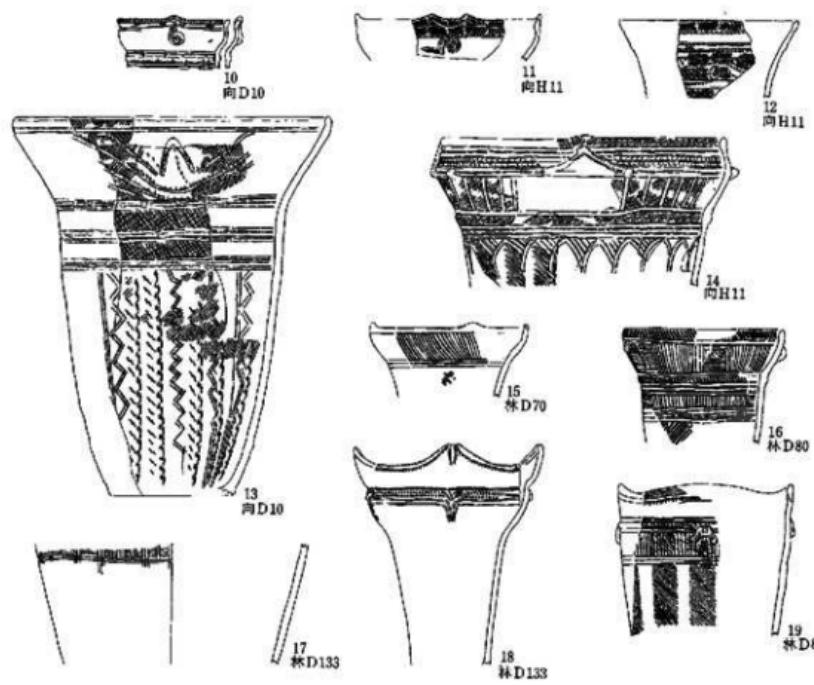
#### 参考文献

- 今村吉信他1972 「弓の足遺跡」、北國野古派人考古学研究会  
鳥取吉信 1982 「绳文時代小字における弓の足」「日本古代遺跡研究第一集2次一」、松本市考古文化センター  
上島義典 1988 「新保式土器 司馬」「新井良成記念文化財セミナー記録」、長野県考古文化センター  
井上 久 1985 「北アルプス東側の中段の遺跡—鹿角市伊那谷1号」、松本市考古文化センター  
山口 有 1990 「城北地区中期の墳土群における對立の火葬」、「対立土器の火葬とその背景」、岩国考古学会シンポジウム4  
山手伸子 1988 「五箇山・合川式土器特徴、「対立土器」火葬、第3章 中段」、小説版  
高橋善男発見者記録 1986 「高橋善男」  
和野敏哉市長記録 1976 「人吉遺跡」「御敷原小字遺跡」、昭和51年度  
同上 1980 「和野敏哉遺跡」、同上、昭和52・53年度  
同上 1981 「昭和8年調査」、同上、昭和51・52年度  
同上 1984 「高橋平遺跡」「中央近畿野原坂越式火葬の新古石」、昭和59年  
松手伸子山地研究部 1978 「女夫山ノ神遺跡調査報告書」、「みやま」、27、南  
資料出典  
日本考古学会会報第26号(昭和26年) 1951・23 (昭和26年) 1952・27 (昭和27年) 1953・34 (昭和28年) 1955・63 (昭和29年) 1958・62 (昭和30年) 1968

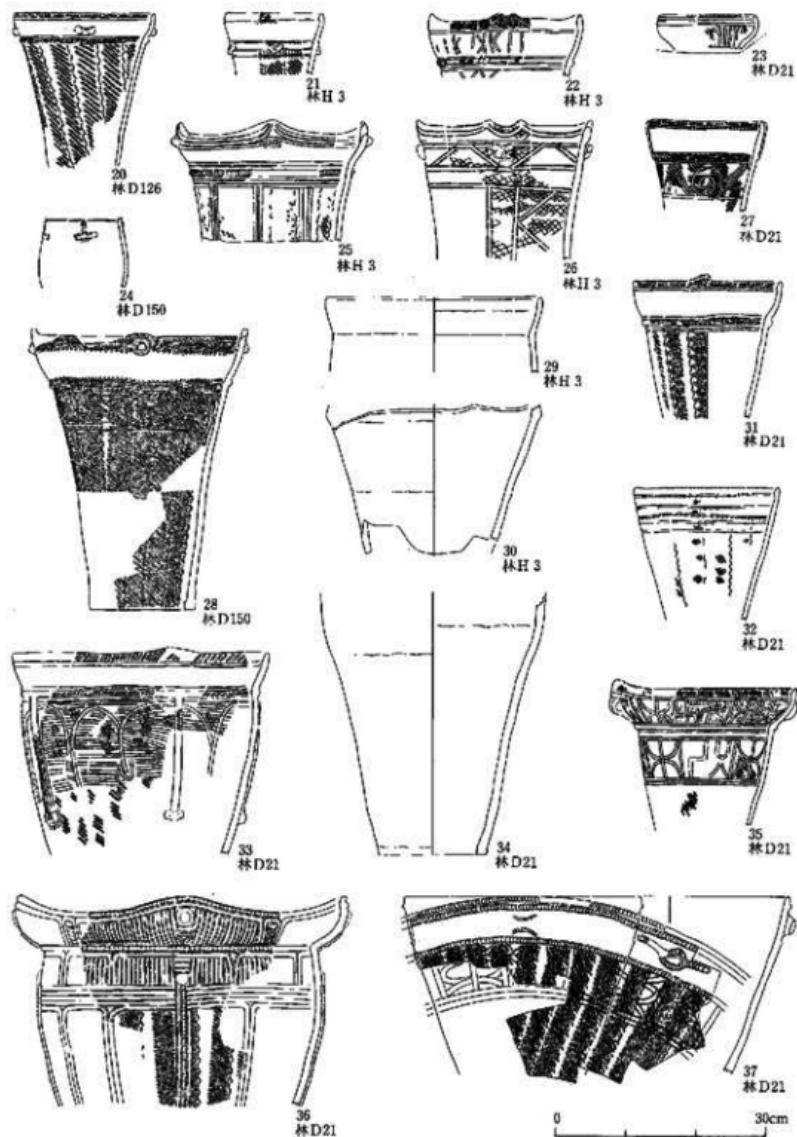
第1段階



第2段階

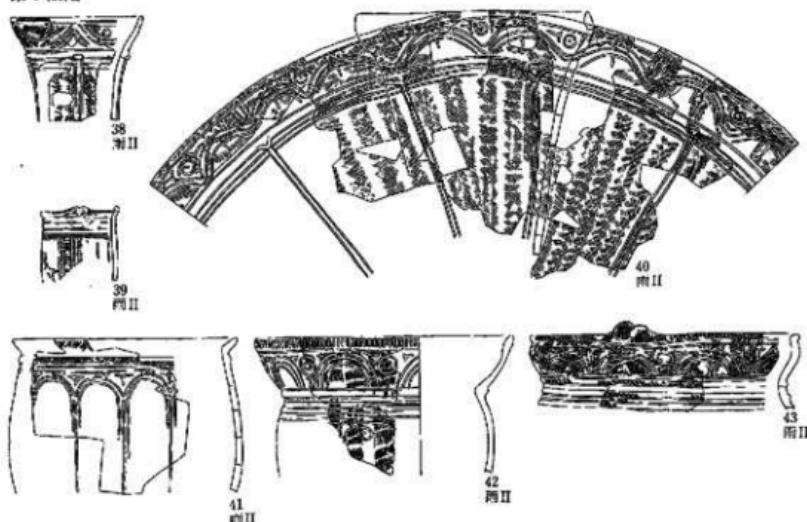


第89圖 繩文時代中期初頭土器集成(1)

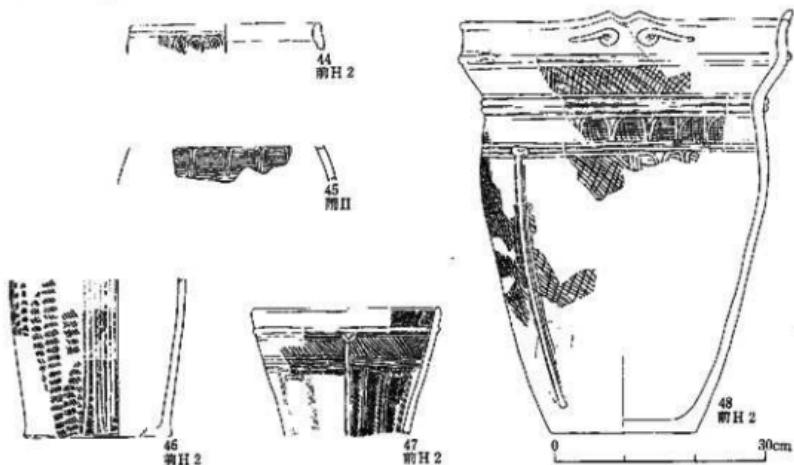


第90図 縄文時代中期初頭土器集成(2)

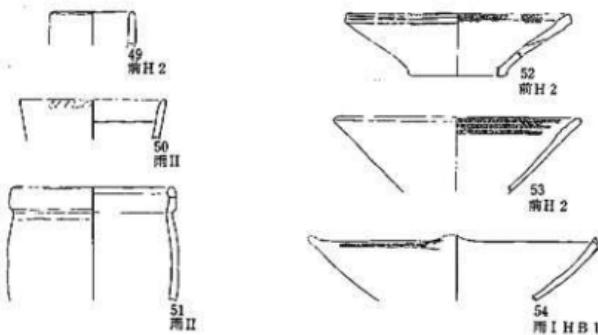
第3段階



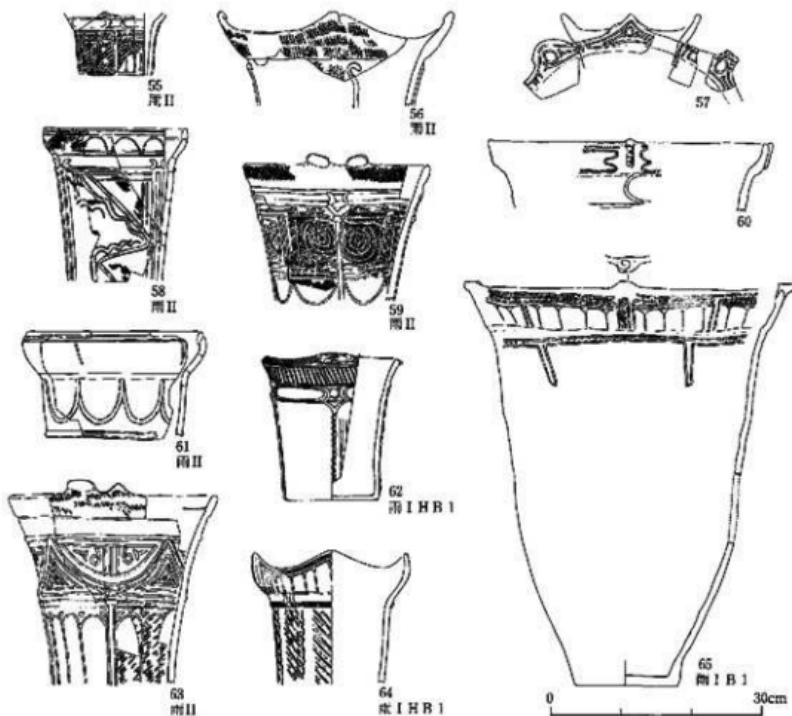
第3・4段階



第31図 繩文時代中期初頭土器集成(3)



第4段階



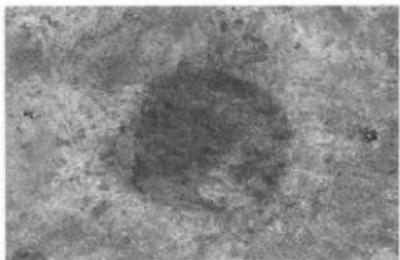
第92図 繪文時代中期初頭土器集成(4)

# 図 版





第1号住居址 地床炉をもつ



同地床炉 (100×60cm)



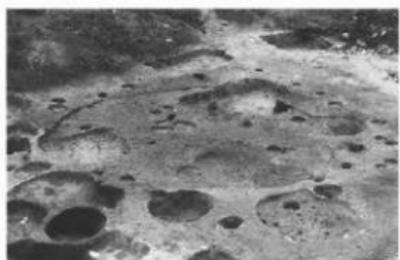
第2・5号住居址 手前が2号住居址



第3号住居址 地床炉をもつ



第4号住居址 床面に凹凸がある



第11号住居址 繩文時代中期



第13号住居址 貼り床を施している



第15号住居址



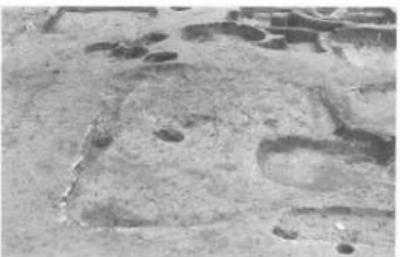
第16号住居址



第17号住居址



第18号住居址 間仕切りの溝がある



第19号住居址 不整形を呈している



第20号住居址



第21号住居址



第22-29号住居址



第29号住居址 遺物出土状況



第23号住居址 調査区域外へのびる



第24号住居址 4本の主柱穴がある



第24号住居址 縁石埋甕炉



同 埋設状態 壇と高環の壠部



第26号住居址 4本の主柱穴がある



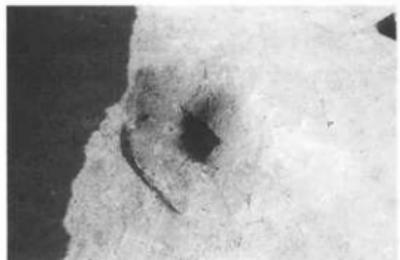
第27号住居址 周溝が巡る



第28号住居址 周溝が見える



第30号住居址 ベッド状の高まりがある



第30号住居址 地床炉



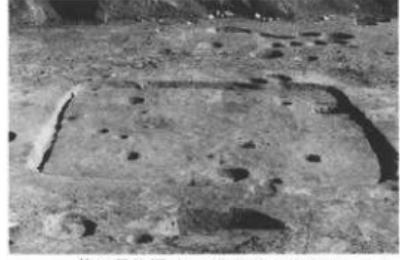
第42号住居址 放射状に拡がる炭化材



第40・42号住居址 古墳周溝に切られる



第44号住居址 炭化材が見られた



第45号住居址 2段堀りの貯藏穴がある



同 埋甕炉 周囲が窪んでいる



向畠7号古墳 墓丘は削平により消失



同 周溝 40・42号住を切る

第4回版



堅穴状遺構 2



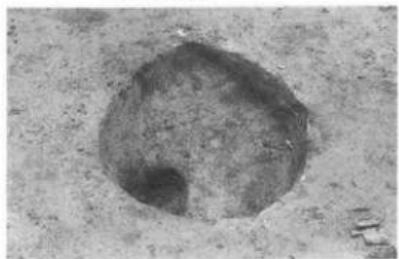
堅穴状遺構 3



堅穴状遺構 4



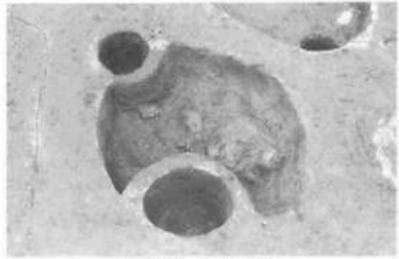
方形周溝墓 1



土壙335 繩文時代



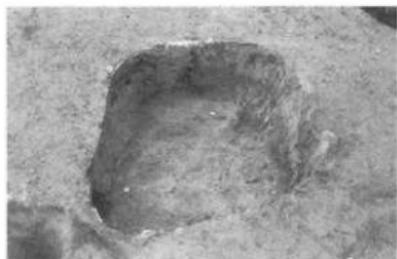
土壙794・795 繩文時代



土壙727 繩文時代



土壙305 繩文時代



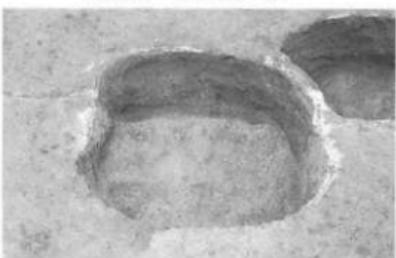
土壙642 中世以降の墓



土壙179 中世以降の墓



土壙301 中世以降の墓



土壙734 中世以降の墓



土壙278 中世以降の墓



土壙782 中世以降の墓



土壙634 中世以降の墓



土壙635 中世以降の墓

第6図版



土塚177 中世以降の墓



土塚680 中世以降の墓



土塚672 中世以降の墓



土塚738 中世以降の墓



13区 墓道(土塚間の空地)



10区 土塚群



10区 土塚群



10区 土塚群

第7図版



3



4



5



6



14



13

第8図版



2



7



3



4



11



13

第9図版



14



15



25



30



31



7

第10圖版



38



55



78



75



32



48

第11圖版



76



90



83



88



118

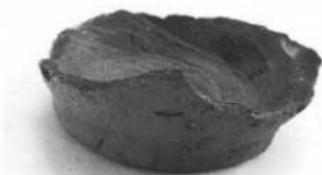


132

第12圖版



89



91



113



103



119

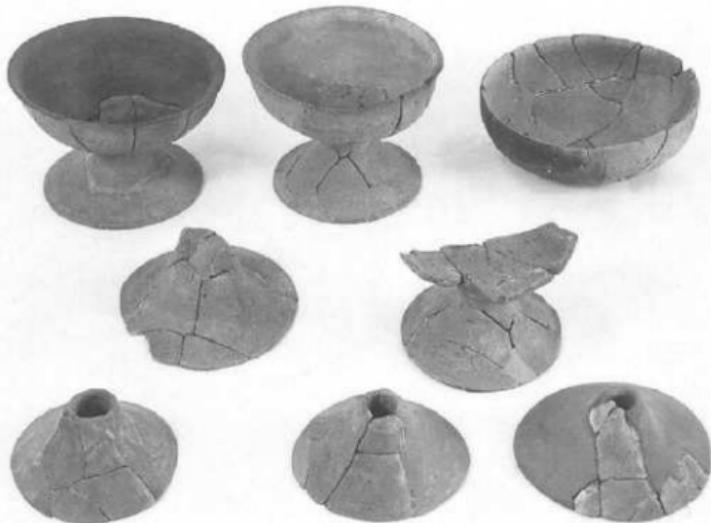


87

第13図版



7号古墳



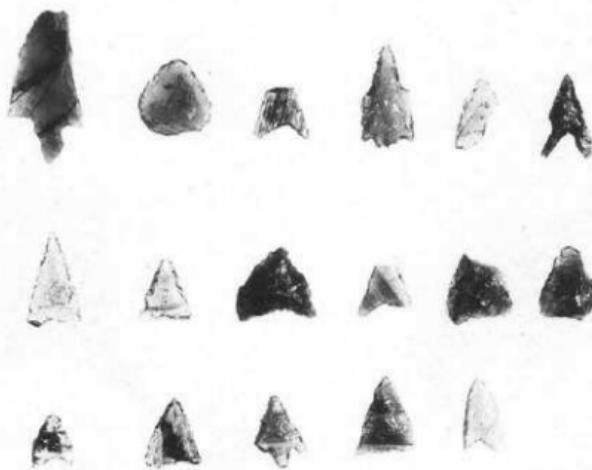
7号古墳周溝供献土器

第14図版



7号古墳周溝供献土器

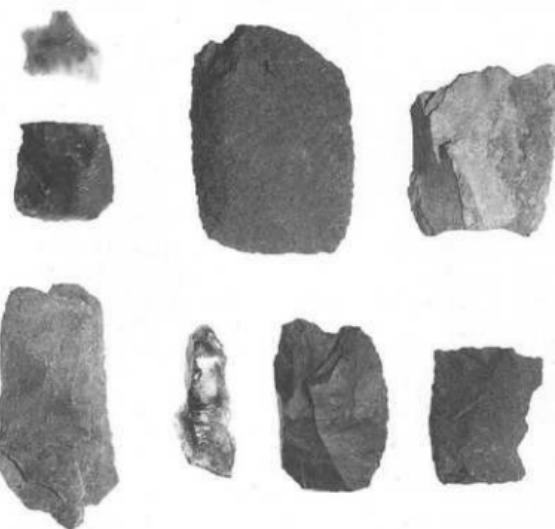
第15回版



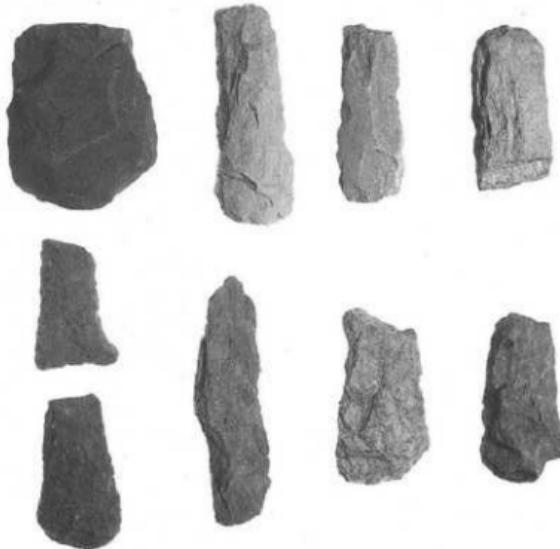
石錐(1~17)



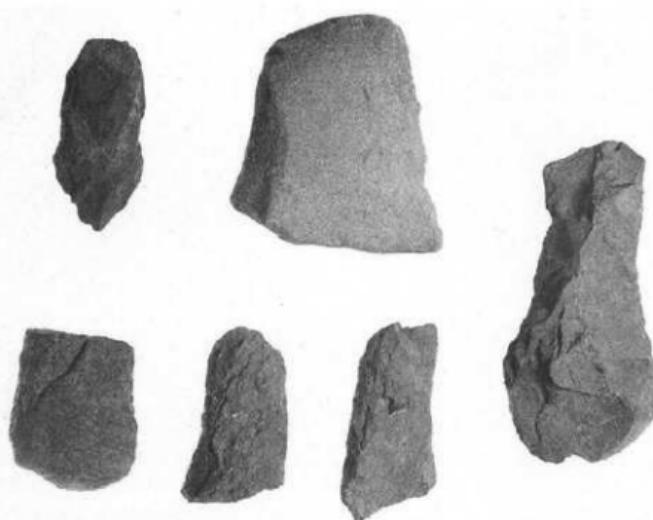
上段 石錐(18~21)・右側 石點(22~23)  
中・下段 ピエス・エスキュー(24~30)



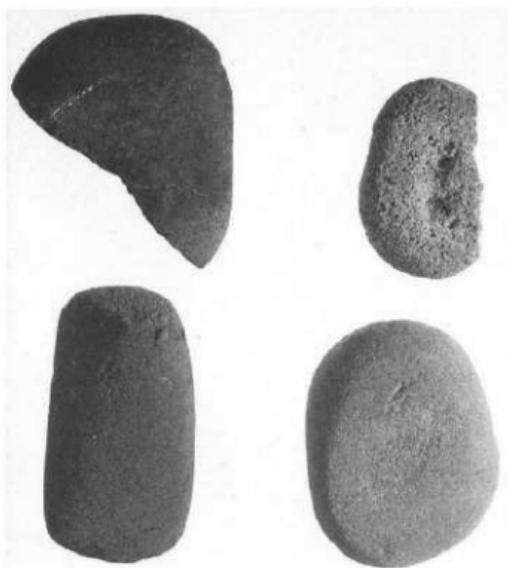
スクレイバー(31~38)



打製石斧(39~47)



打製石斧(48~53)



敲·磨 凹石 (上左:57, 上右:62, 下左:61, 下右:60)  
(殊磨石:61, 下右:60)



置き砥石(67-66-65)



硯(69)・砥石(64-68)



左端：鐵辮  
上段：釘尖狀鐵器  
中段：鐵劍，鐵鏃？，不明  
下段：鐵劍狀鐵製品  
最下段：錢貨

---

松本市文化財調査報告No81

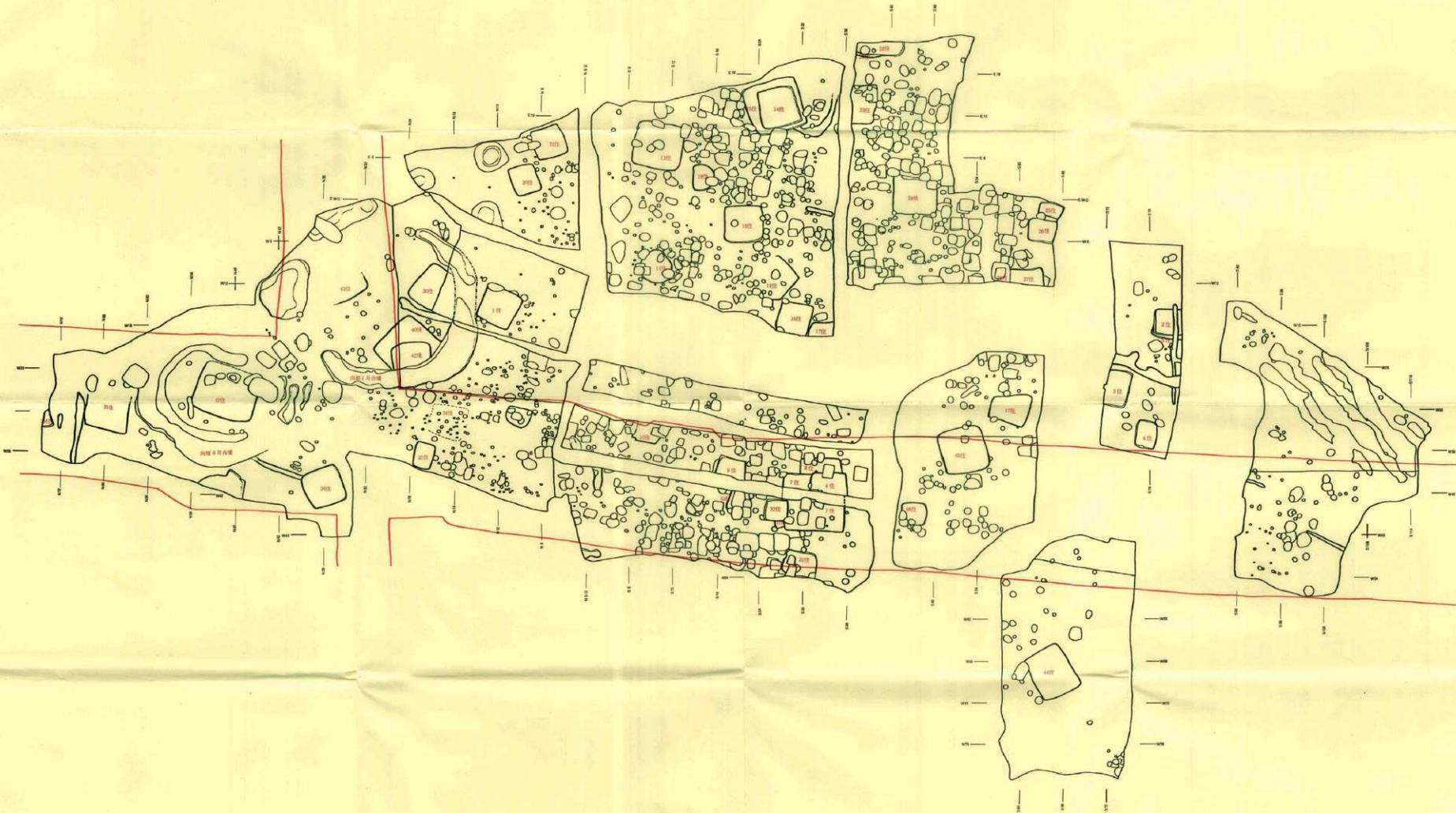
松本市向畠遺跡 II

平成元年3月20日 印刷

平成元年3月30日 発行

発行 松本市教育委員会  
印刷 精美堂印刷株式会社

---



付図 向畠遺跡全体図 (306)

